明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

一月一日發行

女學世界



第十巻
第一號
博文館


謹賀新年
一月元旦
新年の雪景色
いと美しきはこれ
天のなせる美なり
庭にたてる乙女の愛らしく
うつくしきはこれ
美顔水
の現象なり
本舖
紀州粉河町
桃谷順天館
電話粉河五番
大阪備後町三丁目
桃谷順天館出張所
沖

女學世界



新年號目次



肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長（ドクトル）の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及ひ**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價 七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●五十日分十圓●七十日分十四圓▲遞送料十錢●爲替局名は大森局宛の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及ひ詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎

電話大森六十九番

肺治散特約店

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
橫濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 柳田金造

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
越後國長岡町 藤井卯吉
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
長野市大門町 小林傳兵衛
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
馬關西南部町 賣藥會社
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
相模橫須賀汐入町 茶木商店

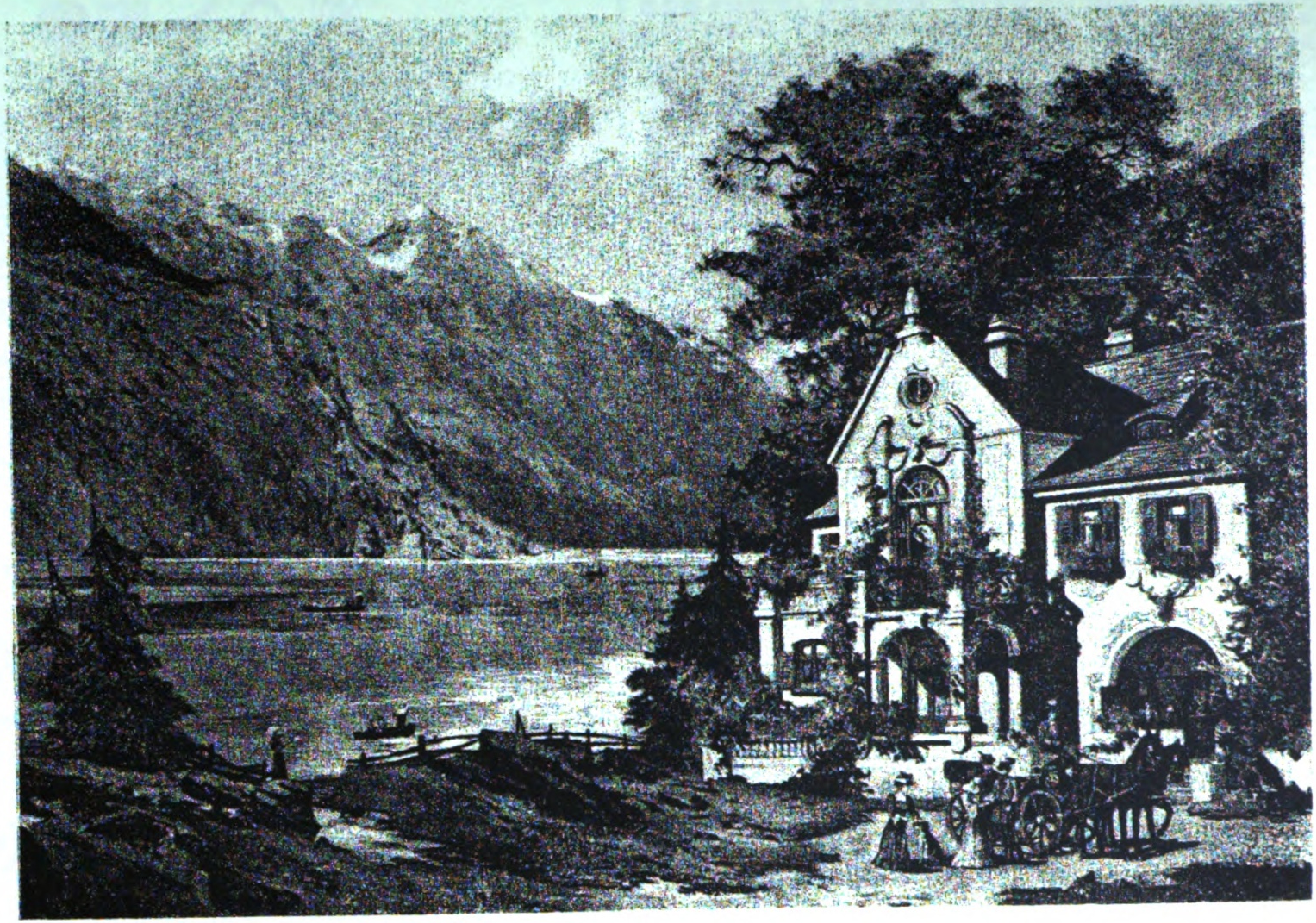
（全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す）

女(いの三)



女(いの四)

別莊の春



●婦人の淚

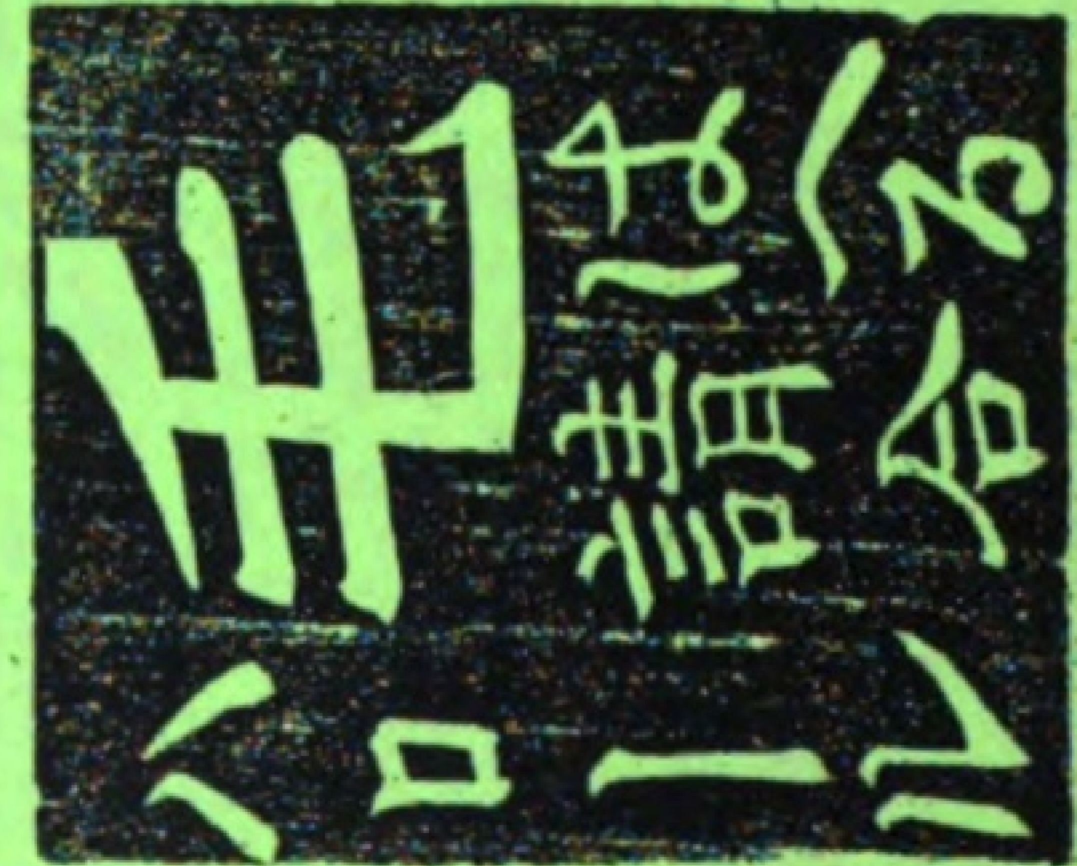
（其原因は男子の罪なり）

近來癩に苦み常に不姙を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて從前の病歷を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である曩に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
藥劑師 **中西莊吉**
（振替貯金東京口座千五百番）



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を益世館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新說を參考し最新なる配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き者が山師的に無責任の處方を以て販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亢進丁幾、レゾルチン、サリチール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮はへぎはゞまゆげひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭の病他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
- 本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
- 麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
- 日本橋檜物町十八 龜田藥局
- 京橋區八官町八 野田藥局
- 神田淡路町二の四 森田藥局
- 芝田町四の一二 加藤藥局
- 芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
- 赤坂田町四の一 竹內藥局
- 同青山北町五 四井藥局
- 本所吉岡町廿五 小島藥局
- 四ツ谷大傳馬町二 永野藥局
- 神田旅籠町一ノ一 瓜生支店

- 堺市大寺南門東入 一色藥局
- 京都市上京區寺町通り石藥師角 福知藥局
- 京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店
- 大阪市平野町二 丹平商會
- 丸龜市本町 櫻井藥局
- 名古屋京町三丁目 飯田藤七
- 同 同 同 荒川長太郎
- 高松市片原町 新明藥局
- 神戶元町一丁目 四村商更局
- 廣島市橋本町 萬代藥堂
- 神奈川青木七軒町 永崎藥店
- 仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
- 岡山市橋本町 加藤藥店
- 弘前市下土手町角 菊地藥店
- 大津市菱屋町 磯崎藥局

女（ろの一）

早稲田文學社編纂

文藝百科全書

發兌元
東京京橋南鍋町一の二
振替口座東京八五三三番
株式會社 隆文館

▼愈々製本出來――期限 明治四十三年一月二十日限 實價特賣▲

一時拂金拾貳圓 着金即刻送本

三回拂金拾五圓 毎月五圓三ヶ月拂

送費 内地金卅六錢 清韓金七拾錢

古今三千の時載と東西の方所とに起れるあらゆる文藝と人物及び其の著作の梗概とを蒐搜網羅して茲に整然たる本書をなす。考證嚴正、記述適確、世界文藝の精華は殆どこの一巻に盡く。之れ正にわが文藝史上の光彩たるのみならずまた出版界の一大偉觀たるを信ず

本書に附したる新式索引はあらゆる事項を索つて一目の下に展開せしむるの便宜を寄與す。即ち本書は完全なる文藝百科全書たると同時に又一大文藝辭典たり。

詳細說明書 郵劵二錢御送付次第送呈す

本書の裝釘 脊角革洋布綴 金模樣堅牢美本

四六倍判紙數千八百頁

挿畫 精巧彩色木版三葉、アート四色版六葉、三色版五葉、精巧アートタイプ及寫眞版數十頁、組込版五百餘個

女(ろの二)

恭賀新年

福袋。福切れ賣出し

一月四日より十日まで（四日は正午迄五日より平常の通）

◎福　袋　毎日五百個限りにて五十錢、壹圓、貳圓、參圓、以上の各種

◎羽子板　價格尤も安く意匠尤も嶄新に有之候

◎商品目錄書　地方係宛にて御申越下され候はゞ直に御送附仕候

東京日本橋區通旅籠町

大丸呉服店

支店、名古屋、大阪、京都、神戸


純白
浮き
スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸（かていようせつけん）
▲定價 二個續（壹本） 廿二錢
英國ポルトサンライト市
製造所 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖嘖たり
價
特製金七十錢
大瓶金三十五錢
中瓶金二十五錢
小瓶金十七錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

女（ろの四）

蘭の花 （泰西珍草花譜）



見よ数百萬の難病者を全治せしめたる

電氣帶發明者

サンデン博士之像



奇効可驚

主治効能

眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す

（説明書無代進呈）●



登録商標

アクチナ

サンデン電氣帶

主治効能

神經衰弱諸症－腦神經衰弱－不眠症－胃擴張－胃膓病－常習便秘－消化不良－生殖器衰弱及無氣力－遺精－夢精－早漏－遺尿：腎臓炎－糖尿病－其他一般内臓の衰弱諸神經痛－坐骨神經痛－頭痛－顔面神經痛－腕部及腰部神經痛－リユーマチス－腰痛－脚氣婦人諸病－ヒステリー－貧血症－月經不順－子宮病－憂鬱症－脊髓－中氣－産後及病後一般の衰弱症

●本具に依り慢性不治の難病を根治したる實證實に數百萬（説明書無代進呈）

定價

舶來品	三號帶 附屬共	金八圓
	四號帶 同	金拾五圓
	五號帶 同	金貳拾圓
	六號帶 同	金貳拾五圓
	七號帶 同	金參拾圓
和製品	戊號帶 附屬共	金五圓
	丁號帶 同	金七圓
	丙號帶 同	金九圓
	乙號帶 同	金拾壹圓
	甲號帶 同	金拾參圓

探見電燈



定價（大小形共參圓半 貳圓半 參圓

丙大形壹圓半 丙小形壹圓 送料十二錢

懷中電燈



定價（最上參圓半 上等參圓 並貳圓半

B形 上貳圓 並壹圓半 替電池 上七十五錢 並六十錢 送料十二錢

デンキークリーム

本クリームは米國タウン化粧品會社の最近發明に係り顔面皮膚を艶美にしキメを滑ならしめ且つ白粉代用として最好適品たること天下無比なり

定價（見本送料共八錢 大五拾錢 小參拾錢 送料八錢

○營業品目（電話、電鈴、表示器、電球電池其他電氣器具一式御小賣）

○一九式ハイローランプ▲凡て代金引換は前金貳割御送附を乞ふ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目 銀座通東側

電話新橋四一二二振替口座東京一八四七三

●支店（横濱市相生町四ノ六三 電話一九三一

大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側 振替口座大阪七三四四番

サンデン電氣商會

女（はの一）

純金包張細工裝身具

△本品は其名稱(包張)よりも實品に價値ある事は大阪有名新聞…朝日毎日新報時事…等の記事に張金術と題し高評嘖々たるは獨り本品のみ

美術　保險　專門





△純金包張指環
四匁付 三圓五拾錢
五匁付 四圓貳拾錢

△右の外御注文に應じ如何樣にても調製可仕候に付御用命を希

●尚御注文の節は指廻り寸法及印面の形ち御明記被下●印面の種類は卅種

附言
以上の品は在來の人造金の如き品と其地質大に異り故に外部純金なを以て包張をせば光澤は勿論其重量は正に純金同一永久使用の稀品也

文字彫刻料一字廿錢 送料十錢

●時計鎖八匁付六圓半より種々

◉ 18金包側 合成金張側 懷中時計

弊店は各國時計中品質精良にして最堅牢正確なる物のみ撰拔し純金純銀白銅側時計及鎖等種々其形は御好み次第各卅ケ年保證を附す

價
18金包側 甲卅圓乙廿五圓
合成金張側 甲拾三圓乙九圓
各送料十二錢

以上の外金縁眼鏡老眼度付其他御婦人用金銀細工物色々 目錄入用三錢

發賣元 大阪東區京橋貳丁目 常盤號 振替口座東京八一一九八番

●診察時間朝七時より夜九時迄●皮膚病あざほくろ

梅毒りんぢ疾わきが生殖器病神經衰弱症

東京淺草瓦町廿八
淺草橋通瓦町電車停留場横

東京 中央醫院

生殖器病神經衰弱

記憶力減衰萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒横根下疳・りん病・わきが・ぢ

皮膚諸病

▲各自病狀を記し郵便切手六錢を封送せば其病症を速に全治せしめ得る特効新藥の説明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

●子を持つ親ある病人家人は必ず讀め

ね小便袋

特別製品各
定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢 上り貳拾錢

男女の區別あれば御注文の節乞注意

衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人小兒病人の最も必要にして



ね、おき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長

●つきやく世話いらず

子宮帶

有名醫學士の説明に因り考案したる品にして月經當時又は産後用として内外國人に信用ある婦人用品なり

定價特製壹圓參拾錢 並製九拾錢●送料各拾錢引替廿五錢

●衛生梅毒よけ花折袋 十二個一打五十錢送四錢

◉大阪東區京橋二 振替東京八一一九八 常盤號

女(はの三)

各國醫學會の賞讃を博す

◎レックス石鹸は今や社會の一般を通じて愛用せらる

謹賀新年

REX
SOAP FLOATS

英國黎賓用浮
レックス石鹸

佛國製
ケーバ
石鹸
香水



◎ケーバ石鹸香水とは世界の美人國たる佛國より輸入す

女(はの四)

白梅



宮崎與平筆


宮内省御用達
内外國金銀名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
醸造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

大和田建樹先生閲　田中常憲先生著

源實朝 金槐和歌集註釋

●全一冊●定價金參拾五錢●郵税四錢

實朝公は一大雄健なる歌風を樹立せる日本有數の歌人にして、金槐集は即ち公が一代十四年間の作歌を集めたるもの也。歌集凡て六百九十三首に達し悉く興味深甚なる公獨特の高調を具ふ。本書は此の歌集の註釋にして著者の熱誠なる解義は歌道研究者の爲めに資する所大なるは論を俟たず。加ふるに本書の序言には優美なる公の歌學經歷を詳細に叙するが故に本集と對照して益々公の眞價を知るを得べし

●東京市京橋區北紺屋町城邊河岸五

發行所（振替口座八六八九）龜井商店

洋画講義録
繪画講習録

當代一流大家數十名執筆、會費各卅六錢、一ヶ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目

大日本繪畫講習會

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖も忽ち上達せしむ毎號着色繪畫多し

洋画材料品総目録

無代進呈

百餘箇の精密なる圖を挿入したる詳細目録は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好册子也



獨逸製ピアノ新荷到着

◎山葉製 オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）

◎鈴木製 ヴァイオリン（金貳圓以上）

◎獨逸國直輸入 ピアノ（金五百圓以上）オルガン（金參百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）

同上附屬品吹奏樂器絃樂器各種

◎舶來樂譜





目録御入用の節は御申込次第直に御送可致候

東京市本郷區湯島切通坂町八番地

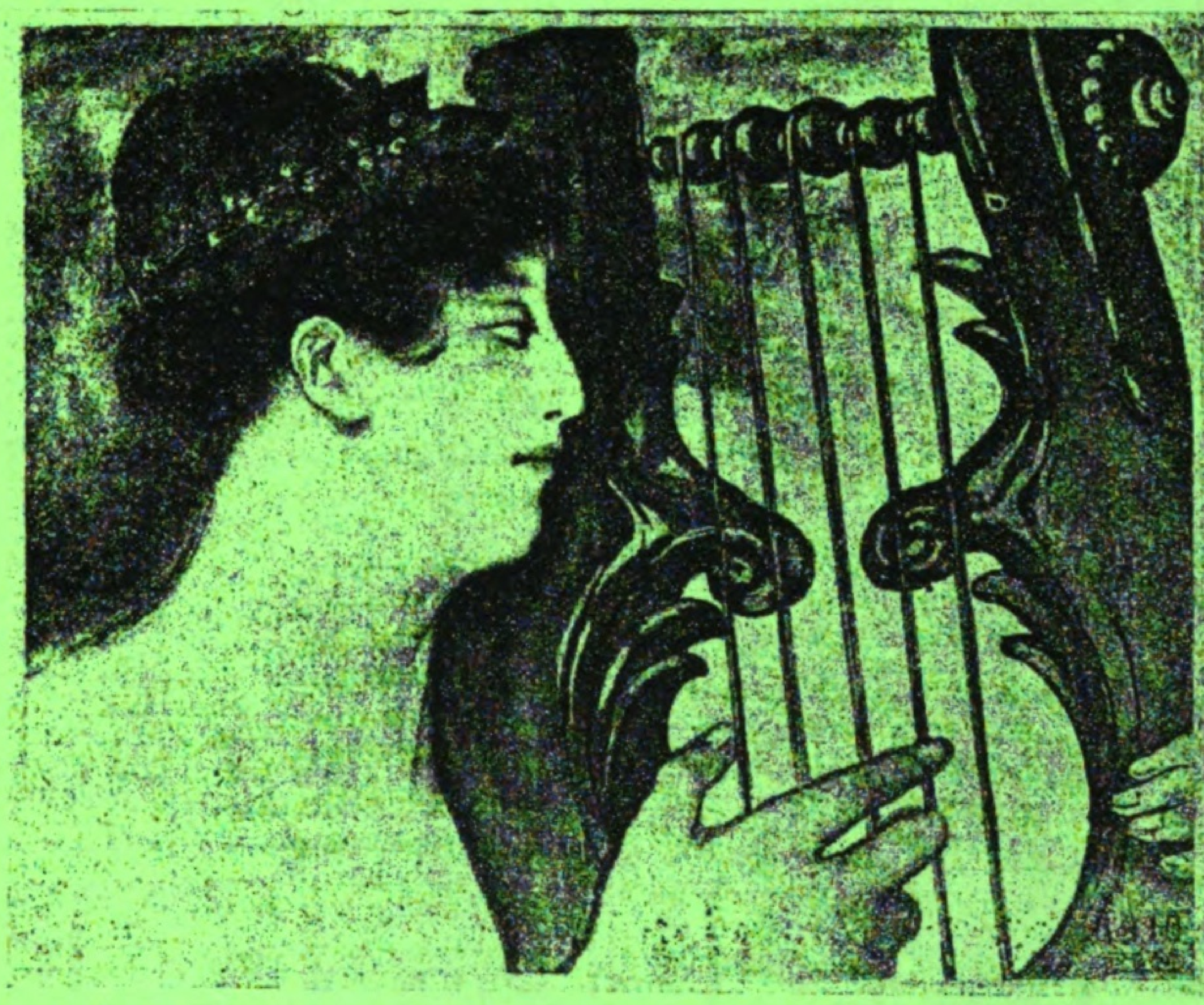
南江堂樂器部

電話下谷一三三〇番　振替貯金口座東京一四九番

女（にの三）

恭賀新年

明治四十三年一月一日



庚戌新刊

音樂

一月五日發行
一冊定價金拾五錢
送料金貳錢

『音樂』は東京音樂學校學友會の編輯にして、毎號古今東西の名曲、懸賞の作曲、內外樂界の彙報、評論及文藝を掲げ我樂界の師友たらんことを期するもの。弊社出版の榮を擔うてこれを諸君に提供す願くば購讀を給へ。

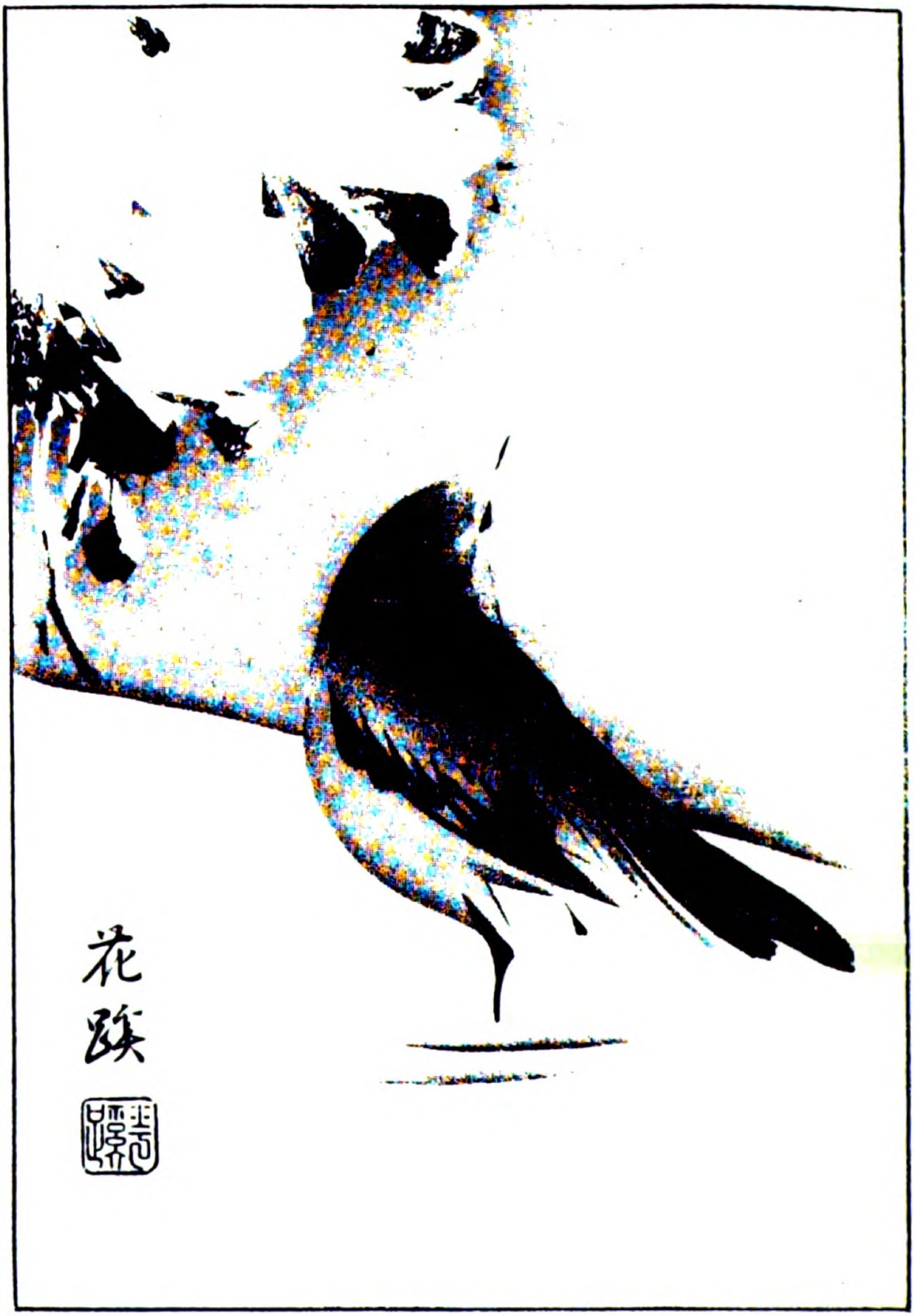
山葉オルガン、ピアノ
鈴木ヴアイオリン　東部一手販賣所

合資會社　**共益商社樂器店**

東京市京橋區竹川町十三番地
電話新橋五二九、同特長四八八〇
振替口座東京一五八八〇

女(にの四)

新年雪



跡見花蹊筆

可憐



平福百穗筆

女（ほの一）

結婚する方々へ

誰の身の上にも秘密の波瀾は有る者です其れを知らずに縁組して幸福の得られる筈は有りません、結婚せんとする人は取極の前に是非とも入念舎へ頼み先方の内情をお調べなさい

入念舎の取調べは綿密と精確とに於て世間類似の同業者に冠絶して居ます規則書は郵券二錢を添へて御申込あらば直に送ります

人事百般の秘密用務を代辨して信切を極むる

入念舎

振替口座二〇二〇〇

◎産婦人科
◎小兒科
宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 鷲山彌生

東京至誠病院

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地 電話番町(二二五七)

禿、脱毛、薄毛、生際悪き人試みよ……

東京皮膚病院發明 山崎製

毛生液(モウセイエキ)

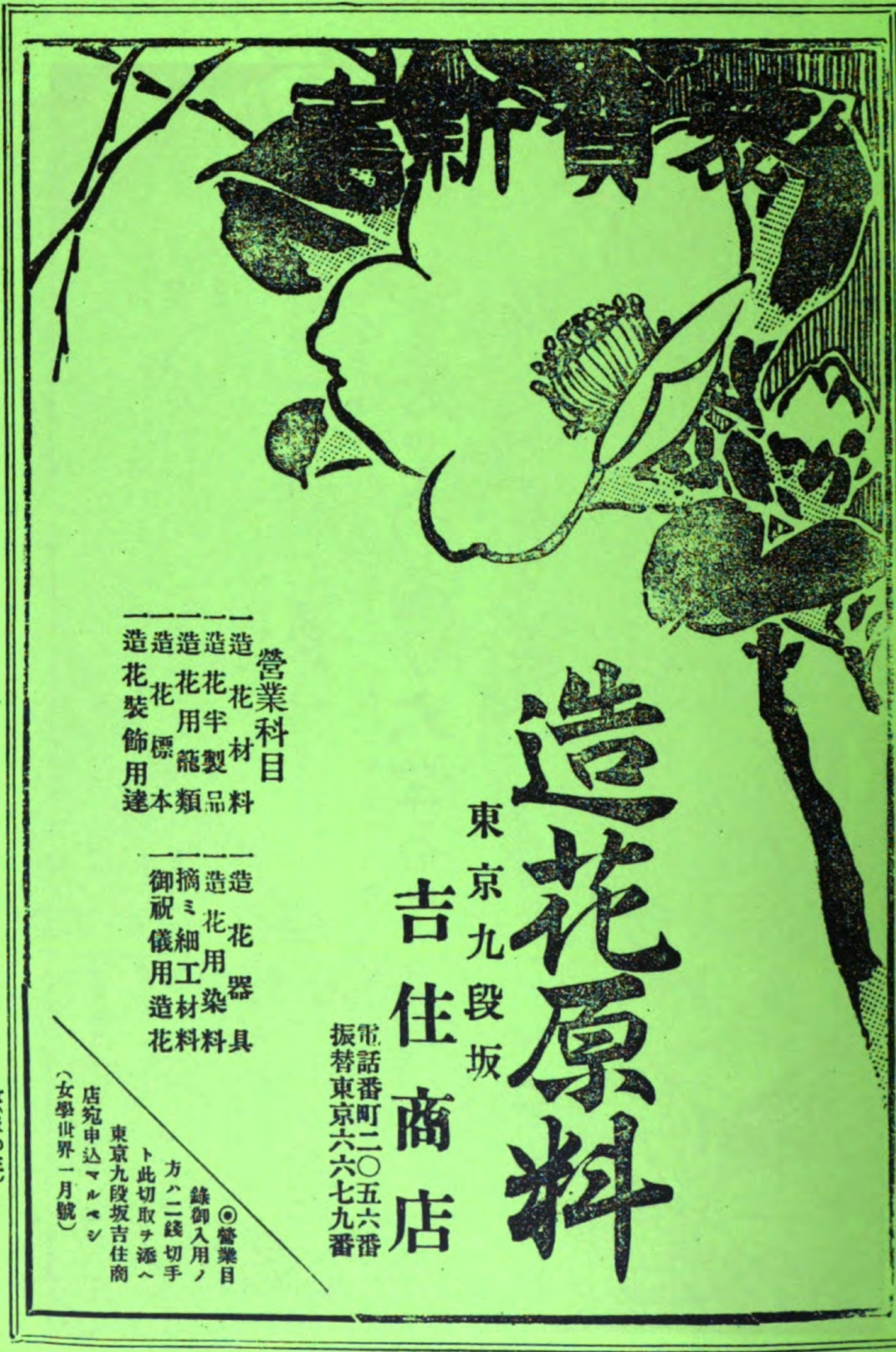


本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

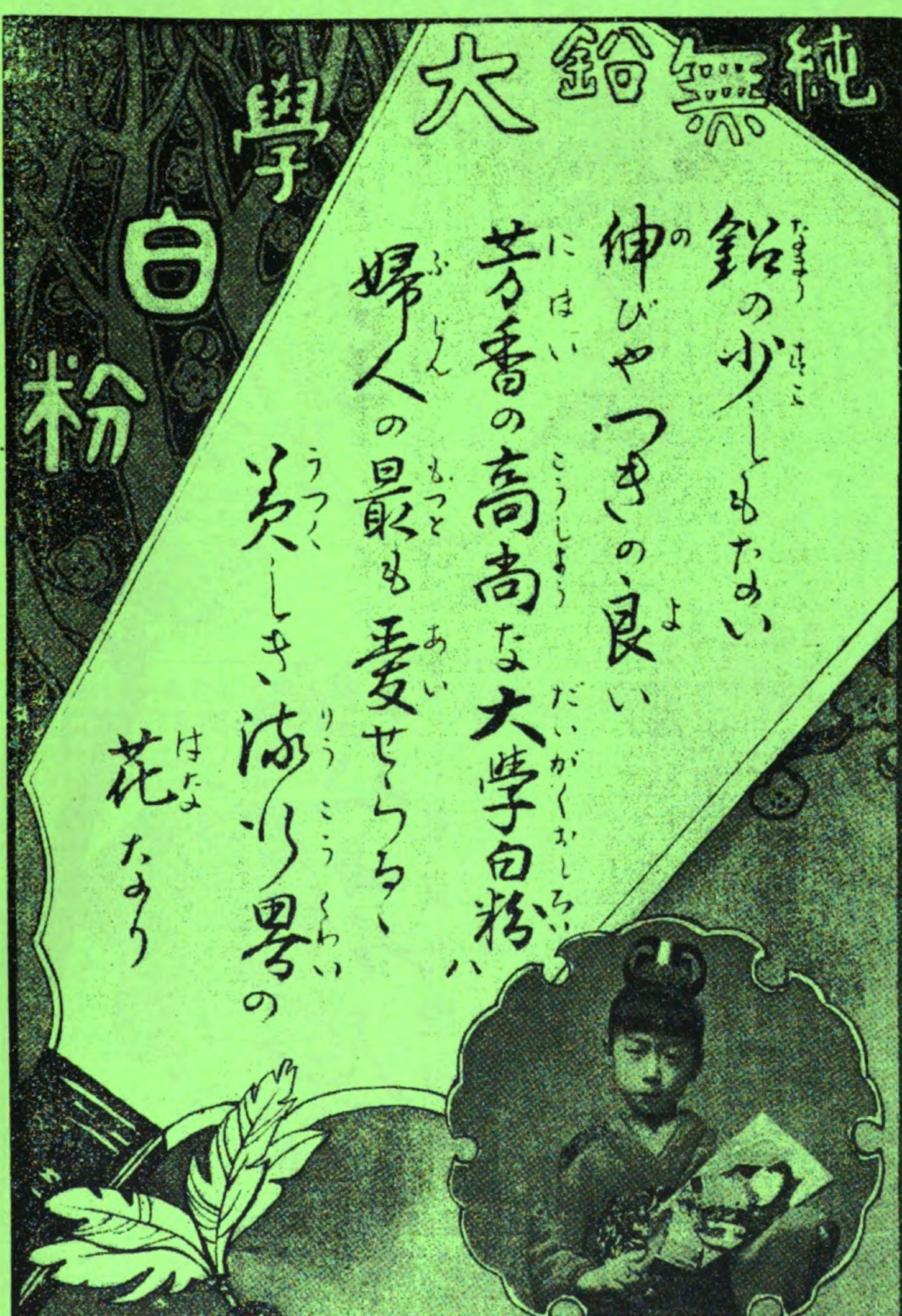
○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

女(ほの二)


恭賀新春
造花原料
東京九段坂
吉住商店
電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番
營業科目
一造花材料
一造花半製品
一造花用籠類
一造花標本
一造花裝飾用達
一造花器具
一造花用染料
一摘ミ細工材料
一御祝儀用造花
◉營業目錄御入用ノ方ハ二錢切手ト此切取チ添ヘ東京九段坂吉住商店宛申込マルベシ
(女學世界一月號)

女(ほの三)


純無鉛
大學白粉
鉛の少しもない
伸びやつきの良い
芳香の高尚な大學白粉ハ
婦人の最も愛せらるゝ
美しき流行界の
花なり

皇太子妃殿下



伏見宮博恭王妃經子殿下



毛髪の艶を美しくする

椿製ランラン香油

ランラン香油は髪をさらりとして常に御使用被下候はゞ決して臭氣を發しませぬ



東京市内……到る所油店小間物店有

價　大瓶　金廿五錢
　　小瓶　金十八錢

（一〇二）

發賣元

大阪市新町

福田源次郎商店

電話……西千六百〇一番

振替……大阪一四八五番

謹賀新年

宮内省御用達

天下一品

萬

最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

醸造元

千葉縣野田町

茂木佐平治

女（への二）

女(への三)

(への四)

月の帶

最新式月經帶

村井弦齋先生曰く有名の山田逸子が歐羅巴に行き幾多月經帶を調査し日本婦人に適する様改良を施し新に製造したる『月の帶』は私共の家族が用て居ますが至極輕く腰の工合も自由で大層都合が良です云々

元大阪府立病院産科婦人科醫長**伊庭醫學士**は、本品の婦人衛生に適し且必要なることを婦人世界に汎く紹介され

報知新聞曰く『月の帶』は産婆山田逸子が西洋婦人の用ゆる月經帶を我邦婦人に適する様改良を施したるものにて日常之を用れば各種の生殖器病を豫防する故月經時の活動に最適當也

婦人世界雜報は始んど毎號其記事欄婦人衛生問答欄及各通信欄内に於て本品の衛生經濟に大稗益あることを賞賛し汎く紹介せられたり

其他明治の家庭、女子文壇等に於て頗る好評を博し**宮中、御殿**各貴顯紳士の家庭は勿論殊に近時**各女學校**に採用され多くの**御用命**を蒙る**名譽**を得たり

効用

●月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品なり

●赤白帶下の强き人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

●初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を溫め子宮病を豫防するの効があります

●殊に月の帶は其製造の親切なるを以て極めて堅牢なれば長く使用し得らるべし

改正定價 特製品金一圓五十錢、甲種金一圓(附屬品添)乙種金七十五錢送料各八錢

▲送金は郵便爲替郵券代用は必ず一割增

東京神田猿樂町二丁目

發賣 醫療藥品器械勉强店 **資生堂藥局**

注意 學校其他團體にて一打以上御注文の節は相當割引可致候

名家の令嬢



首相桂侯爵令孃壽滿子（男爵伊藤文吉氏と婚約の方）



元老松方侯爵令孫竹子

令嬢かゞみ



右圖、物集よし子（文學博士物集高見氏令嬢）

中圖、河本露子（醫學博士河本重次氏令嬢）

左圖、物集かず子（文學博士物集高見氏令嬢）

賜天覽

東久世伯爵題字
本居文學博士題歌

東京朝日新聞記者 仰天子著
表裝口繪 研山畫
木版密書數個挿入

春日局

德川幕府二百六十餘年間の大奥に無比の異彩を放ちたる女丈夫――雄心、妬心、俠氣、侮氣、機智、辣腕、を兼ね備へたる――春日局を赤裸々に描き出されたるの快著なり。

初版 再版 賣切 三版出來 正價金八拾錢

御進物に好適

新年最良遊戲品 武内桂舟君補助 山本滌三郎君案

春遊(はるあそび) 七ッ道具(なゝつどうぐ)

(新版發賣)

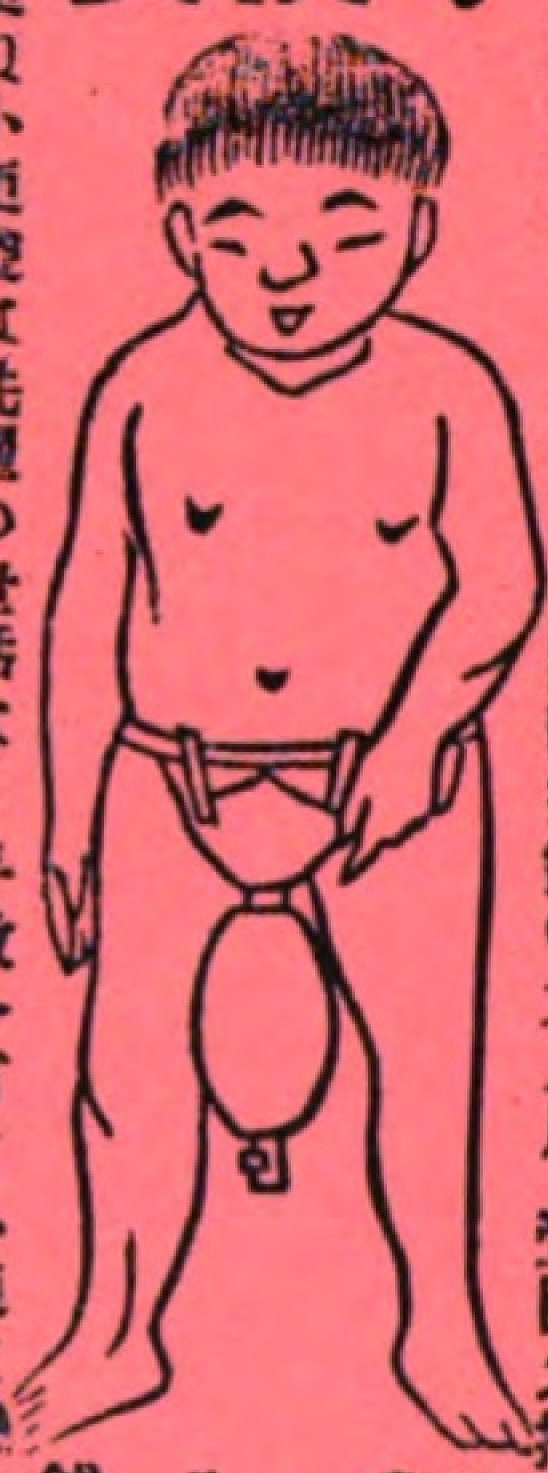
七個の遊戲品にて十有餘種の競技、一人遊び二人遊戲團欒競爭等、兒童より青少年大人に至るの娛樂となるべく組織にして詳細なる說明書を附す、美裝小函入旅行用懷中持に御便利。

壹組定價金五拾錢 特價金卅五錢 送料四錢

發賣元 東京神田 東京堂 其他全國各書店

◉子を持つ親 病人ある家人は是非必要 特許品

ね小便袋



定價●乳兒用 九拾五錢●中人用 壹圓貳拾錢●大人用 壹圓九拾五錢

特別製品各拾五錢上り 送費八錢 引換注文十五錢

衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、ねきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ)

ルーデーサック ━十二個 五十錢 三十個 一圓 ━五十個 一圓半 送料 八錢

子宮サック ━特製 七十錢 二個 一圓廿錢 ━三個 一圓六十錢 送料 八錢

●發賣元祖 大阪市東區京橋二丁目 中川商店

らい病

此のらい病藥は我邦の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとするを主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其效能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする竊着主義の賣藥に非ず

ザノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舖 三河國碧海郡刈谷町 益世館藥局主 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

女(その三)

三版

田山花袋著

田舍教師

岡田三郎助畫

定價金壹圓六拾錢 郵税金八拾錢

定價各金五拾五錢 郵税各金八錢

文藝入門

四版 藤村著 **新片町より**

三版 花袋著 **インキ壺**

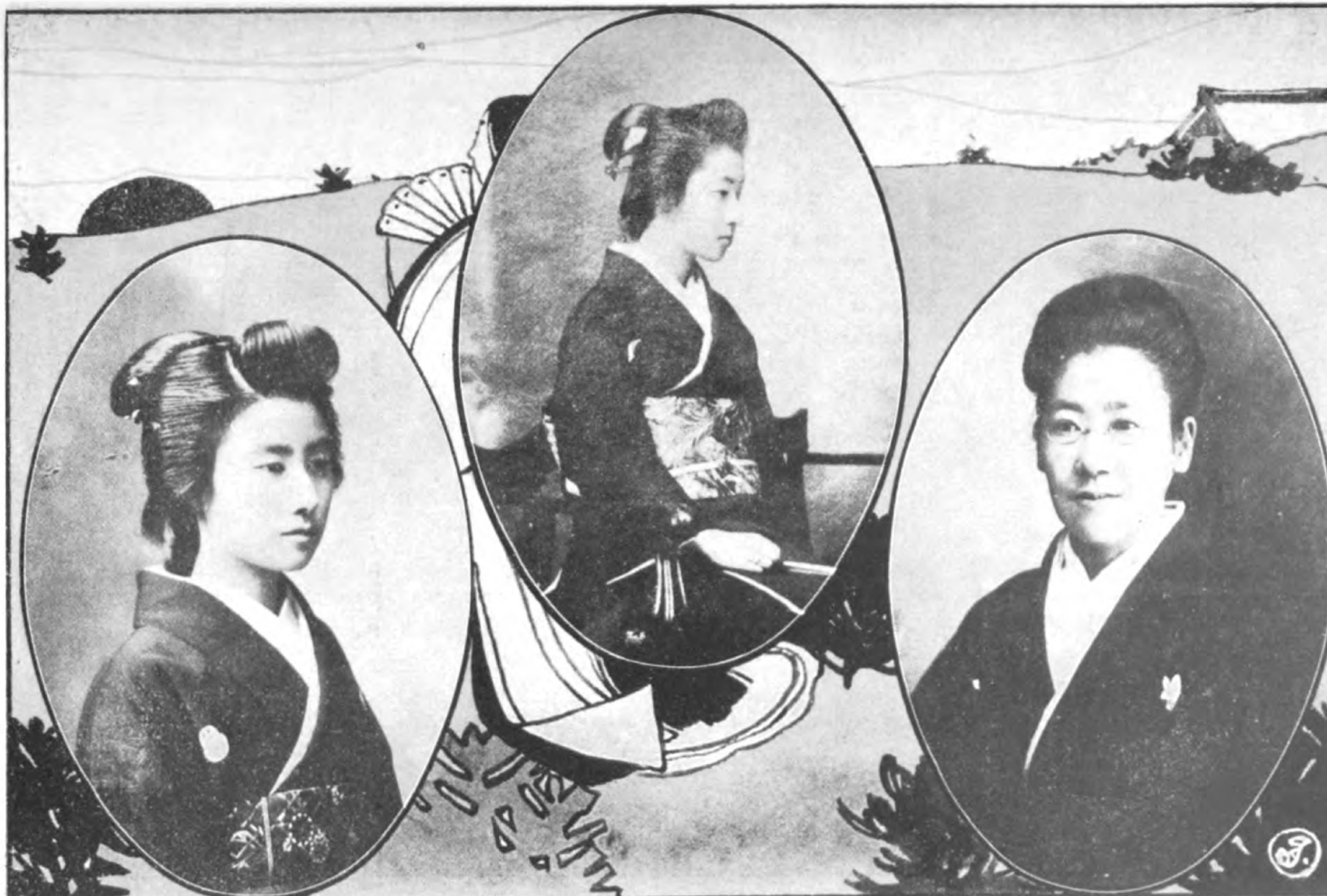
東京神田
富山町

左久良書房發行



女(との八)

名流婦人小照



右圖　瓜生男爵夫人繁子（益田孝氏令妹）
中圖　溝口子爵世嗣夫人須美子（德川達孝伯令孃）
左圖　毛利男爵夫人正子（松平康莊侯先代令妹）

雪の日



左圖　太宰大藏氏二令孃
右圖　三條公爵二令孃


菊の露
おしろい
此頃白粉は澤山ありますが、全く無鉛無菌で附着が良くて、のびの好いといふ白粉では『菊の露』白粉に優るものはありません!!
よむべし
東京市日本橋區横山町三
パール本舗
平尾銑也商店
電話浪花一一一〇番
振替口座(東京)一一一〇番

新輸入 美容料 肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効をゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

英國ロンドン「パーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

白色特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を眩着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を需む)

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に通經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



女(ちの二)

腋臭 わきが

根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來りりよ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

文學博士 三宅雄二郎序

高橋淡水新著

橋口五葉意匠裝幀



最新式美本定價七十五錢郵稅八錢

本書は有史以來**政治、軍事、教育、宗教、文藝、實業**等の諸方面に於ける有ゆる**俊才英傑**の**偉業**を中心とし古今を貫き東西に亘り之を日々に配列し以て古今の成敗人文發展の徑路を叙せり而かも著者が簡潔多趣味なる筆は能く**萬卷**の**辭書傳記史書**を此一卷に縮寫して餘さず眞に之れ**史界空前の寶庫**なり夫れ**教育者**は以て日々教授の參考とすべく**家庭**は以て朝夕訓話の資料となすべく**學生**は以て日々教科の補習となすべく又一般讀書子は以て常識修養の資となすべし

東京市京橋區南小田原町

樂山堂書房發兌

（振替口座七四九一）

新發見藥の紹介●皮膚病患者の最大福音

ニキビ

吹出そばかすの根治藥として余が最近の發見に係る「**クウルー**」の同病に顯著なる偉効を奏するは眞に驚嘆の外なく到底從來の藥物に於て見る能はず此の如き奇藥の發見は獨り我國藥劑界の名譽なるのみならず延て同病患者の最大福音と云はざるべからず本病患者にして本劑の効用及皮膚の衛生法並に根本的療法を知らんと欲する人は郵券貳錢添へ東京市下谷區初音町四丁目卅七番地長田彌平宛申込あらば前記諸症の根治的療法其他病原の説明及全治談を無代進呈す

校長 小出新次郎先生
學監 小川直子先生

女生徒募集

（規則郵券貳錢を要す）

●高等女學科 ●速成科
●尋常師範科 ●高等師範科

本校は毎年四月の新學期以外には斷じて中途入學を許さず因て入學志望の向は此の際速に其の手續を濟しおかばこそ可かれ

東京市青山穩田一一五

女子裁縫高等學院

女（ちの三）

女(ちの四)

本誌は毎號 賜天覽外各宮妃殿下御閲覽の光榮を有す

愛國婦人

本誌は八十萬の會員を有する愛國婦人會の機關雜誌にして同會本部及各支部の狀況は常に細大洩さず迅速に報導するの外趣味豐富なる諸大家の卓説を滿載す

毎月二回（五日廿日）發行
定價一部金三錢五厘
一ヶ月金七錢
半年分金四拾貳錢
一年分八拾四錢郵稅無料

◎現代婦人必讀の好文字

女德論叢

全壹冊定價金貳拾六錢
郵送料金四錢
特價郵稅共金貳拾五錢

◎故奥村五百子刀自は現代婦人の先覺者にして其の生涯は明治巾幗史上に特筆大書さるべきものなり

奥村五百子詳傳

全壹冊
定價金五拾錢
郵稅金八錢

女(ちの近)

東京麴町區飯田町一丁目
愛國婦人會内
愛國婦人發行所

謹賀新年

驚くべき世界一の月經特許安全帶

諸大家稱讚 櫻井堀口兩醫學士推奬 藤川藥學士鑑製

安全帶は外部より吸收する衞生品の大害有る[illegible]防經は身を滅すのみならず國家をも滅すものなり

定價 安全帶 [illegible] 外に必要附屬品 [illegible]（送料金八錢）



謹製附屬帶の[illegible]

本舖 東京本鄉湯島天神町三の一 安全堂

東京牛込袋町二八 安全堂

東京一手販賣 御園おしろい 御園商店

九州一手販賣 長崎市西山四〇 安全堂

●本法は 女髪結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛 二大奇方劑 毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にて是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七 濟世園

●肥滿病の人に告ぐ

多血症●脂肪過多●中氣●酒ぶとり●便秘凡てふとりすぎて御困りの方御やせて中肉美容となる奇藥二錢切手送れば詳報す

●東京市小石川區第六天町十七番地 池田製藥部

●博文館圖書陳列所…館内にあり

蹄鐵印 シャターリヨン 白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用年末歳始の御進物として最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒を輸入發賣仕り候にも御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目 電本局長一四三五

鈴木洋酒店

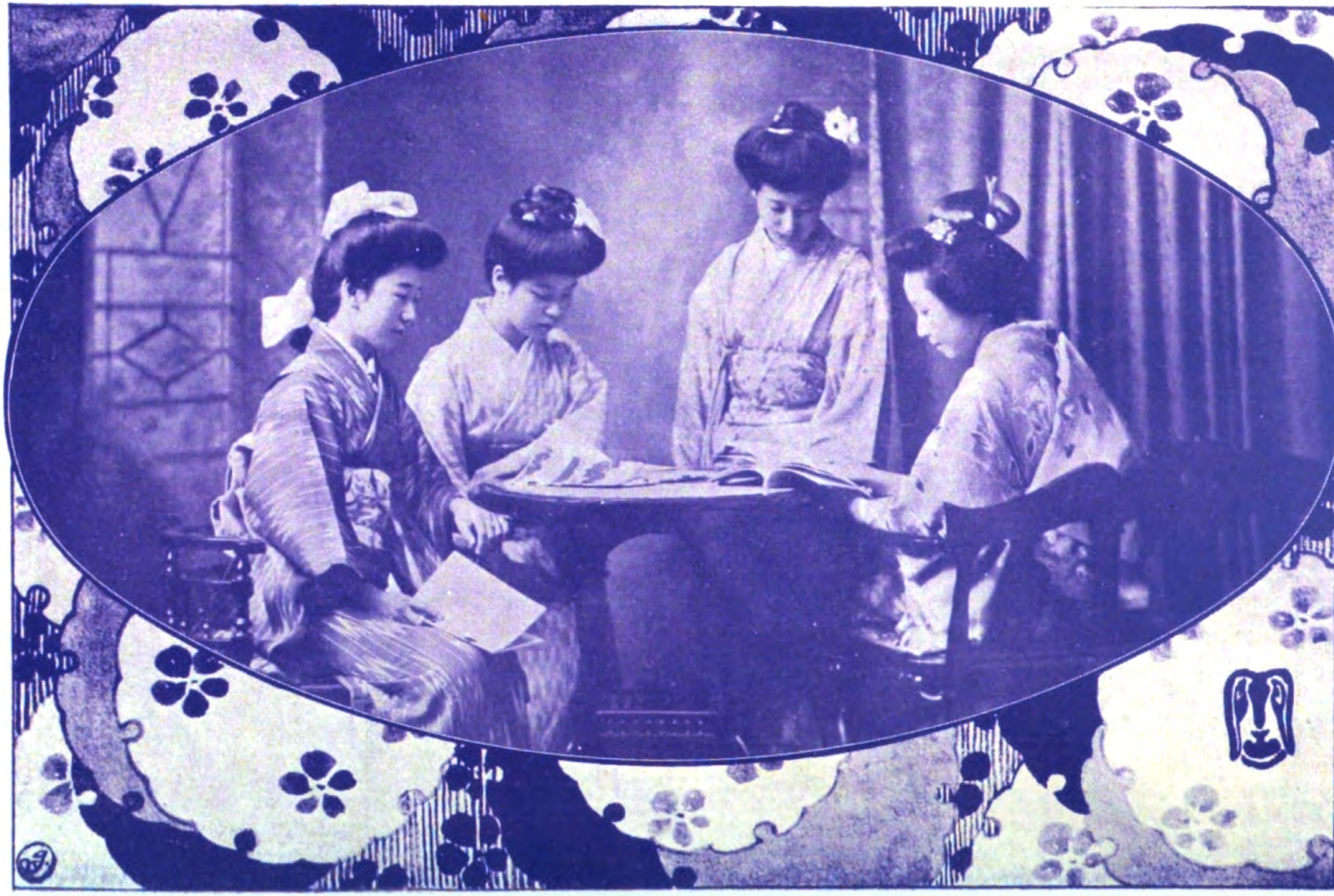
六（五の七）

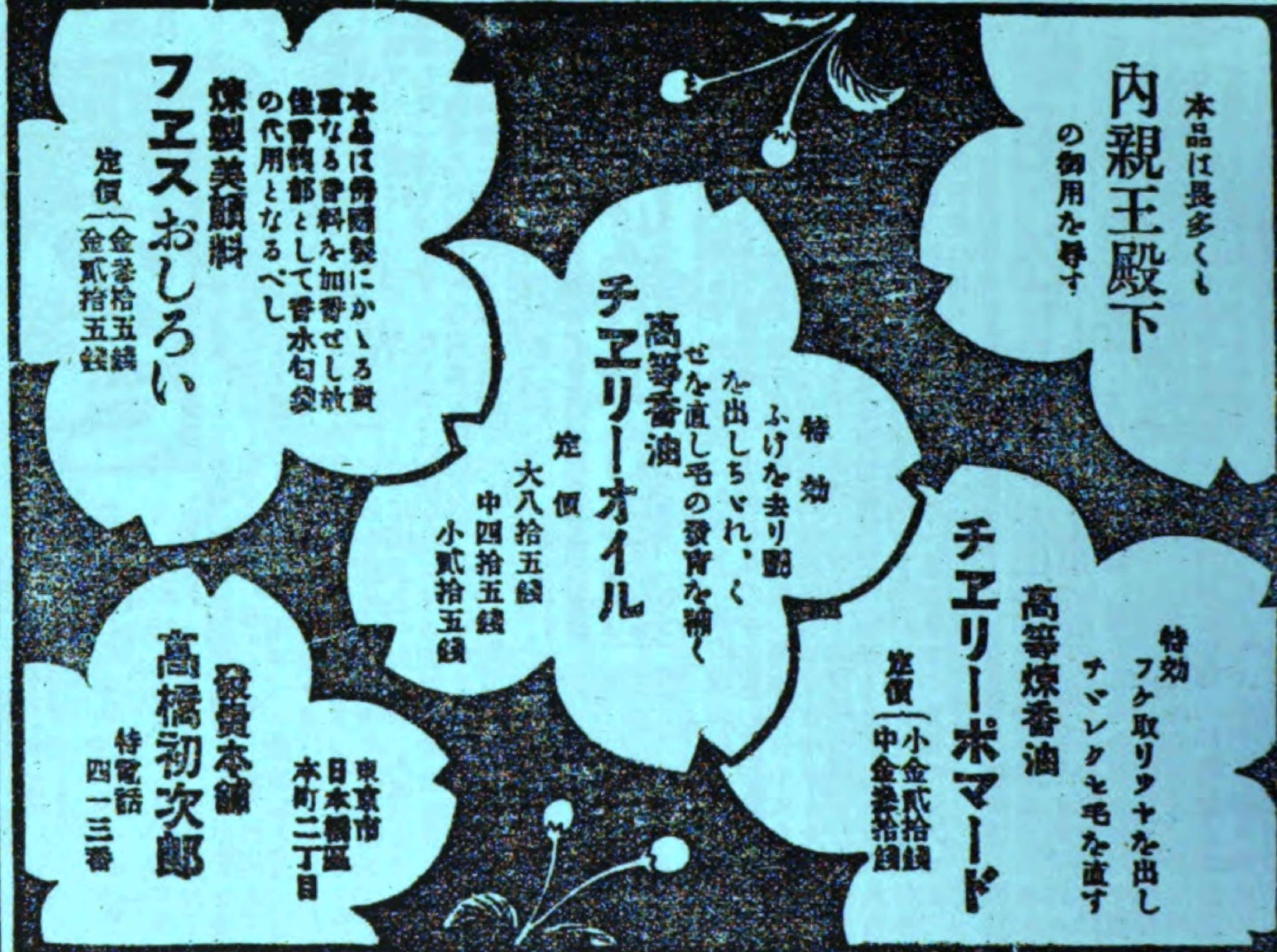
令嬢かゞみ



右　佐藤揚氏令嬢千代子
中　子爵松平頼和氏令嬢信子
左　男爵原田一道氏令孫[illegible]子

友の睦み




本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取リツヤを出し
ナマレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價（小金貳拾錢
中金參拾錢
特効
ふけを去り艶
を出しちゞれ、く
せを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
本品は舶來製にかゝる貴
重なる香料を加香せし故
佳香特部として香水匂袋
の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金參拾五錢
金貳拾五錢
東京市
日本橋區
本町二丁目
發賣本舖
高橋初次郎
特電話
四一三番

女（りの一）

世界無比 ……… 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 日に必ず美麗に除去す

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず ること無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完うせよ來館者へ感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に天然の美質は山の如き全治者の世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其效力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつほふはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其效勿論同日に語るべきものにあらず實に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子は威嚴あり▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を増進する靈劑

滋腎回春 記憶增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボロト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

以上六種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女(りの二)

百人一首歌かるた

上下一組 優美箱入

定價卅五錢、七十錢、一圓、一圓半、二圓、三圓 送料各十錢

景品進呈 發賣元 大阪市東區京橋二丁目 日月堂商店

珍書進呈

▲新春娯樂……殊に最も絶妙有益の珍書數々あり望の人は大阪高津郵便局私書函第貳號宛往復葉書にて申込あれ詳細目錄すす妙齡佳人は勿論奥樣も主人も將た青年學生も苟も人生微妙の趣味と實益望の人はぜひ娯一覧！▲但申込は必ず前記私書函第貳號宛の事

肺病患者の福音

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本 ●東京市下谷區上根岸町 衛生書院



◉佛國土産の最新白色新劑

色黒き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

東京大森停車場上山王 愛隣藥院

乳兒食物の新發見

「アレンバリーフード」に就て

嬰兒の哺育品は母乳に優るものはないとは醫學上の定說なれども母乳を用ふることの出來ない場合も尠なくない斯かる場合に生牛乳若くは「コンデンスミルク」の如き者を消化力の乏しき嬰兒に與へて間々大害を釀せることは嬰兒生理學上明瞭なるのみならず又實例に乏しくないにも拘はらず今日まで之れに代るべき哺育品のないのは育兒上の一大缺點ではあるまいか然るに最近英國より輸入し來れる「アレンバリー」小兒食は母乳と全く同一なる營養と消化性とを有し絶對的に完全なる乳兒の營養食物なるのみならず又大人の病後快復期に於ける食物として最も適當の滋養品である故に生母又は乳母の病に罹りたる時と母の健康容色を保たせしめんが爲め哺乳を欲せざる人及び一般衛生家は「アレンバリー」小兒食を用ひよ「アレンバリー」小兒食には左の三種あり



即ち第一號は生後三ケ月間、第二號は四ケ月より六ケ月迄の嬰兒に適せる樣滋養成分の割合は人乳と同一になし、第三號は六ケ月以後の兒用として麥芽精を調和せるものなり。

定價 一號二號各一罐に付壹圓廿錢 三號一罐に付七拾五錢

一手販賣店 東京日本橋本町四丁目 田邊元三郎 電話本局二八七三番 振替口座一六六六三番

▲全國著名藥店にあり

女(りの三)


醤油
ヒゲタ
宮内省御用
HIGETA SHOYU.
下総銚子港
田中玄蕃醸造
元和二年創業

女子文壇 紀念號 滿五週年

一月一日發行　例號二倍 三百廿頁　本號限り 定價三拾錢 郵税貳錢五厘

◎新年附録 **温室**（石川寅治筆）（石版極彩色）
▲本誌二倍大▼　▲額縁最適▼
妙齢の一美人、温室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艶と色彩の鮮美とは、一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾なり。

投稿傑作 百四十頁 **滿載**

◎**口繪** ◎光澤紙刷 ◎名満雪みち（原色版）外◎故山階宮 東伏見宮兩妃殿下◎鷹司公爵松平伯爵兩夫人◎德川家達公三令孃◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男の家庭◎金子子爵令孃◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の室外和樂◎盛裝の六孃◎誌友面影◎鳥海山外二景は十二頁最新寫眞凸刷なり

東京京橋大鋸町　**女子文壇社發行**　（振替口座壹七貳九）　賣捌 全國雜誌書店

女（りの六）

見よ新装の本誌が如何に活躍せるかを

婦人くらぶ

壹月一日 第参巻第壹號 定價十五錢 郵税一錢 半六册税共九十錢 十二册税共一圓七十四錢

●景物 大丸呉服劵 本號添付（詳細は本誌を見られよ）

●新春の流行……大丸呉服店員

●男女本年一月中の九星……

●英國交際界の内情 某外交官

●未婚女子の執て進むべき路 文學博士三宅雪嶺

●女子の病は二十まで 富士川游

●寄宿舎の新年……あぢさゐ

●御遊戯中の皇太子殿下と皇孫殿下

●壯烈を極めし日本海の海戰 子爵小笠原長生

●新春名流の歌……太田水穂

●一月一日の日記……十四女

●村井弦齋氏の家庭 國木田治子

●最近に於ける婦人界の向上…澤柳政太郎

●御特色鮮やかなる内親王殿下……

●上手で下手な女子の手紙……男爵石黒忠悳

●父の序文を添た娘の歌集 多田

●怒る人笑ふ人…狩野腦病院長

●かるたを取るお友達 荒川澄子

●正月諸儀式の起源……文學博士物集高見

●課目の主なるもの…東郷博士

●寄せ鍋の献立…三輪田女學校

●舅姑の心の解剖 高島平三郎

●新年を機會として新に始むべき事 佐治實然

●手まり唄……當選披露

●寫眞…石版…精巧…材料豐富

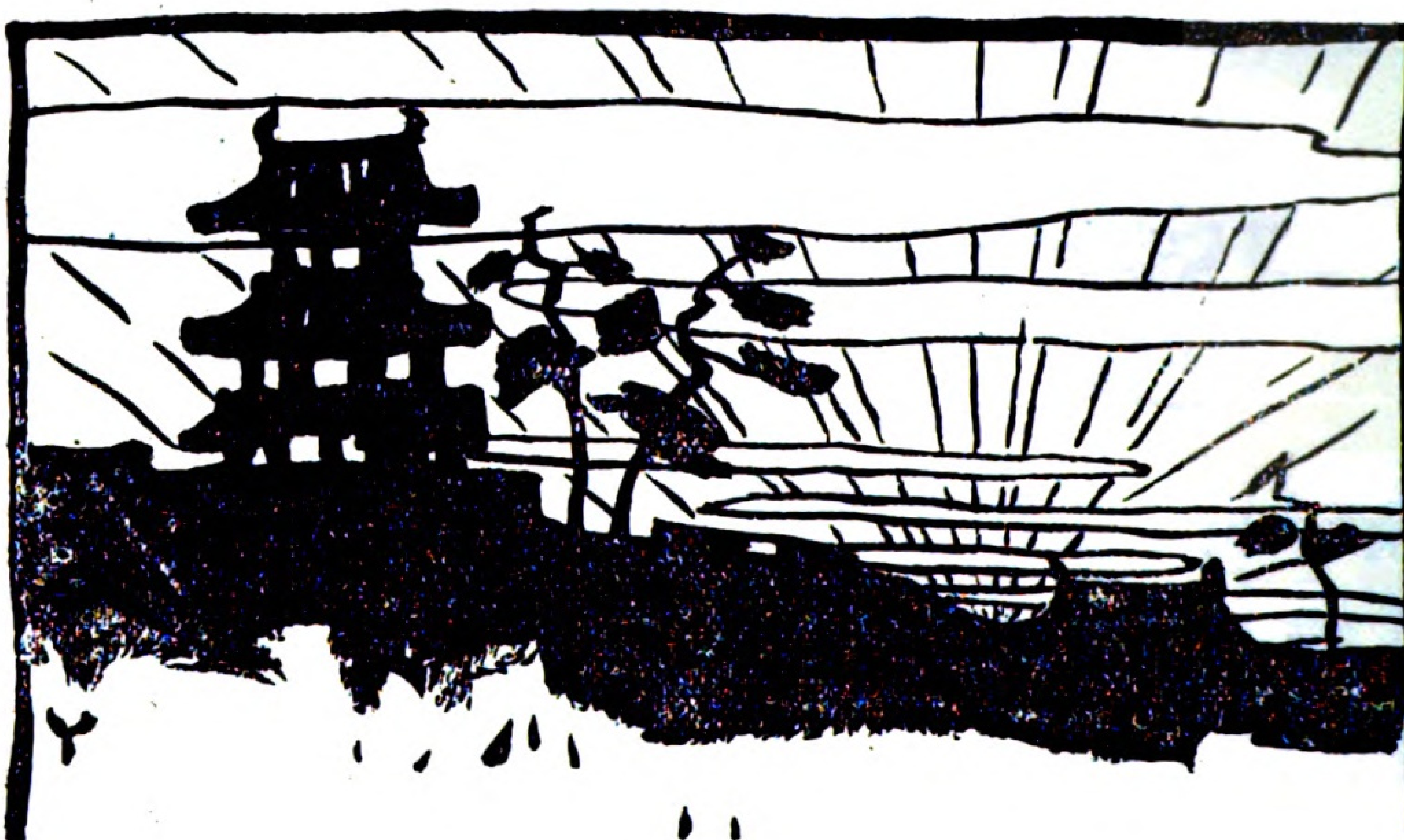
●貴婦人に珍重せらるゝ犬 秋元春朝

●附録 報德すごろく 尾竹國觀（新聞全紙大極彩色石版）

東京日本橋區本銀町四丁目十七番地 紫明社發行 （電話本局三六八四 振口座一七五五四） 賣捌 全國到處

女（りの七）

女（りの八）



女學世界

第拾卷第壹號

新年號

こゝに芽出度き新玉の年のはじめよ、瑞氣六合にたなびき渡る時、金鷄のあしたをつぐる初聲いさましく、初日うらゝかに、光りのどかに、四方の海しづかに、波なだやかに、たかき御くらも、はにふの小屋も、千門萬戸千歳の色の松青く、旭の御旗春風に、時つ風枝を鳴らさぬ大御代を、壽き祝へよろづ人々。君が代を謠へことほげ、めでたき新玉の年のはじめに。

九重の奥

兩陛下の御平生

新春の曙光六合に輝き始め、瑞氣四方に棚曳き渡りまして四海波穩やかに萬民太平の春を壽ほぎますのは、誠に芽出度き極みではございませぬか、斯くまで美はしく治まれる御代に生々する者、何等の幸福でせう。是れ偏へに萬世一系の皇室を戴きまつる恩德に依ること申すも畏こき次第であります。

まづ明けまして御芽出度いこの正月の祝詞と致してこゝに萬づ臣民一統の仰ぎ奉つる我が皇上の御平常雲深き九重の御便りをば洩れ承はりて記しまつる事は單に皇室に對し敬意を表するばかりでなく、萬民衷心の悦びと感謝の意の溢れ迸ばしる一端を披瀝した次第であります。

△御攝生

申すも畏けれど我が天皇陛下の玉體の御健やかに渡らせ給ふ事は臣民の齊しく感佩し奉る次第でありますが、是は實に皇室の御繁榮の基とならせ給ふばかりでなく、又萬民幸福の基であります、併し斯く御健やかに渡

らせ給ふも天縦の御徳とは申しながら一には御不断御攝生に大御心を用ゐ給ふの深きに依らせ給ふ事は侍臣等の密かに恐懼し奉つる所であります。

△御精勵

陛下が御盛健に渡らせ給ふ事は、日々内外萬機の政務を覧そなはせ給ひ當局の大臣の時々の奏上、侍臣の進言を一々聞召され、又内外の臣僚の參内拜謁は申し上ぐるまでもなく、絶えず來朝する外國の貴顯等への賜謁、宮中の御儀式、御典禮に臨ませ給ふ等、數多の大事に宸襟を煩はせ給ひ玉體を勞らせ給ふ事はなか〳〵に臣民の恐察の限りにあらぬ事ながら、其御都度御餘裕あらせ給ひ、御用の御暇には御好みの國風を絶えず御製あらせ給ふと洩れ承まはるだに御精勵のほど、只々恐懼し奉つるの外はないのであります。

△朝の御勤

陛下の御政務に御精勵遊ばす事は前述の次第でありますが、炎熱金を熔かす如き盛夏も、寒氣肌を刺す嚴冬にも、午前の六時には必らず御起床あらせ給ひ、夜の御衣をば別の御衣に召更へさせられ、御口嗽所に出まされそれより午前七時に御朝餐を食上され、暫時御休息の後、當番の侍醫參候

して玉體を拜診し奉つる。それより典侍を召して大元帥の御制服を召させられ、御左肋に大勳位菊花章の副章を帶ばせられ其上には勳八等白色桐葉章、同じく瑞寶章、勳八等章等を御併佩遊ばされ、御腰には御劍を帶ばせ給ひ、午前十時に表御所へ出御遊ばさるゝのであります。

△御晝餐並に御日課

陛下の御晝餐は午後一時の御定りとなつて居る、けれども、時として重要なる御政務を覽そなはせ給ふ際、又は國家の大事に當つて大臣元老等の參内拜謁の頻繁なる折柄には往々一時半、二時三時に至るまで御食事を遣ざけ給ふ事さいありと承はる。

されど御攝生には絶えず大御心を用ゐ給ひて、如何なる日とて御運動を怠らせ給ふ事はなく、御晝餐の後には必らず一二時間の御乘馬又は御散歩を遊ばすと承はる。扨て御奥へ入御ましましてからは御湯を引かせられ御軍服をばフロックコートに召更へられ、午後六時に御夕餉を食召され、それよりは典侍權典侍を御給仕に、和歌の御當座などを遊ばされ午後十時半又は十一時に夜の御殿に入らせ給ふさうであります。

△御衣裳の事

陛下の御衣は表御座所に出御の時には、御軍服を召させられ入御の後には、常にフロックコートを召させられ給ふ、さて夜の御衣は不淨の氣のなき白羽二重にて調じ、一たび玉體に觸れたる御衣、御帶は再び用ゐ給はず、日毎に新らしき御衣に更へさせ給ひ、前の御衣は、女嬬に命じて解き洗ひ衣となさしめ、御側近ふ奉仕する諸官、及び無官の公家華族等へ、一樣に御恩賜になるとか承りました、素より聊の御垢さいも止めぬ清淨の絹でありますから恩賜を蒙りたる人々は聖恩の難有きを拜していろ〳〵に染めて衣服をつくるさうであります。

△御膳部の事

兩陛下の御食事御献立は朝と晝とは二汁三菜、夕には二汁五菜の御定めになつて居りますが、二汁の中の一つは味噌、一つは醬油にて調するのであります、又三菜、五菜と申しますのも其の中の一つは野菜のみの極めて淡泊な御料理で、其他は魚類が主で、刺身、照燒、鹽燒、煮付、蒲燒、蒲鉾などに調じ奉るのであります。

西洋料理の方は兩陛下共深く御好みにはなりません、陛下にはお晝と夕には鷄肉のスープを一合づゝ御用ゐになりますが、皇后陛下は朝夕一合づつ御料の牛乳を召上るのであります。

△御膳部の吟味

宮中の御用に供ふべきくさ／＼の魚類、野菜、獸鳥肉、其外山海の土宜は吟味の上にも吟味を加ふる事は申すまでもなく、兩陛下に奉るべき御料理は、調進した品の些しばかりを取つてそれを大膳寮より當直の侍醫に差出し、それより又御毒味役の諸員へ廻した上で始めて供御になるのでありますが、其の毒味の役は右の侍醫を始め侍從、膳部副長、命婦一人等が承はるのであります。

△御料理方

御料理品を調へまつる庖人、即ちお料理方は、御調理方と申す所に居て日々の御料理を調へまつるのでありますが、其人數は日本料理に常役八人、西洋料理に三人、いづれも此の道の達人で、四條流、大草流の秘傳を心得た人でありますが、御儀式の時、又は御陪食を仰せ付られる際には右の外臨時に御雇上げとなるのであります、そして御料理人はいづれも毎朝潔齋、沐浴して身を清め、西洋風の白の官服を着て割烹に取りかゝるのであります。

△御三食

兩陛下の食召さるゝ御不斷の御三食は至つて質素の方で、二の膳三の膳といふ事のない代り、御好みの品を食召さるゝので、御朝餐後には必らず御湯の下と珈琲とを御嗜好遊ばされ又后の宮には築地精養軒より納むる生パタと麵麭を食召さるゝさうであります、麵麭の大さは一寸に一寸五分、厚五分位に切つたものでそれを二枚乃至三枚を御用ゐになり、パタの外には杏のジャムを御嗜みになるさうです。

△御料理の魚菜

御膳に上る御魚は、大概一々骨と肉とを手際よく庖丁致し、料理人の手にて取離し、後再び原形の如くして御皿に盛るものでありまして、御皿の中より其儘食し召される樣になり居るのであります、尤も魚の種類によつて、さうは致さず、御皿に上すものもあるさうです、まづ御不斷御好みの魚は香魚で、附燒、煮浸、兩方差上ぐるさうですが、大抵御箸のつくは二頭位ださうであります。

又御膾に用ゐ奉る三杯酢は、煮詰めた最上の味醂に最上の酢と醤油とを程よく加減をして交せたもので、又御香の物は、季節によりていろ〳〵

相違はありますが、まづ澤庵、新漬大根、白瓜の奈良漬、守口大根などであります。

△兩陛下の御膳

兩陛下に供へます御膳は、今も尙昔の通りで、白木隅折、刳脚の、高膳で、御食器は、菊桐の御紋章、又は若松、鶴龜などの模樣ある薄手の京燒を御用になります。

それから、御料の御箸は、一回毎に新しきものを御用ゐになりますことは、申すまでもありません、製造の御用を承はる者も、精進潔齋して、十二分に注意することも、亦、申すに及びません、

△兩陛下の御箸

兩陛下の御箸は、長さ九寸の、兩削りで、割合に細く滑かに、宛ら象牙のやうに磨き上げてありますし、用材にも十分注意をして、決して折れるやうなことはありません。

御箸の材料は、箸職の方では重目物と稱する品で、重量も重く木質も緻密なのを精撰しまするので、一度び用ゐるか、左なくとも、他の色物が觸れますれば、忽ち斑點が出來ます故、最も清潔を尊とする御旨に適ふので

あります、御箸の材料は柳の木に似た五倍子といふ木で造つたものださうであります、そして右の箸は御食事の都度々々新たに差上ぐる最と清淨なるものでありまして一度御用ゐになつた品は御食膳に奉仕する女官の手で二つに折り、それを大膳寮の手に渡し清淨な火で燒きまゐらするのであります。

△供御の御米

供御の白米は江州産の三年米を御用ゐになりますが、御買上げになつた玄米を拜みづきとなし、それを一粒えりに撰り分けて炊ぎあぐるのであります、昔は一旦炊ぎあげてから清水で冷し、それを更らに蒸して脂氣を取つたものですが今は只普通に炊いたもので、二升炊きの中より其眞中を取つて參らせるのであります、陛下御一食の量は大抵八十匁位を食召されますさうですが、御さがりの御膳は一々侍醫局へ廻され、侍醫局では御餘りの量目を精密に量ることになつて居ります、又御不例にて御假床の時には御禁食も遊ばさるゝこともありますが、其時の御献立は侍醫局より大膳寮に廻り、それから御調進になるのであります。

△御買物御用の事

兩陛下に奉るべき、肉類、魚類、野菜等は、先づ前日に膳部長より御獻立書を作つて侍醫局に廻すのであります、侍醫局では、更に侍從職と協議の上、再び膳部長に戻り、膳部長が一々檢印をして、それから物品買上係の手に渡り、買上係から御用商人へ御注文があると云ふ順序になりますが御用商人から納める品々には、物品買上係の外、膳部長、又は膳部副長、及び庖丁方立會の上で、一々品の良否を鑑別し、精良の中にも精良の品を擇んで始めて俎に上るのであります。

△御嗜好の品々

陛下には下ざまの事情を知召さんと、大御心を注がせ給ひ、女官に仰せられて、何品にもあれ、庶民の食するやうなものを調じさせ給ふことなどもあります、御旨を承はりました女官は、如何に勅定でも、庶民の食物同樣の物を調ずるといふ譯にも行きませんから、萬事上品を旨として料理し奉りましたが、其樣なものは、大膳寮にて奉るものと同じければ、何をかな下ざまにて用ゐるものをとの陛下の御掟でありますから、或時、鰊の附燒を調じて奉りましたところ、思の外御意に愜ひ、其後は屢々鰊の附燒を參らせよとの御下命があつたと申すことであります、其外、蛸の櫻煮、更科の蕎麥などは殊の外好ませ給ひ、又大膳寮にて調ふるものゝ中には

鼈の調理したのを好ませらるゝ由であります。

△皇后陛下の御食事

皇后陛下の御食事は、日々御常式の外に御好みはあらせられません、鯛の作り身、嫁菜の浸物などを好ませ給ひ、朝には御常式の御膳部にさへ御箸をつけ給はず、僅かにパンと牛乳とを召上らせらるゝ由であります、又西洋料理は、御陪食などのある時の外は召されませんが、時として、蠣、又は芝蝦を衣揚と稱してフライの如くに調じたるものを一種位御加へになることもあります、魚類では、鯛、興津鯛などを好ませられて、献立の内には必ず加へらるゝさうであります。御汁は朝は白味噌を進めまゐらせ、次に　三州味噌を用ゐ毎日三回とも調理法を換へて進め奉つる例であるさうです。

△御好みの菓果

陛下は常々、御攝生を重んじ給ふの餘り、御間食を食召さるゝ事は稀にはあれど、時として聞召す御間食は午後三時より四時の間に、果物など召上る事あり、聖上は殊に西瓜を御嗜好遊ばす由にて、年中御苑に培養して何時にても、御用を缺さぬ様にしてあれど、夏季の外は決して御用遊ばせ

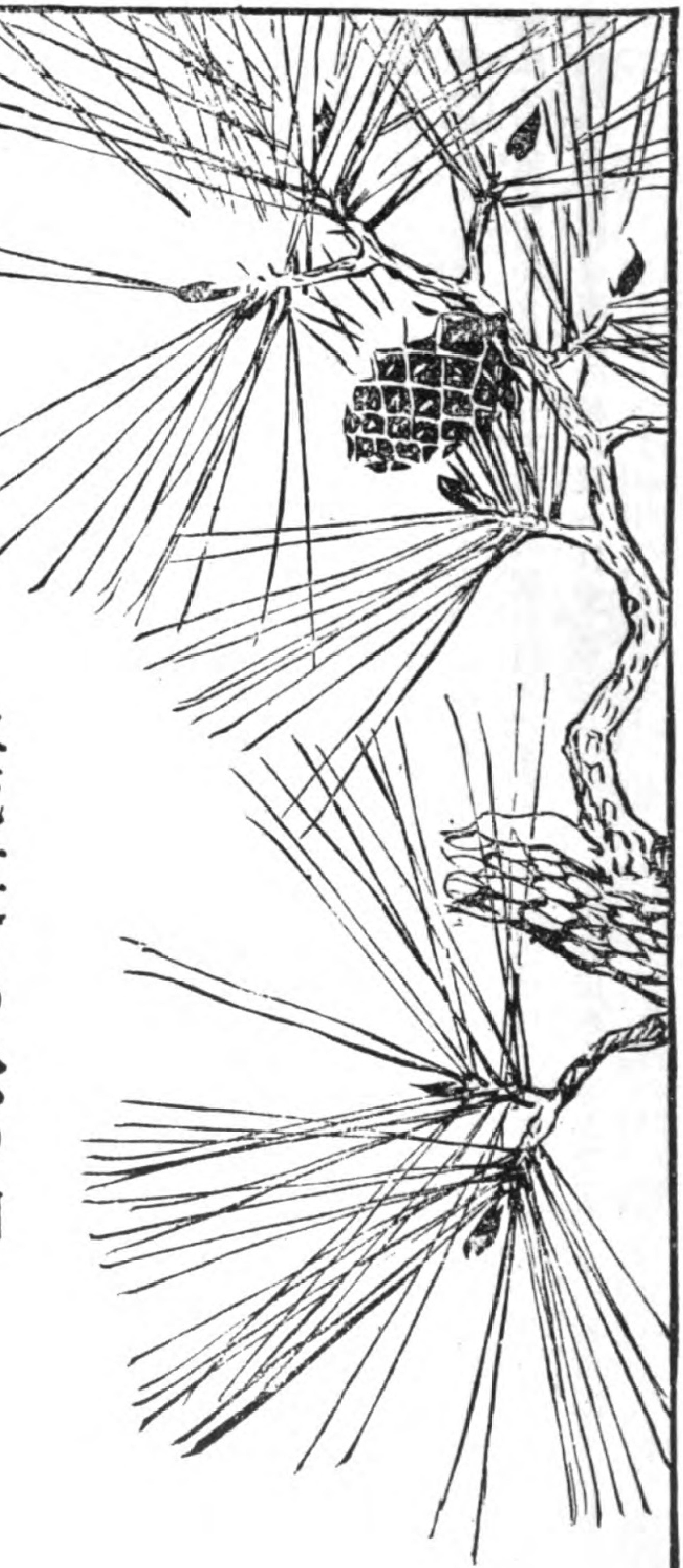
しことなしと承はる、又稀に洋食をきこしめさるゝ時は季節によりて相違はあれど、概ねパイナップル、林檎、桃、蜜柑、蕉實、苺など御用ゐになると承はる。

△雉子酒

是は元旦御祝の節參内の臣僚に下さるのでありますが、その製法は、御獵地にて御手に入りし雉子の胸の肉を、味淋醬油漬又は鹽漬にして刺身のやうに薄くそぎたるものを五六切程、御茶碗に入れ、結構な御酒を熱く沸して注込みたるものださうです。

△宮中の清潔

宮中にては萬事不淨を忌ませ給ふこと今更申すまでもありません、されば玉體を始め奉り、何ごとにもあれ、清きが上にも清かれと意をつけて御食事を調ずる大膳寮に於ては、大清、中清、小清とて三淨の定めがあります、大清といふのは兩陛下に奉つる御食事を調ずるので、係りの者は潔齋して最も清淨に調ずるのであります、中清、小清は宮中奉仕の人の差等によつて、それ〲食事を調へるのであると承りました。（完）



上流社會の松の內

舊大名華族の珍らしき正月行事

夢蝶閑人

上流社會の松の內とて、別段變はつたともありません。特に新華族の正月風俗は、御參內などを外にしては、大した相違はないやうです。けれど、十數

代連綿と續いてゐる舊大家又は大名華族の家庭となると、格式で持つた正月の事ですから、中流以下に見られぬ風習が、依然として遺つてゐるやうです、左に、ざつと、聞いた儘書いて見ませう。

◎上流社會の門松

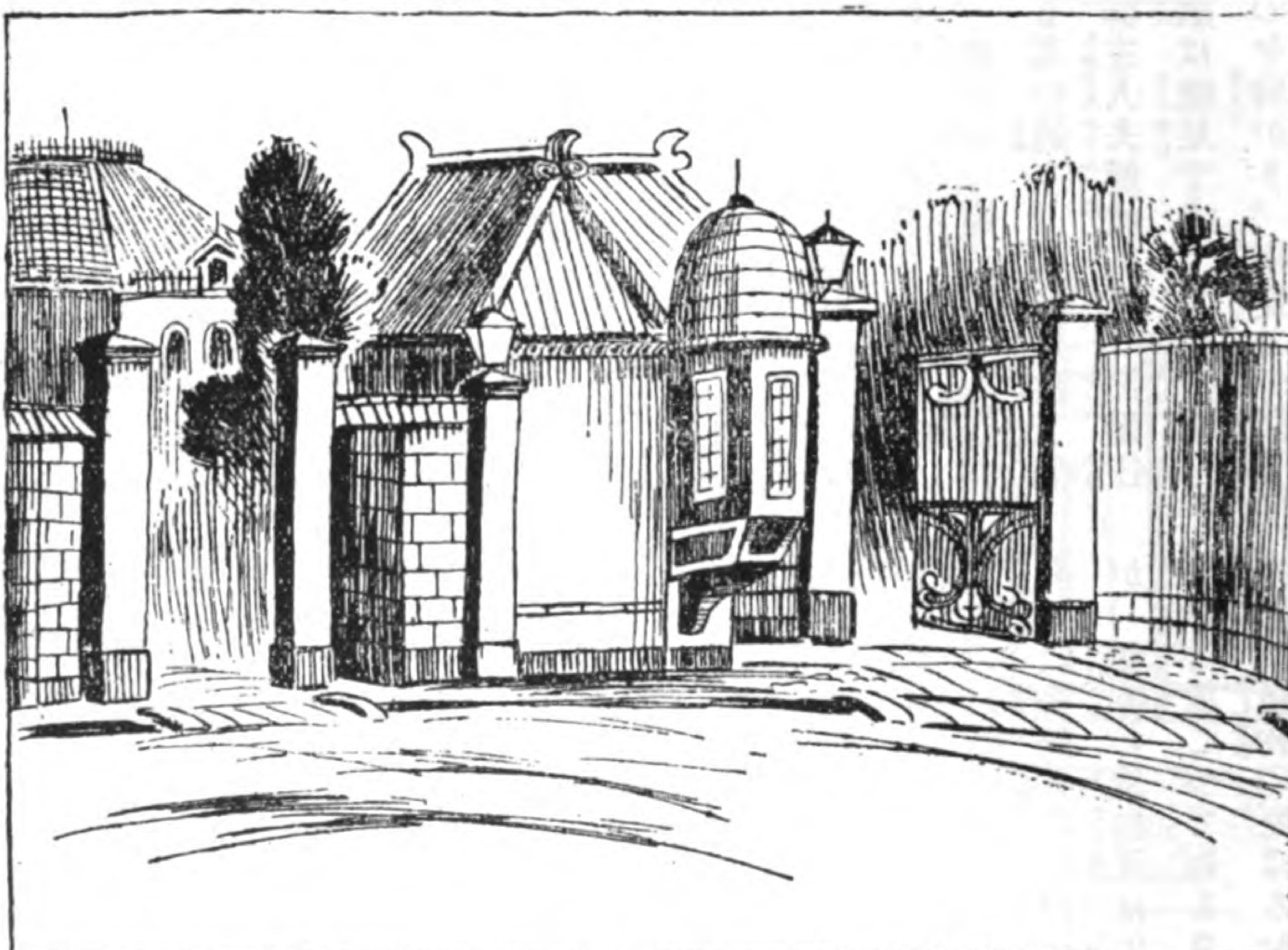
舊幕時代には、門松の飾付などそれは嚴重であつたそして、お屋敷に依つては、それ〴〵家風が定つてゐた、秋田の佐竹家の人飾り、肥前松浦家の椎の木飾り同鍋島家の鼓の胴飾りなどは、講釋師の講談にも遺こつてゐますが、まアその實例で、その他、例令著しい風俗は見えないまでも、お屋敷によつて、それ〴〵お國風があつたのは事實で、日本全國の風俗は、大名家の正月の門松で判じられるとまでいはれてゐたものです。第一門松の產地から吟味がされてあつた常陸鹿島の雌松は、穗が短かくて、日本隨一の稱があり。まして千代田城の門松は鹿島の松に限られてゐたさうです。次では上總の松、續いては相州の松でしたが、今は一列一帶、何處の松とも定つて居りません。五寸丸の青竹に一本松（門松に切り留、鋸刈り、一本松の別あり、切り留は枝を鋏で拂つたもの、小松を鋸で刈つたのは鋸刈、買い大木の松を幹より切つて二ヶ組又は三組にしたのは一本松）を植ゑ、松の根を引張つてある丈け、淡泊としたものです。最も一二年來、青竹の周圍に切り留を植ゑ、根を松の薪で固め、藁繩で結へた昔風のお屋敷もぼつ〳〵見えて來ましたが、從前に比べますと簡略になつたのは爭はれません。

◎特色の遺つてゐるのは鏡餅

乍併その內部に入つて見ますと、上流社會の松の內は、今に依然として舊幕時代の面影が遺こつて居ります。中にも鏡餅や、雜煮の調理方に至つては、そつくりその儘、從來の風俗が、今に大名や公卿華族の奥向を蔽ふてゐるのは流石に正月です。中にも特色の見えてゐるのは鏡餅で、三條公爵家では、上供へは紅、下供へは白の鏡餅で、八寸、七寸、五寸の三種、都合十四五出來るさうです。中山侯爵家では鏡餅の外に、煮た牛蒡を餅の間に挾んだ菱花ビラといふ餅ができ、

なは正月三日に、角釣瓶形の餅が五組出來るさうです。大きいのは大名屋敷の鏡餅で、備前の池田侯爵家のは、一斗取りの角の鏡餅で、上供へは小豆の汁で澁染にしたもの下供へは白です。又た京都西本願寺の鏡餅は、輪供へとかいふ鏡餅で、篩の框に詰めて丸くしたやうなまんまるい鏡餅で、二升取り四十四組、三升取十八組出來るさうです。

◎お雜煮の調理方



有栖川宮家御邸　（麹町三番町）

お雜煮の調理方も、お屋敷によつて、それ〲違つてゐるやうですが、普通に行はれてゐるのは燒豆腐、里芋、お葉、大根、枝昆布（羊角菜）串柿、花鰹の七種をあしらつた雜煮で、祝膳には鰭の吸物——鰭は鯛を用ゐるお屋敷が多いやうだが、鮭の鰭を用ゐてゐるお屋敷も見えます。それに蛤の吸物です。睨み鯛、化粧豆、ごまめ、熨斗昆布の上つた白木の三寶がつく、トいふのは多い方ですが、一様には言へません。又

岩倉公爵家では、元旦のお雑煮は、味噌汁と定つてゐるさうです。雑煮の調理方も、加賀の前田侯爵家では、大根、するめ、蒲鉾の三種、有馬伯爵家では、蒲鉾、するめ、昆布、大根、六角芋、といつたやうに、お屋敷によつて違ふのです。祝ひ膳もその通り、鍋島侯爵家では、必らず御國産の鰤を用ゐられます。之は朝鮮征伐の砌、鰤の大漁を幸先として酒宴が開かれたのが嘉例となつたのださうです。徳川公爵家では兎、前田侯爵家では、鴨ださうです。

◎調度類は一切塗物

舊大名家のお正月の式膳に用ふる調具類は三食毎に變はるのださうです、一切塗物で、夜分のお湯漬の外は、陶器は用ゐられません。膳は朝は蝶足、午が掛盤、朝と午と違ふのです。椀類も其の通り、朝は黒塗、午は、紋のついた椀。但し御主人夫婦丈けて、部屋住の姫様や若様は、朝午共に膳は蝶足です。で、姫様方は陶器のカチ〱音がするのを興がり、夜食のお湯漬を待たるゝことゝ聞きました。お鉢も世間のと違ひ、まんまるいお金鉢ださうです。

◎衣裳は日に四五度更はる

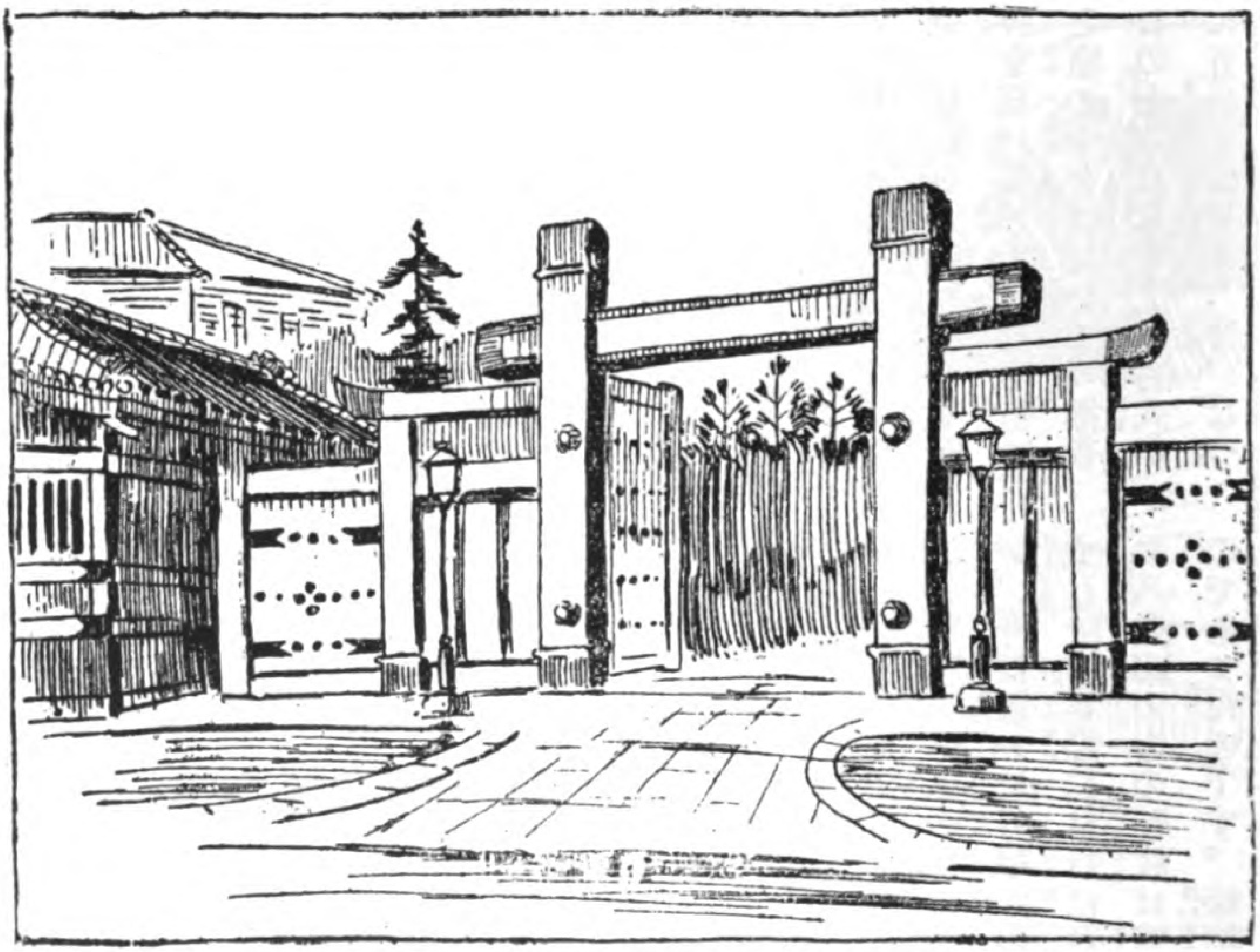
右のやうに調具は朝夕變はるが、正月のお召更は一層激しいさうです。元旦お風呂を召し、お化粧が濟むと禮服のお召更です。一體お雑煮の祝はるゝ時刻は、お屋敷によつて違ふので、一様には言へません。例へば岩倉公爵家では、午前七時半、御家族一同正廳に打ち揃ひ、天照太神宮及累代の靈殿に祝餅を捧げ、同八時、新年の屠蘇を酌む御家例ださうですが、參朝後午後の一二時頃になるお屋敷もあります。從つてお召更の時刻も、一様には言ひませんが、其外も多いのは、元旦の八時頃で、それ迄にお召更は出來てゐる。——今日は御婦人のは白衿紋付と定まつてゐるやうですが、相赤の地白又は地黄の裲襠を用ゐらるゝ古風なお屋敷も遺こつてゐるさうです。そして元日、二日、三日、お召物の更はるお屋敷もあり、午前と午後と更は

るお屋敷もあると聞いて居ります。午後三時又は夜分更はるお屋敷もあるさうです。午後三時又は夜分のお召物は、常着です。

◎午前と午後のお召物

古風なお屋敷を紹介して置きませう——

格式の嚴重なお屋敷になると、姫樣や奥樣は、松の内はお召更に寸暇もないやうに見受けられます。朝は相赤に地白の裲襠、午は相赤に地黒、「組」です。午後の三時に中模樣、右に紋があつて左は無紋の模樣物に更はるのです。夜は縮緬又は糸織の常着、と斯う日に四度更はるのです。そして帶は竪やの字に結んで入らつしやるのです。元日、二日、三日は斯うですが、四日、五日、六日は中模樣で、七日の七草になると、又た元日のお召更に戻るのです。



閑院宮家御邸　（麹町永田町）

◎姫樣の樂みは常着のお召更

斯う日に三度も四度も、然かも窮屈な禮裝で

すから、禮式に嫻れて入らつしやる上流の姫樣も、大抵ではございません。いや、お付女中の氣苦勞といつたら並大抵ではないさうです。それかあらぬか、姫樣はむしろ常着の方を喜ばれるさうで、中には又松の內、取り更へ引つ更へ、氣に入つたのを着更へて喜んで入らつしやるお方もございます。因に髮は奥樣は丸髷、姫樣は、高島田が多いさうです。

◎二日縫ひぞめ七日七草

上流社會では二日の朝、縫ひぞめが行はれます。白木の三寶に、紅の巾と、白羽二重が添ふて出る。白と紅の絹糸で縫つて、歳神に供へられるのが普通ですなほ二日の朝に、例の年男の掃き初めがあります、福包――これは榧、勝栗、野老、穗袋を入れた福包を箒に結ひ、三寶に上せて、室々を廻はるので、拂を持つた女中は、後よりぱた〳〵と室の中をはたいて、掃き初めを致します。そして七日の七草になると、古式がやかましいのです。爼の上に五行、田平子、芹、なづな、鈴菜、すゞしろ、佛の座の七種をあしらひ

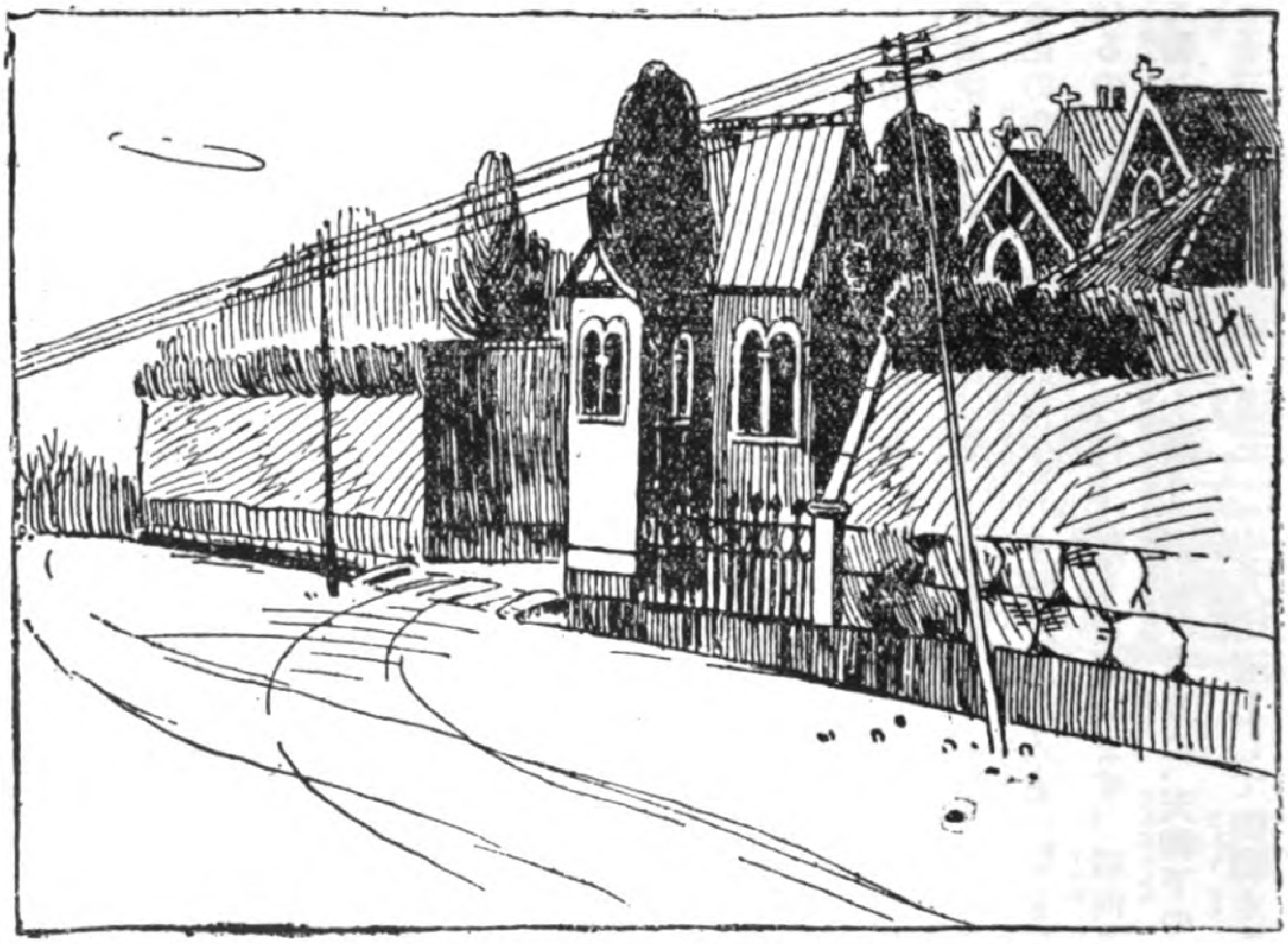
七草、なづな、唐土の鳥が、日本の內地へ渡らぬ前に

と三度唱へて、爼上の供へ物を一トつ宛スト、トン、トンと擊いて竈の前に囃します七草、なづな、唐土の鳥が、日本の內地へ渡らぬ先に、スト、トン、トンと擊きながら、竈の前より荒神の前に出るのださうです。女中等も後に跟いて囃やします。

◎松の內の遊戲

上流社會に行はれてゐる遊戲は、世間とは大した相違はないやうです。若樣は破魔弓、姫樣は羽子板に歌合せと、最う定つてをります。德幕時代には、ブリブリ毬杖といふ一種の遊戲が行はれてゐたさうですが、今は僅かに好事家の間にその名が記憶されてゐる丈けで、實際には行はれません。ブリ〳〵は車のついた八角形のもの毬杖は毬、丁度球放げに似たやうなものであつたのです。姫樣の戶外遊戲は中流と同じく羽

子板です。又室内の方では女中等が交つて、歌合せも賑やかに行はれます。百人一首、古今一首、伊勢物語、源氏物語、自讃歌等の歌合せで、中古には對末又は對末といふた歌合せがあつたさうです。——對末は花牌と混淆になつてゐるやうですが、對末（歌合せ）と花牌とは別々です。一體カルタといふのは、和蘭の舶來物で、天正年間（或は寛永の頃ともいはる）和蘭人の手より、ウンスンカルタの輸入つたのが、カルタの濫觴ださうです。一と度ウンス



北白川宮御邸　（麹町紀尾井町）

ンカルタが輸入されると、忽ち對末の勢力を奪ひ、日本全國を風靡したのださうです。けれど、此のウンスンカルタは、對末のやうな遊戯でなく、一種の賭博品ですから、ウンスンカルタの流行と共に、賭博の風習は四方に傳播した。大名屋敷にも無論行はれたのです。で、寛政年間にウンスンカルタの使用は嚴禁せられました。けれど、賭博思想は絶えません、間もなくメクリカルタが現はれたのです。今日 正月遊戯の隨一となつてゐる

カルタも、前述の如き沿革の下に發達したので、在來の對末（歌合せ）もカルタのお仲間のやうに思はれてゐるのは甚しい間違ださうです。（上流の正月風俗取り調べ中、清水晴風老に邂逅し、端なくウンスンカルタの事を耳にしましたから、序に記るしたのです）

◎松の内の賀客

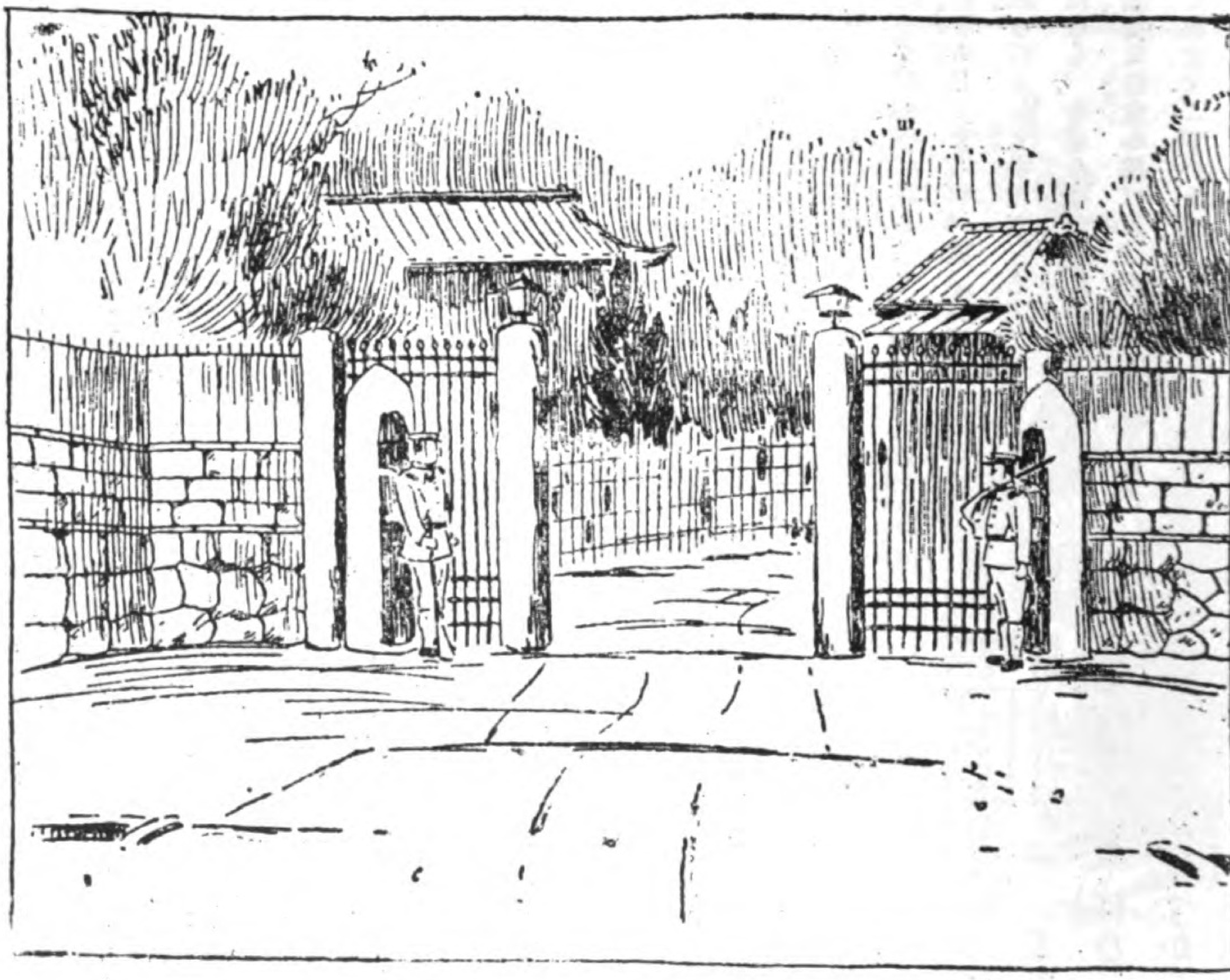
大名屋敷又は舊大家では、食初の儀式が今に行はれてゐるお屋敷もございます。——食初といふのは、三寶に米を盛り、高砂の松を植ゑたもので、その周圍に榧・勝栗・野老（山芋の一種）穂俵、海老、橙、蜜柑を堆高く積んだもの。奥に通る賀客には、先づ最初に此の「食初」が出るのです。賀客は「食初」より、榧又は勝栗二ツ三ツ、頂戴して、初めて主人御夫婦の御挨拶があるのださうです。舊藩臣の年賀などには、簡略になつてをります——舊藩臣の年賀は、大概元日午後或は二日或は三日に行はれるのが定例で、出入の仕事師は、玄關に立つて、下足番を勤める。賀客は大廣間に通ると白木の三寶に茹玉子三個、慈姑五個、蓮三個、之が祝膳なのです。家族は湯桶に御酒を充たして控へてゐる、かくて年賀を受けらるゝので、毛利、島津、前田、細川の四大名屋敷になると、舊藩臣の賀客は、日に三四百名、元日には六七百名以上あるとか聞いてをります。（今は大抵食初の儀式が廢れたやうですが、二三のお屋敷には行はれて居る。なほ地方の高等女學校等にも、正月禮式として食初の作法を稽古して學校があるやうです、當家出身の松田信子老女史は、鹿島及上田高等女學校在職中、親しく教授したと、同女史より聞きました）

◎上流社會と出入者

いづれの上流家庭でも出入者といふのがあります、呉服屋、菓子屋、魚屋、又は大工、左官、植木屋其他の職人、仕事師等の出入者で、大々名屋敷になりますと、出入商人は日々詰めて居ります。お屋敷により期日を定めて、出入人の年賀を受けられるのもございますが、又出入者一同を料理店に招いて饗應さるゝお屋敷もございます。駿河臺の吉川子爵家などがそれで、正月五日に、天神下の花屋に出入人を招ぎ、家從が御主人代理として御馳走するととなつてゐるさうです。

◎年越の福茶及び土龍除

十四日お年越の晩はお屋敷によつては、不思議な延喜が行はれてをります。一體大晦日、六日、十四日のお年越にお祝ひ前に福茶——お豆、山椒、梅干一つ入れた番茶を飲む風習が行はれて居りますが、十四日お年越の晩には、庭前で土龍除のお咒咀が行はれるのです。やはり年男の役で、手に棒切を持ち、



久邇宮家御邸　（麻布鳥居坂）

庭の樹々をはたくのです。實るか、實らぬかと樹をはたけば、後に跟いてゐる女中は、實らうと申しますと應へるのです、實るか。實るか。實らうと申します。……海鼠はお通りなさる、と口々で囃すので、儀式に疲れてゐる女中も、年男の後を逐ふて、鳴らうと申します、とキヤツ〳〵騒いでゐる中に、この儀式が終るのださうでございます。



大山前伊國公使夫人の歐洲貴婦人の社交談

婦人記者

前の伊太利公使大山綱介氏夫人は、錦鷄間祗候野村男爵の御令嬢で。十七の御時大山家に嫁られて夫君の任地佛國巴里に同行され、其後夫君の轉勤と同時に其任地蘭國海牙府及墺國維也納に同行され、八年の後共に歸朝し、更に伊國駐剳仰付らるゝと共に羅馬に居られました。夫人が歐洲の交際場裡の花として彼地貴婦人社會に名聲を馳せられたのは前後通じて十六年、英、佛、獨、伊、四個國の語に通じて又佛文を綴るにもお上手であります、しかし夫人は決して學者一方の人ではなく、令息令嬢の教育は元より雇人の選擇に至るまで、頗る愼密な注意を拂はれ、今年十八歳の令嬢が居らせまするが模範的の淑女でございます。

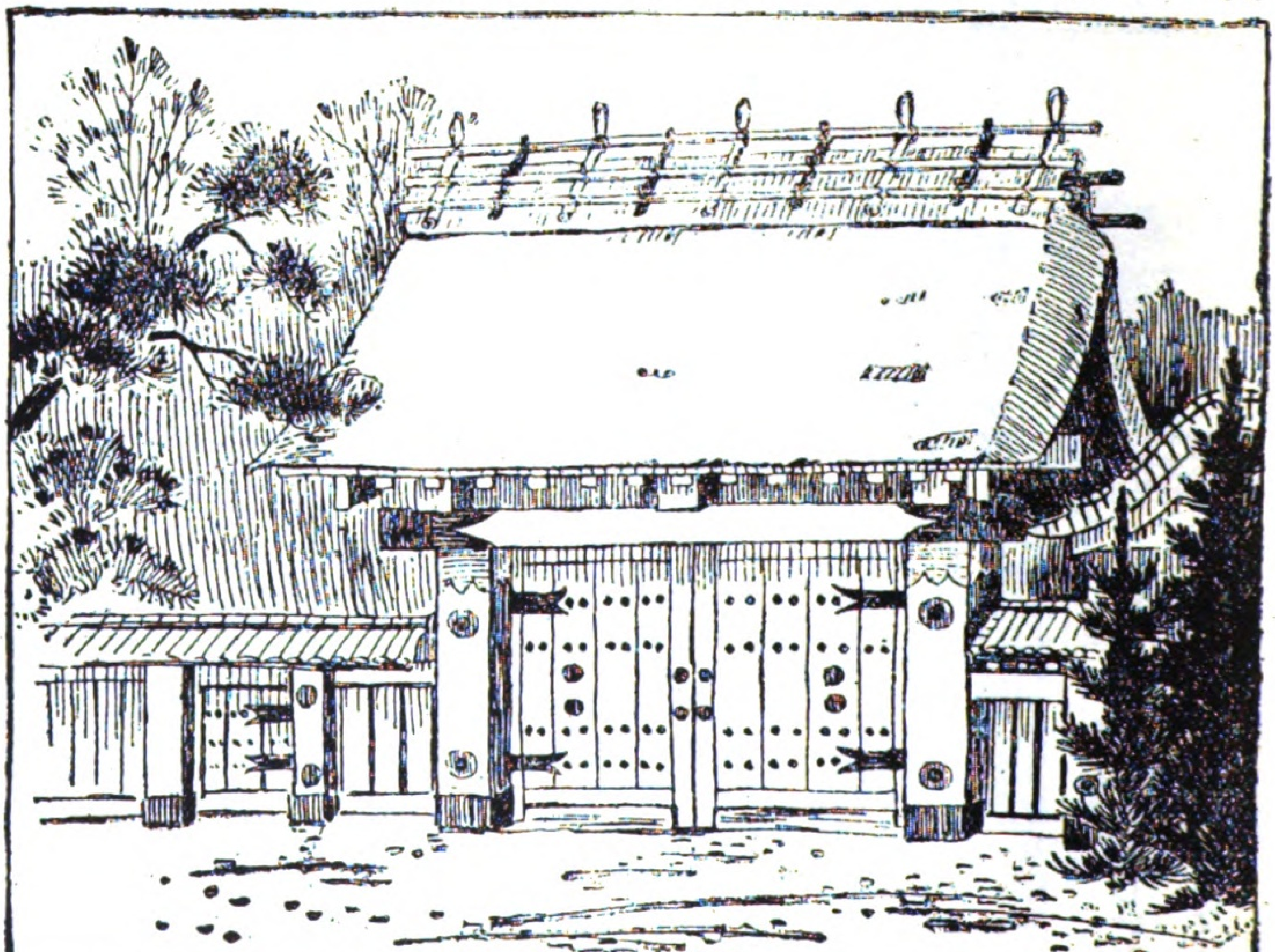
麻布富士見町の高臺に白茶色の新らしい西洋館、石の門柱清らかに建てられてあるのは大山家の御邸でございます。記者はお玄關の小釣鐘を叩いて御案内を請ひ、廣い應接間へ通されましたが、此處は寄木細工の床が滑りさうに光澤を放つて居りました。室内には兩陛下の御眞影を始め奉り、各宮及び各妃殿下の御寫眞が數々、伊太利先皇帝、皇太后、皇帝、皇后の御寫眞が恭しく掲げられ、閑院宮妃殿下御染筆の墨繪の梅の一軸、故淺井畫伯のナポリ寫生の水彩畫、羅馬の古畫などが配置よく掲げられてございます。洋琴の位置、椅子の色どり、盛花の工合、何處から何處まで拔目のない御裝飾と存じました。夫人は薄鼠の風通小紋のお小袖に葡萄鼠の紋羽二重の御羽織、程のよい廂髪の襟脚白く、鮮かな眉に快いお目元、お年頃の令嬢の母君とは如何しても見受けられぬ位、みづ〳〵とした美しい奥樣で居らつしやいます。記者は先づ歐洲の貴婦人方との御交際に就て伺ひしますと『私は、お話しが至て不調法でございますから、間違つた事でも申上げて

はと存じて、實は大抵今迄は、お斷り致して居ります。それに彼地の長所を申し上げますと、直ぐに西洋に心醉して居ると思召す方もありませうしちよつと心配なものでございます。何國の婦人にも長所の裏に短所は必ず少し位はございませうが

私は何時でも成るべく他の善い所を見て成丈け惡い所は見ない樣に致して居ります。

▲妙齢の渡歐が却て好都合

私は極若い時結婚致し



巣鴨岩崎家別邸

て、二週間目に日本を立ち、佛蘭西へ連れて參られましたので、未だ子供の樣な世間見ずが俄かに境遇が變化しまして心細くもあり、一時は何ですか夢のやうでございました。日本に居りました時分、學校の餘暇にミス、プリンスさんに英語を少少習つて居りましたゞけで、佛蘭西語は少しも存じませんでしたから、初め巴里では誠に困りました。それで早速佛蘭西の婦人を家庭教師に賴み、二年間何處へも出ずに一生懸命に勉強致しました

此婦人は日本語は勿論英語も少しも知らぬ人でしたけれども、通辯も用ゐず、初めから私と差し向ひで毎日セッセと仕込んで與れたのでございます。初めて丁度赤兒が名詞や動詞を覺えるやうに、教師が茶碗を指して是れはと申す風に教へて與れ、總て見眞似聞眞似で自然々々と覺えて參り、其内少し文字の數が出來てから、文法を習ふたのでございます。此教師は極親切な人でしたから、私が割合に早く覺えたのですが、一つは年がゆかぬ内で頭腦が單純であつたので、却て都合が宜しかつたものと思ひます。談話が出來るやうになりますと、彼地の上流婦人との交際も追々樂になりました。一體彼地の婦人は、何れの方面に向つても一通りの修養がございますから、趣味が豐富で談話の種が後から〳〵湧いて參り、如何程長く話し續けても他の害になるやうなお話しの出ないのは、誠に都合が宜しうございました。

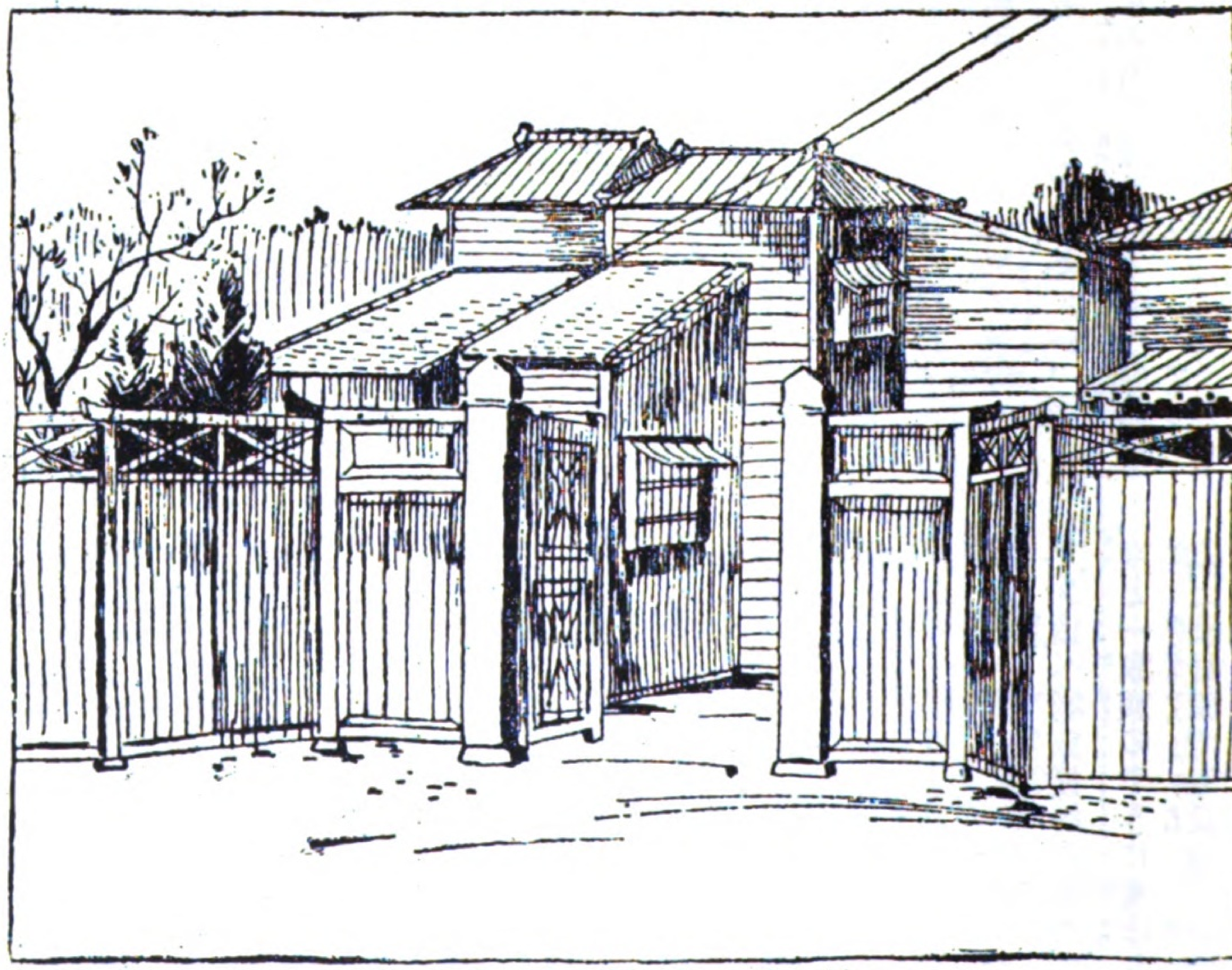
▲應接間の光線

彼地の婦人は、化粧服裝に善く注意致しますが、特に四十を越した貴婦人方は種々工夫を凝して顏にうつり好き飾りを致し、衰へ初めた容貌を繕ふことに努めて居ります。御承知の通り日本の風習と異つて、年を取つた婦人でも華やかな服裝も出來るのでございますから、各自の考案次第で工合のよい色取りの物を身に着けられます。私なぞも帽子や顏覆ひで醜い點を胡魔化し得られましたから、大層便利でございました。客間なぞも餘り明るうございますと、婦人方の顏の缺點が明瞭に現はれて客も主人も善い心持が致しません所から、客間等は成るべく窓掛を美術的に幾重にも垂らして室内を薄暗くさせて置き、三時頃になりますと、薄桃色の電燈覆ひなどを致して、婦人方の容貌が成るべく美しく奧床しく見えるやうに注意致します。

▲繁忙な歐洲貴婦人の交際

赴任後一年位は親しい友も出來ませんから、公會に出るだけ位で餘り忙しくもございませんでしたが、長く

住つて居りますうち漸々知人も殖ゑ随分繁忙に日を暮しました。歐羅巴でも中流以下の婦人は、國國に依りまして少しづゝ生活狀態が異うやうでございますが、上流社會の婦人は、大抵何處でも同じ様に存じられます。私は一番永く羅馬に居りましたから、同地の貴婦人の交際振を一つ二つ、お話し申し上げませう。羅馬の交際季節は十一月末頃から徐々初まり、一、二、三月が最も盛んで、五月末頃に終るのですが交際の廣いものは矢張り



小村外相邸（小石川原町）

年中續けて忙しいのでございます。それで貴婦人達は、矢張り他の都の貴婦人のやうに、交際季節に入る頃から、各自接客日を定めて、一週に一回午後五時から七時まで又は晩餐後來客に接します其他盛に催ふされる公私の晩餐會、夜會、舞踏會などに出席致すのでございますから、却々忙しいのでございます。晩餐會は通例午後八時、夜會は十時頃、舞踏會は十一時頃から始まります。一夜の内に晩餐會後引き續いて夜會又は舞踏會を催す

ことが多いのでございまして、普通の舞踏會は大抵終りが一時頃ですが、コチヨンのある舞踏會は四時頃までかゝりますから、立食が濟んで退散致しますのは、翌朝五時頃になる事がございます。

▲順番の家族小集會

公けの會に於て顔を合せますばかりでは、貴夫人方と早く親密になれませんから、皆樣と御相談の上、一週に一度づゝ各家庭で順番に小集會を催す事に致しまして、一年間に一度ぐらゐ私共が會場に當りましたが、各國大使公使及伊國の貴族達の御家族が御出になつて、可なり賑かでございました。奥樣方同士は一つ卓子を圍んで御茶を飲みながら、種々の趣味談や罪のない打明け話しに興じ合ふ側で、お子さんはお子さん同士、宅の娘や倅も、お相手に交つてピアノを彈くやら舞踏をするやら睦じく遊ぶのでございますが、小さな御子さんでも佛蘭西語を巧者に操られるのは感心なものでございます。此集會は貴婦人と親むのに非常な利益でありましたのは申すまでも無く、これが爲めに耳新らしい有益な、お話しを伺つて何の位、精神上の修養になつたか知れませんでした。最も此會には男子の方は入つて居らぬのでございます。

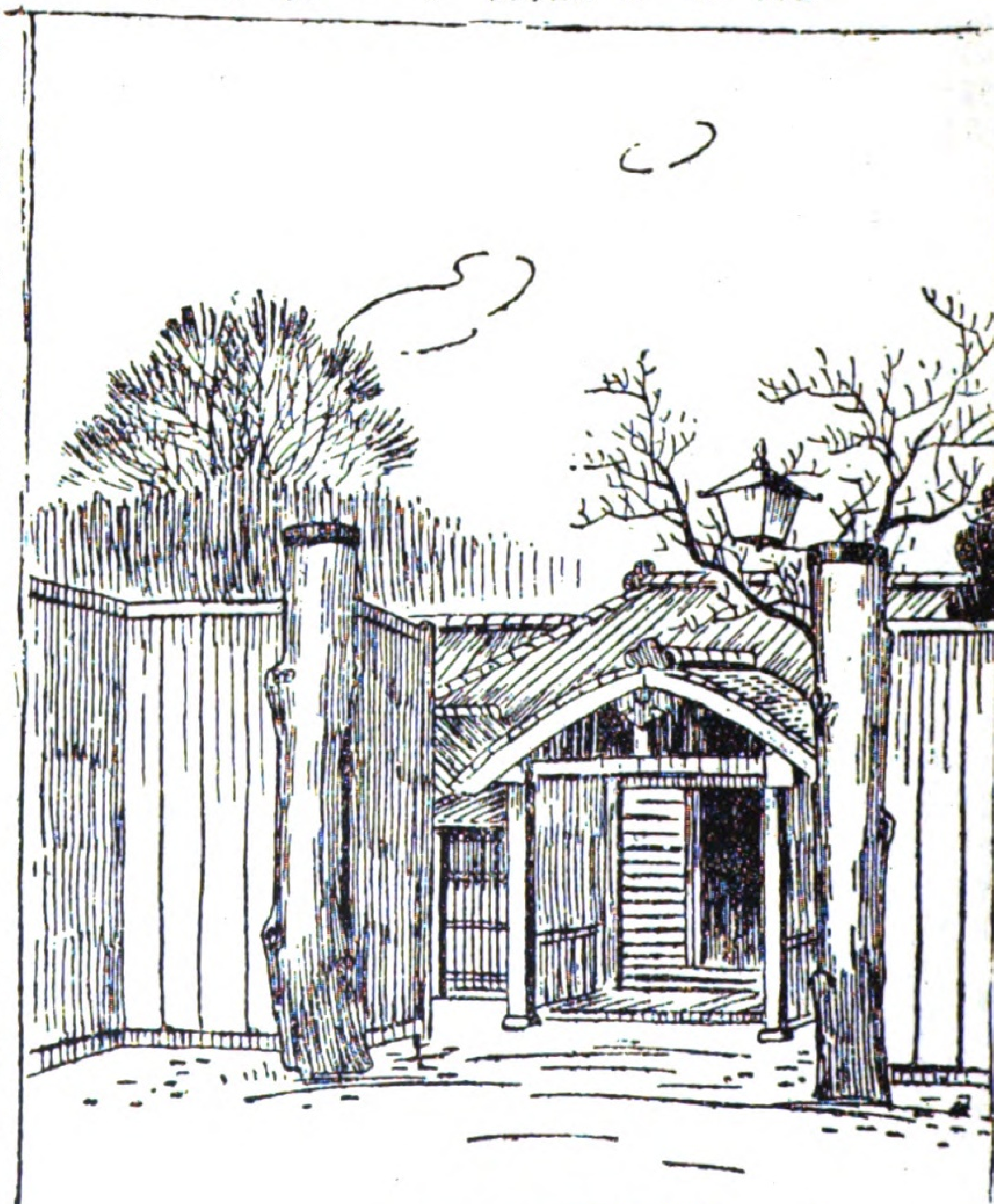
▲暑中休暇の利用

六月以後貴族が轉地致します避暑地は、矢張り各方面でございますが、カマルドリーとウアロンブロザは、交際社會に出る者が多く參ります場所でございます。ウアロンブロザは羅馬から汽車程僅か八時間で行き得らるゝ樹木鬱蒼たる山ですが、一千メートル山頂まで登り得らるゝ齒車附の汽車が備へてございます。避暑地の交際は都に較べますと、總てが手輕でございますから、親交を結ぶのに極便利でございます。私は交際が好きでございましたから、夏は大抵此ヴアロンブロサ山へ家族僕婢を伴つて參り、彼地の貴族や交際官方と一家族のやうに食事なぞを一緒に致しましたので二三個月間でも長らく馴染んだやうに打解ける事が出

來たのでございます、

▲貴婦人の午前午後

彼地の上流婦人達は、交際に夜を更しますから、一般に朝寢を致し、朝の食事は寢室で致すのが多うございます、朝食を濟ませましてから侍女に扶けられて化粧を致し、それから婢僕にそれ〴〵一日の用事を言渡し、各國の新聞紙なぞを大略目を通しまして、十一時頃から十二時頃まで徒歩運



曾禰統監邸　（麻布櫻田町）

動に戸外へ出掛けます。晝の食事は大抵十二時半、一時頃で、食後は凡そ一時間ぐらゐ寢室に入つて休養致すのが例となつて居ります。それより四時頃までは手紙を認めたり、家政を處理したり致します。是等の用事は四時半を限りと致して訪問服に着換へ七時頃までは人の家を訪問に出掛けましたり、又は宅に居つて客を受けたり致します。これが濟みますと、更に夜會服（胸の開いた禮服で帽

子は冠りません）に着換へ、自宅で催す晩餐會、又は他に招かれた公私の晩餐會や夜會に列なるのでございます。

▲外出の定り

午前中は如何なる貴婦人でも單身で散歩致して差支ない事になつて居りますが、此時のは若い婦人も極澁い目立たぬ服装でございます。午前に派手な服装で外出する婦人がありますと、直ぐ人が卑しめて視るのでございます。夕刻訪問に出掛けます際には、午前と違ひ可なり華美なものを着け、夜分の會に列なります際には、一層華やかな服に着換へるのでございます。而して午後及び夜分の外出には、決して輕々しく獨りで出掛けません。自家の徽章の付いて居る馬車と自家の従者並に御者を必ず従へて參るのでございます。

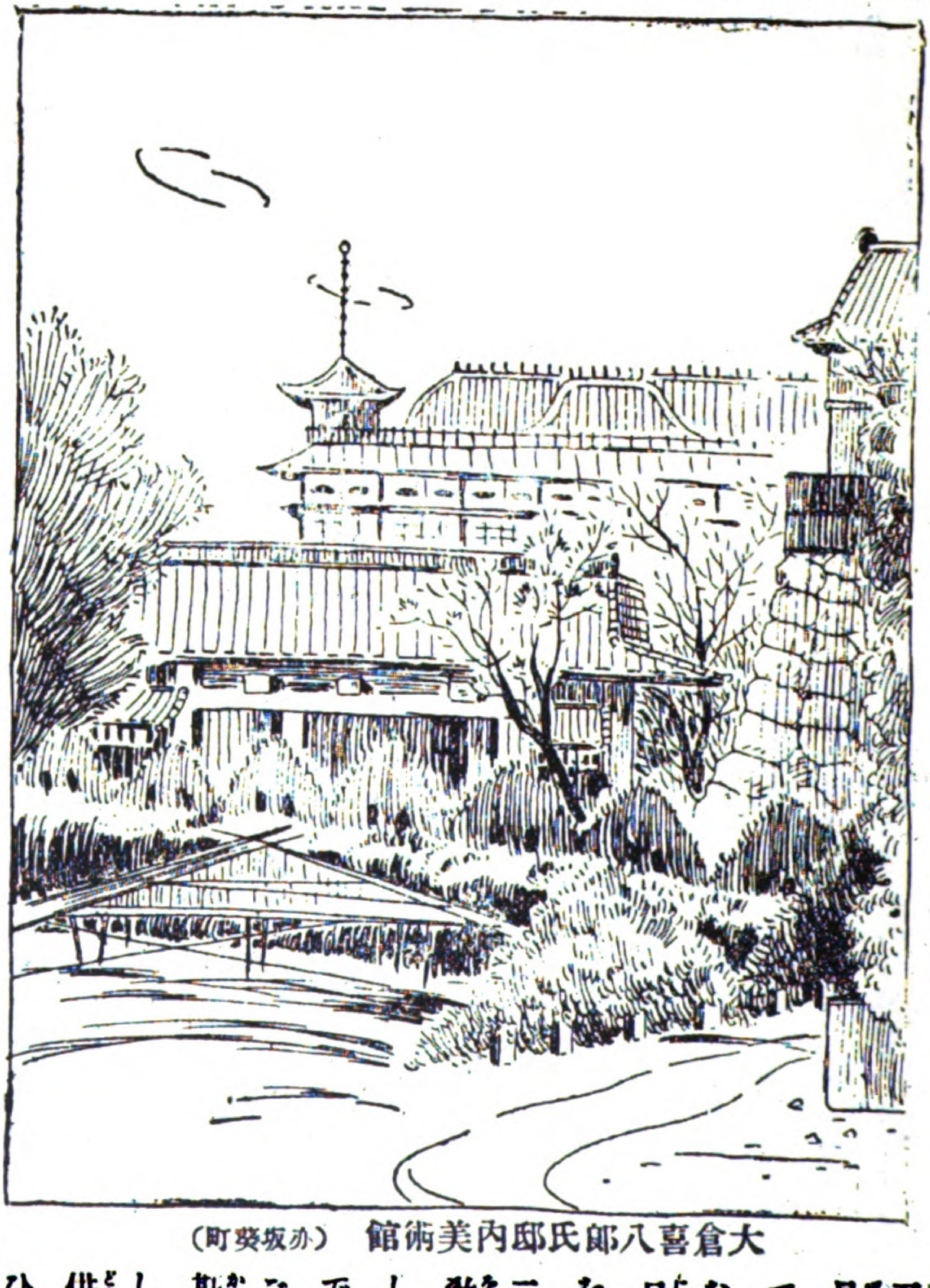
▲結婚前の婦人

上流社會の女子が交際社會に出ますのは、滿十八歳の後でございますが、長者の監督は却々嚴重なものでございます。舞踏會は主に未婚の男女が打ち集ひ舞踏するのですけれども、保護者として其女子の父母兄姉（姉は婚後の者）が必ず室内に附添ふて監督して居ります。一般に結婚前の女子の服装は、極々さつぱりとした物で、主に洗濯の出來易い飾りのない白地を用ゐ、指輪、其他寶石類などは、殆ど身に着けて居りません。而して十八歳未滿の少女は夜早く寢ね、朝早く起きて勉強致す事や乘馬、テニス等の運動を奬勵されて居ますので、心身共に餘程健全のやうでございます。一般に彼地の子供の教育は厳しい方で甘やかす風はございません。特に目上の人を尊敬する事、虚飾せぬ事は、充分教へ込んであるやうに存じられます。

▲子女を學校へ遣らぬ風習

伊太利の上流社會では、子供を學校へ出しませんで、家庭教師を幾人も雇ふて教育するのが一般の風習となつて居ります。畢竟學校には様々な身分の子供が

参つて居るので、野卑な言葉や行儀に染まると困るからでもございませう。私共の男女二人の子供（長女美代子は佛國巴里生れにて本年十八歳、長男西一は墺國維也納生れにて本年十六歳）も日本の樣に學校へ通はせた方が經濟でもあり、世話もなくて宜しいとゝ存じましたけれども、交際の體面上據ろなく一々家庭教師を頼んで教育させました。學科は總て佛蘭西語で學ばせましたが、英國婦人も一人頼んで、嚴格な躾方を受持つて貰ひました。又日本の學問は是非頭腦へ入れて置かなければなりませんから日本から教科書を取寄せ、毎朝二時間づゝ私が教へて遣はしました。忙しい中で隨分面倒ではございましたが、斯樣して置きました爲めに、子供達も歸朝後思ひの外早く取り返しが付きまして、唯今では他の同年位の生徒の中に交つて後れを取らぬやうに爲つたのでございます。



大倉喜八郎氏邸内美術館　（赤坂葵町）

◆嚴重な𡣞姆並に下婢の擇み方

交際社會に出ます婦人は忙しい爲めに如何致しても子供の監督を𡣞姆や下婢に任せる傾きになりますから其擇び方は一般に嚴重なもので御座います。彼地の𡣞姆や下婢は御承知の通り、暇を貰ひます時に主人から證明書を貰ひ受け、これを携へて他の主人に見ゆるのでございますが、正直、精勤、忠實の三個條が此證明書の紋切形になつて居り、よく〳〵惡い下婢でなければ、大抵此證明書を主人が書いて遣はすのでございます。それですから、本當に調べますには、此證明書を見ましたばかりでは未だ安心出來ません。中には證明書を巧みに擬造する下婢がないとも限りませんので、餘程注意が肝腎でございます。應募者は却々多うございまして、周旋屋に頼んで置きますと多勢連れて參ります。先づ證明書を見まして、三個條の外に何か著しい長所又は特別の勤め方をしたと書入れある者だけを擇び、其中から又善さ相な者を擇びます。下婢の方ですと、先づ此位で宜しうございますが、𡣞姆の方は學問も一通りなければならず、又正直で善く働いても、怒り易い性質でゞもございますと、自然子供に惡い感化を及ぼしますから、尙ほ一層撰擇に注意を要しますこれは是非共主婦自身が前主人を訪問して本人の性情素行を聞き訊す必要がございますが、此調査に就きましては、一面識なき間柄でも、身分が懸隔して居つても、大抵面會して正直に其者の平生を話す事になつて居りますから、此點は誠に都合が宜しうございます。

下婢の種類は矢張り樣々で、未亡人もあり、夫婦別別になつて勤める者もあり、未婚の女もあり、何れに致しても不幸な側の者でございますから、格別敎育のあると云ふ次第にも參りませんが、唯だ感心なのは前主人の惡口を申さぬ事でございます。前主人の事ばかりでなく、其家へ出入る婦人方の批評などは一言も申し出しません。これは公德を重んずる風習が自然下等社會にまで行き渡つて居る爲めでございますが、主人の方でも下婢の申す事は一切取り上げぬと云ふのが一般の風習でございますから、下婢の方でも陰口の暇會がないのでございませう。

名流談叢

入澤博士夫人の家庭談

婦人記者

入澤醫學博士の御夫人は中牟田子爵の御令孃で、十一歳の時から御結婚前まで舊藩主鍋島侯爵家に養はれ、侯爵母堂の老女方に躾けられなすつた方でございます、それで磊落な博士に嫁がれて以來、良人の趣味に副ふやうに努められた結果、愼重なお邸風と進歩的な入澤家風とを程善く調和なされ、交際向でも家政整理でも拔目なく切廻して居られます。特に整理の工夫が御巧者で、三年前新築せられた唯今のお邸宅の設計は、御多忙な博士に代つて夫人が專ら考案されたので厶いますが、隅から隅まで注意が行き屆いて居るので、うかゞふ者の誰もが感服致すので厶います。

湯島五丁目の高臺で、御門を入りますと、右手が白茶色の西洋館、左手の供待と衝き當りの車部屋とが矢張り對の白茶色でございます。西洋館に續いて赤松黐の樹、櫻などの植込を控へた二階建の日本家が垣根越しに見えます、お取次は十四五の學生さんで、直にお玄關に近い應接室に案内されました、鈍草色の壁、純赤色の絨氈、栗色のテーブル掛といふ配合の好い室で、書棚には白百合の造花を挿んだ七寶の對花瓶だの小さい陶製の庚申猿、犬、福助一對、鶴田軍醫正が寄贈された露國榴散彈などが置かれてございました。御來客と見えて奥の方で花やかな笑聲が聞えて居ましたが程なくお歸りの氣合がして夫人は應接室へ來られました、色白の眼元の涼しい纖麗な御方でございます。伊勢崎銘仙の細い格子縞のお單衣に三つ鱗の御紋の付いた龜甲形の紋羽二重のお羽織を召し、お髮は庇の出ないS卷に小さく結ばれ、お年に合せてお質實なお服裝でした。

▲結婚してから困つた事

私は極昔風の敎育を受けまして、餘り學校へも參りませんでしたから、當節の事は少しも辨へませんで、誠にお恥かしいのでございます、當家へ參りました當

座は日用品の相場が判りませんで、實に當惑致しました。書生が何々を求めますからと申して參りましても普通知れ切つた物の價を一々尋ねるのも聞が惡く大凡にお金を渡したのでございますから、二十錢ぐらゐの物を買ひますのに五圓渡したり、壹圓の物に五十錢渡したり致した事が毎々ございました、多い方は宜しうございますが、少い時に書生が申し難がつて、其時は默つて居り、程經てから申しましたので尚更赤面致しました、餘り困りましたので、勸工場へ行つて見たり歩く時に正札に氣を付けて見たり致して、漸々覺えたのでございます、お邸に居りました頃は、餘り臺所へも出ませんでしたから、これにも最初は困りましたのでございます。

▲良人から運動の注意

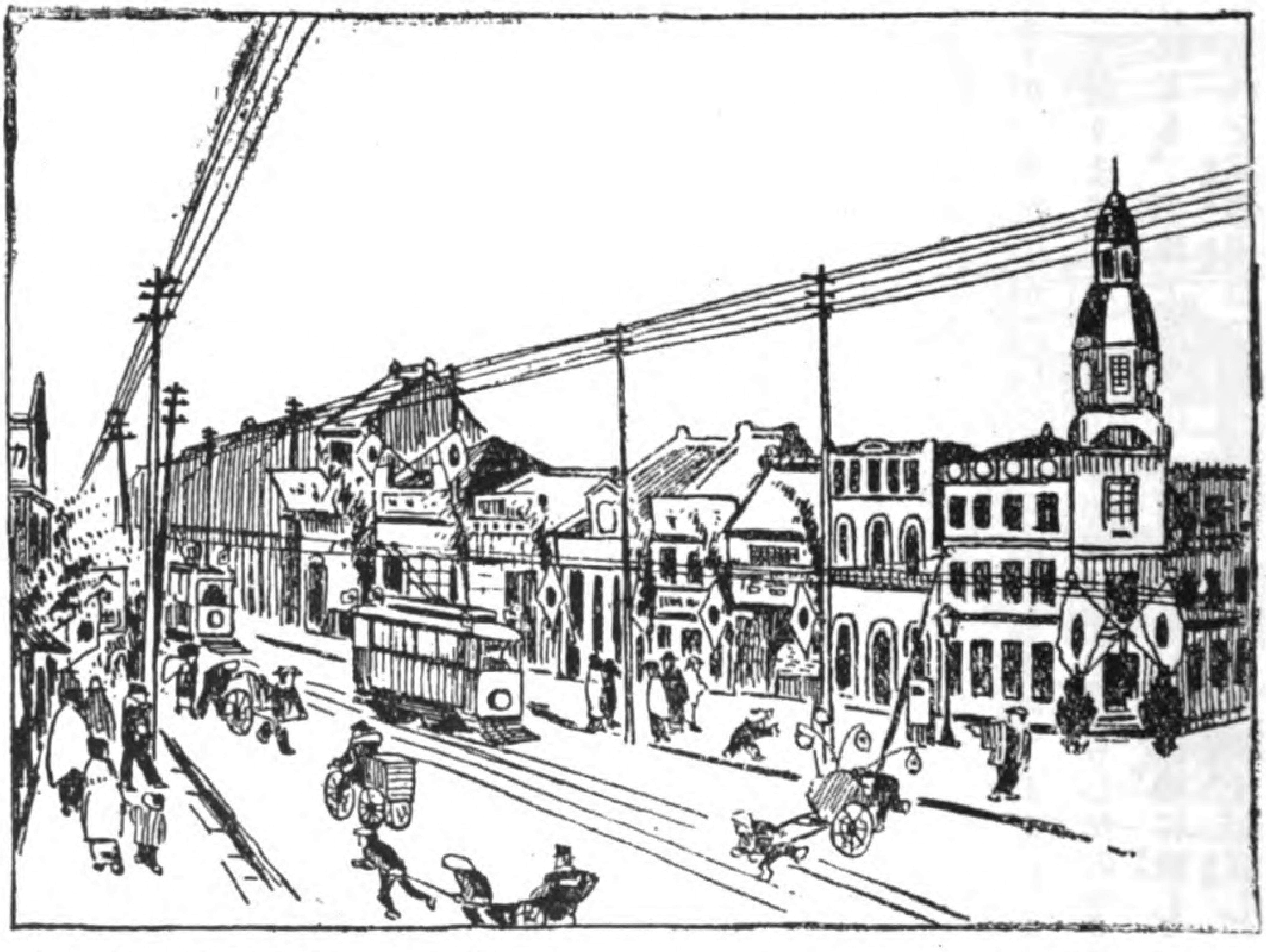
女が家の中にばかり引込んで居つたり、荒業を致さなかつたりすると、身體が薄弱になつて丈夫な兒を產む事が出來ないからと申して、良人が私に運動の練習を勸めて與れました。初めて旅行致しました時、書物を詰めた柳行李に細引を掛けて見ろと申しましたが、私は如何して掛けて宜いか判りませず悲しくなつたのでございます、其後漸々人樣のなさるのを見ましたり、自分でも研究致して、唯今では工合よく締るやうになつたのでございます。それから井戸の水汲を勸められましたので、最初はホンの少しづゝ釣瓶に汲み上げて漸々慣らしましたらば、樂に汲めて兩手に手桶を提げ得らるゝ樣になりました、斯ういふ風に良人が導いて與れましたので、唯今では子供と一緒に山へ登る位の事は出來るやうになつたのでございます。

▲身拵へが速い

私はお邸の老女方に昔風に躾けられましたので、結婚當時は境遇が遙かに變りました爲に、多少困つた事はございましたが、今日になつて見ますと、老女方に躾けられた行儀作法が皆實際の役に立つて居るのでございます、昔の邸方は身拵へなぞ悠長に致すやうに思

召す方がございませうが却却手緻いものでございまして、お風呂なぞでも顔を何分間で洗ひ、身體を何分間で洗ふと云ふ風に整然と定めてございます、お化粧や着衣も矢張り時間が定めてございまして、無益に時間を費さぬやうになつて居ります。老女方が年のゆかぬ者に一寸の隙もないやうな身仕舞を敎へますから。手敏く綺麗に致す事を嚴重に仕込まれます。私は不束で躾けられた半分も出來ませんけれども、それでも、御陰樣で身拵へだけは速く出來るやうでございまして

東京の新年(1)　銀座通り



急性な良人に今から直ぐと申されます時でも、何樣か斯樣か間に合つて、伴が出來ますのでございます。

▲寢るにも廣い帶

邸方では夏冬共寢卷もお端折にして帶を晝間の通りに締めて臥ります、これは夜中何事があつて起きましても、取り亂して居ましては不都合でございますから、斯うして寢られるのでございます何事にも注意深く規則正

しい老女方の生活を唯今考へて見ますと、矢張り西洋婦人の長所に一致して居るやうに存じます。ちよつと着物を脱ぎます際でも、先づ帯を解いて振つて疊み、それから上着を脱いで疊むと云ふ風に脱ぎながら手敏く取片付けるとを躾けるのでございます。

▲些細の物を忽にせぬ

毎日化粧をされ、整然としたお服裝をなすつて居らつしやる昔風のお邸の女中分の生活は、ちよつと見ますと贅澤のやうに見えませうが實際は却々勤儉なものでございました些細の物の始末なぞ誠によく行屆いて居られます。細い切れ端でも張つて皺を延ばして用ゐられますので小切れ疊紙に整然と分類して叮嚀に積み重ねてございます、拔き糸も色を分けて揃へ一々紙にくるんで手文庫に收めてございますが、大抵の糸屋には揃つて居らぬくらゐ色數が揃つて居ります、私も折角老女方に仕込んで頂きましたけれども、不束で漸々疎漏に爲り、ツイ皺だらけの繼ぎ切れを其儘用ゐたりなぞ致しますので、誠にお恥かしうございます、併し是から追々整理を致したいと存じ、避暑に參つて居る間に疊紙は少しづゝ拵へて置きました、世帶を持ちましてから衣類や家具の整理に就きまして種々工夫致します際、毎時參考として利益を得て居ますのは、全く躾けて頂いた御陰と感謝して居るのでございます。イエ最う座敷も臺所も取り亂してございまして、御覽に入れるのもお恥かしうございますが、折角のお言葉ですから、と

夫人は階段を上つて、入口に日本武尊の大きい塑像を据ゑた三十疊敷の洋風應接間から案内されました。前の應接間はどんよりと沈着た色どりでしたが、此廣間は春の野に出たやうな心地が致します、これは絨氈が赤無地で壁が嫩草色、而して窓の數が澤山で光線が充分に入る爲めでございませう、『此室の色どりは裝飾師が意匠を凝らしたのでございまして、絨氈もいろいろ考へまして無地に致しました、無地の方が他の裝飾を浮き起して調子が宜しいやうでございます、椅子

布も一つ〳〵異はせるのが本當だそうですが、餘り億刧ですから、二色だけに致しましたとて、夫人は椅子覆ひを取つて見せられましたが、極薄い鶸色地に薄草色の模様で絨氈と反對色でございました。

「西洋間にしては窓が多過ぎますが、此方が陽氣のやうでございます、此室で一番心配致しましたのは、煖室爐の煙突でございます。石造の建築ですと、普通石の煙突でも差支はございませんが、私共では經費の都合で木造でございますから地震との關係に就いて建築

東京の新年 (2)　人形町通り



師が注意致したのでございます。石の煙突ですと地震の度に目に見えぬ損じが少しづゝ出來て居るのを知らずに居る爲めに大地震でもあると木造家屋全體に影響するさうですから、此煙突は銅に致しました」とて夫人は衝立を取除けて煖室爐を見せられましたが、獨逸の新式銅製瓦斯煖室爐で瓦斯が銅へ照り返して床の方が大層暖まるのださうでございます、承塵に掲げられたる油繪は大抵新派名流の筆になつたもので、風景畫が六七枚見

えました。中にも昨年の公設展覽會で御求めになつた雨後田園の大作（吉田博氏筆）が一番目を引きました次に拜見したのは御主人のお書齋でしたが、專門の者は申すに及ばず、內外の歷史、科學、文學の珍籍が幾層かの書棚に整然と列を成してゐるのは宛然圖書館のやうでございます、書見卓子の正面に御兩親の肖像畫（中澤弘光氏筆）が揭げられてございます、父上樣は博士が御幼少の時に物故なされ、母上樣のお手一つで御敎養なされたとの事でございますが、其母上樣も夫人が嫁がれてから一年後に此世を去られたとの、お話でございます、夫人は博士の數多い讀物の置場所が亂雜にならぬ樣にと整理に注意せられ、新聞雜誌なぞも役所の書類入れのやうな分類棚へ收めて新舊の區別が一目に別るやうになつて居ります。

▲屋根裏の淸潔と落雷の豫防

御書齋の隅に奇形の書棚があつて、而も何一つ載せられてございませんのを不思議に存じて居りましたところ、これは三階の階子段で場所がない爲めに苦心の餘り斯樣なものにしましたと夫人は仰しやいました。三階はちよつと十疊敷ばかり、三方を硝子張にした物見風なもので、東京市の半分ぐらゐは一目に見えます。夢のやうに霞んだ凌雲閣、天王寺の塔、洲崎の海なぞ一入の眺めでございます、一方の袋戸は屋根裏への入口になつて居りますが、天井は悉皆セメントを塗つて鼠を防がれてございます、お掃除が行き屆くと見えて實に淸潔な天井裏でございます、落雷豫防の爲めに書齋の高い處へ絕電機を備へられ、消火器も方々のお廊下に備へ付けられてございます。

▲御主人の消毒室と着衣室

御職掌柄、傳染病患者に觸れられた場合の用心に內玄關の側に消毒用の戶棚を設けられてございますが主人はお歸りになるや否や必ず此室へ御入りになつて消毒をなさるのださうでございます、博士は每朝七時から大學の講義に出向かれて日暮にお歸りになります

し、日曜にはお宅診、其間に往診ですから、お身體が二つあつても足りぬ位に多忙でございますから、性急におなりのも御尤でございます、其で夫人は博士のお身のまはりの事を手早くお世話なさるのに種々工夫せられまして、博士の着衣室など頗る便利に整理されてございます、一間に奥行四尺の戸棚の中へ棚や大小の小抽匣を作り、帽子類は棚へ並べ、ネクタイ、ハンカチーフ、靴足袋、ホワイトシャツなぞ一々名目を張り付けて抽匣へ收め入れ、御洋服は中央へ吊してございます、私は一目瞭然の實例を拜見しました。『良人は從來よく手をたゝく方でございましたが、此設備が出來ましてから手を拍かぬやうになりました』と夫人は仰しやいました。

東京の新年 (3) 兩國廣小路



▲お子さんの衞生

衣裳部屋も御家族の寢室も日本建お二階に在るのですが、寢室の前は廣い廊下で欄干が頑丈に出來て居ります、これはお蒲團を干されるので、欄

干の格子を堅になされたのはお子さんが足をかけられる危險を防がれたのださうです、お子さんは、十一を頭に八つ五つと皆男のお子ばかり、何れもお丈夫にお育ちでございます、博士は申す迄もなくお子さんの衞生に深くご注意なすつて居られますが、夫人も亦博士に劣らず御注意深くお育てになるのでございます、夫人は檢溫器、舌抑へなどを備へ付け置かれ、毎朝お子さん方の健康診斷をなさいまして、特に咽喉部を毎日注意して御覽になるのでございます。

▲毎朝の敬神

お倉庫の側の茶の室に一間ばかりの、戸棚があつてお扉になつて、居ります、天照皇太神と御兩親を祀つて居らつしやるので、此神殿は太神宮拜殿の雛形で全然正式に作られたのださうで御座います、夫人は斯う仰しやいました「私の父は神樣に對する禮拜が嚴しうございましたので、私も矢張り毎日此勤めを致しませんと、氣が濟まないのでございます、特に私共ばかり此新らしい家に住つて、舅姑の靈を忽に致しましては、誠に相濟まぬ次第だと存じますので、毎朝の禮拜は子供達にまで正しく致させて居ります。供へます水は別に此室へ水道を引いて神饌專用と致し、御供米は毎日磨立を供へて居ます」と、記者は熟々と夫人の厚いお心掛に感服致しました、何宗教に限らず、毎日斯樣に禮拜を行ふて祖先を敬ひ兼て自分を省みる習慣を實行しましたならば、小兒の精神に何のくらゐ善い感化を與へるだらうと存じたのでございます。

▲行き屆いた分類整理

夫人は博士の許へ參る澤山なお手紙を、未見のもの既に讀まれたもの、保存すべきもの、保存の必要なきものも、整然分類して、區劃ある置棚に積まれるのでございますから、お忙しい博士に何のくらゐご便利か知れません、又幾つか抽匣の附いた簞笥を作られて。半紙、罫紙、のり入、熨斗、水引、風呂敷、細引、其他、細々しいものを分け收め、抽匣にそれ〴〵の名目

を貼り付けて置かれ、他より届いた小包の油紙だの、カタン糸だのまで入れる抽匣をも備へられてございます、而して廊下の隅々へ綺麗な紙屑籠を置かれてありますから、女中方でもお子さん方でも通りすがりにチヨイ〳〵と紙屑を始末なさることが出來るのでございます、夫人は嘗て永らく、御病氣なされた時、女中から何々の品は何處にございますかと尋ねられる毎に、たしか彼處とは思召しても數多い品物の事ゆゑ、御自分もウロンになつて、お困りなされた所から、斯う云

東京の新年(4)　九段坂



ふ分類をお考へになつたのださうで。『これならば自分が一々指圖をせずとも誰にでも一目で分るのです』と夫人は御話しになりました。

▲流元の清潔と湯殿の戸締

御座敷が斯様に整頓して居ると共に、お臺所も誠に模範的に仕組まれてございます、十疊敷の板の間の中央に据ゑられた大流しは、水ハキロを金網で張り、鉛管を附けてあります、下流しを夕、

きにすると便利ではありますが、働く者が心を放して塵芥だらけにし易いものですから、故とタヽキを設けず、流しの塵芥は小帚で掃き寄せ．小笊に入れてあとを、水で流すのでございます、斯う致すと無暗に塵芥を出さず、約やかに洗物をする習慣が付きます』と夫人は仰しやいました、お米櫃は小高い處に置かれ、底の捩を拈つて米を出し、亞鉛の改良米磨器へ受けるので、此米磨器に分量が目もりしてありますから桝で一一量らずとも濟むやうにして置かれます。燃料は主に瓦斯を使はれますが、料理に依り堅炭の軟かいのを使はれる事もおありださうで、炭は二表分入る抽匣に收め、其側の小抽匣に燃き付類を入れてございます、其他食品戸棚、食器戸棚のお仕組み悉く申分なく行き屆かれ、特に食器類は誰にでも分る樣にズラリと配列してございます。お湯殿は、三方を石で圍ひ、窓を高くし、一方の入口の戸締は非常に嚴重に出來て居ります前のお住宅へ湯殿から三度も賊が入つたので、今度は入口を塞ぎ水は石壁へ鐵管を通じて呼ぶやうになすつたのださうでございます。

▲十三年目に御琴のお調べ

食堂は三十疊の洋風廣間で、特に心を込められた、裝飾でございます、扉の外には椅子數脚を備へた石疊の來客運動場も設けられてございます、此室に据ゑられたピアノに就て興味のあるお話を伺ひました、夫人は斯う仰しやるのです「良人は最初學問一方に凝つて居りまして、音樂の趣味なぞはございませんでしたから、私は少し習つた琴を定めし良人の耳に煩さからうと存じ、全然思ひ切つて生家へ還して了ひました、併し私は音樂が好きでございますから、切めてピアノでも今少し習ひたいと存じて良人に話しましたけれども矢張り良人が餘りすゝまぬ樣でしたので、思ひ絶えて居りました處、此家の裝飾として注文致しましたピアノが外國から屆きました節、或音樂師に損じた點を直して戴きました處、ちよつとお彈きになつた其音色が如何にも佳かつたので、外から歸つて參つて私に向つ

て、玄関に立ちながら直ぐこれからピアノの稽古に行けと許して呉れました、最早ピアノの稽古を許された以上は琴の方も許されるだらうと存じて、十三年目に生家から琴を取り寄せました。

併しこれは内々取寄せて見ましたのですが、或日琴の方も宜しいでせうと恐々訊きましたところ、唯一言「ウン」と僅かに許可の意向を見せて呉れました。

斯様な事はホンのお笑ひ草でございますが、自分の慾を制して目上の意に従つてさへ居れば、何時しか好い機會に遭遇するものだと存じました。

記者は夫人の趣味豊かに教訓多きお話を一々感佩して、長座を詫びつゝお暇乞致しました。



宮中かるたの御遊び



△元朝の御束帶

新春の光のどかに瑞雲四方に棚引き渡るこの時、九重の雲深き玉敷の宮居の御有様はいかならん、漏れ承はるだに長き御事にこそ。さて、暮れゆく月の三十一日の夜の十二時といふに節折の御祓といふを執り行はせたまふ、係の官人謹しみて兩陛下の御身の丈けを取り參らせ、神前にて祓ひの御式を奉仕して御形をば川に流し參らするなり。此の御式終りぬれば、時を移さず御掃除にとりかゝり、高等官は御居間判任官は御次の間を掃ふとぞ。斯して東雲ちかき元日の午前四時といふに、天皇陛下御起床あらせ給ひ沐浴齋戒遊ばされ、神々しき古式の御束帶を着け給ふ、典侍謹みて四方拜の御式場へ臨ませ給はるを奏請し奉る、かゝるほどに宮に仕へまつる大小の官吏は申すに及ばず女官なども除夜、徹宵して、御調度萬端の御事に忙はしきとなかく〳〵に下樣の測り知るかぎりにあらじ。



△三ケ日宮中の御多忙

軈て陛下には御式場に臨御まし〳〵て、御神酒を波々に注ぎたる御土器を執らせたまひて天下泰平を祈り給ふ、次で四方を始め賢所、皇靈殿、神殿等を御拜あり。次いで御常御殿に入御あらせられて大禮服にお召更あり。改めて御着座あれば、御非時として菱花びらを奉る(菱花びらとは御餅を菱の形に切りたるものなり)御非時終りて愈々晴れの御膳に向はせらる。晴れの御膳と申すは、新年の一日、二日、三日の三ケ日に、鳳凰の間に出御あらせられて御供進を聞食すなり。其間内膳係は更なり女官の人々の繁忙は改めて言ふ迄もなし。

△女官の奉仕

女官は何れも皇居宮に御局まゐらせるものにて、上は典侍權典侍より下は權命婦に至るまで、それ〴〵勤務の時間を定め仕へ奉るなるが、兩陛下の御用を承はる間はすべて洋装を用ゐ、勤務時間外にありては特に緋の袴を着するなりと。されど正月三ケ日はいづれも晴れの正装を用ふる習ひなり聞く處によれば平日は公けの仕へを退さし後御料理の稽古を爲すもあり、座花遺花を飾りて樂しむもあり、或は新聞、雜誌の讀みふける事

もあるなりと、されど正月など御儀式の多き月は殆んど寸分の暇なく、終日正裝して勤務するなればなか〳〵に身は疲るゝなりといへり。典侍以下權命婦に至るまで陛下に御直接し奉つる女官の多忙なるにつれてそれに使はるゝ女嬬、權女嬬、雜司の末に至る迄其忙はしさは目もくらむばかりにて、旦那さま(即ち我が仕ゆる女官)が一日に數度もお化粧をなしお召替へをするゝにより、それらの準備をなし手傳をなす事故、殆んど身を下におく暇もなしとぞ。

△御かるた會

斯かる次第なれば、宮中に於かせられては、松の内は特に御多端にて、歌留多などいふ御遊び事はなか〳〵御催しの御暇あらせ給はぬなれど、御女性に座します皇后陛下におかせられては御優美の御嗜み深く、正月も中旬を過ぎ宮中の御多忙も聊か緩む頃となれば宵のほどより、御内儀に於てかるたの御催しあり、一夜女官を御相手として樂しませ玉ふなり。畏こけれど其時の御模樣を洩れ承はるに、御相手には新樹、早蕨の兩典侍を始め、花松、緋櫻、小菊、藤袴等の權典侍以下柳、玉椿の掌侍菊、萱、袙、葛、薫等の命婦、權命婦等の女官十數名御内儀に伺候して催さるゝ由にて、この時女官方にはいづれも薄化粧を施し、新春の晴衣姿優しき扮裝にて、手を取り袖を連れて紅葉



山を左に見、御内儀に通ふ大廊下を運び行く羽二重の裾音高く聞ゆるも優にやさしき御事なり。

△御殊愛の御骨牌

かくて御内儀に詣で、席順正しく威儀を整へて揃り、只管御開始を待ち奉る。此處には古今、新古今の歌留多を始め、時かるたさては源氏歌留多などありて、竝み居る女官達の意見を問はせ給ひて衆議によりて始め給ふ、申すも畏けれども美術思想に富ませ給へる皇后陛下の御事なれば、御かるた札はいづれも美しく、大抵は金紙、銀紙の裏地なるが、中にも源氏がるたと申すは、陛下御平常いと愛し給ふが故に殊に麗はしく、表裏ともに金襴の錦地に天には八雲の形、地には千草の形を浮き出しせるものにて指を觸るゝだに畏れ多き程なりとぞ。而かも此かるたは、陛下御自身にて五十四帖の名句を選び出でさせられて、畏くも御手づから水莖の跡を垂らし給へるものなれば、結構なること申さんやうもなし。

△御審判

愈々かるたの御開始となりて、女官方を御相手に多くは散らしにて打興ぜさせ給ふ由なるが、一回は必ず源平に分れて遊ばすが常なりとぞ。されど夜更けぬれば組を離れ給ふこともあり

と申すこは一には御審判の御役目に當らせ給ふと、一には御健康を慮からせ給ふゆゑなりとぞ。女官の方々は此の源平こそ陛下の御審判にもあることゝて、謹愼の上にも尙御謹愼を表してウカとは指なども出すことなきわけなれどもそこは、流石に競爭のことゝて、行儀正しき女官の中にも、雪の加き腕の自然と袖より現はるゝこともありて、いと〲活潑なる樣なるに之を覽そなはして陛下も一しほ興に入らせ給ふなりと。されどこれ迄の例によりて、源平に分れても結果に優劣を附け給はず、御仁德に富ませ給へる皇后陛下には、一夜打興じさせたまひて後、羽二重一疋に御菓子を添へて賜ふなりと承はる。

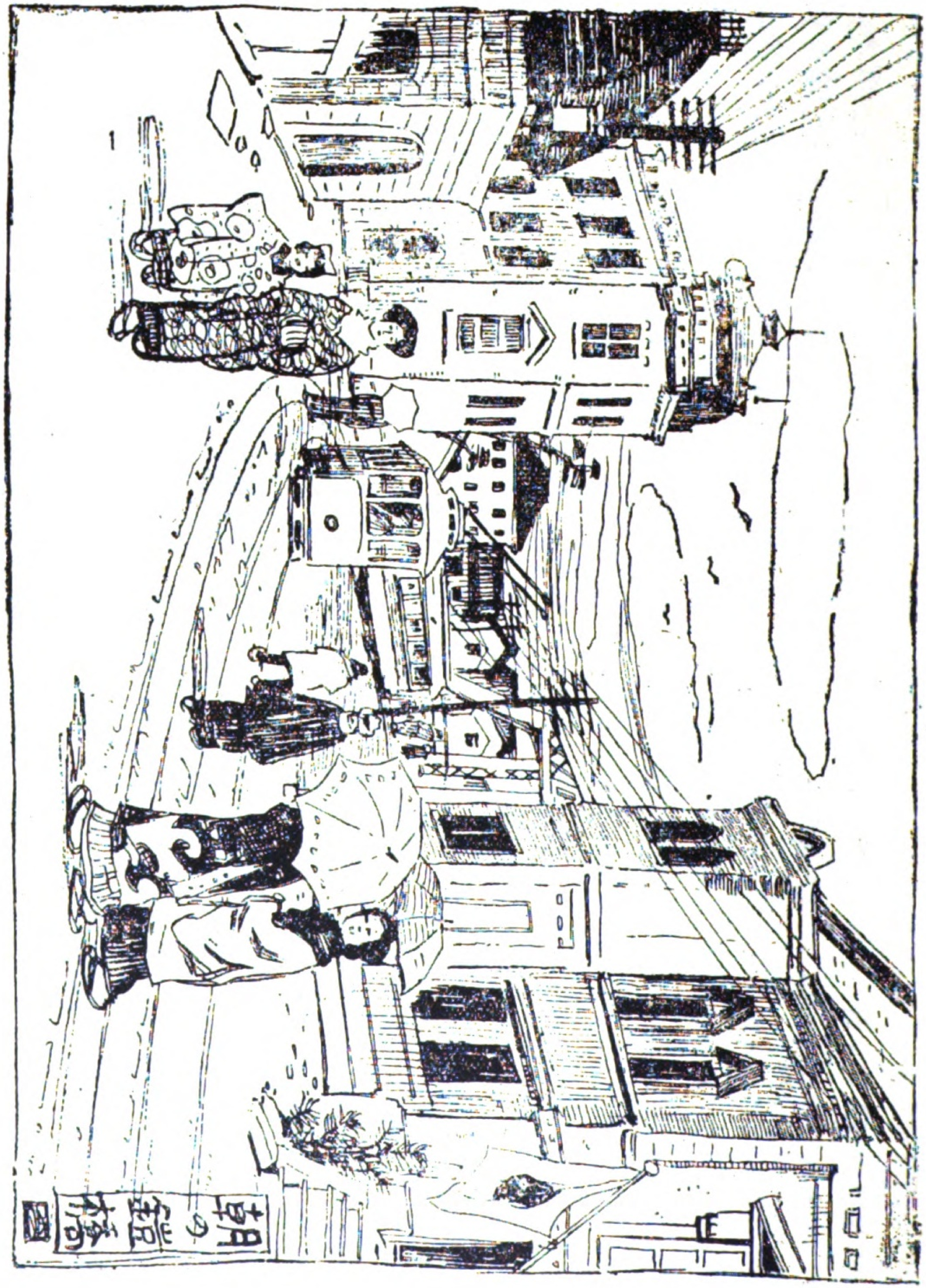
△帶止と襟飾

◎ブローチの新型　襟まはりの裝飾ぶり行屆きたるは誰が目にもいと鮮かに感ぜらるゝものなり、今年は衣裳髮飾の類まで總て色合淡きもの喜ばるゝ由なるが、寶石貴金屬製の裝飾品も亦衣服の流行に伴なひ、淡白したる意匠の濃手物專ら流行し・十八金製の瀟洒たる高山植物のブローチ、乃至は西洋花にダイヤ眞珠を嵌めたるブローチ杯最も流行せり、亦プラチナ或は艷消金製にも面白きものあり、石は餘り大ならぬ物の方喜ばれ夜會用の他は石の數も尠きが好し。



◎帶締の新金具　金色眩ゆき繻珍の帶を、愛らしき金金具の帶留に留めしも昔なり、綴錦の帶に寶石入の帶留を輝かしたるも過去の事なり、當期の流行は長さ約四寸内外の極めて丈長き十八金製の金具にて、彫刻も念入のものあれども、却つて彫刻粗にして雅味あるものゝ方大抵の帶には引立ちて見ゆ、彫刻は素より季に適ひたるもの喜ばれ、裂地は鹽瀨にてクリーム色、錆鼠瓶洗朱にさがら縫せし物、或は納戸とクリームの縞にて幅は二分五厘を出でざるが好し、亦日常物としては二四内外にて氣の利きたる物あり型裂地等はほゞ前と同じにて割貝の飾りなれば、夜間電氣などにて見る時は中々に引立つ可し。




朝の銀座



浪華の春

大阪紳士と若奥様の正月

美登利

▲元　朝

無事に去年を送り、目出度こゝに豊けき御代の新春を迎へる。

朝寝の良人も、けふ計りは東雲の薄明りに、若水で冷水摩擦をなさる。婆やが、お雑煮をこしらへる間に自分も手水を遣ひ、御園白粉をうすくはいて着物を改め、御座敷へ祝膳を双べ、謹んで扣へた駒のお酌で、屠蘇を祝ふ。

大阪の新年は始めて、勝手が違ふ様に思ふが御重詰には手製のキントンや、東京から態々小包で送つて頂いた、玉置屋のわかさぎに蓬莱の黒豆も有る。

床には、竹田の松鶴の圖を掛け、花瓶の早梅馥郁とゆかしい薫りを放つ。

新婚三年の春やゝ調ひたる家の内、希望に輝やく將來の樂しさが滿ちて居る。

フロックコートに召し替へて、會社の名刺交換會へ御出かけに成る靴を召しながら。

「歸りに船場へ廻るから、お前も午後から出かけては什麼だ」と仰る。

「ハア左樣致しませう、けふは會社の方もお出は御座いませんでせうから、私も御年始に伺ひ升わ」

「御機嫌よう行て被入いまし」

初日をうけた〆飾を、ゆるう春風が渡る。

未だ土地に馴染も淺く、濱寺には親類も無いから、年禮のお客も少なく此頃知己に成つた別荘の、奥さん

方も、暮から大阪の本宅へ御出に成つて、折角出した名刺受も、御近所の方のが四五枚、淋しげに乗て居る

本家へ御年始に行ふと思つたが先方は大阪の舊家で元日から女の御年始は、何とか思召すだらう什麼しよう。だがどうせハイカラ夫婦だつて平生から例外にしてゐらつしやるのだから、構はない行ませう。

藍氣鼠の無地御召に、友糸刺繍の江戸褄模様、帯は白茶の糸錦、佐土屋形の丸髷に、金無地の櫛と中挿を挿して、細い金鎖も掛け、鳥渡姿見にうつして見る。

霞織のコートに、ポートアを穿いて、ついそこの濱寺停車場から電車で行く。

▲船場

古風な門松に〆飾り、定紋付きのダンダラ幕を張つた門口で車を下りる。

金屏を立廻し紫檀の机には双幹松の盆栽を置き、同じ小形の文臺には、古代梨地の名刺受が乗てある。店を通つて玄關から訪なへば、小紋縮緬の紋付に黒繻子の丸帯、髪は島田に白丈長をかけながしにした仲働が取次ぐ。

廿疊の奥座敷床には勅題に因んだ探幽の雪中の竹の大幅を掛け、蓬莱に飾供へもの〳〵敷床脇は圓形の白交趾に温室咲きの福壽草がゆたけき春を示し顔である、不老長春の立花は、嫂様の御手際鮮朧に拜見する。

香水の薫りと衣ずれの音がして、嫂様が被入つた。

裾模様の紋付に繻珍の丸帯キチンと御締め成され髪は一筋亂れぬ黒塗の様な丸髷に、鼈甲の櫛笄、御年賀の詞も叮嚀に長く、東京でお友達同志簡單なのとは大きな違ひ、しつとりと落付のある容體、何様大家の御寮人様は悉したものと思はれる。

「お目出度く御屠蘇をお一つ」と高蒔繪の重詰を御開きに成る。

仲働が行儀正しく、蓬莱を眞中に据ゑて御吸物を運び、しとやかに鶴亀の銚子を取る。

義兄様の御居間で籠飼の鶯が一聲、浪華の春はのびやかである。

▲釜の湯

お舅様の御居間は離の茶室、カトウ口を明けると名香がほのかに薫る。

鐵色無地の道行召して、郡内のお蒲團かけた置炬燵の上へ新聞を擴げて被在る。

「おゝ美登利か早う出られましたな、まあこちらへ御這入り」と飯銅の火鉢を御すゝめ下さる。御免蒙つて進み新年の壽を申上る。

床には青巖の横物をかけ、掛花瓶に椿一輪投げ入れの風情はいひしらぬ。

「今朝早くに孝秋が會社の行がけだと云ふて、歸りに又寄ると云ふて去んだが、もう見えさうなもの、東京の御兩親も御機嫌宜しいか」といつも乍ら御優しく御尋ね下さる。

「どれ抹茶をひとつ上ようか」と爐の炭を御添へになる。釜の松風蕭々と、庭には聞なれぬ小鳥が囀づる。大阪の眞中とは思はれぬ靜けさ、山奥の庵へでも來た様に、寂として氣も落ち付く。

御菓子は鶴屋の新年の雪さら〳〵と茶筌の音。薄茶の香りは又た格別謹んで一服頂く。

庭下駄の音カタコトと、「おばちやん」と、花子さんが鹿の子絞りで袖口を止めた、友染のひら袖に、おかつぱが肩迄かゝつた可愛らしい顔を出して。

「あのな、道修町の姉ちやんと、學校の姉ちやんがお歌留多しますよつて、早うおこしと新座敷で待て居やはり升」ちよつと頸をかたげて、

「お祖父ちやん」と莞爾する。

「花子お正月で嬉しいか、どれお珍をやりませう」と、御菓子を紙に包んで下さるのを大人しく頂いて、

「なあ早うお起し」と自分の袖を引く。夫ではと御挨拶して庭へ出る。

敷松葉に霜よけの冬飾ひした茶席の前栽、蹲踞の萬兩の實が紅一點、趣を添へてゐる。

新座敷で御廻禮を濟して被入つた良人と、本家の美紀ちやん、道修町の登志子さん、(美紀ちやんの從妹)

恭賀新年

博文館主 大橋新太郎

副館主 大橋進一

女(中付の二)

博文館編輯部

主幹 坪谷善四郎

巖谷季雄
石坂橋樹
石橋助三郎
石井民司
伊東祐穀
伊尾準
長谷川誠也
濱田徳太郎
西村惠次郎
本多昌明
沼田藤次
押川方存
太田善男
大竹昌春
川本忠太郎
海賀篤磨
河岡英男
鹿野直司
鷹野勇雄
武内桂舟
田山錄彌

武信由太郎
竹貫登代多
竹貫直人
高村眞夫
長井氏晸
中村四郎
中原司馬雄
浮田和民
内山正如
久留島武彦
山路彌吉
松原岩五郎
前田晁
前田長太
小柳覺
淺田彦一
齋木寛直
木村定次郎
三間保治
鈴木徳太郎

(イロハ順)

博文館營業部

支配人 羽田福太郎

大野金太郎
山田靜三
杉山常次郎

宮川大壽
上村恭三
堀野賢龍
田中六藏
里見謙吉
佐藤憲斌
關謹平
遠藤好夫
金子督太郎
細野佐藏
松原濱之助
谷俊三
玉井喜重郎
古賀豐策
小峰正一
兒玉幡太郎
有田利雄
番場宗八

權藤文雄
横田地巴
繁田郁藏
今井玉三郎
福澤市太郎
今井淳
永井泰
林彦之助
中村長
塚脇十三
内藤憲輔
富所三郎
磯岡鷲郎
松本勉治
矢澤潤三
松木玉之助
廣瀬貞一
小林久四郎

中村慶次郎
菅五太郎
高橋常次
木村照治
堀龜七
佐藤誠
神崎新四郎
渡部吉藏
早川多輔
山本順治
菊地金五郎
松澤義一
中田國治
浦島政雄
牧武
原田貞助
松本勇次
渡邊明義
藤井留芳
行方從藏

博文館特別割引券

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀諸君平素の御眷顧に酬ひんとす

圖書御注文の方は下段切取線内の**甲種券**

雜誌御注文の方は**乙種券**を添へ期限内に御申込被下度候

●本券は各種とも一人一枚限り有効とし數枚御送付あるも割引の歩合を増すものに無之候

（切取線）

（甲種）

博文館發行

圖書特別割引券

（女學世界新年號）

●圖書御注文は此券を切取り御添附の事

●有効期限は明治四十三年二月十日限り

●期限中は定價の一割引を以て特賣仕候

●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす

●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす





（乙種）

博文館發行

雜誌特別割引券

（女學世界新年號）

●雜誌御注文は此券を切取り御添附の事

●有効期限は明治四十三年二月十日限り

●期限中一册賣は定價の五分引●册數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分引とす

●館友は館友規定引の外割引せず

●本券は前金御注文の外は効用なし

●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

女（中村の三）


恭賀新年
書籍及雜誌
國運の發展に伴ひ益々業務の刷新を企圖し併せて日頃江湖諸賢の愛顧に酬んがため一層の低廉を以て迅速且つ便利に萬事懇切を期し勉强販賣候間舊に倍し彌々御引立の程奉懇望候
東京神田區表神保町
東京堂書店
電話本局一二三番同二四八番同二五五二番
振替貯金口座東京二七〇番 發電略號〇ト
圖書切手調進仕候

(中付の四)

内外洋紙類大販賣

謹賀新年

合資會社 博進社

専務理事 山本留次

東京市神田區錦町一丁目 東京本店（電話本局特長四九〇、一六〇三、二四一〇番）

富谷松三郎　九里誠一
織田保次郎　中川董司
新井健三　松浦靜三
遠藤廣吉　奥山作次
丸山信次　仁平周一

副支配人 長沼恒次郎

山本九兵　横山幸七
長谷川金之助　鷲淵忠雄
杉山幸次郎　大島久吉
川浦善之助　小野村佐市

大阪市東區瓦町二丁目 大阪支店（電話東長一四五〇八番）

支配人 中村孝吉

宗像仲吉　松本作三
宮下眞次　小川林一
八木永吉　增池宗次郎
岡崎靖一　石垣喜次郎
岩波慶次郎　柳橋兵一郎
水野利三郎　廣瀨政次郎
久保芳男　岡山定三郎

帳簿文具大販賣

東京市神田區錦町一丁目
大阪市東區瓦町二丁目

文運堂

東京本店（電話本局七八〇）
大阪支店（電話東四四五）

支配人 長谷川丈太郎

金原要一郎　黑澤倉次
大石吉英　山本次郎
小川德次郎　柴田照三
塚脇十四三　田中弘

藥品製紙原料大販賣

東京市日本橋區本町三丁目（電話本局二八六番）

博愛堂

支配人 林季三郎

江口脩二　大島善五郎
前田伯　渡邊五郎
平野克二　川奈部隆
海老原直一郎　栗原久四郎
淺井喜一郎　渡邊八郎

謹賀新年

博文館印刷所

東京小石川區久堅町百八番地
電話番町四六、七三二

理事 大橋光吉
支配人 高橋季吉
副支配人 水谷景長
技師長 君島潔

《營業部》

山田英二　内藤智次郎　市川七作　久保民生　三好仲雄　富井龍次郎　飯塚市郎治　御田村龍吉　小川德三郎　大庭正雄　永原哲藏　小川豊太郎　渡邊倉之助
高橋正信　川井正次　瀧澤與策　神保平三郎　吉田德司　丸山彥吉　加藤綱三郎　中津璋　加瀨亥之三郎　上村安治　柳井淸之進　上野朝太郎　高橋松太郎

《工務部》

田丸信次郎　足立義一　秡川研太郎　吉岡泰五郎　齋藤利貞　伊藤景介　永田喜健　松本八三郎　榊原健三郎　横山弘識　辻盛之　大江幸吉　佐藤磨　安孫子俊男

女（中付の五）

一等國

一月二十日發行

洋裝四六判二倍大
紙數二百六十頁
寫眞版如例豐富
正價金三十錢
郵稅(本號に限)四錢

太陽第十六卷第二號增刊

◎一等國の列に在る諸國は世界の運命を司配す。

◎世界的と言へば即ち一等諸國の形勢に冠する形容詞なり。

◎吾が國は東洋に於ける唯一の一等國にして。歐米の一等國と文明の大競爭を試みんとす。

◎統計書を通じて彼れを知らむとするは恰も玄關に立ちて他人の家内を覗はんとするに異らず。其の實質實狀は知るべからざる也

◎本誌は統計書以外に立ちて世界の一等國を紹介す

◎政治外交の舞臺、社會の狀態、學海文藝の現況其の他百般の形勢は、悉く本誌上に明記せらる。



(丸中付の六)

毎月一回

文藝倶樂部

一日發行

第拾六卷第一號……一月一日發行

洋裝菊判 紙數三二〇頁 口繪 木版摺錦畫●原色版●寫眞版 十頁挿入 定價廿五錢 郵税（本號に限り）二錢

▲小說▼

◉逸話 小山内薫

◉かしく坊 三宅靑軒

◉五千坪 新田靜灣

▲脚本▼

◉孤島の兄弟 松居松葉

▲活社會▼

●犬商賣 椋蓮花

●犬神 風露郎

●緣門物語 迎月子

●四十年前の飛行機 靑い人

▲長廣舌▼

●雪の滿洲生活 北馬泓人

●新年の鶯界 嚴舍主人

新年附錄

▼年中重寶壽語祿（五色刷鮮麗無比）山中古洞畫

▲演藝界▼

●演藝當座帳（岡鬼太郎）●昨年の劇界 柿山伏（）●古曆（幸堂得知）●初がすみ（森曉紅）●初問答（籾山藤作）●大入叶（黑法師）●大入袋（瀨戶圓太郎）●演劇小議（孔雀船）●四本柱（虹口力水）

▲忙中閑▼

●福壽草（鶯亭金升）●新年曰く（竹貫佳水）●海上失敗談（怒濤庵）●惠方詣（淸唱生）●夜長物語（思案生）●鳥羽へ二日一夜（柿紅）

▲新流行▼

●春着 近藤蕉雨

▲講談▼

●犬千代丸 眞龍齋貞水

▲落語▼

●犬どこの犬 朝寢坊むらく

▲募集落語▼

●餅 犬 夏のや

▲百花園各種▼

東京 博文館 發行

女（中付の七）

毎月一回 一日發行

少女世界

第五卷 第一號（一月一日發行）

紙數百廿八頁 口繪如例
正價金十錢 郵稅壹錢五厘（本邦に限る）

口繪

中村秋人君著

名媛と事蹟

洋裝四六判美本紙數三百頁　正價金四拾錢　郵稅六錢

▼孃ちやんも見るべし姉さんも讀むべし

一、富美宮泰宮兩内親王殿下、各宮妃殿下、各姫宮殿下三十方に、名流婦人、女子教育家、女流作家、女流畫家四十二人の優しき美しき幽かしき愛らしき話のみを叙し附錄として三皇孫殿下、各若宮殿下の御愛嬌話と婦人に關する數項とを加ふ。

一、筆蹟は有栖川宮妃殿下を始め、各宮妃殿下同姫宮殿下及び名媛の書畫數十枚を挿む然して其取るところ大概ね幼少の手に成れるものにて恰も天眞爛熳たる天使の姿を髣髴として偲ばしめ其愛らしさ云はん方なし就中閑院宮妃殿下六歳の時御染筆に成りし繪畫と七歳にして渡米留學せし津田梅子女史の八歳の時故國の慈母を慕ふて送りし愛嬌たつぷりの書翰は見る人をして思はず莞爾と眉を開かしむるものにして頗る興味あり

一、著者は虚榮虚飾の塵烟を厭ふて、清を探るの年少氣鋭の健筆家にして又大に考へつゝある子煩惱なれば其觀察の着實にして精細、其一句一章は必ず教育的の意味を含み、然も取材の如く優しく美しく幽かしく愛らしき筆を縱横自在に振ひ讀んで解り安く味ふて清新の趣味を覺えしむる近來の快著也。

▼お母さんも味ふべし教育家亦一讀を要す

女（中村の十二）

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

東京帝國大學文科大學講師
佐佐木信綱君著

定家歌集

全一冊

袖珍菊判半截形
洋裝總クロース
上製紙數凡二百頁

▲近刊▼

わが國民にして百人一首を知らざる人は無からむ。百人一首を知れる人は、撰者定家卿の名を知らざる人は無からむ。藤原定家は、和歌の歴史に於いて、黄金時代と稱すべき新古今時代の代表者にして、一時期を劃せる歌人なり。しかも定家の名は普く知られて、眞に定家の歌を知れる人は少なし。此書は佐佐木先生が、定家の歌集より、秀逸の作數百首を選出し添ふるに、定家の傳記、その和歌及び歌學に就いての評論、又年譜等を以てし、卷頭には定家の肖像、及び眞蹟を掲ぐ。殊に本書は袖珍和歌文庫第一卷として、體裁高尚なるポッケット形なれば、旅行に携帶せむにも、机上に置かむにも、最も優美なる歌集なり。歌に志ある人は云ふまでもなく、文藝を愛する士は、必ず一本を座右に備へらるべし。

田山花袋君
前田木城君
共著

評釋 新古文範

全一冊洋裝四六判
上製紙數五百卅頁
正價金七拾錢
郵稅拾錢

文章上達の秘訣は、多く讀み、多く作り、多く推敲するの外にないとは、古來の定説である。中に就いて、多く作り、多く推敲するは、各人自身の實行に屬すればこれは姑く措く、今日の如く、古今東西の書籍が殆ど無限を算せんとするの時に當つては、先づ何を讀むべきかといふことゝ、これが既に問題となるであらうと思ふ。本書はかゝる疑惑を抱ける人々に對して一は以て空しく群書を渉獵するの煩を救ひ、一は以て古今名著の一斑を知らしめんが爲めに編述されたものといへり。收むる所、凡そ百五十二篇。史傳、叙事、翻譯、感想、詩歌、論議、書簡、日記、叙景の各體に渉つて、古今の名文を選拔し、これに最も新意に富める評釋を下してあるから、人一度びこれを讀まば、以上各種の文體に通ずると同時に、また一般文學の眞味を味ふことが出來るであらう。

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（中付の十二）

!文運堂の嶄新なる日記手帳!

文運堂編輯部編纂

家計重寶臺所勘定帳

此勘定帳は婦人に最もつけ易くして家計の費途一目瞭然たらしむる様式に考案せる最良の日記なり殊に家庭の一切に就て懇切なる説明を附しあれば効果は頗る多大なるべく本書に依りて幸福なる家庭を作り得らるべきは疑ひを容れざるなり。

▲洋装頗美本
▲四六判紙數
▲凡三百廿頁
▲定價廿五錢
郵税金六錢

博文館編輯局 少年、少女世界部

木村小舟君編
名和永年君畫

日本歴史手帳

此手帳は、古今に通じて有名な武將、忠臣及び義士などの歴史、殊に其最も著名な事蹟を誰にも讀み易く、且面白く編述して、これに、一々、鮮麗な繪畫を掲げてありますから、手帳を使ふ間に、知らず〳〵覺えて終ふ事が出來、また卷頭には、唱歌の樂譜も掲げてありますから、英雄を謳ふ事も出來まする、頗る趣味のある有益な手帳であります。

▲洋装菊判
▲紙數八十頁
▲定價壹册六錢
郵税金四錢

女(中付の十三)

日記手帳出版元　帳簿文房具製造

東京神田錦町(振替東京一九〇〇七番)
文運堂

東京日本橋區本町(振替東京二〇四〇番)
博文館

大阪市東區瓦町(振替大阪八三六五番)
文運堂支店

東京日本橋區駿河町(振替東京三〇〇番)
三越呉服店

文藝倶樂部 第十六卷第二號 增刊

（一月十五日發行）

全一冊洋裝菊判
紙數三百二十頁
口繪寫眞版豐富
正價金二十五錢
郵税（本誌に限）金四錢

講談 落語 義士外傳

芝居の獨參湯といふなる「忠臣藏」は昨年中、場に上せられたるもの、數ふるに遑あらず、また此の種の出版物も尠からざりしが、多くは千篇一律の銘々傳的のもののみなりし、本誌が新春增刊として發市するは、裏面より觀たる所謂義士の外傳なれば、內容の如何に壯快にしてまた悲慘なるかは、編者の贅言を俟て後知るべきにあらず、口演諸子また藝壇一騎當千の强者にして氏名左の如し

口演者

神田松鯉
西尾麟慶
放牛舍桃林
清草舍英昌

柳家小さん
錦城齋典山
桃川如燕

三遊亭圓喬
柳亭燕枝
桃川燕林

一龍齋貞山
眞龍齋貞水
猫遊軒伯知
三遊亭圓右

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

（中付の十六）

とお友達と見える娘さん二三人、歌留多は今酣である。東京の活發なのとは違ひどこかゆつたりと、嫂樣はいつも讀方で被在る。

外は萬歳の皷の音と和して、追羽子の音も賑はしう

明日は美紀ちやんと登志子さんと濱寺へ遊びに被入いと約束をして、我家へ歸つたのは、九時過ぎ流石にけふは、夜網の聲も聞えず連れ立つて行く、酒機嫌の若いものが流行歌も春らしい。

明日のお馳走の献立を考へ乍ら、床に入る。

東京の新年 (5) 二重橋前



▲春遊び一

約束をした美紀ちやんと登志さんが來る筈だから早起して、駒を難波へ買物に遣る、婆やと二人、御座敷の飾付や御馳走の仕度で忙がしい。良人は、網島の鮒卯に謠曲の會が有つて、朝からお出かけ。お重詰は。

一の重、小鯛の甘露煮。二の重、慈姑のキントン。日の出蒲鉾、黄金羹。三の重ひらめの昆布卷。四の重小芋、ちくわ、松蕈のうま煑。五の重、鯒のさしみ、つま生海苔、わさび。

外に鯛の鹽燒、附合を百

合の白煮、ちらし壽しとお寒いから茶碗蒸しをこしらへませう。

お壽し（海老、椎茸、玉子燒、鯛の酢漬、すだれ麩、もみ海苔

茶碗蒸し（蒲鉾、鯒の切身、栗、銀杏、小松菜、松茸、鷄肉

お菓子は手製の新年の雪、果物はネーブルと紀州蜜柑、やう／＼出來上つた、髮をなで付け、大島飛白の對に着替へ桐胴の火鉢へ火を入れ、さあ何時でも被入いとお待ち申すが、お嬢樣方はお化粧に御念を入ると見え一向音も無い。駒を電車まで迎ひに出さうかと思つて居ると、話聲がして、チリンと門が開いた。

「まあゆつくりねえ」と玄關へ出る。お揃ひのボーアを取り乍ら莞爾々々と。

まあ／＼之ではおそく成つた筈、二人とも裝ひ凝して、東京式のハイカラと、大阪式の嬢さん風と、ホワイトローズに牡丹花どちらとも云はれぬ美しさ、お供の竹はつゝましく勝手口へ廻る。

「さあ／＼おあたりなさい、寒かつたでせう」と火を廣げる。登志さん前髮を氣にしながら、「濱寺は閑靜でいゝわねえ」と褒める。

「左樣ですねえ閑靜もいゝが淋しくつて私は船場の方が善いと思ひ升わ、ねえ。」

美紀ちやんは莞爾片笑靨を見せる。

登志子さんは去年から、東京の女學校の寄宿舍に居るので、髮も思ひきり前髮の出たローマにして、高島やの新案のリボン櫛に、關口の花束を挿して、紅かけ納戸の裾と袖に富貴草の模樣の有る被布を着て、キッと合せた白襟を、名の頭字のTを花文字にして寶石をあしらつたブローチで止めて却々ハイカラだ。

美紀ちやんはお母樣のお指圖とあつて、上品な高島田に鼈甲の前挿、藤色紋羽二重に小町菊の腰高模樣、渦卷と牡丹の洗朱の帶を立矢の字に締めて、派手な顏が一層引立つ。

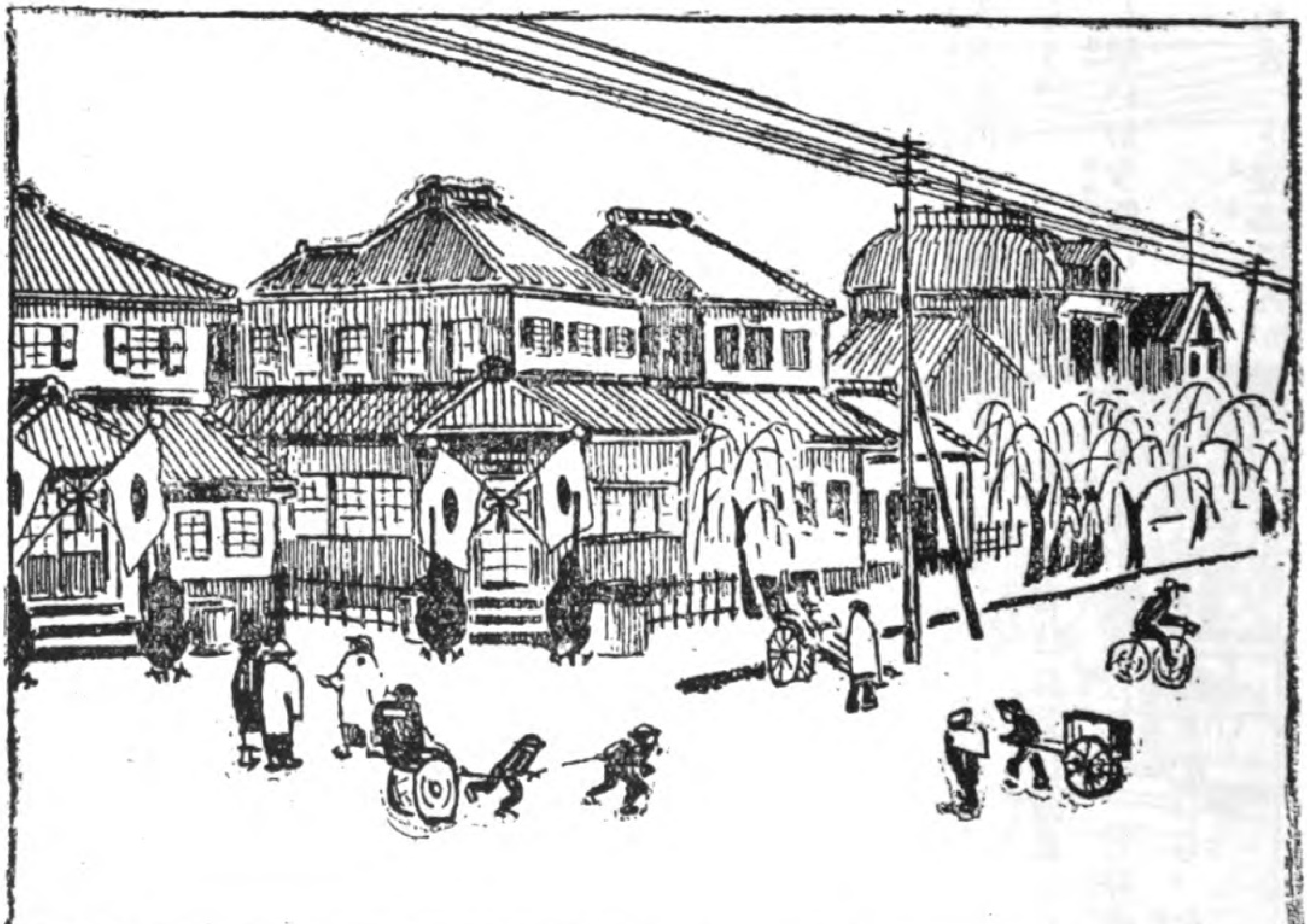
登志さんしきりに東京の話をする。伯母樣の前のお家の前に電車の停留所が出來て、ほんとに便利に成つてよ、今度東京へ被在つたら、またあのお家に遊ばせなねえ」「おや左樣ですか。だけれど何時東京へ行くか

知れませんもの、其内おなたが卒業してお仕舞なさるわ。」「いゝえ私英語が好きですから卒業したら、英文の專科へ入學らうと思つて居升わ、さうしたら伯母様のお家へ寄宿をさして頂戴よ。

美紀ちやんはどこ迄も大阪の娘さん風。女學校へ上ると、生意氣に成る、女は第一に裁縫が出來なくてもと縫物は自家の針女に習つて其他習字、和歌、活花、茶の湯、盆石の稽古迄、皆師匠は自家へ招き、三味線と舞も、浮世小路の野中おつまさんに習つて居たが、今

東京の新年 (6)

日本橋小舟町通



ではもう止めて、琴の稽古に熱心。夫も古風な組を習つてゐると云ふ。

「わたし組は面白うおまへんよつてきらいでおますがお母さんが習へといやはるさかい、習ふて居ますの」と金歯を少し見せて笑ふ。

お屠蘇が一順濟んで「いふは是非聞して頂戴よ」とお琴を出す。

「お目出度く『羽衣』を彈て頂戴な、私も久し振りで一緒に彈きませう」

『君の惠み久方の天の羽衣稀にきて』と彈き始める。

生家に居た頃兩國中村樓のお浚へで師匠の山室の山勢

山登などを先生と彈た時を思ひ出す。眞實に羽衣は上品な曲、彈でゐると思う氣が澄む樣だ。

此度は登志さんのヴイオリンと美紀ちやんの琴で、「根引の松」を合奏せる。どちらも敗けず劣らぬ名手惚然聞とれる。ハイカラな登志子さんと優美な美紀ちやんと相對したスタイル、實に何とも云へない。萩園樣に願ひ度い樣だ。

そして二人とも樂しい盛りの、何の思ひも無い人達春風春水來一時といふ句を目前見る心地がして花瓶の水仙の香とともに醉はされて仕舞ふ。

次は新曲「雪月花」を二人で彈く、手の細かい面白い曲だ事。

門がざは〳〵と騷がしい、大方近所の人達が、珍らしい琴の音を立聞に來たのだらう。

茶碗蒸しが出來たので、少し早いが夕飯にする食後のネーブルを食べ乍ら。

「ネエ伯母樣歌留多を仕度事ねえ」と登志さんが云ひ出すと、美紀ちやんも「ほんまになあ、ようおますやら、一度でもえゝさかいなあ、伯母樣」と、なか〳〵熱心。

「私も左樣思つたのですがねえ、始めると、一度や二度で止められないでせう。大事なお孃樣をお呼申て歸りがおそく成とお宅では案じに成るからけふは止めませう、其の代り七草には、高山さんの奥さんや金田さんのお孃さんもお呼申て盛に歌留多會を仕升から其時は泊りがけに是非來て頂戴」だが之限りでお歸しするのも殘り惜しいから、家族合を二三度して夕日が門松に斜の頃、駒と停車場までお送りする。

歸つたら、婆やがもう後片付を皆仕てくれた。

「まあ澤山の汚れ物や片付物一人でさせてほんとに氣の毒な」と犒らう。

今日は眞實に面白いお正月をした。停車場へ下り列車が着くらしい、五分鈴が北風にさえて聞える。あの汽車でお歸りかしら、火鉢へ炭をついで、日記をつける。

東京ではお寶〳〵の聲も賑はしい今宵を、こゝは又ひつそりと時々門を通る車の音と、霜に冱ゆる道を日和下駄の音カラコロと、

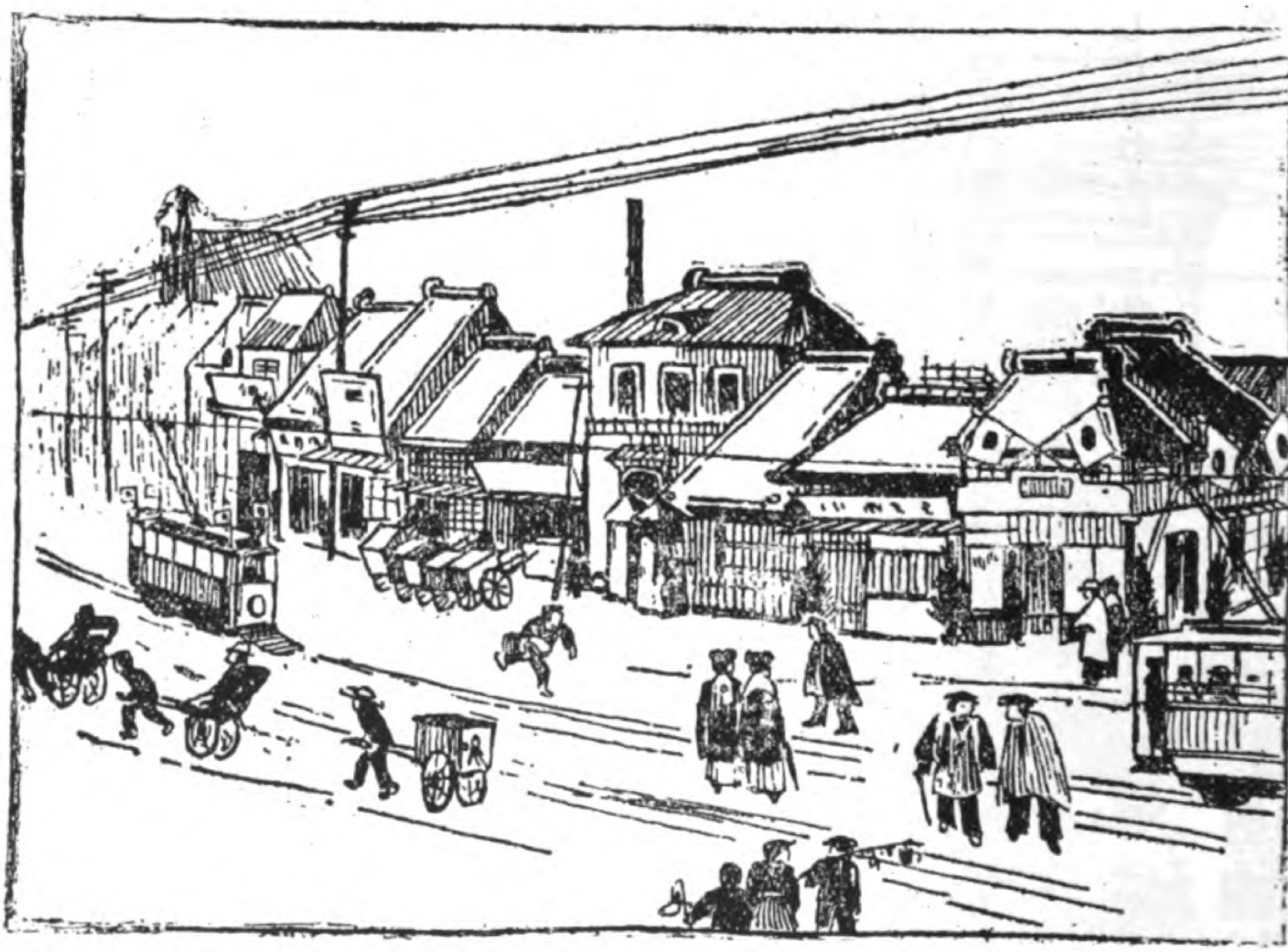
隣家では又風儀の惡いスリパチ落しとか、メン振りとかいふ遊びをして居るらしい、チラン〳〵と音がしてドッと笑ひ聲がする。

▲春遊び　二

音と聞く高師の濱のあだ波はかけしや袖のぬれこそすれ

紀伊の歌と名高いこゝ高師の濱、まだ春淺み霞の色もほか〳〵と、さやかと見

東京の新年　(7)　本郷三丁目



ゆる淡路島につゞく六甲山の峰の白雪影も寒う夏季は海水浴に潮の色もわかぬまで都人の打つどうといふ此濱べも今は沖の舟まつ漁夫が妻より人影も無い。

珍らしく風も凪いで、靜かな濱べを歌思ひつゝ步いてゐると、

「奥さん、佐藤さん」と呼ぶ聲がする。「おや誰樣だらうと振り返ると、繪の樣な松林から、濃い紫の被布が見え、ゴム草履で砂を蹈んで馳けて來るのは金田和氣子樣、

「只今お宅へ伺ひましたら濱へ御運動にお出だつて…

……大方此邊だらうと思つて參りましたの」
「まあ左樣で御座いましたか失禮しましたわ。いつお歸りに成りまして」
「今朝歸りましたの。昨日は歌留多會を遊したつてねえ、ほんとに〳〵殘念で、何故知らしてくれなかつたつて婆やを怒つてやりましたわ。登志子さんもいらしつたつてねえ」
「登志子もあなたがお出が無いつて大層殘念がつて居りましたわ、まあ家へ歸つてゆつくりお話致しませう」
丸髷と、マガレツトが双んて、元來し道を松原へ這入る。和氣子さんと登志さんと同じ學校の卒業生、濱寺には別莊が在つて私は高山先生でのお知り合ひ。座敷へ通ると櫻炭が燃える樣におこつて、暖かさうな匂ひがする。
「歸りは向ひ風で寒う御座いましたわねえ」と先づ火鉢によりさう。
駒がカステーラと茶器を運ぶ。
「手製よ、一つ上つて頂戴」和氣子さん櫻色に少し上氣た頬をリングの光る手でおさへながら、
「明後日は發會だわねえ、お歌はお出來に成つて」
「いゝえ。少し差支ますので出席れませんが、兼題だけお送りしたいと思つて居りますが、出來なくつて困つて居りますの、あなたは」
「私も大阪の宅に居りますと、毎日お友達が被在つたり、芝居へ誘はれたりして、歌なんかちつとも出來ませんの、今朝からやう〳〵二三首詠んで、奥さんに添删頂かうと思つて持つて參りましたわ」と懐から折詠草をば出し被成る。
「なか〳〵自分のさへ出來ないので其麽事。……作例を拜見させて頂きますわ。まあ新らしくつて大層いゝでは有ませんか、跡の方が調べが高くて猶いゝ樣ねえ之をなさいよ」
「私もまあ夫かと思ふのですが下の句が少し氣に入らないので」
「いゝえ之で結構。之になさいよ、何なら私も書きま

すから家で短冊へは書きになら無くつて。……駒や私の書棚の短冊箱と硯箱と持て來ておくれ、夫から机の上の薄い本も、

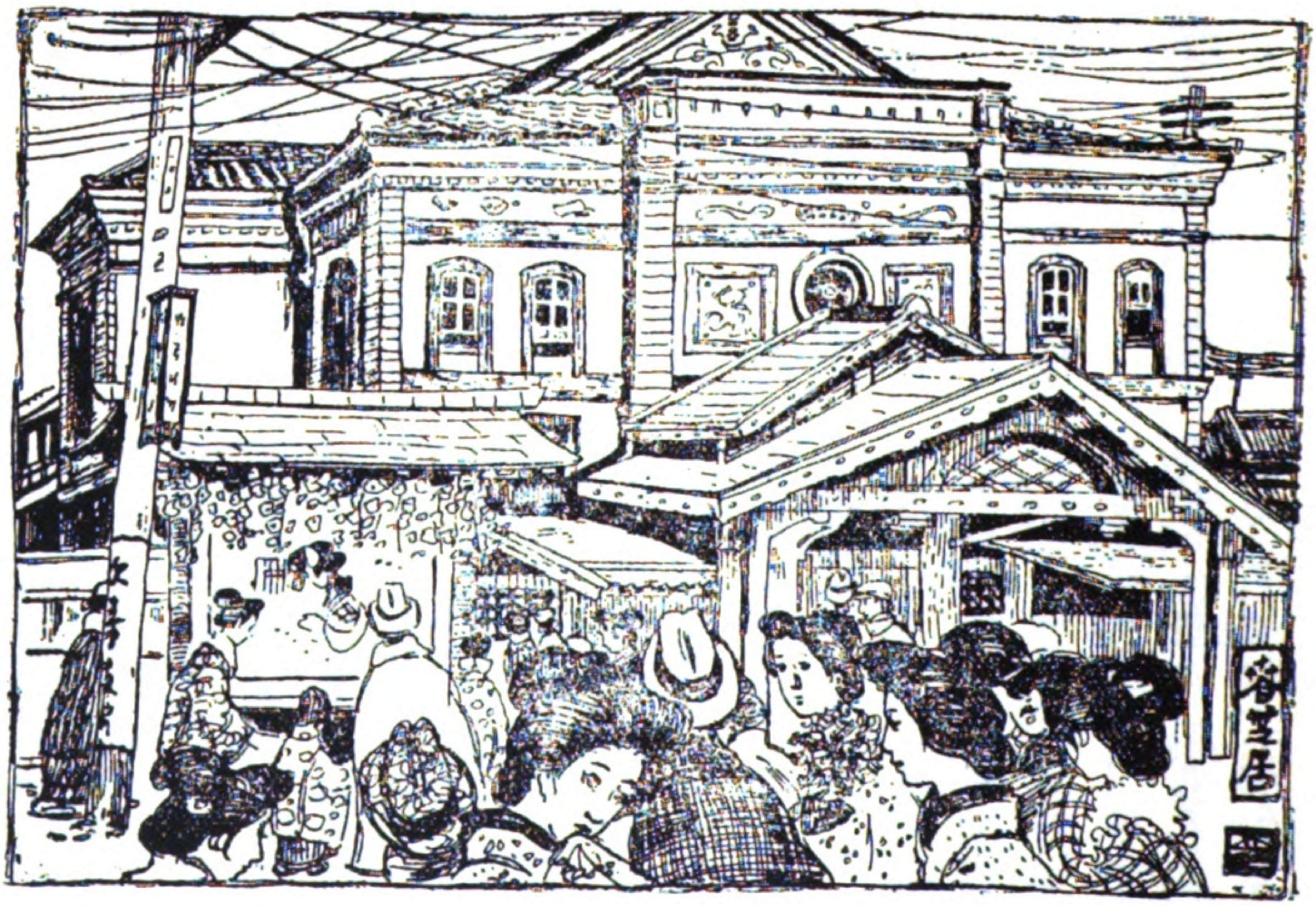
和氣子樣小野流の美しいお書で半紙へ下書ばして被在る。自分は山家集の春をひろげて想を練る松風のしらべ、寄せては返す波の音も遠く聞え、晝なほ靜けき濱寺に歌想ふによい處で在る。

和氣子樣お短冊片手に、

「よいのがお出來に成つて？」

「いゝえ下手の考なさぬに似たり、もうよしませう

東京の新年 (8)　木挽町芝居場



どれ拜見まあお立派に小野流は女らしくて好いことねえ私もう出來ませんから前のを書て置ますわ、ほんとに何と云ふ惡筆だらう短冊へ書く度に娘時代の怠りを後悔する。

和氣子樣女學世界の令孃かゞみを見て被在る。遠くで猿廻しの太鼓の音がする

「金田樣のお孃樣お迎ひで御座います」と駒が取次いだ。雜誌を俯せて「ではお暇致します」「まあいゝではありませんか少し遊んでいらつしやよ」「またよせて頂きますあなたのは短冊も一緒に持て參りませうね

えゝ」

「夫では何卒先生によろしく願ひます」

短冊挾みへ二枚入れてお渡しする。

お納戸鳥の露ショールを下女が着せかける。ぶつさりしたマガレットにクリーム縞のリボンを大きく結んで背の高い後姿とつて二十一と仰つたがまあお若い私と二つ違ひに見えやうか？

誘ふ葉も無い銀杏にからんだ繪紙鳶を、夕風が吹き鳴らす。

▲福わかし

曉方から窓をうつ木枯の音が強い。「今朝は寒からうと覺悟して起出ると、手水鉢は氷に閉ぢて、昨日活け殘して入れ置た水仙が丁度ガラス入りの細工物の樣に見える、湯殿へ行てネジを廻す「まあ冷い手が切れさうだ。

四日の朝は大阪では福わかしと云つて、東京の七種粥の樣な「オミ」と云ふものをこしらへる、吉例ださうな。暮て嫂樣に訊つた通りドレ大阪式にこしらへませう、具菜（菜の花の若葉）を細かくきざみ、味噌漉に入れ沸騰した湯につけ、直ぐ引上げ、鍋へお米を粥をこしらへる樣に仕かけ、一泡吹た時お玉杓子に一杯の白味噌と前の菜と餅を入れ、餅の柔かく成りしを度とし火を引きむらして置く。

お手が鳴る。枕元の雨戸を一枚明けて、新聞を上る

「昨日鮒卯でお父樣と文樂座へ行く約束をしたがお前も行かぬか」と仰る義太夫は大好だ。

「えゝお伴いたしますわ」と二つ返事、「だが髮がこわれて居るから什麼しようと、鬢の後れ毛をなでる。

「束髮にすればいゝさ」と仰る。

「夫では早く支度を仕ませう」と湯殿へお冷水をとらせ自分は鏡臺の前へ坐る。

此邊ではお正月と云つても、三ヶ日限り、もう早くから筬の音がする、ほんとに農家は勉強だ事。丸髷の癖が直ら無くつて上手く結ひ無い、手が倦く成つて仕舞う、やう〳〵マダムに、結ひ上げ珠入り虞美人草の

簪を挿して、手早く身仕度をする。
丁度良人も湯殿から大島紬の羽織の、紐を結びながら被入しつた。
氣づかつたオミの加減もよく出來て朝飯を濟ませ直ぐ出かける。

▲お迎ひ

此處難波の停車場、電車と汽車から吐出された、幾百の人。人様ざまの思ひは異らうが、初春の樂しさは面に滿ちて皆活氣を帶びて居る。
初詣での住吉歸りと見える二人連れ。露の滴れさうな桃割に極彩色の舞妓、派手な黒地友染の振りの袂を朝風に靡びかせて、こぼれ出る鴇色の袖も艶かしい。
連れは潰し島田の婀娜者、藤鼠の襟から拔出た樣な白い頸足をなめた髱をゆら〳〵と、着物は何かコートに包んで二三枚重ねた白八つ口が見える。
國旗を交叉した停車場の松飾をくゞつて、難波新地を演舞場の方へ消えた。

良人は會社へ鳥渡寄ると仰つて一足先へ、自分はお舅様をお迎へに船場の本家へ車を、
横口から音なふと、竹が出て來た、嫂様も直き被入つた「まあお上りや、お舅さんはえろうお待ち兼でお店にお出だす」とお仰る「おや左樣で御座い升か、つい遲く成りまして」と店へ廻る。
「お老人のお氣忙しく、ラッコの帽子をお被り成り、インバネスも召して。手袋をはめ乍ら店の土間に立て被在る。「さあ出かけ樣かな」
「お早うお歸り」と店の者が低頭をする。
車は二臺、箒目正しき船場の朝を御靈文樂座へ。

▲文樂座

朝日をうけた御靈の屋根に鳩の一群が舞ひ上る。
此處をよい遊び處に集まる、子守は日當りのよい鳥居前に陣取つて、鞠をかゝるやら、泣く子賺して子守歌うたふやら、賑はしい。
境内をぬけて文樂座へ這入る。入口では振込が、

「染太夫さんエ――」と景氣を付て居る。
舞臺は判官切腹の場、染太夫が語つて居る。憂のきく太夫だからしんみりと、聽衆は寂として、時々鼻をかむ音がする斗り、身が締る樣た、殊に二上りに成つて「御台所は正體なくといふ處、女義太夫や素人は派手に語るが憂を含んで實にいゝ、廣作の三味線も太夫を助けて、さえた音を聞せる。
人形は桐竹紋十郎が遣ふ由良之助、名人には成度もの人形が生きてゐる樣で遣ひ手の姿が不思議に目ざはりに成らぬ。
幕が〆ると見物はどよめいてあちこちで大阪一流は持參の辨當の蒔繪の重箱が開かれる。此處は芝居と違ひ眞面目に聞に來る人が多いから、興行物にはよい着物を着る習慣、土地の割には質素だ。
お天氣が替つて雪もよひの風がざわ〳〵と大層冷る借り炬燵の火を掻き立て、お男樣にインバネスをば着せ申す。
茶屋場の幕が明いた。

華やかな舞臺面。掛合の太夫が各々好み肩衣で、蠟塗に白房のしぶいのや、高蒔繪の派手な見臺を控へて居並ぶ、陽氣で素らしく面白い。
攝津大掾の由良之助、惡からう筈なく、南部太夫のお輕玉をまろばす樣な美音で「たより無いのは身の代を役に立ての旅立」といふサワリ、什麼してあゝ自由に語れるものかと感服する。
此處は舞臺も陽氣、出語りも大勢で息もつかぬ面白さで有つた。
良人はポッケットから、ウイスキーの平瓶をお出しに成る林檎を剝いては酌をする。
お男樣はお茶を上りながら「面白かつたなあ」
「ほんとに宜しう御座いました道行の三味線はいかにもよろしう御座いました」良人は「平衛門がよかつた力のあるさび聲、いつ聞ても越路太夫はいゝ」とお譽めに成る。
木の音とともに太夫座が廻つて、半白の老人攝津大掾、太い長い眉毛、穩やかなおもて、靜に一禮して見

臺を構へる。

門では振込が「攝津大掾さんエ――」と繰返しくりかへし高らかと呼び上る。立錐もなき滿場の聽衆水を打つた樣に、一節でも聞もらすまじと身じろきもせず耳を澄す。

「人の心の奥深き、山科の隱家を尋ねて此處へ來る人は、加古川本藏行國が女房戶那瀨」と語り出す。しつとりと上品な筆も言葉も及ばぬ、品位のある語口、忠九は父樣の十八番、煙草片手にお持ちに成つた儘熱心に聞て被入る。

今晚お歸りに成つたら、五行本へ朱をお入れに成るだらう。

お石と戶那瀨の詰合。品の有る內にも武士の妻の意氣、子にあまき母親の情、夫々異なる二人の女性を、巧に語り分け、聞く者も、思はず息をつめる。「鳥類でさへ子を思ふ」と云ふあたり、之こそ他に類の無い名人の節廻しと聞惚れて仕舞ふ。

割腹後の本藏大丈夫の心を語る大きさ、七十四の太夫とはどうしても思はれぬ「あゝ大阪人の自慢するも無理ならぬ事、之計りは、天下一品大阪の誇で有う。

こゝを出て梅月で手輕い夕飯をすませ、船場へ男樣をお送り申、車を難波停車場へ急がす。

北風は身を切る樣でヒユー／＼と頸元へ吹き込む。ボーアを顏にあて、大分來た頃と、ふと顏を上ると、戎橋際で廣告塔の電氣で晝を欺く計りまばゆい、流石商業地、廣告の趣向は東京も遠く及ぶまい、心齋橋から戎橋まで大阪目拔の場所、道幅の狹い町を往來は織る樣に、こゝに軒を並ぶる商店は商業の懸引、油斷も隙も有らじと目を八方にくばる家每の瓦斯や電氣は赤く青くかゝやく。

丁度發車の間に合ひ、わづか三十分で、身は濱寺の靜けき里に運びさられた。

雪げの空は吹き晴れて、氷る樣な月が松間に物凄いコートに包んだ二人の影を白砂にうつしつゝ家路につく。

犬の話

◎別格猫と畜生犬

私共の傳聞するところによれば、猫が家畜となつたのは餘程古い事である。併し猫が十二支に加はつて居ないのは、これは實に佛教と密接の關係があるからださうで、それは鼠が佛典を噛ぢるところからその鼠を捕捉し驅逐する猫は、家畜として一種特別の待遇を受けて居たのである。猫の飼養は、もと寺院にのみに限られて居たが、遂ひに進んで一般の家庭へ入つた。此習慣が日本へ渡來したのは、欽明天皇の時であるらしい。

又英國の傳說によると犬が家畜となつたのは紀元千〇六十六年でウイルアム一世が、ノルマンデイ公として王位に着いた時、タルボツト種の犬を英國へ連れて來たのが首先であると言ふ說もあれば、或は往昔、英國々民の祖先が、英島國へ渡つてその國族を樹立した時に既に人に飼はれて居たと言ふ說もある。孰れが眞實かよくは分らぬが、アダム、イヴの神話中にも犬が出てゐる位だから、何しろ古いものには違ひない。

◎無邪氣な惡戯

同じ家畜でも猫は却々陰險であるが、犬は快活で能く人に懷く。又最も能く子供の性格と一致して居る。子供は多血神經質であるが、犬も亦多血神經質である。子供はお客樣のシルクハツトへ水を入れたり、靴へやいとを据ゑたり、能く惡戯をするが、犬も隣家のむつぎを咬へたり、下駄の緒を喰ひ切つたり、却々子供には負けてゐない、けれども何れも所謂「今啼いた烏が早や笑つた。」の類で、全く惡氣のない惡戯である。子供は却つて無頓着だが、然しある場合に於いて極めて神經過敏である。犬も亦然うで、實に可愛ゆい所がある。

◎西洋では家庭の一員

日本では犬はまだ十分愛用されて居らぬ。けれども西洋では家畜と言ふよりも寧ろ立派に家庭の一員となつて居る程で、坊つちやん孃ちやん達の食卓の隣りには必らず犬の椅子がある。從つて犬が下女達の命令を身にするが主人達に對しては絶對に服從すると云ふ事實を見るのも珍らしくはない。といふのは外國の子供は男女共大抵犬が大好きだからでもある。早やい話がナシヨナル讀本の第一を開けて見てもよく分かる。日本でも成程男の子のお宮參りの飾りの車には必らず張子の犬がぶら下げてあるが、迚も西洋で可愛がるのとは較べられたものではない。

◎犬の嫉妬と虚栄心

犬は子供の性質と一致して居ると共に、又或る婦人の性格とも一致して居る所がある。第一嫉妬心が深かい。次ぎに虚栄心が強い他の犬が愛されて自分が愛されぬといふ場合には非常に怒るものである。假令主人と雖もその場合には屹度咬み付く位の事をする。他の犬が良い座蒲團を持つて居る時、自分に木綿の汚ないのを與へられる様な事があると必ず怒る。又犬に虚栄心があると言ふと一寸可笑しい様に聞えるが、之れは實際である。例せば、眞鍮の頸輪を嵌めてゐるのを鐵製のと取更へると、大いに不服で、矢張きら〳〵した綺麗なのを好む。

◎犬と音樂

虚栄心どころではない、犬には高尚優美な音樂趣味がある。三味線、ヴアイオリン、オルガンなどを彈いて聽かすと、初めは靜肅に傾聽してゐるが、遂に居堪らずなつて來るので、何とも譯の分からぬ奇妙な聲調をあげて自から何かを歌ひ出す。それが調子に合つてゐるから面白いのである。此頃湯島の獣醫の入江濤吉氏の飼犬は、「君が代」の練習中であるが、餘程進歩發達の見込みがあるさうで、先生は躍起となり、聲をあげては「もつと大きな聲で高く!」「聲を下げては「低く、小さく!」なぞとやつて居られる

◎犬君はポケットらら名刺

西洋の愛犬の風は盛んなもので、佛蘭西などには犬の食べるパンを專門にしてゐる商店がある。それから矢張專門の洋服屋があつて一着の價格百廿圓などいふ隨分高價な品も賣つてゐる。貴婦人達はさういふ物を着せた犬を連れて他を訪問するのであるが、犬君が先方へ着くと先づ帽子を脱ぎ、洋服のポケットから自分の名刺を咬へ出して、先方の貴婦人に與へる。と、先方ではそれを見て、犬の名前を呼び御馳走を饗するといふ順序である。犬が金の入歯したのなどはもはや過去の話で、此頃は名刺代用に表面へ金で呼名を表はして居るものがある。只今佛蘭西邊で愛されるのは、フレンチトーイブルドツグ、ポメラニヤンの二種である。そして華美な佛蘭西婦人は、犬を連れて歩くのにも如何したら自分が美しく見えるかと隨分腐心するさうで、婦人の帽子が小さければ犬が大きく見え、帽子が大きければ犬が小さく見えるなどゝ色色考へてゐると言ふ事である。

◎金庫犬と番犬

犬の種類は四十三種あると言はれてゐるが、之を大別して家庭犬、獵犬、愛玩犬、金庫犬、番犬、護衛犬とする事ができる、家庭犬は坊つちやん、孃ちやん達のお友達、獵犬は狩獵用、愛玩犬

は貴婦人等の愛玩用、金庫犬は金庫番、番犬は屋敷の番、護衛犬は人の護衛用である。アメリカのディヤナ州ポリス町には、此等の犬を完全に教育する學校があつて、校長をエルプ氏といふが、前大統領、ルーズベルト氏の飼犬なども先年此學校を卒業したといふ事である。

金庫犬などは却々重寶なもので、二匹なり三匹なりでちやんと金庫の前へ控へて居ると其金庫は先づ安全である。然うして控へてゐると、金庫を開閉するには、一定の徽章をかけた人が、先づ犬に一瞥の目禮を遂げた後、右手に鑰鍵を持つて開閉せねば犬は承知しない。徽章をかけぬとか一瞥を呉れぬとか、兎に角規定を破つて開閉しようとすると、犬は忽ち阿修羅となつて吠え付き、其人を咬み殺さなければ止まぬ。此の犬が病氣とか或は病死した爲めに泥棒に入られる例は澤山あるから、亞米利加では其の豫備犬を飼ふ家が少くない。番犬でも良い奴になると、十五分なり、卅分なり、時計が一定の時刻を報する毎に、槍のふる樣な夜でもちやんと小屋を出て屋敷の周圍を精細に見屆けて歸へるのがある

◎犬のお產と哺乳

犬の分娩期は春秋二期である。分娩後の汚物は一切自分で始末して、決して他の者へ迷惑を掛けない。哺乳期は凡一ヶ月で此間子犬を哺乳する親切は殆んど人間も及ばぬ位である。二ヶ月目から乳が出なくなるが、然うなると親犬は先づ自分で或る食物を食べ一旦胃袋へ入れて第一次の消化作用を行ひ、後ち嚥下して、餌のやうになつたのを子犬に與へる。

特に優しい事は、犬は產後間もなく愛兒を人に奪ひ去られると彼等は愛著の爲めヒステリー症に罹つたり、甚だしいのは發狂したりする。何時であつたか、加賀丸船中で、日本婦人が、子供に乳房を啣せた。外國人が見て「日本婦人は禮儀を知らぬ。人の前で失禮ぢやー　失禮ぢやー」と言つて切りに切齒扼腕したと言ふ事があつた。吾人は進化上から見て、この外國人の習慣的心理を疑はねばならぬ。

◎犬は主人の道を嗅ぎ分ける

犬の五官の中で最も發達して居るものは嗅覺である。人の自殺と他殺を、空氣の動靜や其の臭氣に依つて知るとは不思議なものである。又三つ股道で主人の行衛を失つた時には、彼等は先づその一、二の道を嗅いで見て、主人の香ひがしなかつたら飛んで第三の道へ急いで主人に追ひ付く。此時第三の道へ行くには、既に直ぐ飛ッ走しるのであるが、こゝらを見ると犬には又推理作用があるものと言つてよい。

◎ちんの榮耀榮華

猶狆の事を一寸記しておく。之はスパニール種に屬する日本獨特の犬で、外國ではヂャパニーススパニールと呼んでゐる。貴婦人初め一般の家庭に愛玩されるもので、先年我が皇室から英國皇室へ御贈りになつた七頭の狆は、此頃頗る鍾愛を蒙つて榮耀榮華を極めて居ると言ふ事である。我國で之を産するのは、京都名古屋邊が重もで、船が横濱を解纜する毎に、十頭や廿頭は必ず輸出されて居る。然し内地で餘り大切な育て方をする爲めに、上陸後大抵死んで了ふから、一頭金五十弗宛に賣り付けた位では結局引き合はぬとの話である。



一口話

以上犬が家庭の花とも實とも言はれる子供の性質と一致して居る事、家庭の主人公たる婦人の性格のある點と一致して居る事、又教育次第でどのやうにも賢くなると言ふ事を述べたが、恰も玆に犬の歳を拾ふのであるから、此際此の賢明な犬君をして、どうか日本家畜界のオーソリチーとして皆樣が可愛がつてお遣り下さる樣にといふ希望を附記して筆を擱く。

東都の正月

宮中並に市中の正月行事

△四方拜

新春の曙光麗かに四海を照せば門の松飾り冴えぐくしく、自ら泰平の色をそへて、參賀の客の走りあるく樣ゆたけくも見ゆべし。宮廷にては黎明の朝四方拜の御儀式あり。天地四方を拜ませ給ふが故に斯くは名づけられたるものとかや、むかし皇極天皇の御代に天皇南淵の川上に行幸座まして四方を拜し天を仰ぎて雨を祈り給ひし事日本紀に見え又孝謙天皇の御代に橘奈良麿等が天地四方を拜し共に鹽汁をすゝりて誓を爲したる事も又續日本紀に見ゆ、おもふに神代よりの遺法なりと見ゆ。京都の御所にては清涼殿の前庭にて行はせられしが、現今の宮城となりては、神嘉殿の南殿に於て行はせらるなり。今其御有樣を漏れ承はるに、豫て前庭に屋を設け、其中央に眞薦を敷き、御屏風二雙を立て廻はして御座を設け、さて陛下には午後五時三十分といふに先づ綾綺殿に出御あり。此處にて御束帶を着させられ、御手水、御劍、御草鞋、御笏等は侍從奉仕し、それより掌典長の御先導にて御設の御座に進ませ給ひ、先づ神宮を始め奉り遙に拜ませ給ひ、御拜畢つて賢所、皇靈殿、神殿を御拜あらせらる。



△歲首の旬祭

此日には四方拜の外に尙一日祭とて、朝、賢所、皇靈殿、神殿の御前に歲首の御祭典を行はせらる。こは四方拜に先ちて掌典長以下をして行はしめ給ふ例にして、先づ午前四時より御殿の裝飾を奉仕し、式部職の官員着床して賢所、皇靈殿、神殿を開扉し、賢所、皇靈殿には、各々折敷、高坏、六本立、折櫃、御酒等の神饌を供し、神殿には洗米、御酒御鏡餅、海魚、川魚、海菜、野菜、菓、作果、鹽水、以上十臺の神饌を供して祝詞を奏す。陛下には四方拜の御儀を終らせられて後賢所の御前を拜ませられて御玉串を捧げ給ひ、次に皇靈殿、次に神殿の御拜ありて夫々玉串を捧げ給ふ、御拜畢つて入御あらせらる。之を年中旬祭の始となす。旬祭とは每月三回一旬の初日に賢所、皇靈殿、神殿の三前に行はせらるゝ御祭典を謂ふなり。

△市中の賑ひ

俗間にては元旦には初日の出を拜まんとて未明に起き出

で、上野、湯島臺、神田明神臺、愛宕山、九段坂上などの高臺、或は洲崎、高輪の濱邊に集ふ者多く、或は惠方詣とて歳の吉方に方れる神社に詣でゝ一歳中の幸運を禱るものありて參拜者頗る多く、商人は祠前に祝飴などを鬻ぎて是又なか〳〵賑ひなり。或は七福神詣とて一日より七日に至る迄市中七福神を祀れる神社佛閣を歴巡して參拜するもあり。年賀の客は一日より三日迄の間を三ヶ日としてゴム輪走り、自働車飛びて頗る雜閙を極むれど、遲れたるは七日迄にするもあり。家々にては玄關門口などに名刺受を備へて賀客を待つ。市中の町々は、日章旗翩々として初春の風にひるがへり門の松飾りは新春の榮を競へり、年賀の客年玉配り、さては萬歳、鳥追ひ、獅子舞、太神樂など絡繹たり女子供は今日を晴れなる新衣を纏ひ羽子突き凧揚に餘念なし。

△新年拜賀

九重の雲深き御邊りにては、一日、二日の兩日天皇、皇后兩陛下宮城に在まして文武百官より新年の拜賀を受けさせ給ふ。先づ一日午前九時三十分といふに、兩陛下鳳凰の間へ出御ありて、親王、王、同妃の各殿下、宮内省官吏並



に同夫人等の拜賀を受けさせらる此の拜賀畢りて後、兩陛下には皇族以下各員を從はせられて正殿へ出御あり右に天皇陛下の玉座、左に皇后陛下の御座ありて、右の方には親王、王殿下を始め奉り、侍從武官長以下整列し、左の方には妃殿下を始め奉り、典侍、女官、皇后宮大夫等整列す。十時より大勳位、親任官、其他高官の拜賀を受けさせられ十一時より又神佛各宗管長等の拜賀を受けさせられ、午後二時には各國大使公使等外國の使臣の拜賀を受けさせらるされば天皇陛下には早朝神嘉殿の南庭へ出御あらせられて四方拜の事を行はせ給ふより、百官の拜賀を受けて薄暮正殿より入御あらせらるゝまで殆んど御休憩の暇もあらせられざる由。さて翌二日午前九時に又賢所、皇靈殿、神殿の御前を祭らせらる。之を二日祭と申す。この日も正殿に於て一日の拜賀に次で又百官の拜賀を受けさせらる。更に東宮御所の御有様を承はるに、皇太子、同妃兩殿下には、一日午前十時三十分より宮内省高官の拜賀、同十一時より一般帶勳有位者の拜賀を受させられ、二日には午前十時三十分より前日に引續き百官の參賀あり。又親王、王殿下は二日午後拜賀あらせらるゝやに承はる。

△二日の賑ひ

俗間にては二日には學校子供の書始、音曲習ふ少女の彈始など今も下町邊には行はるれど、多くは廢れたり。又商家にては此日に初荷、賣始を行ふ。夕暮よりは「お寶〳〵」と喧しく呼びつゝ寶船の繪を賣りあるくが、これは此夜其繪紙を枕に敷きて寢れば吉き初夢を見るといふ。各商店の賣始は品物に景氣など添へて客を引く。初荷の景氣賑はしくまた勇まし。いづれも未明より貨物を大八車に積み重ねて幾輛となく列れ、七福神、高砂、日の出などの飾物をなし、紅毬燈を繋け、出入の仕事師附副ひて旗を押し樹て、囃子、音頭をとり、掛聲いさましくれり行く。男の兒は紙鳶のうなりに夢中となり、女の兒は手鞠、羽根突き、追羽子に日の暮るゝを忘る常には眞面目なる奥樣も今日は亦斑らに顔を染められたまふなど、實に春の陽氣なり。夜に入りては福引、双六歌留多に興をやり文金高髷のお孃さんゝ髷横さまに蜻蛉返りさせて爭ひ騒ぎて、さゞめきは一町先にも聞ゆべし。



○三日の元始祭

三日の朝も宮廷にては賢所、皇靈殿、神殿に御祭典を行はせらるゝ事二日に異ならず。之を三日祭といふ。それに次いで午前九時に元始祭を行はせらる。こは明治三年正月三日に、神祇官に於て天神、地祇及び歴朝の皇靈の御鎮祭ありて盛典を擧げさせ給ひ、翌四年正月三日にも亦神祇官に行幸ありて親祭を行はせられたるに始まり、天津日嗣の本始を祝して歳首に神祇を崇めさせ給ふ盛典なり。即ち神殿の御裝飾を奉仕し、式部官著床して御殿を開扉し、賢所、皇靈殿には四方拜の御時のごとく折敷、高坏、以下の神饌を神殿には飯、餅、海魚、川魚、野鳥、以下を供し、御幣物には錦一巻、紅白絹各一匹、晒布二端、以上一臺宛を供し、さて時刻に至りて親王、王殿下、以下高等官著床すれば、陛下にはやがて綾綺殿に出御、御束帶を著せられ、御手水の後、掌典御先導にて賢所を始め御拜の御座に進ませられ御玉串を捧げ給ひ、御拜御告文を奏し給ひ、畢つて入御あらせられ、次に皇后陛下御玉串を奉り給ひ、御拜畢つて御退下、次に皇太子殿下を始め奉り皇族宮内省高官の參拜あり。正午より午後二時迄は午前に引續き一般高位高官、神佛各宗派管長等參拜するなり。

○お使の神事

同じ三日に、豊宮崎神社にて御使の神事を執行す。社官、[illegible]

沙門天の御使と称へしものにして、維新の後久しく廃絶せしが、近年に至りて復興せられ。使者は講中にて勤め、其の扮装は甚だ滑稽にして、頭には古兜に裏白、譲葉を前立としたるを戴き、身には素襖を着し、一丈許の大太刀佩き、五尺餘りの擂木を腋に挟み、一枚歯の高足駄を穿き、大杓子を杖につき、社人に導かれていと真面目にのそり〳〵と本社を出で、男坂を下り、愛宕町通を北に新坂を上りて本社に帰へり、て待設けたる世話人等と挨拶ありて式を了る。其起因詳かならざるが、或は元和の頃社僧俊賀下野の人なりしかば、彼の日光の強飯の式に倣ふて行ひしに始まりしともいふ。

△政始めの御儀式

四日は政治始にして、宮廷にては陛下此日内閣へ出御ありて政始の御式を行はせらる。これは陛下御即位の翌年即ち明治二年一月四日に始まりたるものにして、當日午前九時、各大臣、枢密院議長、會計検査院長、警視総監、東京府知事等通常禮服を着用して内閣へ参集し、やがて陛下の出御あらせらるゝや、各大臣以下着床し、斯くて萬機を聞召さるゝに當り、先づ神宮の事を奏す。これは前年十二月末に神



宮祭主より同年中伊勢神宮に於ける諸祭典が總て滞りなく執行されたる旨の報告ありたる事を奏上するなり。之を奏する間陛下には立御あらせられ、各大臣以下も亦陛下の御例に倣ひ奉る。次で総理大臣より各國の事を奏し、天皇畢つて入御あらせられ、諸員退出す。各官衙にては此日より政務を執り始め、諸會社、取引所なども此日より業を始む。

△新年宴會

五日には宮中にて新年宴會を催さる。此日正午、陛下豐明殿に出御あらせられ、皇族、高位高官の者、其他各國大公使等を召して新年の御宴を開かせらる。時刻に至り陛下には皇族、宮内大臣を従へて出御あらせられ、千種の間に列立の高官に通御掛に拝謁を賜ひ、更に此等の諸官を従へて豐明殿に入らせられ、各員敬意を表し奉る間に玉座へ着御あらせらる。やがて勅語あり。「朕新年を賀し各國大使公使並に諸大臣と親宴を開き歓を共にすることを喜ぶ」との意味を宣はせ給ひ、首座大使よりは、各國大公使を代表して奉答し、総理大臣よりは群臣を代表して奉答し、御宴となる。其間奏樂あり。先づ勅獻を、次で次第の物を陛下に

供し次で親王以下に賜ふ。御宴畢りて入御あらせられ、親王以下諸員續いて退出するなり。

△消防組出初式

六日には、俗間にて、此日を六日年越といひて蕎麥を食ふ習はしあり。此夕松飾を取拂ふ。

松の内とは一日より此日迄の間をいふなり。此日には消防組の出初式あり。當日午前七時に、警視廳の火見櫓より打出す半鐘を合圖に、市内各所の警鐘一時に打鳴らされ、六箇分署四十組の消防夫は袢纏股引の扮裝甲斐〴〵しく諸所に集り、更に各方面の分署に勢揃ひをなして呉服橋の式場に臨む。同時に本廳及び各分署備付の蒸氣喞筒も參着して、整列すれば、警視總監、消防司令長官等之れに臨む。さて喇叭の聲にて蒸氣喞筒式場を一巡し、司令長官は各組頭、小頭等に對して各々職務を盡すべき旨を諭し、後、目錄、酒、及び鯣を賜ふ。それより各組の若者は、梯子乘をなす。これは一時その危險を慮りて停止せられしが、三十年より更に之を復興せり。其技に大の字、吹流し、背龜、腹龜、倒さ大の字、腕だめ、膝掛、遠見、三尺留等の種類ありて、四間三尺の長梯を地に樹てゝ之れに攀ぢ、其の頂に



登りて、或は突立ち、或は腹ばひ、或は倒さまに掛り、或は横たはり手脚を張るなどするゆゑ、觀る者も手に汗を握る。

△御講書始めと陸軍始め

七日には宮中にて御講書始の御式あり。當日陛下には鳳凰の間に出御あらせられ、侍講等を召して進講を聞召さる。大概國典、漢書、洋書の三部に分ちて進講を仰付けられ、畢つて後進講者に御酒を賜ふ。

越えて八日には陸軍始觀兵式あり。歳新にして大元帥陛下親しく兵を閲し武を勵まし給ふなり。これは明治四年一月八日講武始の節舊本丸にて兵式執行あらせられたるが始にして、當日、陛下には、午前九時三十分御出門青山練兵場に行幸あらせられ、先づ場内に整列せる諸兵隊の前を御乘馬指揮官御先導にて御一週閲兵式を行はせられ、畢つて分列式御覽ありて還幸あらせらる。閲兵式とは陛下親しく整列せる諸隊の前を通御あらせられて軍紀の振張を檢閲あらせらるゝ御式にして、分列式とは其の軍隊の運動を叡覽あらせられ、同時に軍隊に於て敬禮を致し奉る御式なり。陛下臨幸の觀兵式は必ず此の二つを合せ行へど、時には

一つのみを行ふ事ありといふ。

△歌御會始め

毎年一月十八日には、宮中にて歌御會始の御式あり。これは宮中御歌會の御發會式とも申すべき御儀式にして、鳳凰の間に於て行はせらる。豫め題者、點者、奉行、讀師、其他發聲、講頌等の諸役を定められ、又御題を仰出されて一般臣民の詠進を許さる。御歌會も亦古來の御儀式にして、維新の後も明治三年以後年々之を行はせられ、最初は皇族華族、勅任官の詠進のみに止められしが、後暫々仰出されて遂に普く一般臣民の詠進を許さるゝに至れり。御式場の模様を漏れ承はるに、當日午前十時兩陛下には宮内大臣以下及び女官等を從へさせられて出御あり。聖上は右に、皇后宮は、左に御著床あらせられ。斯くて下臈の歌より讀み上ぐる慣例にして、讀師が懐紙を左の方に取置き、御硯蓋を御向け、其上に懐紙を御前に向けて引延せば、講師は先づ詠進者の姓名を讀み上げ句讀明白に其歌を讀み、次で發聲其初句を朗詠し、講頌の諸員は同音に第二句より講頌す此の如き事各々一回にして順次上臈のものに至る。親王、王同妃殿下の御詠進は二回講頌し、東宮、同妃兩殿下の御歌は、別の案上に置かれたるを、講師御懐紙を御硯蓋の上に置き、讀師、發聲以下の者起立して拜見し、復席して二回講頌するなり。

次で讀師は皇后宮の御前に進みて御懐紙を賜はり、復床してそれを御硯蓋の上に置き、講師、發聲以下起立して之を拜見、復床して講頌すること三回にして講師之を返上す。次で聖上の御前に進みて御懐紙を賜はり、復床して御硯蓋の上に置き、講師、發聲以下の諸員起立拜見の後講頌する事五回にして之を返上す。以上の如くにして式を畢り、兩陛下入御あらせられ、役員に酒饌を賜ふ。役員の内題者點者は御歌所長之を承はり、其他は華族及び御歌所の各員に仰付らるゝが常なり。



△くさ〲の祝祭

正月中の宮廷の御儀式は略ぼ右の如くなるが、尚ほ民間の行事を顧みれば、七日には若菜節供（七種）とて、若菜粥を煮て食ふ。これは菘、蘿蔔、芹、薺などの七種を撰びて煮る又十一日は商家にて藏開又は帳綴とて祝ふ習慣あり此日鏡餅を下して食ふゆゑ又鏡開とも云ふ。削懸を門に懸くる習ひもありしが、今は行はれず。十四日には年越と

て注連飾を除き、十五日には赤小豆粥を食ふ。俗に此粥を三日の後まで蓄へ、之を暖めて食へば疾病を免るなど言ひ又凍瘡に塗れば効ありとも言ひ傳ふ。

十六日は閻魔の賽日、茅場町の藥師堂、淺草公園、下谷廣小路の常樂院、兩國回向院、新宿大宗寺、小石川餌差町の源覺寺等の閻魔に參詣する者多し。殊に此日は男女、雇人の半期に一度の藪入日なれば、久しぶりに生家を見舞ふもあり、上野、淺草邊に遊ぶもありて、市中各所の料理屋の繁昌は一入なり。又芝居興行物など大に賑ふ。廿五日に



龜戸神社に鷽換の神事あり。文政三年太宰府天滿宮の式を模しゝに起り、百難悉く「うそ」になれかしとて榊を以て刻める鷽を神前に陳れ、參拜の客の別に贖ひ來りし物と引換へて與ふるなり。凶を變へて吉となすの意に出づると云ひ傳ふ。其他神社佛閣にても、一年最初の賽日には、初詣と稱へて信徒の參拜夥しく、就中五日の蠣殼町の水天宮、八日の茅場町の藥師十日の虎の門の琴平神社、十七日の淺草觀世音、二十一日の川崎大師など最も賑ふ。





三千年前の女の姿形

江見水蔭

太古の遺跡を研究して居りますと種々面白い事實が發見されますが、今から三千年も前の時代に、日本に住んで居た人種の女子の狀態に就て、自分が調べ得ました結果を一寸お話し致しませう。

抑々三千年も前といふと、無論、神武天皇御即位以前でありますが、其時代の女子は、嘸野蠻極まる者であつたらうとは、誰しも直ぐと頭に浮ぶのでありますが、事實は決して然うでありません。

頭髮の裝飾、顏面の扮粧、衣服、穿物、冠り物、却却發達して居ましたのみならず、手工にも長じて居ましたらう、割烹にも秀れて居ましたらう、然うして身を持する頗る貞淑であつたといふに至つては、我々の先住民として、大いに誇るに足ると存じます。

勿論この時代には、鐵器類を用ゐる事を知りませんでしたから、石器を主として貝器、骨器、角器などを使用しましたので、迚も現今の文明に及ぶべくも有りませんが、併し、或物の如きは、却つて現今の文明も猶且つ及び難い程の美術品の出でたのも事實であります。

それなら、斯くの如き日本の先住民―石器時代の住民―それは如何なる人種であるかと申しますると、實は未だ能く分らないのでして、學術上未だ疑問でありますが、之には二大學說が既に出て居りまして、コロポックル族であらうといふ、坪井先生の學說と、アイヌの祖先であらうといふ、小金井先生の學說との爭ひは未だどちとも解決されずに居ります。

私は坪井先生のお說の方が、どうも事實に近いと信じる樣に、今日ではなりました。といふものは七年間

太古遺跡の發掘其他の調査に從事しました結果なのでありますが、それに就ては又他日の別の問題と致しまして、その三千年前の或る人種の女子を明治の今日に貝塚の底から、手を取つて引出して、皆樣に御紹介致しますと。

▲**頭髮は今よりも複雜に結んだ**

頭髮は大和民族の祖先が簡單に結び、或は垂げたのに比して、頗る複雜に結んだものです、それは何故分ると申しますと、先住民の遺跡を發掘しますると、時時其當時の住民が手造りにしました土偶が出て參ります、其土偶は、宗敎上の――迷信の的？――必要から造つたものか、或は玩弄物として製したのか、それは未だ分りませんが、兎に角、其土偶が、當時の住民の風俗を表はして居るといふ事は、非認が出來ません

この土偶には、明かに男女の區別がありまする、その女子の方は土偶に就て調べて見ますると、大概立派に結髮したのを表はして有ります。中には頗る複雜なのが有ります、廂髮も確かに有ります、又土偶の中には、頭巾を冠つた形のが有りますが、それとても、後頭部には大概、突起を現はして有るのから見ましても、髻を結つて居たといふ事は確められます。

それから、結髮したばかりでなく、それに櫛、笄、或は、簪、又は根掛など用ゐた形跡があるから面白いでは有りませんか。

勿論、植物製の物は腐蝕し易いものですから、現品は今日まで遺つては居りません、けれど骨器、角器、或は貝器、牙器などで、簪として又は根掛として考へるより他に適當しない物が時々發見されます、櫛、笄に就ては未だそれに當る遺物が出て居ませんが、これとても後には出るかも知れません。

出るかも知れないと云ふと、出ないかも知れないといふ反對も有りませうが、既に簪、根掛と見る品が出た以上は、それに伴ふ他の二品の出ないといふ事は、先づ無からうかと思はれます。

簡單に其簪を御紹介しますと、獸類の大腿骨を削りまして、頭部を美麗に彫刻しまして、それに朱を塗

つて飾り、それから尾端を鋭く摺り磨いて、頭髮の中に插し易い樣に製してあります。

根掛の方は、貝を現今のと同じ形にスリ減らしまして、其兩端に孔を穿つてあります。貝の他に猪の牙で同じ形を造つたのも有ります。

結髮の分類を吉田文俊氏が東京人類學會雜誌で試みられましたが、餘りに長く成りますので、其說を御紹介するのは避けませう。



▲お白粉は疑問お赤いは確實

これは却々難かしい問題ですが、今の樣にお白粉やクリームや、そんな物を塗つたか如何だか、それは分りません、いや分つては居ます、塗らなかつたでせうが、學問上からいふと、塗らなかつたらうといふのは、假定說でありますから、斷言するだけの材料が出ない上は申されません、

それでお白粉は疑問としても、顏にお赤いを塗つたの

は事實であります。

お赤いとは何かと申しますると、顔に朱で彩色を施したので、丹面、頬紅の系統は之から引かれるか如何ですか、兎に角、土偶の顔面に朱の塗つてあるのは事實なのです。

それから、顔に刺靑をしたのも事實であります、これも同じく土偶の顔面に刺靑の痕を凹線を現はしたのが澤山あります。

▲耳飾りも附けました

頭髮を結び、それに裝飾物を挿し、顏面にお赤いを塗り、刺靑を施した三千年前の女子は、更に耳の飾りをも附けました、それは滑車形の土製品で有ります、耳朶に孔を穿ち、それに土製品を嵌めるのでありまして、これは、現時の未開人種の中に、同じ方法で未だ試みて居るのが有るさうです、之は最近に坪井博士が此耳飾り說を立てられたのでありまして、その耳飾りの實物が遺跡からも發見せられゝば、又耳飾りを附けた形の土偶も出ますので、最早や動かす事の出來ぬ、事實であります、中には實に美麗なる製作。奇拔なる意匠の品があります。

▲首のまはりに玉

頭、顔、耳から下つて今度は首ですが、此所には石牙、骨、或は土製の玉類を輪にして裝飾に掛けたものと見えます、いづれも實物が遺跡から出まするし、又例の土偶にも其形が現はして有ります。

▲いよ／＼服裝しらべ

女子第一の問題は服裝で有りますが、之は迚も實物は遺り樣が有りませんが、土偶で見まするると、決して裸體では有りません

既に頭髮を結び、簪を挿し、耳飾り、首飾りをして顔にお赤いを塗る太古の貴婦人が、裸體であるべき筈がありません。

土偶を見まするると、チヤンと立派な衣服を着けて居ります衣服の原料は獸皮も有りましたらう、草木から製作した織物も有りましたらう。

織物といふのは語弊が有るかも知れません、編物と

訂正してもよろしい。が、植物から復製の衣服は確かに有りました、それは其時代の土器の模様を現はすのに、其織物を其儘押付けて形をのこしたのが、いくらも有ります、随分目の細かいのも有ります、これが又土偶其物にも押付けて形を現はして居ります。

又織物の形を押付けて無い土偶を見ますると、面白い事には、其襟、或は裾、それから袖口を見る處に毛皮を裏がへして、縫付けたらしい形を現はして有ります、さぞ着て居て暖かさうに見えます。冬の服裝は此毛皮の方でありましたらう



それで織物と獸皮との兩方を通じて、面白い模様が表はしてあります、これは恐らく織出し或は刺繍、或は縫付けたものでは有りますまい、其所までの技藝が發達して居たか如何ですか疑問です、大方何かで書い

たのでは有るまいかと思はれます。ですが、衣服は無地でなく模樣の有つたのは事實です。

それで衣服の形を申しますと、上は筒袖の、下は股引、先づ洋服式です、それで多くは兩肩の處に襞が取つてあるのです、男子のは別ですが女子の服は、腹部の中央で合せる樣に仕立てたと見えまして、大概それを表はすべく腹部中央に一線が引いて有ります。これは乳を小兒に與へるのに都合が好かつたらうかと思はれます。

乳と云へば、土偶の乳の高まりと、腹部の高まりと衣服の眞中から開く樣に表はしてあるのとが、女子である證據としてありますので、腹部の高まりに就ては姙娠を表はすのではないかといふ說さい有ります。

▲冠り物と穿き物

中部の衣服が濟みましたから、今度は上と下とですこれも土偶から得た考證ですが、頭部が尖つて恰も三角形を成す頭巾を、すッぽり顏まで冠つて、眼と鼻とだけを出したものらしいです、之は現今でも秋田地方では婦人が農作の時に使用して居るさうです、顏を隱くす爲めが主で、其他は日に焦けぬ爲とか或は防寒のそれであらうと思ひます。顏を隱くすのが主といふ事は、次ぎの一節を御參照下さい。

穿き物の方は獸皮で巾着式に包んだらしいです現今でも關西の邊鄙な地では、此皮靴を用ゐて居りますがそれに類した形であつたでせう。土偶の足部に能くそれが表はれて居ります。

▲太古の婦人は貞淑

此一節では太古の婦人が貞淑であつたといふ事と、手工に長じて居たといふ事が同時に解決されるので有ります。

それは北海道に居る現在のアイヌの口碑なので、これも坪井先生が親しくお調べに成つたのですが、斯ういふ昔話をアイヌは持つて居ます、それは「昔コロボックル」といふ他の人種が居て、土で器を造るのが巧みであつた、それで其器を以て、アイヌと食物などの交

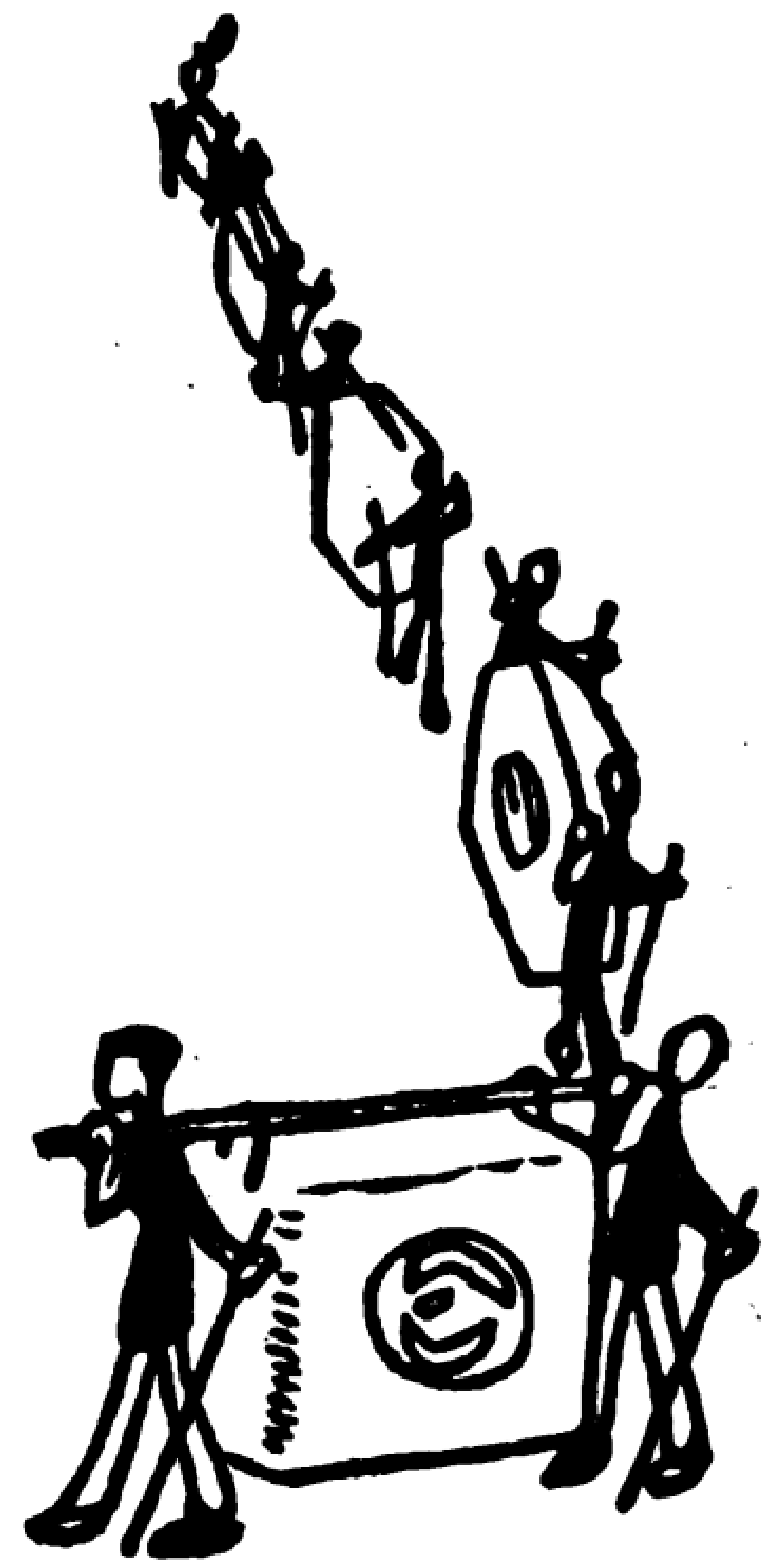
換をして、居たが、それも窓から手を出すだけで、顔を決して見せなかつた、或日アイヌは其手を取つて無理に引入れて見た處が、それは手に刺青をして居る婦人であつた、それから後、コロボツクルは酷く感情を害して、アイヌから遠く去つた』。

這んな話が傳はつて居るのです、アイヌの不敬を怒つて、再び姿を見せぬといふ事や、交換に來ても家に入らず、窓から手を出すのみで、顔を見せぬなど、如何にも、奥床しい處があるでは有りませんか。

未だ手工、割烹に就てもお話が有りますが、先づ今回は大體に於て三千年前の女子を御紹介するに留めて置きます。

（完）





初春の令孃日記

上原綾子

東天紅と一きわたかく曉告ぐる雞の音に、夜のいろ淡く消えゆけば、希望の光かゞやきて、榮ある明治四十三年の帷幕はこゝに全くかゝげられた。

除夜の鐘の音きくとて眠い眼をこすり〳〵炬燵にしがみ付いてたのももはやふる年の夢とすぎて、フトめさむれば、枕元には美しいゑはがきや封筒など御年始状が置かれてある。

あゝもう十八になつたのねと思ひながら例年の通り永續きのしない早起をして、昨日はじめて結つた島田の鬢を、そつと嫂樣になで付けて頂く。

うつすり御化粧して着替の終る頃には日頃朝寐坊の兄樣まで初姿(?)をお見せになつたので千代もかはらぬ初春のことぶきを、揃つてめでたく祝ひ納めた。

參謀肩章にエポレツト、短劍姿いさましく、海軍大尉の禮裝で御でまし遊ばす兄樣を御見送りして茶の間に戻れば早門内の敷石に靴音みだれて長閑なたこのうなりが遠くに聞える。

御廻禮客の接待役は嫂樣に御願ひ申して私は至極閑散な身を、居間の緣に日向ぼつこかた〴〵いろ美しい新聞の初刷に、片つ端から目を通す。

いつぞやの峯子さんぢやアないが全く藝妓の初よそほひが何よりも〳〵一番興を誘ふのですものこればつかりは人ごとの樣にもなく一生懸命になつて讀んだ。

去年までは元日は學校の拜賀式に必らず出たものだけれど今年は親類を廻る氣にもならず第一日を有耶無耶に暮す。

夕方一寸玄關に出てみると大きな銀の名刺受には海軍大將だの伯爵だのと立派なのばかり並んでるのでハテナと思つて、そつと下をのぞいてみると案の定出入の大工だの米屋だのゝがひそんで居た、こりあ乾度書生の竹村のしたことよ、彼男でもこんな事に氣が付くかとをかしくなつたが私だつて矢つ張り薩摩孝助なんていふのより大將や伯爵の方が氣持が好いから其の儘にして置いた。



「御孃樣繪はがきがまあこんなに澤山參りました」と云つて小間使の糸が十枚あまりも持つて來たうちに林さんから五日の加留多會の御案内が有る、まあうれしい!!! 今から胸鳴り血湧き返つて……。それにしても我家ちやア何日頃するんでせうかとう〱林さんに先越されちやつて……オオ氣がもめると眼色を變へて茶の間に突進する途端、廊下で松と鉢合せしちやつた、けれどいつもの樣に痛

い痛いの百萬遍くり返してソツと御茶碗の御湯を目のふちになすり付ける藝當なんぞしてみる氣にもなれないので直ぐそのしかめ顔で襖をガラリ

「ちよいと嫂樣大變〳〵、うちぢや何日？　早くして頂戴な、ねえ、明日はいかゞ？」

「まあいやな綾さんね、そんなにせき込んでおつしやつては何だかちつとも譯がわからないぢやありませんか」

花はづかしき嫂樣が、ことし十九の初よそほひ艶やかなお髷をかしげてしとやかにニツコリ遊ばしたのであられもない我が姿に氣が付いて漸くそこに腰をすゑる、島田の手前もありますものねえホ・・・・でもほんとに恥しかつたのよ。

林さんの御はがきをお目にかけてからうちの會の事を御願ひすると

「エ、〳〵私やいつでも……でも一應兄樣に伺つてからに遊ばせな」とおつしやる、

仕方なしに嫂樣と御話してると丁度兄樣も御歸りなので早速要件をきり出してみる、兄樣つてば

「いゝぢやないか、そんなに血まなこにならなくたつて、僕が艦に乘くまでにするさ」ですつて隨分だわ

「御自分だつて去年までは夢中になつてさわいだくせに……嫂樣がいらしつたもんだからあんなことおつしやつて憎らしいわね」と思ひ切つて言つてのけた。お二人とも何だかくすぐつたい樣な笑顔を見合せられる。それでも漸く和睦が成立つてゝは明後日の午後からと定つたので急に氣忙しく嫂樣と手分して御案内のはがき書いたり電話かけたり、初春早々チンチコ舞をしてしまつた。命から二番目の大事の〳〵の島田をこはすまいと御客用の箱枕の御厄介になることこれで二晩、何だか首筋が痛む樣だ。

あれ〳〵どこかで加留多のよみ聲、床をすべつて南の高窓音なく開けば露滿天に星かげまばら、若き匂ひをたゞよはせて、夜はゆつたりと更けてゆく。

△追　羽　子

朝日の光りは深翠の門松に輝き渡つて若い人の追羽子のこゑ〳〵。門前にひやくわだちの音の絶え間もなく廻禮者のかずは昨日にも劣らない、

あれ程氣をつけた甲斐もなく逆枕がはづれて大事の髪がつぶれちやつたので嫂樣はじめ女中達や兄樣までが大わらひ、口惜しいから「こんな竹皮づゝみなんか重くていやだわ」と負け惜み言ひ〳〵その實少々殘念だつたがマガレットにかへた。ヤケに元結切る拍子に誤つてたばの毛一つまみほどきつてしまつた、こんなにしては迚も束髪には結べまいと思へばいよ〳〵口惜しく、プッツリと切れた毛をつかんでみたが何となくもの足りないので數へはじめる。



これで二百本と思つた時冷い涙がまぶたにあふれたのでこれでも矢ッ張り私は女だと考へながら、それはそのまゝ紙に包んで捨てゝしまつた。

猿まはしが來て内玄關は賑やかだこと、出てみると赤い友禪のお振袖きたお半と、かつら冠つた長右衛門とが今桂川にかゝつた處だとあつて、女中達が面白さうにキャッ〳〵と笑ふ、お猿のこゑにそつくりだ、書生の竹村は

「お孃さん、このモンキー君のしかもお半君の方が煙

草のみますよ、御嬢さんの葉卷に於けると同じく……
…」と反歯を見せてニヤ〳〵笑つた。
でもねえ私去年までの様にお猿のをどりに他愛もなく笑ひくづれる氣にはどうしてもなれないの、これもだん〳〵年をとるせいでせうかしら――あゝどうかして身も魂もとろかしつくす位若々しい血潮を、この五尺二寸の全身に漲してみたくつて!!!
もう〳〵何だかたまらなくなつて立ち上るなり弓をとつて糸も切れよと强くヴアキオリンをこすりはじめた

1、曉寄する新潮の、
　その浪たかく鳴るところ、
四海の闇はかげひそめ
　愉快ならずや僞刼の
　塵にまばゆき光あり、

2、空に無限の座をしめて
　きらめき出づる明星に
刧風夕べ鳴りを止め
　四海の荒び收りて、
　千歳春の歌をきく、

3、みよ紫の雲間より
　希望の光さしそめぬ
十三年のあけぼのを
　彌生が岡の若ざくら
　瑞枝に躍る旭かげ、」

大好きな〳〵この歌を力の限り彈いてみたら漸く重荷おろした様な氣になつたので明日の加留多の御案内かた〴〵御年始をかねて砂土原町（嫂様の生家）にゆく、
嫂様もおいで遊ばせなと云つてもえゝ、でも家持が今つから出歩くこともできませんわなんていやに奥様じみたお口振りばかり、
「まあ嫂様のおませだこと!!」と遂口に出して云つたら、それこそほんとのおませだつて又笑はれた。
輪飾りかけたゴム輪の俥に佛蘭西みやげの派手なバツシヨン、勅題模様の中振袖を斯う重ねて抱車夫の宮が得意の韋駄天ハゲツチヨロケのガタ〳〵俥を音も無

く、、スイと抜く時なんかの心地よさつたら……これもパユテイーと云はれるかも知なれいが全く悪くはないものよ、ねえ、

永岡では昨日伯父様が参内をおすませになるを待つて直ぐ一同は逗子の別荘におでかけださうで召使の他には夏子さん一人が残つてらしつた、それでも松竹梅を活けた十五畳の新座敷、大きな緞子の座蒲団に押しするられてしかも本式に御膳部まで持ち出されたのはいさゝかならずありがた迷惑、夏子さんの居間で女中達相手に二度ばかりトランプしたが皆どうもお上手な先生ばかりでつまらないからよしてしまつた。



雑誌みながら夏子さんが蜜柑の汁を目にはねかして痛い〳〵と泣き出しさうになつたのは大閉口、お相伴だか何たか私もしぶきを引かけられた。

永岡の俥に送られて歸つたのは大路小路の夕闇に、

おたから賣りの聲冴ゆるころ、今宵の初夢は何であらうか……あゝ明日のまどゐの待たるゝ事よ。

△かるた會

今日は樂しいカードパーティー、何だかものにそゝられるかの樣に、そゞろ心も浮き立つて暫くの間もじつとしては居られないわ。

會場は十疊の客間と十疊の書齋の打通し、床には梅の盆栽と福壽草の鉢植を置いてよろづに落ちなくくばられた嫂樣のお心づくしは明るい窓のいろにもよまれる、まろうど待つ間の暫しを御書初めにと私は唐紙を一枚そめた。嫂樣は例の竹柏會仕込ののびやかなのを美しい色紙に何ぼ自惚づよい私でも鷺堂先生直參の嫂樣のと、金釘流の我が筆とを並べて眺める勇氣(?)はなかつた。

つひでに庭先に三脚もち出していろ／＼塗すくつてみたけれど、これも森だか山だかわからないつてさんざん皆に冷かされる、あゝもういや／＼、書筆なんか此のまゝポキッと折つちまはうかしら……御案内の時刻に先つ事正に十六分先登第一にやつて來たのは牛込の大塚さん、パレット片手にとび出した私を見るなりあのチヨツピリびげの生えかゝつた口元で笑ひながら「今日はワイフと相乘で來ましたよ」といふ。

まあ何のこと馬鹿々々しい御自慢のセロを聞かせるつてあの大きなものをわざ／＼連れて來たんですもの「また、おきまりのローマンスでせう？　もう澤山ですわ」とこつちからも強硬に出ると自稱グレート、アーチイスト、一も二も無く凹んでしまつて頭かき／＼敷島を吸ひつけてる、ほんとに罪はない人ね。

華子さんには最初御案內狀に是非旦那樣も御一緒にと云つて上げたので、正直にちやーんと御揃ひでお見えになつた。新型のスプリングコートにしやれたネクタイの若紳士を、氣取つた御召の半コートめした華子さんとが、お並びになるとほんとに好く御似合だけれど御二人ともまだホンの學生あがりのおゝお暖かですことねとお羽織おぬぎになつた華子さんの後姿なんか

黒い御髪に紅薔薇一輪褪紅色のお帯のあたりなどどう見てもマダムどは思へはしない、美しい方つてお得なものねえ、

さて今日のお顔振れは伊井さん、野崎さん龜岡さんなどを初めとして未來の宰相を以て任ずる向ケ岡の諸星、襟にG字の一かたまりチックを匂はせた城北のハイカラ連、兄樣の御連中はどうも餘りお手並の振はない航海科の杉原さん水雷科の保科さんなど天晴海軍大



學の秀才も何も無茶苦茶の大敗北で『今日の戰は濃霧ですつかりしくじりました、どうも天祐もあまりアテにならんですな』なんかつて大しよげよろしく『やアこれは藝術家の御揃ひで……如何です何か一曲伺ませんか』と飛んだ方角へ八つ當りしてるのは砲術科の河邊大尉、

未來のシユベルト、小ラファエルなどの面面もあまりめざましい活動もない、こなた娘子軍はとかへり見れば

遊撃の名手、夏子參謀、守備に妙を得し雪江將軍、目白の森を一人で背負つて立つてる樣なS子將軍の鼻イキもなか／＼に荒い、此の道にかけては嫂樣も勇將、私だつてむざ／＼人後には落ちないつもりだ。

華子さん玉香さん喜久子さんなどいづれも腕にヨリがかゝつてると見えてどうして／＼去年までとは大ちがひ、總勢二十七人が入り亂れての大激戰（といつても別に引たくり合なんて蠻的行爲はしないが）に皆の面は若き血汐にかゞやきわたる。

御馳走はなくともと食堂を開けば白いクロースに匂ふ盛花、ビーアのよろしい方はどうぞ御隨意にとこちらはこちらで御鮨の御箸を動かしてる時、雪江さんが「あの九州辯の早稻田の方ねえ、何だか大山大將みたいな氣がしてなりませんのよ」おつしやつたので大わらひ即ち此處に恭しく秋山さんに對し、元帥閣下の尊稱を捧げ奉つた由來を公表して置く、

夜に入つてからとし子さんがいらつしやつた。

「もつと早く上るんでしたけれど、兄に連れられて玉突に參つてゝ遂こんなに……」と美しい齒を見せてニツコリ、琥珀の御袴胸高に、くさりはわざと寶石入の野暮をさけてなは目も細いプラチナが、御召の衿に一きわはえるそしてほのめく香りはローズ――ほんとにとし子さんは白薔薇ねえ、

嫂樣が手招きなさるまゝに物蔭に立つと

「保科さんがねえ、華子さんのことをいろ／＼おぼしめしの有りさうにおたづねになるもんで私も遂あの御嫂樣の樣に申上げてしまひましたのよ、ですからあなたもそのおつもりで調子を合せといて頂戴ね」とおつしやる。

あゝほんとに――メンバーにも旦那樣だけは安田樣とかいて華子さんの方は元の姓の初森さんとしてあるし、それにあの方の無邪氣な可愛いものごしでは、誰もミセスとは氣づかぬらしいわ。

華子さんにそのよしを告げておめでたうとばかり背中をポンと一つたゝけば

「では私もそのつもりになつて少し安田を妬かしてや

りませうかねえ」なんてすまあしたものネ、、、これぢやア迚も一とほりおごつて頂くだけではすまされないわ。

　追々皆様のかくし藝がはじまる、野崎さんの臺灣入、杉原大尉のマルセイユも久しいものだが龜岡さんの追分節は殊に〳〵振るつてる、女の方々はおすましで何と云つても遊ばさないので私が總てを代表して大塚さんのセロにヴアヰオリンを合奏せた。曲はモザルトのセレナーデ、それでも皆さんが面白かつたと云つて下すつたので何よりの大滿足よ。



　主も客も歡をつくして樂しいまどゐを解いたのはおぼろ小路に小夜更けそむる十一時半ごろ、安田さん御夫婦がお迎への自働車で御歸りになる時の保科さんの顔つきはそれは〳〵實にみもので有つた、嫂様も隨分罪なかたねえ。

　お送りがてら立ち出づれば、戸毎の門松は霜に凍つてお互にかはす、左樣なら失敬のこゑ〳〵は闇に冴えた……。



うれしい正月日記

萩　香

二日

さあいよ／＼保科さんのカルタ會だ。もう暮の中からこの事ばかり思つて胸を躍らせて居たんだから、今日なんぞ朝つからソワ／＼と居ても立つても落つかず何だかくすぐられる様に嬉しくて平日ならおこりつける事にまで、ホヽ、ヽ、と笑つたりする。

無ろん御飯は胸がつまつてゝ食べられない、新聞も身を入れて讀んで居られない、午後三時からとある御招待時間の今までを、まあ何んなに時計ばかしながめたらう。それもだん／＼針が近づくに従ひ不安の念が沸いて現に今もきまりが悪いのとたのしいのとこはいのと嬉しいのがチヤンポンで、一層もつとのばして貰ひ度いような氣もする。ほんとに馬鹿な――では何だつてこんなに待こがれたんだらう。

この氣後れと、かの熱心と、比較に成つたものぢやないのにいざとなると私は乾度かうだ。さうでせう、巳の年の方はみんなさうですよ。わけて貴女なんか十二月生れなんだから。と云つた人があつた。それや事實さうかも知れないわ。だから今日もまた空しく――心ははやつて／＼はやつて居乍ら――定刻を三十分も過ごさして了ひ、えゝ焦つたい。――ではない、ぞく／＼と歯がゆく……えゝ決然起つて突貫の覺悟、下駄をつゝかけて出る。

「あれ、平打が落ちさうだよ。まあ何うしたつて云ふのねエ。」

呆れた樣な母樣のお聲を後に、裾を開いて駈け出し乍らやつとまがり角で止つて、ホヽ、ヽ、今の勢は、と

我ながら可笑しく今度は歌など口吟みつゝ歩く。

御門へふみ入る時にはまたしても後れが出てこゝから逃歸りたいとも思つたがぢつと轟く胸をおしゝづめ、造り聲で玄關にかゝると。

「おゝよく、」と先へ來て居たお優ちやんが出て來て、「さあ〳〵どうぞ……」と小腰をかゞめるあまり眞面目なので平常のやうに笑ひかけもせず、とつたショールと手袋を渡して御座敷へ通されるともう五六人のお客樣、友禪づくめの小さい孃樣だちも嬉々と泉水の邊に長い袂をひるがへして居られる。みんな見知越の方なのでお定りのお目出度を繰り返しつ、まづ〳〵と座ぶとんの上にならべられた。

曳く裳に香のうつりさうな青疊、お床の幅は探幽の筆。大三寳にはお



饒うや〳〵しう、橙やゆづり葉の色も目出度く火鉢に・はねる櫻炭、何を見ても春らしい感がしみ〴〵する。一座は一同孫の話でもてゝ居る。私はちやんと兩手を重ねて澄まして居ると左の丸窓からもるゝ夕陽が横顔をかすめて、のぼせる程あたゝかい。

やゝあつて上手の襖をすうと、お納戸色紋羽二重の羽織着てぬけ出たやうな若奥樣。はつと少し座を退さると、その晴やかな笑顔を私の方へお向けなすつて靜かに御挨拶遊ばす。初對面の私はもう何と言つたやら只ドギマギと禮を返して獨で顔を熱くする。

血色の好い地に薄すりはいて程のよいお丸髷に銀の平打、ふつくりとした優しいお品のいゝ――お年は廿一二、ほんに私が男だつたら早速この奥さまに戀して仕舞ふわ。

二ツ三ツ新聞のお話など出た上、「私一寸御免かふむります……」としとやかにすべり出られる。あとにはぱつと殘つたリ、ーの香、二枚重ねの變り裾をさばく衣擦ザヤ〳〵サヤと。

それからお手料理の御振舞。此處の障子に黒い影法師の寫つた頃は、いはゆる宴酣であつたのだが私は御祝儀だからと強ひられて、仕方なく受けたお盃を持あまして居た。眞實に餘りだわ、とお酌のお優ちやんを白眼めると、おほほゝゝかねてお手並は裁縫場で存じて居りますから。と氣取て笑ふ憎らしさ。例のお屠蘇一件をこゝで敵討とは驚いたわ。

餘興の福引では私銀行の火事と云ふのでお薩のやいたのを頂いた。千早振る神代も聞かず立田川、かはくれないでみをくれるとは、で蜜柑の剥いたのを貰ふた人がある、悋氣な奥様よくふくれると、ゴム風船を取つた嬢さんもある。やがてこれの終るのを待兼たやうに口々に、どうぞ一ツとお優ちやんへの所望、艶な島田を俯むけて辭退する間に早くも用意の三味線は持出された。もとよりもじ〳〵惡遠慮なんかして人に癇癪おこさせる樣なお優ちやんぢやない。でも二ツ三ツおし返してとう〳〵取り上げた。鳥渡指先をなめてポツンポツンと調子を合せ初める。肉附のいゝ手首の絆の

長じゆばんの袖がホラ〳〵こぼれかゝつて上氣した樣な頰、やゝ醉を帶んだ眼、くつきりした額つき、厚化粧の首筋、妬ましい程美しい。奧樣はと見れば、細い金指環をはめた可愛いゝ手を、私と同じ火鉢に翳して俯いた目はぢつとお優ちやんにそゝがれてある。

あゝ一座の注意と視線を一身にあつめて居るお優ちやん、私はこんな事のある度、どれ程口惜しく恥かしい思をするか知れやしない。三味線なんぞ下品なものの樣に有仰つてどうしても習はせて下さらなかつた、亡い父樣が恨みだわ。

長いお得意ものを一ツ、賞讃の中に終へてもうねと笑ひ乍ら仕舞つて了ふと、こゝで小さいお孃さんや若の事なんかばつかり話されるお方達はお暇なすつて、もうのこつたのはうら若い匂があふれて居る人ばかし

さあこれからが私の世界のカルタ、奧樣あんな優しいお顏遊ばして乍らどうして〳〵、むべ山風の嵐よりおそろしいお手並。廿五枚のその持札はまたゝく間嵐ふく三むろの山の紅葉ばのやうに散じ去る。

かくてお優ちやんは二度まで來たお使を先へ歸して了ひ、愉快をつくしての散會は十一時、ランプ片手に送り出されたお玄關を出るや、ゴーッと松の梢を渡つて來た夜風が汗でへばりついた後れ毛をはらう。

「淡路島、通う千鳥の鳴く聲に、」

先へ立つた私が高らかに誦すと、

「いく夜寢醒めぬ須磨の關守、」

とお優ちやんと多田さんが受ける。ほゝゝゝおほほほゝゝはゝゝゝゝと一しきり花やかな笑聲。十日あまりの月に凍てた霜どけ路にカラ〳〵と下駄が妙にかろく當る。

惜しい事に今日のカルタ會は人が少なかつた。從がつて田內さんのに較べたら興味も半にも足らぬ。あゝ今思へば去年は實にたのしかつたんだわ。

「おやもうこゝでお別れでしたね。失禮致しました。」

「や、失敬。」

「否、私こそ。左樣なら。」

ひらり踵を回してさつと門へ飛び込むと、戸を開け

て下すつた母様が肩をすくめて、おゝさぞ寒かつたらうね、つて有仰る。併し私はまだ先刻の——御祝儀の——名ごりか、顔ばかり無性に火熱つてそこへぐたぐた坐りこんだまゝ身動するのもおつくうに成つて仕舞つた。ほほゝゝゝ多田さんは本統に面白い方よ。今丁度お優ちやんと別れてあの日耳曼進軍歌の節おもしろく、亂暴に麥畑をつゝきつて行く後姿が目に見えるやうだわ。ほほゝゝゝ

眼の前を種んな美しい玉が通つて好い氣持、茫としてるのを母様によび覺され急いで着替して床に入る。おゝ冷つこくていゝ、ふつと寢返りを打つ。と今脱ぎ捨てたのを母様が衣桁に掛けた私の友禪の下着が薄ぐらい豆ランプのあかりで馬鹿に派手に見える。

あゝ顔が熱い、風に吹かれて酔の發したのか、もう動悸がひどくつて息苦しくて息苦しくて堪らない。腦もピン〳〵する。あゝ苦しい。

三日

嬉しい〳〵保科さんのカルタ會で昨日は一日夢の様に過ごして了つた。さあ今日は裁縫の先生へ御年始に行かねばならぬ。今まで生徒はみんな元日と定まつて居たけれど、各自に新らしい着物が出來たのに私ばかしが去年のまゝので行きたくもない、それには同じ類のお優ちやん、二人相談の上同輩とは別の日に行きませうと約束した。が明日はもう門松をとつて了ふから厭とも今日行かなければ役目がすまぬ。

でお化粧しやうと鏡に向ふとまあ髪のひどく壞れた事。昨夜は酔つた苦しさにメチャ〳〵に寢たもんだから髷なんか妙な癖をつけて仕舞つた。また母様に叱られる。

絹裾であすこまで歩いたら堪らないから袴のかゝつた銘仙の着物にお召の羽織。ほほゝゝゝこれぢやぬき襟で雪駄でもちやら〳〵鳴らさなくつちやうつらないわ。いつもの様にショールのぐる〳〵まきなんかぢやあ。

お優ちやんを誘つて行くつもりで例の通り遠慮なく枝折戸から庭づたひに居間をのぞくとあら大變、お客


休戦

横、しかも私とも舊友の保田さん、はつと思ふ間に目早く見附つてから障子を開けられる。

仕方ない、私も上りこんで挨拶する。それや操さんの變つた事、鳥渡半年ぶりなのに、一體同じお轉仲間で跳ねくり返つて居た頃には、私と同じく痩せた眞黒な方だつたけれど去年横濱の女子師範へ行かれてからメキ〳〵肉が附いてきめも好く見違へる程綺麗になられた。優しい細面、細い眼には絶えず微笑をたゝえてほんにこの人を春の女神とは小學時代から誰か云ひ出したか、その姿を見その聲を聞いて居れば思はず此方も微笑まれるのである。

乾度今に理想の好教員となられるであらう。

操さんが師範へ入學當時は羨望七分嫉妬三分で村中の評判、私だつてその數には洩れなかつたがもう今ぢや小學教師なんか頼まれたつて厭

この操さんもあたら女の春を敎育と云ふおほひで包んで、たふとい盛春の四年間を所謂馬車馬的に進まれるのか、と思へば鳥渡冷笑の念も沸く。

現に私等はかうして高髷に簪やまきゑをかざり、振にはもみうらをこぼして居るのに年増めいた花月卷。袖のみじかい紡績の綿入、裾高なメリンス袴、わざと人目に附かぬ樣な服裝。あゝ十七といふ妙齡が何時までつゞく。否、何度ある。私は出來る時分に出來るだけ派手もしようし人をも戀はう。二十となればもう花はおとろへ實を結ぶ。ほんのわづかな間――身も意志も自由で色あり香あり蜜ある花やかな今、あだに過どして何うならう。

私はこんな事思つて操さんを見る。操さんはすつかり女敎員化した口ぶりで種々話される。お優ちやんは思切つた事云つてませ返す。

たゞこれ學問專一といふ操さん、高嶺の花を氣取つて居るお優ちやん、乙女の血のみなぎつて居る私、共にラケット振つて二三をさけんだテニス場裡の當年の面影あともなく、思はぬ會合に時ならぬ花を咲かせて晝過ぐるまで腰を立てなかつたが、お優ちやんとは外に話しもあるだらうと氣を利かして引とめらるゝのを

無理に歸つて來たのが一時半、御飯を食べてから先生の許へ行く、大層喜ばれてさあお上りなさいお上りなさいと引上げられ、私はお玄關だけでお暇する氣で居たのに御叮嚀な塗膳五重の椀の定紋付、お屠蘇まで進められ御惣領の勝代樣、今日は白いものをお施こし御髪に白のリボンさへ加へて出て居らつしやる。

昨日花やかな保科さんの若奥樣を見て、今日はこゝにいたづらに女の春老かした勝代樣と相對する。

廿三と言へば女の盛りではあらうがもう處女時代は過ぎて居る。間もなく老嬢の部にぞくするのだ。

世人がその逝くを悲しむ春や散るを惜しむ花はまた年毎にめぐつて來るが、一度去つたら二度と歸らぬ人生一代の花たる青春の時代を、こんな片田舍に埋まれて勝代樣御自分では何ともお思なさらぬのであらうか私がお針に通ひ始めて足掛三年、長の月日を一日の如く下女代りに甘んじて厭な顏一度なすつた事もない。

これがおとなしいと言ふのか不知、そんならおとなしいと云ふのは理想も趣味もないつまらぬ平凡な女……なんだわ。まつたく勝代樣のふくよかな胸には理想の花が咲いてないのかしら。名譽心が燃えてないのかしら。だがこんな方が未來の良妻賢母となるのかも知れない、とにかく私なんかには半日の眞似も出來ないわ。

お茶を頂き乍ら先生や勝代樣と同輩のうはさを始めつい長居して夕方歸つた。留守の間に年始狀が十二三通。片つぱしから名前だけ見て行くと沼川さんから。あはてゝ取り上げてキツスした。あゝ懷かしい……今年は御歸省なすつたんださうでお故郷の繪ハガキに去年は樂しかつたが、などゝ書いておよこし成すつた本統に去年は樂しかつたんだわ。が今はいたづらに悲しい思出となるばかりである。あゝ和さん何處に何んな年を迎へて被居るだらう。あの流るゝ樣な月下の道を沼川さんなんかに送つて頂いた時のカルタ會が送別の……否最後のにならうとは神ならぬ御主人役の和さんはもとより露ほども氣附かなかつたがあれから間もなく東京へ行つてお了ひなすつて……もし今年鵠沼に

いらしたならどれ程盛大な會が開かれたであらう。私は今一度熊谷さんと花々しい勝負がして見たい。悲しささびしさ人戀しさに思はずホロ〳〵と涙がつたふて胸がいたくなつた。
夜は床の中で新年號の女學世界を讀む。

測らざりき。内ポケットの奥深く、世に時めきし丸髷姿の、とこしへに笑を含んでかくれたりとは。
の邊が妙に胸をゑぐつて幾度となう繰り返す。あゝ
世に時めきし丸髷姿のとこしへに……

中等社會の生活難

▲日本の人口は一年に五十萬づゝ增加する、即ち百人に就き一人宛殖ゑる勘定だ、これは獨り日本ばかりではない、獨逸の如き、英國の如き、皆著しく增加しつゝある、佛蘭西ですらも只率が少い丈で、年々殖ゑて行く。
▲世界の人口が此調子で殖ゑると、百五十年の後には、地球上に產出する食物では、到底足らぬ、今迄一升食つて居た者は八合に減じ、七人子供を產んだ者は五人位に止め置かればならぬ。
▲理窟ではない、現に此徵候は表はれて居る、之を思ふと、文明が極點に達すれば、再び野蠻の狀態に立歸るものらしい、今日祕密に行はれ、而かも益々增加せんとしつゝある墮胎や、生兒節滅の如きは、即ち野蠻の行爲ではあるまいか、
▲野蠻の行爲でも、脊に腹は代へられぬから、仕方なしに之を行ふのである、但し上流社會は此限りにあらず、下等社會も左まで痛痒を感ぜぬ、何故なれば、上流社會は言はずもがな、下等社會に在ては、生れた子供は、幾ら多くとも、手足が利ける樣になると、直ぐ働かせられて賃金を得る、印ち器械の代りに使はれるから却つて利益になる、
▲唯だ一番困るのが、中等社會だ二十歲にもなつて一文の金にもならぬ者は中等社會の子弟である、永く親の脛を嚙るほど親は瘦せる、自分一人ならまだ可いが、兄弟が澤山あつては、親の辛らさが思ひやらるゝ、
▲勿論親は子供の爲めには、骨身を惜むまいけれども、斯くして不完全に育つた子供は營養不良、多くは低能兒、激げしき競爭場裡に立ち得さうもない、甚しきは家庭の厄介者となる、於是育てられる丈の子供を產んで、他は何とかせねばならぬ樣になるのも理窟は兎も角、實際止を得ない文明の弊である、
▲之に伴うて必然起るべきは結婚難、反比例に密淫賣繁昌、病毒の蔓延、恐しい事が續々と起つて來る、まあ御互にあんまり澤山子供を作らぬ事だ、之が結婚難を救ふ根本の策である、（男爵高木兼寬氏談片）

各地風俗の變遷

飛騨の山里の冬籠り

水仙女

飛騨へ行くと、お猿を友達にしてゐるんだつて幼少時聞いてゐたが、其飛騨にも、住む樣になつたねえ」、とはよく炬燵の中で、母が述懐で、ありました。實際今でも、都の方の中には、さう思召方も、ありませう。然し只今では、なか／＼開けたものです。

あの鵜飼で名高い、岐阜の市から、東北三十三里、其處こそ、飛騨第一の、都會高山です。さて、其三十餘里の飛騨街道はと、申ますと、仰げば峨々として、聳ゆる山又山、而も幾百年を經たかと思ふ喬木が、天を摩して鬱蒼と茂り、颪に散り來る葉は、これ直徑一尺もあらうと云ふ、ほーの木の葉、俯せば、飛騨川の上流、奇岩怪石に碎くる浪の花は、宛然雪の樣、其間を、靜に車やる時は、眞に天地の景と、物語る心地がします、然し其淋しい事つたら、わけて、中山七里なんか、一日の中に馱馬引く馬子の、一人二人に、會ふか、會はぬか位、幾尋の谷の、彼方此方の大木に、藤づるを結び付て、フガウ渡を掛けた所なぞ見ると、つひ心細くなりますね、しかし、高山町へ入ると、是は又意外に繁華、こんな山奥に、よくと驚かれます、誠に吹き至らぬ所なき、文明の風は、この重疊たる千山萬嶽をも越えて來て、今は電信電燈も出來、鍛冶橋の傍には、アークの光無月の夜も、清き流に銀波を漂せてゐます、こゝ高山町の人口は、左樣ですね、二萬もありませう、戶數は四千からです、地勢をいへば、四方山に圍れた、盆の樣な平地、宮川と云ふ、清流、（下流は神通川となる者）は、町の中を西流して、河東には櫻さく城山を始、寺院の屋根の散見する小山が連つて、是を東山と呼ぶ、なぞは誠に小京都の名に背かぬ佳境です、況して遙く彼方には、夏猶寒き越の白山が、雲表に聳えて、清楚たる姿、すが／＼しう眺めさせるのですもの。

何しろ海拔千八百六十尺と云ふのですから、避暑にはもつて來い、夏の盛は夜店なども出て、なか／＼の賑ひ、西洋婦人が、こゝ特産の、紀州みかん程の、林檎の燈の光に、色競へるを、買つて居るなんか、開けてゐませう、一體材木なんか、幾何も有るんですからどこの家も、カツタリと出來てゐます、店なんかも、隨分立派なものが有つて、流行品はどし／＼輸入されますから、だん／＼繁華になると共に、生活程度も、隨分高まりつゝある樣です、「是で汽車でも通じたら」と、申ますと、古老は「いや惡い者が入り込んで、いけません、今でも昔の樣に、なく、せいたくで、いかんだすもなあ、」との事、やつぱり、地勢の樣な狹い氣性が見えますね。

△風俗

此處で、珍らしいのは、盆踊、涼風そよぐ、九月の初頃、廣い街に掛行燈、つり行燈、華かに、點して、番頭小僧娘さん、内儀から大店の主人まで一緒になつて、一種面白い手拍子足拍子揃へて、夜更くるまで、踊ります、恥しいのか盛装した娘樣が、布の袋の、面幅に、首まで隱して踊る樣の可笑さ、見る私等は、例だつまらぬ、と思ふけど、踊つてる御當人は又なく嬉しいのださうです、これも近時は、追々廢られると聞きましたが……。食物には割に困難しませんが、まあ驚いたのは、香の物、「此の邊の漬物桶は、床の間に、かざつても宜いね、」なんて、母が申ましたが、それは澁塗の大した物、其に漬る材料は、多く蕪菁なんですが、左樣、丁度十月頃。少々川水が冷く感じる時節が來ますと、川の兩岸此處にも彼處にも、蕪菁の山を積んで、女中やら日傭やらが、終日腰を据て、二日も三日も、せつせと、洗つてます、まあたんと漬物する處ですつたら、「まあ、あんなに冬のおかずにや冷いがねつて申ます」と「なあに冷かござんせん、ほー葉に包んで、爐で焼ながら食べます、それや美味ござんすぞな冬中寒いに副食物拵面倒だすもな、」と、お香の物を燒いて食べるなんて、初めて聞いた。一體寒國の人は不精なものよ、私達なら、朝晩炊かうと云ふ處を、此邊

の人は、多になると、一度にうんとたいて、三日も四日もお茶漬で、平氣。お茶漬と香物嫌な人は、飛騨の人ぢやないなんて、すましてます。だから顔が、青白いのかしら、あらまあ左樣ぢやありませんわね、やつぱりかやうな雪國には、私見た樣な、色黒は生れないんでせう、保護色といふでもありますまいが、だが、其香の物は全く上手に漬いてますね、蕪菁の皮を綺麗にむいて、漬ける時紫蘇を少し入れるんださうで、薄桃色のそれは、美的なもの、味も大變佳良のですよ。土地が土地ですから、魚は少い樣なものゝ、それでも川から鮭や鱒が獲れますし、北國から、烏賊なぞが、澤山來ます。

九月の、八幡樣のお祭には、すべて鱒のお刺身、あの木目のついた樣な、赤い肉を、大きく盛つた處は、きれいですこと、高山の人は、非常に珍重して、味ひますが、少しも條蟲なんか、生きませんが、他から來た人は、一遍で直です、妙ですねえ。秋には栗がたんと獲れます、それが細い美味いんです事。其代り、松茸は御座いませんから、しめじだけの味は知れども松茸の風味を解する人は、少いでせう。又竹藪なんてものは、更に有りませんから、筍といへば、熊笹の搾程の物しかありません。物干竿なんかも皆木、竹の皮の役目は、皆朴葉が勤めて居ります。

△冬籠

冬になりますと、何うも、寒いこと、何でも、寒暖計が、華氏の十三度まで、下つたと覺てますが。もう十一月頃からチラ〳〵始めて、三月頃までといふもの、積るが上に降り重つて、見渡す限白皚々、それが凍つて道なんか、鏡の樣、下手に私共が出樣ものなら、忽ちスッテンコロリ、背骨を碎くる計、割物なぞ持つて歩けやしません、然し流石土地の人は、婦人でも、子供でも、皆社祚の樣な、チャンチャンを上に着て、其鏡の樣な道の上を草履の裏に竹の半分に割つた物なぞつけて、スーツと二町も、三町も滑つては、止り、止つては亦滑る、其巧さ、學校に於ける、冬の遊戯は、すべて、これ廣い運動場に、大勢の子供が、頭巾眞深に

懐手で、湯氣の樣な息を爲い〲、スー〲滑りくらしてゐる處など、ほんに都の君達に、おめにかけたい、光景、それで他から來た者の樣な、滑りの出來ぬ者のためには、釘木履と、申て、日和の齒に、釘のうつたのが御座います。

朝起きて見ると、三四尺も有らうといふ、恐しい垂氷が、軒一ぱい下つて、硝子戸は、皆、楓の樣な形に凍つてゐます、濡れた手で、庖丁の樣な、金物持たうものなら、手に附着てしまう、其氣味惡さつたら。それで、もうこんな時には朝から晩まで大きな爐にどんどん火を焚いて炬燵にもぐつてゐるより仕方がないのです、え、薪ですか、それや御安價御ざいますね座敷に寢てゐて御飯のたける樣な大きな薪で、これは冬道が凍ると山奥の婦女が橇といふ者に積んで朝のうち引きもきらず出て來ます、綿入の上へ淺黄の帷子着て手拭襷甲斐々々しい姿は京の大原女を少し安つぽくしたと申ませうか、斯樣に却て寒い間は橇で滑るといふ運搬に骨が折れぬからお安いのでせう、まあ寒い代り薪炭と綿とが安いのでもてるんですねお正月だつて羽根の音一つ致しません仕方がない炬燵の中で寢正月、賑な東京を夢見てるばかり、こんな風で三月まで冬眠の姿、漸う雪消の風が吹き初めると、さあぬかるみのひどいこと、四月中頃になると葉の方が一足お先へ出た梅や櫻や桃や名無小草に至るまで皆一時に芳を競ひ艶を爭ふといつた樣、あちらにもこちらにも祭禮が初まつて毎日お獅子が表を通るので御座います、櫻の名所に城山公園霞たなびく邊、まばらな綠は白雲の花をつづゝて宮川の清流に對する處嵐山をも忍ばせる佳景況して現時は廣瀬中佐の銅像も出來まして、高山からは、ちと離れますが、珍らしい眺は、千光寺の、霧の海、天氣の好い朝、此處より望めば眼界すべて、これ霧の海、一河の碧流其中に漲るも面白く、霧はれ渡れば、高き低き山々は、宛然一時に千島百島の湧き出でし如く露れ、霧はなびいて、水の如く流るゝ其奇景、言葉につくせぬ眺です、其外轉月の岡も、一寸聞えた所、かの「小紫たなびく雲をしるべにて、位の山の峰

を尋ねん」、と拾遺にものせられた、一位材もて名高い位山は高山から一里の處に御ざいます、それよりも、高山での、見物は天王、八幡の、祭禮、何百圓かを投じて拵へた、それは立派な、屋臺、常には倉にちやんと仕舞つてあるのを、二十幾つといふ、程引出して、人は裃着て、市の中を引き歩くのです、夜になると



其屋臺を、一しよに集めて萬燈にかざつた處、慥に初めて見るものをして、アッといはせますね。

△宗　教

地勢の加減か、宗教心は至つて強く、多くは門徒のかたまりで、子供でも、學校の復習を忘れて、お經のけいこ、本願寺の御連枝でも、御出るものなら、皆土下座で、隨喜の涙に、むせぶのでせ

う、お賽錢なげる向きも少なくありません、愛國婦人會入會奬勵なぞにも、これらを利用すると、其効極めて、著しいものです、從つて、ヤソの振ないこと、西洋婦人の宣敎師が、廿年も布教に從事してゐて、やつと、五六人の信者とは、推して知るべしですね、言葉も隨分妙で、アクセントは、皆異ふし、何でも、「つまらぬ、」とか、「よわつた」、とか「きのどく」なんて、事をひつくるめて「怖いこつちや」と、いひます、進物なぞもつて行くと、「まあうたてい事やなあ、」なんと。

名物としては、先は位山の一位細工、春慶塗、飛驒紬、眞綿、一位細工は、古笏に用ゐられた、物、今は、種々美術的製作品が出來ます、春慶塗も、生地に、檜の柾の上々を使つて、塗り堅く、膳盆箪笥いろ〳〵あります。三島豆は、老人にもよい、土產としては、好適物、まあこんなものですねえ、ひだも高山邊は、こんな風ですが、これから二十里も、入つて、白川郷――昔平家の、落武者が、隱れたといふ、處へ行きますと、今もいろ〳〵奇習が傳つて居るさうで、驚く勿れ、一家族が三四十人から四五十人、親子兄弟甥姪から從兄弟、はとこ、又いとこまで、どつちやに住んで、其中の嫡系の、家長夫婦の、指揮の許に、日夜營々として、つとめて、敢て、分家獨立なんぞせず、空しく、素樸な、山野の間に、單調な生活をして一生を終るのです、勿論この邊は、米は採れませんから、皆ひえの、御飯、パラ〳〵して、箸になんか、掛らぬさうで、從而、米の貴いこと、愈々今死ぬといふ時、かぞへる程の、米粒を、與へるのだとの事、ほんとに同じ日本とも思へぬぢやありませんか、こんな、人は田舍者が、東京見物に、出るより以上の思で、一生に一度か、二度、高山の町へ出て、其文明に、驚いて歸るのださうで、それも見ぬものが、多いとの事です。



名流婦人の趣味と生活

本誌は嚢に當今名流の方々へ左に掲ぐる日常の心得御嗜好等の事柄を御伺申上ましたところ、皆様方は御繁忙の御場合をも厭はせ給はず一々御回答下されましたのは誠に感謝いたす次第でございます。今その御回答順によりまして一々御披露いたす事に致ました。

1、平常最も信仰し給へる古今の人物
2、日常最も感心し給へる金言又は名句
3、艱難に處するの覺悟
4、富貴に處するの心得
5、幼年の折最も樂しくおはせし事柄
6、毎日のお仕事
7、日常の御嗜好（讀書、詠歌、遊藝、旅行其他の趣味）
8、お好みの食品
9、お買物の御用（呉服、小間物、日用食品等）
10、御氣象の一端

▲

三輪田女學校長　三輪田眞佐子

（一）紫式部、曹大家、クヰン、ヴクトリア
（二）自ら歎かず、辛酸を嘗め盡して心鐵の如し、己の欲せざるところ人に施す勿れ
（三）艱難を常事と覺悟せば苦痛を感せず
（四）富貴に處して淫することなく又奢ることなきこそ望ましけれ
（五）讀書と詠歌及び讃等に興味を有せり
（六）教授、裁縫及び臺所用にて日々を忙しく送れり
（七）讀書と郊外散歩位の外嗜好なし
（八）嫌の食品なし何物につけ美味を感ず

(九)電話にて呼び寄る事もあり又商店に行く事もあり
(十)高潔を好み正直を愛す

△　本多庸一氏夫人　本多ていて子

(一)光明皇后、マダムフライ、細川忠興夫人、松下禪尼、フロンレスナイチンゲール、木村重成の妻
(二)人は萬物の長なり、義は國を尊とくし罪は民を恥かしむ、愛は凡ての德の首なり、己の事のみを思はず他人の事をも顧みよ
(三)艱難は心身を試錬する砥石にして神の與へ玉ふ好機と思ひ、愼重堅忍勇氣を以て戰ふ者なり。病を知らぬ者は病人に同情を拂ひ得ぬ如く、艱難に逢はざる者は他人に同情を持つこと薄きものにて人としての尊き德を缺くと云ふべし、故に艱難は天の恩寵と申すべし。
(四)驕奢に溺れず、怠惰に陷らず、貧窮者を憫れむ事と社會の公益に盡さん心得なり
(五)鬼ゴッコ、栗や梨の木に登りて實を振ひ落すこと犬猫を抱く事、年寄の話を傍聽すること、諳誦ものの競爭、古詩の高吟
(六)おしめ洗と針仕事は極つた仕事に候。洗濯する事もあり、話の草稿を書く事書面を認むる事もあり、婦風會母の會慈善會等に出席。
(七)歷史的の書を讀み世の隆替を考ふること。時に和歌を考へ、或は歌集を讀むも面白く感ず
(八)赤飯と餅菓子は好物なり、平素は味噌汁、魚肉、野菜類にて一食一菜制なり
(九)衣服物は柄と地質の丈夫なるを好む、小間物は趣味も撰擇もなし、必要に依り可成廉價なるものを買ふ、食品は滋養を第一、味を第二、價を第三とす
(十)何事も自分の主義本領を失はざる樣に致度思ふ然し人に不快を與へざる樣注意すること大切なり、竹の風に搖かされ、雪に倒さるゝも其直なる姿を失はぬ如くありたし

△　女子商業學校長　嘉悅孝子

(一)天照大神。ヴヰクトリア女皇。ジョセフイン皇后

(二)曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳而不習乎、未若貧而樂、富而好禮者也。
王何必曰利、亦有仁義而已矣。
疾風怒雨禽鳥戚戚、霽日光風草木欣欣、可見天地不可一日無和氣、人心不可一日無喜神、(菜根譚)
日本の女性を知らんと欲せば先づ大日靈貴命を知らざるべからず、大日靈貴命は日本女性の標本なり日本の女性は優しかるべし、然れども意氣地なきを許さず、日本の女性は强かるべし、しかれども暴なるを許さず優しくて强きは是れ日本女性の本領なり

(三)艱難の味は大分なめつくしたる此身、正しき道だにたどり居たらんにはなどか花咲く春のなからめやとの確信の下に、うき事のなほ此上につもれかし限りある身の力ためさん、と何程の艱難にても大なる希望を以てよろこんでうくる覺悟に候まかり違つた所でおさんどん、その時は日本一のおさんどんになつて見やうと存じ候

(四)萬一の僥倖で富貴の身とならば世の中に才能ありて埋まれ居る女子達を拾ひ集め學問さして見度、そして極々質素なる生活をいたし見度と存じ候

(五)今も大すきに候が子供の時にもお正月の歌留多遊びが何よりの樂しみに候ひし

(六)朝おきると直に學校の雜巾がけ、手習、學校の敎授位に候裁縫は夏冬の休み中の仕事に候

(七)讀む事が好きに候

(八)さつぱりした日本料理、鰻の蒲燒、太刀魚、かまぼこ等は大好物に候、其他果實何でも大好物に候

(九)吳服もの染物はきらいではなく、人のものまでよく買ひ申候、その他器具食器の買物大好きに候

(十)くす〳〵するのが大嫌い、よく男であつたらと父母からも申され候故、まづ勝氣の方かと存じ候

海老名彈正氏夫人　海老名　美也子

△

(一)基督

(二)汝心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し

主なる汝の神を愛すべし、又己の如く隣を愛すべし
(三)天命を信じて取る可き方をとり行く可き道を行く然る時は自ら活路開けて終に艱難も自己の爲となる
(四)富貴は社會の爲に利用し、苟も己一個の娯樂贅澤の爲私用せざる事
(五)讀書、裁縫、お年玉、まりつき
(六)家事裁縫、文通應接、敎會、婦人會等に出席
(七)裁縫、讀書
(八)格別の嗜好食品なし、強て申さば鹽煎餅位のもの
(十)眞面目

▲

男爵石黒忠悳氏夫人　石黒久賀子

(一)孔子樣
(二)昔し育ちの私故に女大學を何よりわかり易く金言として遵奉いたし居候
(三)軍人の妻たる者は昔の武士の妻や女子の事を思ひ出したとへば甲州のおあん物語などの事思ひて常に艱難はあり勝ちの事と覺悟仕居候
(四)此身富貴と申すに御座無候まゝ別に富貴の覺悟とて御座無候いつも〳〵昔し故郷にて良人の手助けとなり多くの書生など扱ひ自ら日々の家事を執りし事をいつもの心得と致居候
(五)父母の元にて年寄りたる祖父の昔話しを承りし事や冬は雪の中に山兎の躍るを追ふたり雪消には田間に若なつみし事など樂しく覺候
(六)日々家内の掃除飾り付け又は家族の衣服や世話良人の食物や來客の應接などの外仕事として無御座候
(七)嗜好と申して何もなく毎朝々々送り來る新聞を讀む事などいと樂しく存候
(八)おいしきものは何でも喜びていたゞき候
(九)有餘る家計ではなく良人が積年の勤勞に對し皇室や國家からの恩給にて暮し候一家なれば買物とて日用必要品の外は不申致候
(十)自分の氣象が如此別に是と可申上程の事無御座候

▲ 文學博士三宅雄二郎氏夫人　三宅龍子

(一)古今の人博く存じ居候にも御座なく候へど大かたの人を一部分は信仰いたし候故申たつるとあまり澤山に相成候

(二)己れの欲する所之を人に施せ、己れの欲せざる所之を人に施す勿れ

(三)もしかゝる場合には心しづかに自分のなしうべきよきことを盡すべく

(四)もしかゝる場合にはわが身の幸福なるものならば成べく他にも益すべくわかつべく

(五)夏の夕涼臺にて亡兄と従弟(田邊工學博士)と後園の枝豆など食しつゝかたりしこと

(六)きまりたることなく雜用

(七)讀書、詠歌、遊藝、旅行、園藝、手藝、何にても趣味をもち候

(八)あまりに好惡の念なく何にても普通人の甘しといふものは甘しく存候

(九)御手遊類はほしとおもひ候事御座候他に買物につきては自身の欲するものは御座なく候

(十)自分はさりとも存じ居不申候へど人は慈愛に富むなどうわさいたし候由

▲ 與謝野晶子

(一)特に誰ぞと申す程はつきりと心に上り候人は無く候古今の名ある人々は勿論世に數へられぬ末々の人達の言行にも夫々面白き所のあるやうに存じ候

(二)是も同様に候猶古來の格言など申す世に行き渡り候言葉よりも日常見聞致候實際生活の上に身にしむ言葉多き樣に存候先年郷里より受取り候「チチキトク」と云ふ電報等は最も私を教へ候處深く候と存じ居り候。

(三)艱難は何よりも嫌ひに候。如何なる境遇に在りても樂みを求めたと存じ居り候。若き日に人を戀ふるは上もなき樂みに候。又聊かながら文學の片はしにたづさはり候身は、空想のよろこび、製作の樂みに耽り候ことを得候へば、衣食住の困難を忘れ得る場合も多く候。併し人並すぐれて貧しきことを苦に致し候も亦文學を知りし故に候。

(四)勿論富貴の家に人とならざりしを恨めしく思ひ候、貧しきためには一生の過半を餘計なる無益なることに費さればならず候。猶私は當今の富貴なる家の貴夫人令孃に文學趣味の淺きを惜み候。此點に於て私の羨しく存じ候は寛弘長保時代の貴族の女子に候。和泉式部、紫式部清少納言などにかしづかれたる藤原氏の姫が羨しく候。

(五)幼き日の樂みはと問はれて、悲しき思出のみ浮び候。何一つ他の家の娘達の如く娯らしく育てられざりし私は、正月、節句、祭の物見、寺の供養などの日にも、ろくろく髪もあげず着替もせず、途に人のさざめき、鐘の音などを聞きて、暗き物蔭に親に忍びて目をうるませ居りしのみに候。十二三の頃より歴史と文學の書物を盗むやうにして讀み候を何よりの樂みと致し候ひき。

(六)文學の方の書きもの、五人の子を養ひ、新聞雜誌の歌の撰、來客の應接、此等のために忙しく暮し居り候。小兒の交代に病氣を致し候ため、介抱に疲れ睡眠の不足致し候が苦しく候。縫物も大抵自身にて致し候

(七)是は女の身に取りて嗜好と云はんより命に候べし。次には讀書。中にも文學と歴史とに關するもの。近頃文學にては小説を多く讀み候。歴史は久米邦武先生の御著述より最多く益を受け居り候。先生の平安朝史の出で候ことを待ち兼れ候。次には歌を詠み候こと。人戀しき時に詠み出でしが癖となりて思ひとまり難く候。私は議論などをなして歌を詠む人を好まず候。歌は涙の如くせきあへず出づるをよしと思ひ候。又次には我兒。これを嗜好の中に入れ候もいかゞなれど、五人の子の中にも好き嫌ひあれば、子の愛も嗜好の如きものに候はずや。長男を最もかわゆく思ひ候

(八)野菜類を好み候。又蒸菓子の類を食後に戴き候ことも。併し食物のえりごのみなどを致す程の身分に無之、常にあるがまゝに任せ居り候

(九)申上ぐる程の事も無く候。若し出來候ことならば三越、白木の四季の賣出しに必ず參りたく候。世の親達、おほかたの男達に告ぐ。女にはよき衣を着せ給ふべきものなり

(十)打見のみにあらず、心にも醜き所多しと知り候。そを掩はんと力め候が女のならはしに候。この御答はむつかしく候。たゞ愛憎の心はげしく、人に對しては更なり、我に對しても極端にものを果敢なみ、又極端に思ひあがりも致し候と申すにとゞめ候

▲

佐々木信綱氏夫人　佐々木雪子

(一)橘姫命、大葉子、松下禪尼
(二)かつて夫より聞きて、深くわが胸にゑりつけ候は左の數首にて候。

（萬葉集）
我せこは物なおもほし事しあらば火にも水にも我なけなくに
（萬葉集）
君なくばなど身にそはむ櫛笥なるつげのを櫛もとらむと思はず
（古今集）
そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたて
（頼政集）
み山木のその梢ともわかざりし櫻は花にあらはれにけり
（行誡上人集）
法の海よしいかばり深くとも汲みほす迄は汲まむとぞ思ふ

(三)撓まざる精神もて、あくまで奮闘せむ考に候
(四)望みて能はざる事、考へ候こともなく候
(五)佛蘭西に在りし時、わが誕生日に小宴を催ほしあるじまうけに、裾模樣着て坐を出でし時に候ひき。眞珠の細工せしブローチ、さまぐ\の裝飾せし刺繡箱など人々より贈られし、今もなつかしき紀念に候
(六)來客の應接、ひまぐ\の讀書、子供等の復習、又此頃末の子の乳母がはり、牛乳の世話等重に致居候
(七)子供等伴なひ郊外散步、秋の夜の讀書
(八)肉類を好み候。
(九)これと取立て申す程のものなく候
(十)わが家、わが身の立場を常に顧べく心がけ居候

▲

大藏省專賣局部長濱口雄幸氏夫人　濱口夏子

(一)山内一豊公夫人、ジョセフヰン
(二)別にこれなく候
(三)平素より華美贅澤をつゝしみ、むれと質素を心掛け居候へば貧に處するの覺悟は、いと易きことなるべきか其のほかあまり艱難の經驗は無く候へども其方の、修養は日常怠らずいたし居候
(四)別に飽食暖衣を望まず候も他日もし富貴の中を得ることもあらば、あまたの貧者を世話いたし金なくて志を得ざる有爲の青年のために各々其の志を伸べしむれば、いかばかりかうれしからめと存候
(五)郷里なる小學校在學中身體虚弱の故を以て兩親の注意により一たび休學せしめられ、凡一ヶ年の後健康恢復して再び復校せしとき、

親族其他知己の人より、色々の珍ら敷草花の種子をもらひ來りみづから花壇をしつらへ培養せしこと

(六)近來はとかく健康すぐれず候ため、別に仕事もはかばかしく出來候はれど、元來蒲柳と六人の子供の世話方とにとりまぎれ餘の仕事にたづさはる餘暇とてはこれなきからだに御座候

(七)別に詠歌、謠曲、旅行等の趣味無之、讀書と瞑想に耽ることゝが唯一の嗜好に有之、謠曲は最も好まざるところに有之候とりわけて芝居寄席等多數の人の込合ふ場所には立寄るだに心地よからず候

(八)別に食品の好惡はこれなく、田舍より地方の產物など取寄せて樂しみ居候總じて濃厚なるものよりも淡泊なるもの、西洋料理よりは日本料理肉類よりは野菜類がこのもしく候、水菓子の類は殊更よろしく候

(九)三越白木屋等別に定まれる取りつけの家とては無之、所謂行きあたり次第其時々の都合により買物を調ふる流儀に候

(十)友人知己の方々の御批評はさまざまなるべし

▲

櫻井女塾長　櫻井ちか子

(一)我邦史上の人物としては身を殺して正道を踏みたる平の重盛、和氣淸麿等を崇信す

(二)己れ人にせられんと欲する事は又人にも其如くせよ。滿足は自然の富なり。自信は成功の秘訣。右等は常に愛誦する所なり。

(三)萬難は凡て天父の命ずる處と信じ而して現在の境遇に滿足し以て奮勵努力正道を辿つて自己の本分を盡すの覺悟

(四)衣食あらば以て足れりとし餘力の許す範圍に從ふて他の匱乏を賑恤し善行以て喜ぶ者と共に喜び哀む者と共に哀まん事を心懸く

(五)我が生いたちし土筆ケ岡の若草匂ふほとりに遊び或は古川端の小流れに入りて海老小魚など漁りし折の樂しさは他に比すべきものあらざりき

(六)子弟の訓育、家事の整理、塾生の監督等を重なるものとす

(七)新智識を得て、新事業を企だてる事に趣味を有し常に考案默想するの外に特殊の嗜好なし

(八)和洋の何れを問はず其料理の宜きを得たる衛生に適ふものを好む

(九)日常入用品の外には用なし

(十)一言にして云へば純江戸子とでも申すべし

▲

子爵小笠原長生氏夫人　小笠原秀子

(一)日蓮上人、身延山第八十八世日良上人
(二)女人となることはものに従て物をしたがへる身なり夫楽しくば妻も栄ふべし(御遺文兄弟抄)
我れ身命を愛せず只無上道を惜しむ(法華経勧持品)
三界は安き事なし猶火宅の如し衆苦充満して甚だ怖畏すべし常に生老病死の憂患あり斯の如き等の火熾然として止まず如来は既に三界の火宅をなし寂然として閑居し林野に安處せり今此三界は皆是我が有なり其中の衆生は悉く是我子なり然かも今此處は諸々の患難多し只我一人能救護をなす。法華経譬諭品
(三)右の金言に従ひて静に事を處す心得に候
(四)おどりをつゝしむ
(五)記すべき事なし
(六)主人出入の世話及子供等の世話裁縫訪問等
(七)読書
(八)すし、天ぷら、洋食、うなぎ等
(九)松屋呉服店、伊勢屋其他櫻屋小間物店

▲

小説家　瀬沼夏葉

(一)耶蘇基督
(二)求めよ然らば汝等に與へられん。尋ねよ然らば遇はん。門を叩けよ、然らば汝等の爲に啓かれん
(三)忍耐
(四)まだつひ考へませんでした
(五)お伽話や、史談や、怪談をきくこと
(六)空想に耽つたり。子供の世話をやいたり。病氣をしたり。怠けたりしてゐます
(七)旅行も好きです、ピヤノを彈くのも、唱歌を歌ふのも好きです
(八)バタと、肉と、甘い菓子
(九)着物を買ふのが最も好き

(十)剛情で、癇癪持で、泣蟲

△

酒匂常彦氏母堂　酒匂治子

(一)男ならば德川家康、女ならば孟子の母
(二)忍耐、忠孝、勤勉
(三)心を靜め、よく考へ、精々仕事にはげみ、賃仕事も辭し不申の考へに候
(四)富貴に處しては貧賤に行ふされど住居衣服、小ざつぱりとして慈善などは好んでしたく思ひ候
(六)神靈のお守、墓參、又體の爲め庭掃除、裁縫など
(七)日々子供の事に逐はれ乍ら新聞を讀み又造花など
(八)うなぎと鮪のさしみが何よりの好物に候
(十)づる〱としだらなきは嫌に候　確かりとして氣のきいたのが好きに候

△

日向輝武氏夫人　日向きむ子

(一)佐倉宗五郎日蓮上人、奈翁豐臣秀吉楠　正成大石良雄神功皇后ナイチンゲール阿佛尼小野小町
(二)足る事を知れ、樂の都は苦の峠の彼方にあり、人不知而不慍亦君子乎
(三)健康と勇氣とを失はず、何事をなすにも一種の趣味を持つて即失望と悲みのうづの中にまきこまるゝ事なく常に心を其外に置き、我評判に己を見つゝ且つはげまし且つ慰めつゝ進む事が必要だと思ひます。
(四)人間は滿足と云ふ事は到底出來ぬ物だそうですが、先衣食住さばかりの不足なく、利の爲に我意をまげればならぬ樣の事なきは富貴と云へばいはれると思ひますから、巨萬の富を得なば如何にせんと云ふ事も餘り考へませぬが、もし富貴の身となれば國の爲めにせればならぬ事、又人の爲に力つくし度事をのぞみのまゝに行つて見たいと思ひます三枝をみつばよつばの殿づくりして樂しむ樣の事は、自分は餘りやつて見度ありませぬ
(五)未だ見ぬ繪帖或は草双紙を古本屋で買蒐むる事、友どちと里川に釣の糸たれて長閑の日を味ひし五六歳の時の春、山上の野に乳母と草の花つみし折
(六)夫を事務所へ出すまでの世話する事、前夜受取りし書狀のしわけし返信出すべき方へはそれ〲かきて送る事、外は其折々にしたがひて子供等の寢服、仕末、或は客間かざりつけ、臺所監督人を訪問し又訪問を受け。餘暇に讀書、かき物等

（七）旅行、殊に登山は何よりも、讀書、詠歌
（八）鳥肉、アイスクリーム、出來たての鹽せんべい、覆盆子、ドロップス
（九）日用の食品に一番心を盡します次が書物です小間物店へは折々行きますが呉服の方は餘り氣にしませぬからせひ入用の時の外ちつとも見に行きませぬ
（十）呑氣

▲ 陸軍中將男爵阪井重季氏夫人　阪井春子

（一）尼將軍政子、靜御前
（二）教育勅語、御仙泣すな馬肥せ
（三）忍耐事に堪ふ
（四）儉素身を守る
（五）觀劇、籠に乘りての親類廻り
（六）裁縫、掃除、接客
（七）散歩、旅行
（八）すし、果物、羊羹
（九）呉服、小間物

▲ 醫學博士弘田長氏夫人　弘田増子

（一）岩崎彌太郎母堂を欣慕す
（二）艱難は其身を玉になす
（三）日常艱難と戰ひ居候
（四）更に心得無之候
（五）曾祖母に愛せられ其談話を聞くを最も樂み候
（六）手紙の往復、子女の世話、家政の整理
（七）美文、讀書
（八）豆腐、果物
（九）衣服の買物は餘り趣味なし小間物も同様に候
（十）至て潔癖なり

（以下續出）

床しき新年の裝飾

△庭先の趣致

家々の格式家風によりて一槪には言へざれど、まづ普通中流の家庭を標準として述べんに、正月に入りて先づ注意すべきは庭園を清掃する事なり。例令猫の額の如き小さき庭にても、來客の眼に觸るゝ以上は見苦るしからぬ樣に注意して手入を加へ、樹木の枯枝を伐り取り、石燈籠、手水鉢はそつと苔を落さぬやうにして穢の泥を去り、隅々の雜草は拔取り垣根の破れなどは豫め繕ひ置くべし。中庭茶庭等に敷松葉などすれば殊に趣致あり。又手水鉢には柄杓の新しきを添ふべし。その柄杓も淸めの手水鉢には檜、下の手水鉢には杉の柄杓を添ふ。檜と杉とは品に上下はなけれど、斯くして客に手水鉢の上下を示すは心ある仕方にて家の風儀のゆかしさも見ゆるなり。此の柄杓は孰れも中の深きを用ゐ――神社佛閣の手水鉢の如く淺き柄杓は用ゐざるをよしとす。

△床の間の掛物

床に掛くる軸物は三幅對、二幅對、又一幅物、何れにて



も宜しけれど、目出度き繪畫又は詩、歌の奇を選むべし、されど戀歌の類は一切掛くべからず。掛物の好みは最もその家の人の品位を示すものなれば注意せざるべからず，其の掛方は、先づ中緒を解き、結び目を右の方へ片寄せて表へ見えざる樣にし、疊の上にて少しく開き、上部即ち掛木の中央を左手に持ち、風帶の折目を右手にて能く伸し、其儘右手に掛緒を取りて隨意の足より床の上に輕く上り、緒を釘に掛け、兩手に軸を持ちて徐々に掛降し、少しく裏へ卷返し、又表へ卷返したる後、手を離し、曲らぬやう陸を直して床を下り、今一度見て曲り居らば能く直すべし。掛物に掛けはなしといふ事あり、つまり此掛方を知らざる樣を嘲けりたる言葉なれば大いに心すべき事なり、又三幅對は先づ中を掛け、次に右、次に左を掛くるなり。二幅對も亦先づ右を掛く。其掛方は凡て一幅の時と同じ。總じて見苦しきは中緒の見ゆる事なり。甚だしきは中緒が表にぶら下りたるを構はぬ人あり。又右の裏表へ卷返すは掛物の反り返らぬ爲めなり。反りて鯣烏賊の如くなりたるは最も見苦しければ、幾度も裏表へ卷返して直し置くべし。

△正月の生花

生花は元旦に挿すべきものなり。年の始めなれば、

第一松竹梅、其他は松の根〻に寒牡丹、椿、寒菊、椿花の根〻に椿、寒菊、千兩、又は竹の根〻に椿、寒菊、或は猫柳、猫柳に椿、寒菊、水仙、千兩等を普通とす。茶席には檉柳に白玉椿を挿す。而して生花は何流を問はず床の軸前に置くべし。二瓶の時は左右に置き、三瓶は池の坊にて申さば、眞の花瓶に眞の生花を挿して中尊（軸前）に、行の對瓶に行の生花を對に挿して左右に置く。其花の品變りても花形は對に挿すべし。花を挿し終りたれば床に薄板を置きて其上に据ゑ、水を十分に差添ふるなり。但し寒天の時は九分目とす。花瓶に花臺を用ふるは松竹梅の外稀なるも、近頃は諸流とも多く花臺を用ふる故、薄板にても花臺にても各自の好みたるべし。

△鏡餅の飾場所

床の正面に鏡餅を三寶に載せ、其上に海老橙を始め種々の物を取合せて飾り置く家多しと雖も、上中流の家庭にあるまじき事にて、古來年始の飾り付けに斯かる無頓着の仕方はなし。主人の好みにて緣喜物として飾る時は違棚か地袋棚の上に飾るべし。又近頃、所嫌はず寫眞額など掲げ硝子の器物など澤山並べ、剰さへ其硝子器に毛絲の編物を敷きたるなど無風流の雜飾多きも、これも愼むべき事なり



違棚と地袋棚には、平素は第一に料紙函、硯函、其他繪卷物、畫帖、書籍等何品にても飾れど、年始には儀式として熨斗、鮑を三寶に載せて置くべし。棚の品物は來客の娯樂の爲めなれども、親、兄弟、妻子、又は歌妓、俳優等の寫眞帖などは差控ふべし。又道具自慢にて種々の品を飾り立てるも卑しき業なり。

△裝飾の額面

額面は時々羽箒を以て塵埃を拂ひて保存に注意し、折釘は額の長さにより三分の所に打つべし。額を支ふるに三角の小蒲團などを用ふるは奉納額のやうにて俗なり。又額面も掛物も同じく主人の人格を現はすものなれば、書畫とも高尚優美なるを選むべし。賀宴又は珍客招待等には前以て掛替へ置きて馳走とすべし。油繪は光線の工合もあれば、六疊乃至十二疊位の小さき日本室にては畫面の趣致も十分に觀賞し難くして不適當なり。又祖先父母等の肖像額は客に窮屈の思ひさする故、之れは書齋居間等に揭ぐるを宜しとす。

倚序でなれば一言す。床に向つ左は即ち客の座にして、主人は違棚地袋のある方を脇にして坐すべし。正月など來客の多き節なれば特に注意すべきなり。


銀座の春
萬
東京案内



家庭向長崎料理十二ヶ月
お正月の献立

崎陽　桑原東浪

先づ開けまして、お目出度存じます。舊臘より不調法なる手料理を御覽に入れましたところ、處變れば品變るの譬、如何やら風味も異なところがあるわいと、難有いお思召、如何計か大慶に存じをります次第で、本年も相變らず、御披露仕る事と致しませう。

さて初日の影のパッと映込むが早いか、御慶申入ますの聲、家々の門口に賑々敷なりますと、お知合より御親類中、一年の無沙汰を此時にぞ取繕ふ、何でも彼でも年の始の縁喜沙汰、初春のお目出度すに流して呉れる書入の松の内は、常日頃見た事も稀なお客様迄が、今日は取分け勢込んでのお訊、家の内の取締を遊ばす奥様方より、取次から勝手向の奉公人に至るまで、初鳥の聲諸共に、中々のお繁忙、勿論手廻し好きお家では、モー昨年の内にお仕度は整へをるとは申せ、お客様の下戸上戸、萬事お見計やら、お指圖に、眼も廻る次第でございます。そこで新年早々のお献立は、何處も變らぬ品定ながら、先づ御慶の御挨拶の濟み次第、取出しまする、初春の御祝儀として、

○松竹梅の御雜煮

先づお客様がお上りになりますと、早速据ゑますのは、挾菓子に昆布茶、それから此松竹梅のお雜煮を出し、熨斗昆布をお三寶に乘せた儘主人とお客様の間に据ゑまして、お屠蘇を重ねますうちに、棚のおさしみ

向付は登り鮎の鹽燒、又は鰹二切、其他は家々にて種々取合せて使ひます。おさしみの妻は立花に限りますので、此立花と申しますは、東京にて藪柑子の事でございます。

さて松竹梅のお雜煮は、如何云ふ風に工夫致しますかと申しますに、其材料は新筍に松茸、梅の花形の蒲鉾を添へますと、之で松竹梅になります。最初に昆布と松魚節で煮出汁を拵へますのですが、之は何やら昆布臭くて、味は宜敷とも、嗜不嗜がありますから、矢張只今では東京と同樣に、澄し汁に致し、松魚節の削きましたのを、水から煮出しまして、分量は其都度多少違ひますけれど、先づ半分位になる迄煮詰る位な心持が宜敷ございます。煮上る前に先に酒を少量注しそれから醤油、之も可成色のないのを加へまして、沸騰ましたら、之を水嚢で漉し、之に湯煮た新筍、松茸と梅の花形の蒲鉾、鯛の身一切、鷄又は鴨の肉二切許入れ、ザット煮立て、餅は一寸五分位の燒餅二切を加へます。此雜煮は品好く、味も滋味く、至極結構ではございますが、一所に入れて煮ますと、汁が濁りましてお客に出すには、工合が惡ふございます。そこで煮出汁丈拵へて置きまして、筍も、松茸も、鯛の切身も鴨の肉もそれ／＼湯煮に致し、皿か鉢に、順序好く並べて置きまして、お客來を待つ樣に致しますと、萬事手早く出來、お客が見えたら、直ぐ樣煮出汁を溫めまして、椀の中に以上の品々を、見綺麗に並べ、上より熱い煮出汁を掛けて出します。餅も此時には、燒いたのを、一先湯に漬けて椀に入れます。此樣致しませんと、餅がシットリと致しません。

右は普通の松竹梅のお雜煮でございますが、新年は何方樣へ參りましても、何れもお雜煮攻になりますから可成淡白とした方が、皆樣にお氣に入る樣です。殊に餅腹とか申しまして、隨分閉口致すものでございます。そこで一寸風流氣もあり、氣が効いてゐるのは、梅の花形蒲鉾の代りに、本物の梅の花を使ひますので、お汁は勿論極淡白と煮出汁を効かし、具は新筍に松茸に鷄又は鴨の肉二片位に止め、椀の中に見綺麗に、且

つ數少なに入れ、汁を掛け、蓋を致しましたら、其空 すものかと存じます。

足の中に、本物の梅花一輪乘せて出しますので此時はお椀も可成は日の出椀か何か、一寸異な變つた風のものが宜敷い樣で、一家の者の心意氣も、自とお客樣にも通ずる樣で、面白うございます。總じて何を調理致しますにも、一寸は風流氣や、氣取ありますと、同じ物でも、大層趣が有る樣になりま



何時も松竹梅と申す次第ではございませんが、

此お雜煮は、何の御祝儀にも應用されるものでございますが、長崎邊では、旅立とか、目出度歸國したとか、聟取、嫁入に至るまで、お祝事とあれば、直ぐ第一に用意致しますもので、ヤレ御就職のお祝、ソレ御昇進のお喜と、何でも彼でも雜煮づくめ、しかし何も時候柄に從ひます結局之

が其土臺となりますもので、此様な御祝儀には、お雑煮とは申しませんで、「鰭、味噌」と稱へます、彼處の今日の「ひれみそ」はお滋味かつたとか、誰様の處のは上手に出來てゐたとか、お互に評し合ひます程、無くてならぬ一品となつてをります。そこで一寸「ひれみそ」の事を申上ておきませう。

○ひれみそ

「ひれみそ」と申すものは、全く字の通りなもので、「ひれ」とは魚の鰭の事、「みそ」は味噌汁で御座います。何故お雑煮の事を云ふか、と申しますと、其お雑煮は、お祝の心持で、必ず目出度といふ鯛の身を入れ、鯛の鰭を添へますからで、そこでお雑煮をお祝に使ひます時は、一概に略して「ひれ」と申すのでございます。夫故此場合には、キツトお椀の中は、鯛の鰭を挟みますが、多人數になりますと、料理屋に、兎に角、大概のお家では、其人數丈の鯛をお求になる譯にも參りませんから、鰭と尾とを、人數に應じて切つて置き、お客様に出します時、一寸お椀の縁に挟みますので、お椀の中には兎に角鯛の切身は入れなければなりません。しかし此「ひれ」は何方様へ呼ばれましても、又招ぎました節も、盛切一杯のもので、決して換へるものではございません。之はお變といふ事を忌みました縁喜かと思ひます。

してまた「みそ」の方は味噌汁で、御祝儀の節、之もキツト附けますもので、上等の白味噌を濃く立てまして、沸騰ましたらば、鯛魚とか、赤魚とか、其時々のお魚で、其味の淡白ので、脂の少い、肉の緊縮つて崩れないものを撰みます、程々に切身と致しましたのを入れ、味噌汁が一升位なら、それに小さい杯で、酒を一杯か一杯半位注しまして、煮立てます。若し味噌が割合に鹹加減でしたら、白砂糖を茶匙で、一二杯加へ、加減を見ます。倘ほ薬味としては、三葉か、芹などが宜敷ふございます。之に柚一片か、柚花のある時分ならば、柚の花一輪浮かせますので、百人が百人好きの致すものです。之は何様な魚類の味噌汁にも向き

ます仕方で、お惣菜に日々御工夫なされば、至極結構なものが出來ますから、是非お試を願ひ度いのです。して此「ひれみそ」をお客様に出します順序を、ザット掻摘んで申しますと、其場合は何れも御祝儀の事ですから、何時も會席で、從つてお膳も會席膳を用ゐますので、おさしみ、口取、向付に小鯛の濱燒とか、海鼠か、阿古屋貝の酢の物、東京ならば、阿古屋貝はございませんから、蝦を代用しまして、鳳輦草か、鶯菜を粧點ひまして、お猪口に白隱元豆を使ひ、之を先づお客様に据ゑます。それから兼て仕度致して置きました、當日第一の呼物「ひれ」を溫め、箸前に据ゑますので、之が御祝儀の標示となる譯でございます。來客も充分興を催しまして、いよ／＼御飯となります時、「ひれ」に對してをります「みそ」を、別に汁椀に盛つて出す事になりますが、之で當日の「ひれみそ」が完備致した譯で御座います。

　これに續きまして、お正月中に致します事は、七草粥とか、十五日の小豆粥とか申すもので、別に東京と變りました事も御座いません、只內々の者の膳部には、向ふに付けます田作の代りに、長崎邊では、總て鹽鰯の干したの用ゐまして、之を「からがき鰯」と申します之は裏白の葉を下敷と致し、雌雄一對膳部に附けます。尙は元日より三ケ日、七草とか、十五日とか、或は「ひれ」とか總て祝儀に雜煮を祝ひます時、其椀の中には、必結昆布を入れる事になつてをります。尤も之には種々結方がございまして、何時も同じには參りませんそこで昆布の結方の中で、普通世間で行ひますのは、「劍結び」、「はこせこ」の二種の樣で、「劍結び」は何れの場合でも差支はありませんが、只婚禮の時は使ひません。婚禮の時は必「はこせこ」に限ります。

　正月も半を過ぎ、二十日ともなりますと、廿日正月と申し、何方も別に之と申す程の事もありませんが、彼地で必取行ひます「にごみ」の事をお話致しませう

○にごみ

此「にごみ」と申しますのは、正月中使ひ殘りの品々

を、此時調理致しますので、所謂煮込といふ心持で申すのでございます。此材料は大概大根、牛蒡、結昆布、焼豆、鯡の身、鰑等で、何でも使ひ殘りの品で、一所に煮て差支ないものを入れるのでございます。之は全くお惣菜向きでありながら、二十日には缺かさぬものとしてありますので、上下共に用意致します。しかし此材料の割合に、味は宜敷、中々滋味ものでございます。さて此仕度を取掛りますのは、前日十九日の晝過から、大根は五分位に輪切に致し、牛蒡、里芋も、それ〲程合に刻みまして、湯煮上げ、湯煮汁を捨て、更に水を大鍋一杯に滿しまして、それに水に漬けてあつた鯣を、細く短冊形に刻み、豆は大豆で、一寸煎つてから、二品共、一所にお鍋に入れ、松魚節を加へて、能く煮詰めます。煮上りますれば鰤なり、鯛なり、骨附の儘ブツ切に致したのを入れ、又煮ます。それから醤油と酒鹽を注し、砂糖はホンノ茶匙一杯位を加味致す丈で宜敷ので、之で大根に充分味が附き、浸み込みますのを程と致しまして、永く煮詰るのでございます。いよ〲二十日となりましたら、又火に掛けて一廻り煮立てまして、其日に參ります親類縁者、來る人毎に此煮込一椀に、向ふへは膾と、水餅にお砂糖を掛けたのを添へて据ゑます。家に依りまして、水餅の代りにおしる粉を出す處もございます。只今はお寒の中の事故、此樣な煮込物は、日々のお惣菜には御便利で、且つ種々の材料から出ました味故、割合に滋味ものでございます。

正月とは申せ、寒に入りましては、寒氣も肌に浸透る樣で、兎角悴勝になりまして、其上白い物さへ降積るといふ折柄、お炬燵に冷をお凌ぎになる時などには何か温いものが欲しくなります。此時分には是非共お勸め致し度いのは、彼地で「鍋料理」と申すもので、恰度東京の寄せ鍋、九州邊の「チリ」に似てをるものでございます。

○鍋料理

譬にも一つ鍋を衝合つた間柄とか、一つ釜の御飯を

食べた中とか申し、一つ器で食事を致しますのは、何となく親みの増すもので、又極親い中でなければせぬ事ですが、寒天に雪の降る黄昏時などに、極睦しいお仲間同志で、一つ鍋を取巻いて、一杯召上りながら、四方山のお話に、心も移り、氣も合ひつゝ、誠に深味りとした團欒でございますが、之には是非共此「鍋料理」風の御趣向を遊ばすが宜敷からうと存じます。之は多人數は工合が宜敷くないもので、多くて四五人、先づ三四人まで、極親い、氣の置けないお友達同志に向きますので、先づ今晩會食を致しますから、操合せてお出で下されとか、お誘になりまして、お客様の見えます前に、一通り使ひます材料をお整へになり、お客が見えたら、小振の會席膳におさしみに、海鼠か赤貝位の酢の物を乗せて出し、兼て煮出汁を拵へ置きましたのを、少し深目の鍋に、板昆布をザット





洗つて敷き、其上に鍋の八分目位に注ぎ、焜爐に掛け煮立ちましたら、酒鹽と醬油で、好鹽梅に加減を致しお汁が出來ましたら、焜爐と共に、お客樣の眞中に据ゑまして、錦手か何か、綺麗な大鉢に、鯛の身、鷄の肉卷半平、是に紅色、黄色などのがありますので、色半平といひ、之を白と三色にして入れ、倘ほ唐菜、里芋干饂飩の湯煮たの、唐菜は一寸五分位に切揃へ、里芋の竪に切りましたのと、椎茸の能く水に浸したのとを體裁好く盛分けて出します。御主人はお手づから、其品々をお鍋の中に入れ、煮ながら、皆樣はお好きなものを、勝手に自身で、膳に附けて置きました散蓮花かソツプ匙で、お掬ひになつて、深目の皿に移してお食りになるので、お話を遊しながら、食事をなさるには至極妙で、寒い時には、暖くもあり、情合も移りまして、日頃の隔を忘れる事になります。しかし此樣に材料を澤山入れませんでも、其時の有合で、此樣な方法で致しませば、何でもお滋味く食べられます。此品々の中で干饂飩は、是非共缺く譯には參りません、之が這入りますと、且に滋味を出すもので、湯煮ますにも餘り永く湯煮ますと、後で崩れて仕舞ますから、ザツトでよろしうございます。餅のある時分には、之に餅を入れましても結構で、鷄なども骨共に刻みました方が、煮出汁も味好く、お小皿に其肉を移して、お醬油を滴して召上りますと、風味が好うございます。東京でも、寄せ鍋と申すものがございますから、彼是取合せましてお試になると、倘更面白い御趣向が附きませう。



世界各國の新年

東西南北生

◎人種と宗教と氣候に依つて異る世界の正月

東半球、西半球、耶蘇教國、佛教國、人種に依り、宗教に依り、はた又氣候に依り、正月元旦の風儀いろいろの風習が行はれつゝある、先づ氣候からいへば我國の正月は冬季の眞最中であるが、南米又は南洋諸島は九十度以上の炎天である、隨つて周圍の風物はがらりと違つた感じがする。氣候の相違は是非ないとしても、新年の目標となつてゐる暦は、人種に依り宗教に依つて相違があるから日本の正月元旦は一般基督教國の新年と同じであるが露西亞では師走の半頃支那では十一月頃、印度では七八月の候、マホメット教を奉ずる土耳古、埃及、馬來諸島は亦た別の月となつてゐるのである。故に我國の新年賀狀には、萬里同風といはれてゐるが、われ等が屠蘇を酌んで、新年を祝つてゐる時、同時にニユーエヤーを呼んでゐるのは英米獨佛等の太陽暦諸國で、その他はまだお正月にならぬのである。

◎珍妙なる土耳古暦

中でも不思議なのは土耳古暦で、太陽暦でもなければ、太陰暦でもなく、印度暦とも違へば、露暦とも違つてゐる。四年毎に一回の閏がある、その年月に十二支のみを用ゐてゐるから、一ケ月の中に七日が二度あつたり、十日しかない月があつたり、珍妙不思議に出來てゐる。トいふのは、良い日を澤山用ゐて、惡い日を省いてゐるからで、よほど勝手に出來てゐる。しか

も土耳古を初め、地中海沿岸、馬來種族の蔓延せる南洋諸島、西藏、及び支那内地等に擴ろがつてゐるのであるから、この不思議なる暦に支配されてゐる民族はなか／＼多いのである。

○正月風俗は東洋の特色

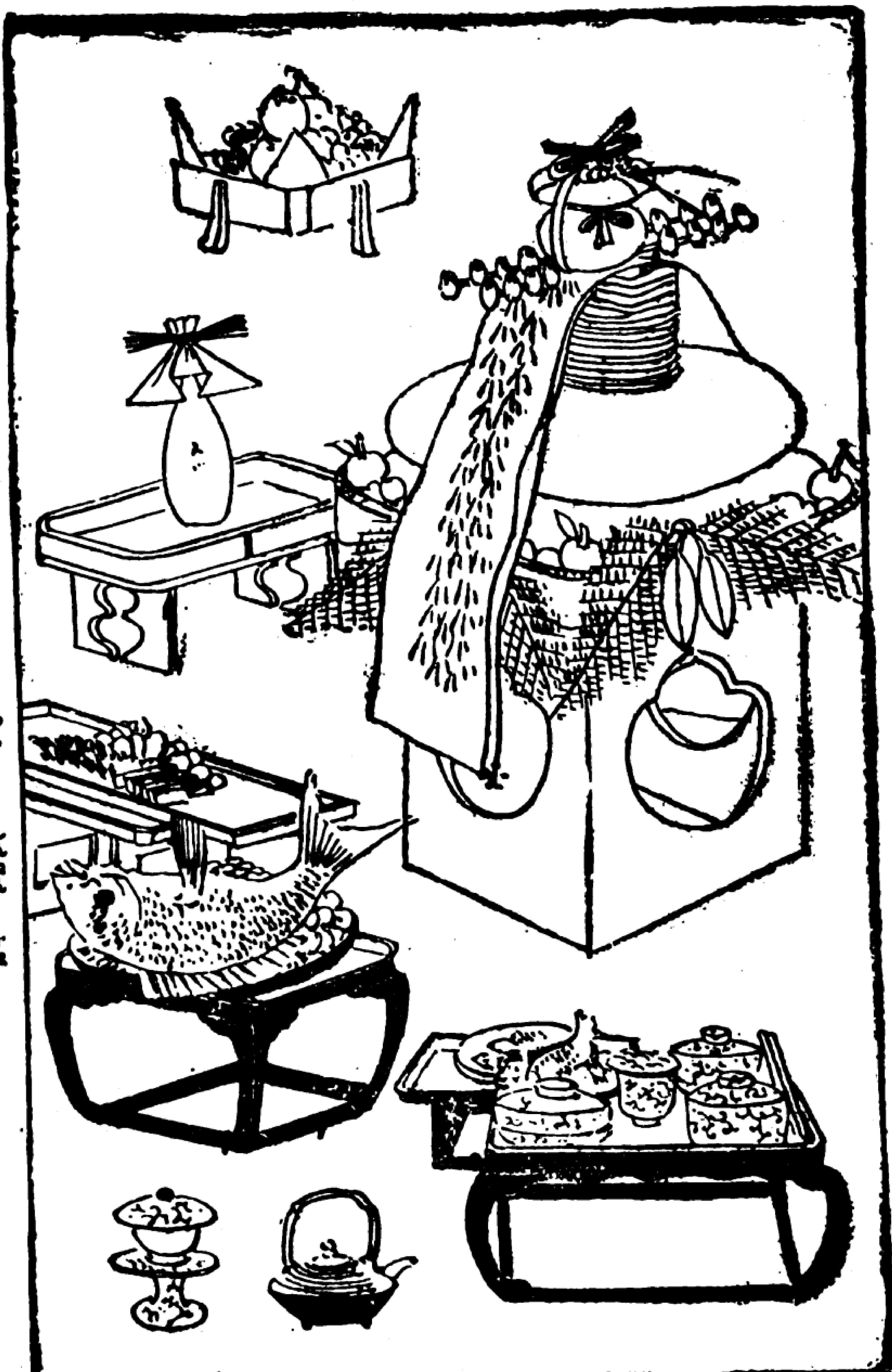
同じく太陽暦を用ゐてゐる間に於ても宗教の相違に依つて、正月風俗は甚だしく異つてゐる。耶蘇敎國では十二月二十四日より、所謂耶蘇誕生祭期に入るので、新年に入つたといつて、特別なお祭りの形式はないのである。只この中で英米國民は除夜に種々の遊戯を行ひ、元日に蠟燭遊びがあり、全く正月風俗がないでもないが、何しろクリスマスを送つた後であるから、東洋諸國に於けるが如く新年に對して特別の儀式や趣向はないのである。蘇格蘭人と露西亞人には只僅かに嚴そかな儀式がある。若し强ひて歐米人の正月風俗といへば、此の蘇格蘭人と露西亞人であらう。けれど、支那、朝鮮、日本の正月に比ぶれば索然としたもので、言ふほどの事はない。故に正月風俗といへば、儒敎國の特有現象で、特に支那人は正月に對して深長なる意味を持つてゐる。現に南米、大陸又は南洋諸島等、支那人の勢力ある地では、支那人の正月の爲に、その國民は日用品の供給を杜絶せられてゐるほどの次第で、かれ等支那人は本國に在る時のみならず、異鄕に出でゝも盛んに正月風俗を守つてゐるのである。

◎蘇格蘭人の無禮講

先づ歐米人の正月より取り掛らう。――一體歐米人といへば事務的種族で、例令宴會の如きでも、豫め來客の數が極まつてゐて、招待狀を受けない者は、如何に親近の間でも、宴會に顏を出すとは出來ないのは彼等の慣例。然るに正月丈けは所謂無禮講といふものは夢にもない。處が蘇國人の間に無禮講が行はれてゐるのは。事務的種族の歐米人に特種の現象である正月元旦のオプンデーで、知己不知己を問はず、宴會

は公開せられ、窓から棒に顔を出しても尤むる者はないされば、合衆國又は加奈陀の如き殖民地では、獨逸人や、愛爾蘭人や、伊太利人、墺太利人等の正月元旦は、ひつそりかんとしてゐるが、獨り蘇格蘭人の家庭のみは、笑聲外に洩れ、嬉々として兒女の來往してゐるのを見受くる。

○耶蘇降誕祭は獨逸人



蘇格蘭人を除けば、歐米人の新年は、極めて索然としたもの。一月一日職業を廢して、靜かに休息を取る丈けである。最も各國公使の間では賀禮の往復あり、特に平民國の北米合衆國では、大統領は白館を公開して、萬衆に握手を許し、新年を祝つてゐるが、クリスマスの殷賑さに比ぶれば言ふほどのものはない。で、歐米人の新年とい

へば、どうしてもクリスマスを連想してくる。中にも盛んなのは獨逸で、上はカイザルの宮殿より、下は工場に燻つてゐる勞働者に至る迄、萬幅の熱誠を以て降誕祭に景氣をつけてゐる。

◎獨逸宮廷の「貝殼室」

獨逸宮廷の御家族は、常にポツタダムの離宮に在らせらるゝのであるが、ポツツダム離宮に世界各國の貝殼を集めた「貝殼の室」がある、こゝには珍奇といふ珍奇な貝殼は悉く集つてゐる。先年我國に來遊された皇弟ハインリツヒ親王が土產に持ち歸られた貝殼も、やはり此の宮殿に飾られてある。――獨逸宮廷のクリスマスは此の貝殼室で行はれるのである。室の中央に大きな松の木(日本のとは違つてゐるが)を飾り、その下にクリスマストリーとして陛下から皇后に送られた贈品、兩陛下から御家族に贈られた品物は山の如く陳列される。御家族一同其處に集つて健康を祝されるので、最も眼を惹くのは皇子皇孫等の陳列品で、御父母又は御友人より初めて贈られた物品を區分して、銘々に陳列されるとただその間にお粗末なる品物が交つてゐるので面白く、又は銘々の御嗜好等も發揮されて御家庭の情味は躍如として其處に現はれてゐる。日頃峻辣なる手腕を揮はせ玉ふカイザル陛下もこゝではその手腕や權威より離れて、無邪氣なる父となつて、クリスマストリーを喜ばせ玉ふのである。中流以下のクリスマスは、一般世人の知れる所であるから省く。總じてクリスマスの贈物又は室の粧飾等品には、宮廷も下流も變つたことなく同じ方法を以て行はれてゐるのである。

◎マホメット教國のイシラム

土耳古を中心とせるマホメット教國民にはクリスマスに相當するイシラム祭日といふがある。基督教國民はクリスマスを三日で引き上げるが、マホメット教國のイシラムは、無慮三十日間打ち續くのは頗る長いお祭りである、且つその期間は無言絶食と來てゐるから驚く。イシラム祭日は、十一月頃に當り、同期間に入

ると、マホメット敎を信ずる善男善女は、日中食物を絶ち、職業をも廢し、日々寺院に詰め切つてゐる。元來マホメット敎國民は、埃及人と馬來人とを問はず、非常に潔癖な種族で、他人の食器といつたら手にだも觸れない。トいふのは、マホメット敎では豚肉を禁じてゐるからで、豚臭に觸れる危險を恐れた習慣が第二の天性となつたのであらう。だから、同敎國民の旅行を試むるとなると、食器ぐるみ食物迄携帶して出掛けるので、その騷ぎといつたら大變なものである。イシラムの絶食期はまた格別で、夜間密に起きて食事を取り、二時頃になると、最う參詣の仕度にかゝる。闇夜を劈いて聞ゆるのは隣人を誘ふてゆく聲で、その聲は長く、長く、尾を曳いて椰子の葉にかすれて消えてゆく。かくしてイシラムの期間終れば茲に初めて平常に復るのである。我々が暮と正月とを別けるやうに、マホメット敎國民は、イシラムの期間を以て人事に區劃をつけてゐる。正しい月！土耳古人や、埃及人や、馬來人等は、イシヲムの期間を以て最も正しい月としてゐるのである。(以上は馬來種族の實例による。)



◎呪文を唱ふる西藏の正月

こゝに又世界の秘密郷を以て知らるゝ、西藏の正月は、土耳古暦に依つて新年を迎へてゐる。――元旦になると、土民は大きな盆の上に麥焦しを山の如く盛りその中へ干葡萄、干柿、バタ等を入れ、よく混せて、五色の絹で小旗を作り、その上に立てる。そこへ家族はぐるりと車座になつて坐つてゐる。で、先づ主人は右の手に一ト握り握つて、口の内に呪文を唱へながら空中に撒き、幾分を手にのこして、之を食ふ、次ぎに主婦、續いて小兒、といふ順序で皆な同じことをやる此の式が終れば、小麥粉を捏ねて棒根のやうにして油で揚げたものと、瓦煎餅に似たやうなものを小皿に盛り、人毎に配り、茶を飲みながら之を食ふ。但し賀詞を交換するやうなことはない。次に羊肉、乾酪などを生の儘で食ふ。煮たのは禮に合ないとしてある……十時頃に茶、午後の二時頃に晝食、重もに饂飩と羊肉を用ゐる。此時西藏に君臨する達賴喇嘛は、布達拉山上に大饗宴を張る。こゝに駐在せる支那官吏又は土人の官吏を招いて會飮する。「跳鉞の戯」が行はれる「觀飛神」の戯が行はれる。跳鉞の戯といふのは、十餘人の兒童より成れる一隊が、身に華美なる絲衣を着けた白布にて造れる帽子を戴き、足には小さき鈴を結び手に〱斧や鉞を持ち、翩々として、胡蝶の如く互に入り亂れて舞ふのである。舞踏者の前に十餘面の大鼓が据ゑられてある。音頭取が前に立つて拍子を取ると、舞手は鼕々と大鼓を打つ宛として天上界の觀がある。

◎終夜樂を奏する蒙古の正月

東西一千三百里の廣袤を有する蒙古の正月は、支那とは違つてゐる。露西亞式でもない。土耳古暦の下に佛教式を取つてゐる。西藏の正月とやゝ似てゐるのは土地が接近してゐるせいでもあらう。正月の御馳走に、饂飩、羊肉、乾酪、バタ、茶を用ゐてゐるのも、西藏と殆んど一樣である。で、元日のまだ太陽の上らない晩方に、一人毎に四十九個宛の團子を天幕の内から投げる、外では之を拾ふて全數を計算し、奇數

であれば不吉、偶數であれば吉祥として、終夜樂を奏して宴飲するので（圓子は糯米の飯に羊肉を混じ、拳大の圓子としたるもので、汗王の下では正月撒く役人と拾ふ役人を定めて置く）胡弓の音は或は陰に或は陽に、胡沙吹く朔風に送られて旅人の腸に泌み入る

◎支那人の正月と爆竹

南清と北清とを問はず、支那人の正月は爆竹の正月である、否支那内地のみならず、佛領印度又は蘭領印度等に散在してゐる支那人の正月も、皆なそれで陰暦二月二日に初まり十五日に終る、そして廣東地方へかけて南清一帶の例を以てすれば、十二月十六日、



商家歳終の牙祭を行ふのをキッカケとして、二十三日に各官衙の竈を祭る例あり、二十四日には竈を天上に送り、戸毎に香を焚き、家廟を祭る、此の期間天上會議あり、地の神天に上り、天の神下りて留守居となる。二十五日は新年用品の賣出し、我國の年の市と相似たもの、此日天上の玉皇上帝、人間の諸神を從へ、諸天を巡り來年の祝福を定め玉ふの日とせられてある。大晦日になると、爐を圍んで酒を飲み盛宴を張り、かくて爆竹の音と共に正月元旦となるのである。單に正月に入るまでにも

這樣な手數が掛かる。――門口には「利如曉日騰雲起」などいふ對聯を貼るが、日本のやうに門松などは飾らない、年賀の往復又は開年の儀式など、なか〳〵念の入つたものである。特に賀客に持ち出す菓子には、紅棗、橘紅、瓜子、落花生、糖瓜の五種を用ゐ、酒は大概朝興酒、肴は豚、鷄、鴨で、家格によりてそれ〴〵相違があるが、その種類には、非常な注意を拂つてゐる。そして特に正月中は大聲を禁じ、器物を破損せぬ樣に相互に愼むとゝなつてゐる。が、內情に入れば、支那人の正月は、賭博の正月で、家外では爆竹の聲聞ゆると共に、屋内には廣東賭博が行はれてゐる。總じて形式的の歡樂の多いのは支那人の正月で、かれ等は商業に農業に日頃心身を疲らせてゐるのは此の正月を賑はしく盛んにして暮らさんが爲めである。若し彼等の生涯から正月を取り除けば、かれ等の一生は勞働、疲勞、蓄財、一片の白紙となつて仕舞ふのである索莫たる白紙の人生に意味を彩るのは蓋し正月である。

○在外日本人の正月

舊の朝鮮人の正月は、支那式で、注連もなければ門松もない。門口に聯牌が貼付けらるゝことも又支那と同じく、爆竹の音の喧しいのも又支那と似てゐる。

朝鮮、滿洲、支那、南洋、布哇、北米、南米等に散在してゐる日本人は、約三十萬、その中朝鮮、布哇、北米に尤も多い。――在外日本人の正月はどうであるか、布哇又は北米本土に在留の日本人は、〆繩松飾も日本內地と同じく、雜煮その他食膳の献立も、日本內地と變はらないのは勿論である。布哇の如きは、元旦に宮詣りが行はれる（同地では日本流儀に伊勢大神又は稻荷神或は天滿或は金比羅を祀れる神社あり）宮詣りが終ると、ホノル、市又はヒロ市に開かれる芝居に出掛け、夜は同鄕の誰れ彼れ集つて、カルタ遊びに耽る。無花果、芭蕉子、万壽果、麵果、橄欖、酸果、レモン、椰子等の樹木翠色滴れる處移民家屋は點綴して、甘蔗園は一面に擴がつてゐる。そしてその間より日本風の俗謠が聞ゆるのは、布哇日本人の正月である。



「みいちやん、[illegible]しませう。早くいらつしやいな」
「エー、今すぐに行くことよ。もう十行も讀めば一段落なの……」
と云ふ風に、どの區切りで巻を捨てゝもよい様な書き方をして見やう。暇があつたら讀むべし。夫れが一番忠實なる（筆者の爲に）讀者である。



各女學校の校風競べ

河岡潮風

女子大學と云へば誰でも知つて居る。皇居の西北目白の臺に鎮座してスエズ運河以東、金門以西に於て、最高の教育を施す學府で御座る。今更めかしくその學校を月旦するは、日を指して、明し、丸しと云ふ類、迂闊の譏を免れぬだらう。そこで觀察の方面を換へて「裏門より見たる女子大學」として見やうかとも思つたが、時は正月紙屑拾ひさへ休業するに、天下の記者と自任してゐる御大將が、裏門のあたりをコソつくわけにもゆかない。それに松の内は誰しも遊びに忙がしいから、長つたらしい文章を讀んでは居れぬ。序の事に各學校校風くらべテナ題にして、兼好法師の徒然草的に「思ひうかべて侍りし事、そこはかとなく書きつけ」たらどんなものか。

△品行と品性の區別

明治法曹界の彗星兒、花井卓藏君つねに曰く『品行と品性とを區別して呉れ。乃公は品行は善くないが品性は良いぞ』と、男は夫れでもよいかも知れぬが、女は是れでは困る也。露西亞の何とか女史の樣に、先づ見本として(！)數人の亭主を持ちその中より一人を選んだ方がイヽワなどゝ切り出されては、たまつたものでなし。婦人は矢張品行と品性と一致するがよろしい。巾幗界の花井卓藏出づる日は、日本が露西亞化するの秋である。

女學生の品行問題といふ事、隨分八ケ間敷かつたが大抵は跡かたもなき虚らしい。或時は渡邊女學校が攻

華された時もあり、女子美術に延燒した事もあり、女子大學も糞味噌に書かれた折もあつた。また現に某女學校には泥棒に親しくしてゐた學生があると云ひ、某學院の一生徒は墮落書生と關係してゐたと傳へられるその度ごとに三面擔任の記者は針小棒大に書き立てる呪はれたる女子敎育こそよい面の皮ではある！

この結果は人をして都會の女學校を恐れしめる樣になり、女學校出身者を敬して遠ざくるの傾向を作つたのは事實だ。

先日渡邊女學校の顧問澁澤博士に會つたが、無責任なる社會が、無責任な批評を渡邊に浴せかけるのを非常に慨嘆してゐた。罪あらば逆磔に逢ふとも小言一つも云へまい」が、罪なくして見る配所の月ほど癪にさはるものはない。僞女學生の多き今の世、何々女學校生と自稱する輩の多き此頃、輕卒なる批評ほど閉口するものはなからう。

無論、石多くして玉の少なき（某女學校の幹事の告白によれば、兎も角も才媛と云ふ名の許せるは十人に一人あるかなしだと。）學校で、萬に一つも間違ひは無いとは斷言は出來ぬ。けれどもさう〳〵三面子に筆誅される不心得者が續出する筈もない。女子大學の如き開校以來、今日迄艶種に上つた內で多少事實の形跡があつたものはタッタ一人だと、學校當事者はさう云つてゐる。そんな事はどうでもよい。たゞ見聞した處を記しておく。

△靑くなつた秀才殿

特別で以て名は揭げぬが、實際にあつた事。さる名門の子弟と思つて下さればよい。非常な好成績で某大學を卒業した秀才の身上話だ。此男大學時代は、自宅に近き高田のさる女塾へよく通つたものである。寄宿生は主に女子大學生で、毎日裏のコートでローンテニスが盛んであつた。秀才殿はテニスを打ちに來るのであつた。

遠くて近いと云諺さへあるに、大學でも指折りの秀才忽ちにして、種々の風說は立つた。何子さんもさう

よ。何子さんも變よと二三名の候補が出來たのを知つて、一女子大學生は憤慨して、秀才殿に無名の手紙を送り、爾今ノコ／＼來るべからず。妾が同窓に濡れ衣を着せる樣な事あるべからず。君も理否に明るき御身ならずやとばかり疊みかけて、水ぐきのあとこそ細々しけれ、意味は隨分思ひ切つた事を書いたのだ。乃父の性質は善かれ惡かれうけついだる彼も流石にこの豆鐵砲には驚いたと見え、パッタリ來なくなつて仕舞つた。但、もう來ずともよい迄に事局は發展してゐたのである。

三人の一人くれがし子の父は正金銀行の利れ者であつた。他の一人、なにがし子は非職官吏の娘、女子大學にホンの一と月か二た月ゐた事もあるさうな。話はこれからが滑稽。

こゝに一人、飛耳張目、何か事あれかしと覘つてゐる男ありと思ひたまへ。ある日散歩の道すがら、秀才殿の裏通りを通りかゝると、令孃風の一人が、ピユーと口笛を吹いた。ハテお轉婆めと思ふ瞬間、サラリと洋館の窓が開いて、水色カーテンを押しあけざま首を突き出したのは秀才殿だ。同時に身を翻へして見えなくなつたが、スグ裏の戸から現はれて、物も云はず令孃の手を携へて、トットと散歩に出かけたのである。

無論見る人なしと思つてゞあらうが、何にしろあまり態度が傍若で癪にさはつたので、翌日同時刻に罪と知りながら惡戲をした。物影にかくれて、ピーと口笛吹けば、首を突き出す事昨日の通り、早速裏へ出て見れば、通るものは秋風ばかり。秀才殿あはれやスゴ／＼入つて行つた。

こいつ痛快！も一つ擔いでやらうと或る考案を一味の蠻カラ連に語れば、ヨカッペイと早速承知。その翌日は一分隊ほど押しかけたのだ。ピッタリ塀へ身を潜め一人がピーとやる。サラリと窓が開く。昨日の今日だから結果いかにと危んだが、噫、この道に入れば賢も愚となる。秀才殿威勢よく裏戸を開けて飛んで出た。待ち伏せた網へ兎の飛び込んだ爲體、異口同音に、

「シイ、シイ。犬は居ねえぞ！犬は居ねえぞ！！」

スワ事露見と秀才殿唇の色まで蒼ざめた。秀才に非ずして醜才ぢや。あとも閉めずに潜みかくれた。そのあとで一同

「あゝ愉快だ〳〵!!」

兩三年過ぎた。くれがし女は大阪の富豪に嫁し、なにがし女は子の母となつて折々俥で音羽の邊を通る。秀才殿いかにせしや、兎角世の中は是だ〳〵と當時の一人は悟り顏をしてゐるがそんな事はどうでもよい。僕の云はうとするは、こんな小事實が擴大されて、女子大學生の品行を云々する樣になると云ふ事なんだ。

東京の新年 (9)　新橋附近



高々一ト月や二タ月でも、籍を置いたゞけで、その學校が不しだらの責任を負ふとは閉口する話。社會はもう少し寛大な見方をしてやるがよいとおもふ。勿論、女子大學へ對してばかりではない。なほ述べたい事もあるが、それは他日の事。

△成瀬校長の獻身行爲

高木は風多き譬、成瀬校長の人身攻撃の的にされるも久しい事だ。夫れと云ふのも獨身であるからで、女子教育家の獨身は社會の誤解を招く事が夥しい。七

八年前校長が獨りになつた頃は、随分良配も求めたであらうが、五十を出づる四歳の今日では全くこれで押し通す決心をしたさうな。校長は長州人の特性を發揮して粘り强い人。精力主義の人。そして賢い人だ。何で三面種になる樣な事に手を出さう？非難の根據なき事知るべしでないか。

元日早々から他所の懐勘定をして濟まぬ話であるが、校長の年俸は二千圓だといふ。而かも年々五百圓を女子大學基金へ寄附をしてゐるから、千五百圓が純收入である。交際費も出張旅費もみなこの中を食ひ込むのだもの、自分自身の爲めに費す金はいくらもない獨身なればこそ是で行けるのだ。それにも一つ校長について感心せねばならぬ點は、私生活と云ふものが殆んどない一事である。晝も夜も學校に關した事務ばかりやつてゐて、自分の時間と云へば、新着の洋書を繙いて、新智識の吸收に努めるのだ。これもまた獨身なればこそである。世人はまた、校長が諸富豪に寄附をさせる上に於て、ペコ〳〵すると云つて攻撃をすると聞く。一理ある如くして無理な話だ。命は出しても金は出さぬと云はぬばかりに、力みかへる金持の多い今の世に、オイ寄附をして呉れ！の一言で、十千萬圓を投げ出す馬鹿がどこにあるか……たとへ美人養成學校設立基金だとても！況んや……

天下のお寳を集めるにお世辭の過ぎるは尤もの事、人は校長の微衷を諒として買ふだけの度量がなければならぬ。之に加へて麻生學監の經營の苦心。塘幹事の勞力、諸講師その人を得たる事などは、大いに謝する處があつてよからうと僕は思ふ。

△婦人教育家六傑

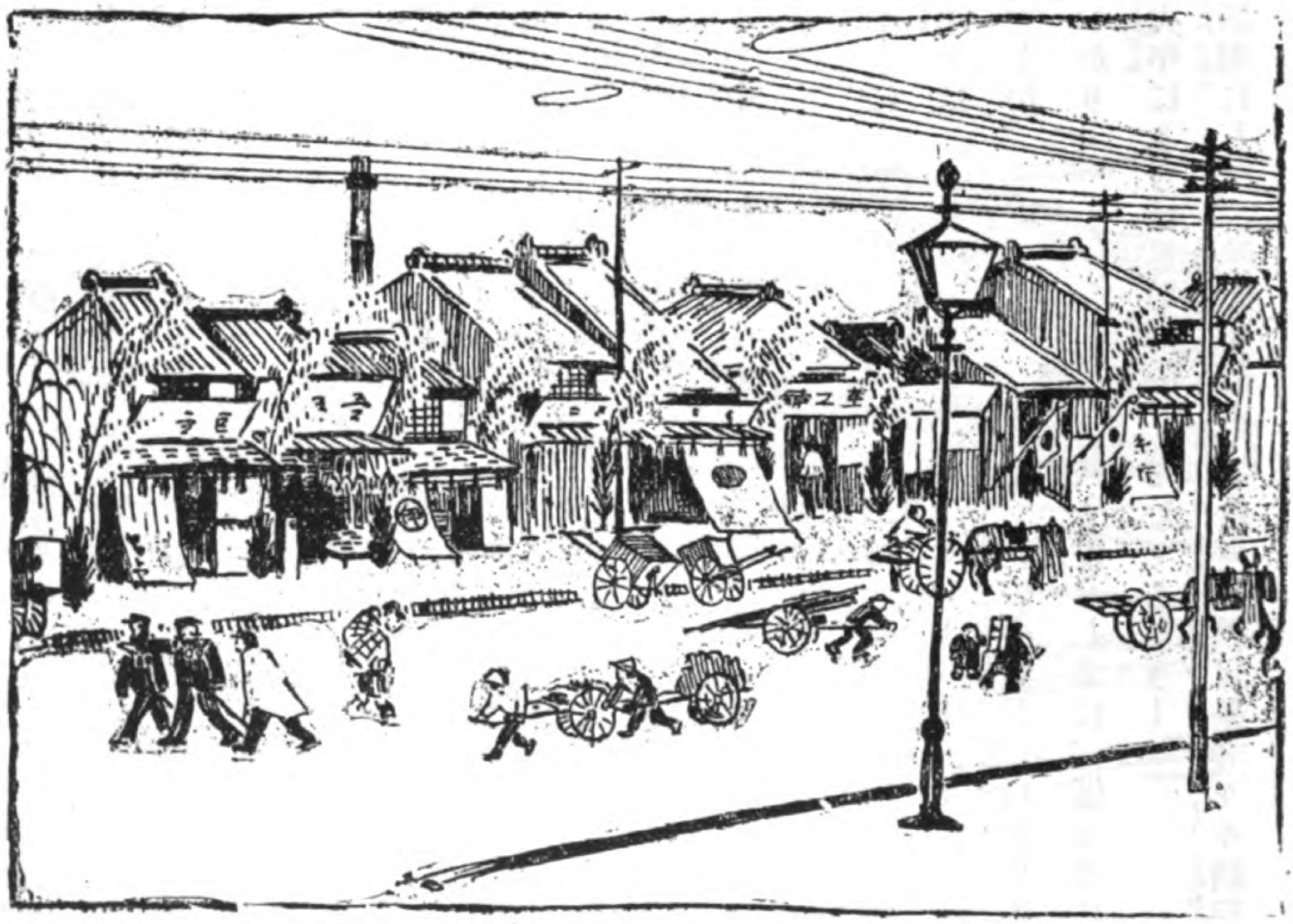
貴婦人の間には随分新らしい顔ぶれも殖えて來たが女流の教育者としては相も變らず、以前の儘である。下田歌子女史は何と云はれても頑として泰山の樣な處に偉大な點が在る。幾百千の門下生は師の君ほどエラくして完全な先生はないと信じ切つてゐるから大したもんだ。跡見花蹊女史は益々健にして、益々精力を發

輝しつゝある。日本の婦人に此人を持つ事をお互に心づよく思はねばならぬ。三輪田眞佐子女史もシッカリしてゐる。流石は梁川星巖先生の配たる紅蘭女史に仕込まれたゞけあつて、秋霜寒き威嚴がある、いづれの詩の會へでも、懐劍を帶の間に挾んで入り來り、ツツーと上座へ通つて、ピタリと坐し、おもむろに末座を見まはして。

「コレお若い方！　作れましたかな。出來たらこの婆がなほして進ぜる。」

と云ふを常としたこの利かぬ氣の紅蘭夫人の人格は、

東京の新年 (10) 三田四國町



眞佐子女史を通じて推知するに難くない。

利かぬ氣と云へば、山脇房子女史なんかも其一人だ女流敎育家としては比較的遲く出發したのであるが、此の意氣は女史をしてつひに今日の名をなさしめた。この點は嘉悅孝子女史なども同じである。たゞ嘉悅女史は濶達な氣象で、婦人には珍らしい開けた人と云はねばならぬ。某政治家が、女史の若き頃、その夫人に迎へんとしたのも理由のある事だ。

不幸にして潮風生はつねに懸け違つて遇はないが、

棚橋絢子女史も一方の旗頭である。右の人々を假りにわが女子教育界の六傑としておく。實はもう六人を加へて十二傑としたいのだが、不幸！わが管見の見る範圍の狹いセイか見あたらぬのである！！

△聲援法の二種類

孔子の曰つた樣に「一言智を現はし、一行愚を現はす」ものならば、一寸した運動會の應援にも、その校風と生徒の氣質は現はるゝのである。

潮風生は獨斷なる分類をなして、應援に學習院女子部式と、女子大學式との二つあると申す、學習院は大宮人の優にやさしく、

「赤、勝つやうに！　白、勝つやうに！」

と唇を動かすのである。女子大學では

「赤ア、赤ッ！　白オ、白ッ！」とか、

「赤ア、しつかり！　白オ、しつかり！」

と躍り上り〳〵應援するのだ。犬年にふさはしい聲援だと皮肉つた記者もあつたが、活潑にして、味方を激勵するのはこれが一番利目がある。

府立の女學校の如き、第一はどちらともつかず、第二に學習院式、第三は女子大學式である。更に進んで短い應援の歌を作り、又は外國大學のを眞似て、齊口を揃へて、

「フレー、フレー、フレー、ダイサン！」

だの。

「ラ、ラ、赤組、ラ、ラ赤組、赤組、赤組、フレー！！」

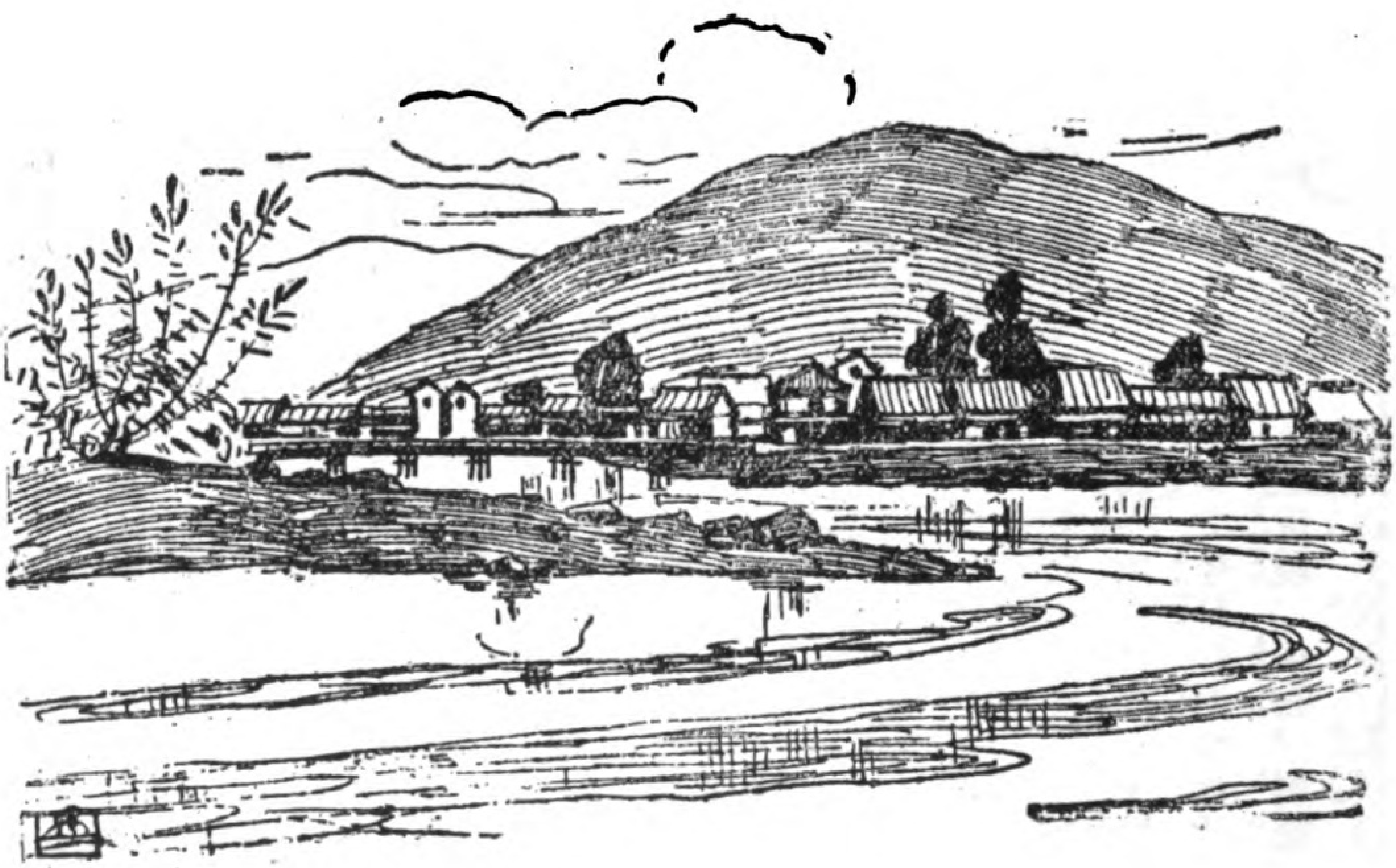
などやつたらどんなものだらう。田舍の婆さんは目を丸くするか知らんが、何、かまはぬ。すでにフートボールもやり、ロンテニスもやるからには、百尺竿頭一歩を進めて、より大くハイカラな應援法を講ずべきである。かの慶應義塾幼稚舍生が、銀鈴を振る樣な聲で「フレー、フレー、ケイオー！」を叫ぶ時の可愛い樣に、花の少女が、白布や赤布を打ち振つて聲を等しく叫ぶ愛らしさは、譬ふるにものもなく、云ふに言葉もないであらう！

今年の秋は是非々々新應援法をやつてほしいもの

だ。

△冬枯れの女學校

世には「フケイ木」と云つて植物專門の博士殿すら分類に苦しむものがある。「フケイキ風」と云つて氣象臺でも天文臺でも襲來を豫測出來ぬものがある。この木の茂る處、皆なの顏色は蒼くなり、この風の吹きまく處、商工業は沈滯する。學校にとつても此の二つは大敵だ。男女いかなる學校でも、最近の一年間は從來より入學志願者が減じたと云つてゐる、寄附金募集中の



學校も豫定額を募り兼ね、校舍を增築した學校も生徒はガランとしてゐる始末だ特に閉口してゐるのは私立の女學校だ。戊申の詔勅の結果を誤解した先生達もあると見えて、無暗矢鱈と財布の口を締めるから、不景氣が益々不景氣になる。私學校の財源の主なものは授業料である。生徒が少ないと夫れが減じるから、發展すべき必要事業も繰延べになる。教職員の手あてにケチ〳〵する。實にミヂメになつてゆく。

或人は說をなして曰く、學生の少くなつたのは女學

校が殖えたからだ！と又た曰く、イヤ日本人が女子教育に倦きたのぢや。と。そんな事はどうでもよい。吾々の聞かうとするのは理窟ではなくて、その結果である。いづれも同じ秋の夕ぐれ。どこも〳〵經營者は青息吐息、ガッカリ頓首の姿だ。技藝學校の種類のものについて聞くと、裁縫科が最も人員が多いさうな。卒業して潰しが利くからであらう。又た教員志願者も非常にある。將來融通が利くからであらう。世がセチからくなるにつれて、人の心が實利實用にばかり傾く樣になる。適者存續と云ふ意味から云へば、此際紛々たる私學校は倒れ去つて、立派なものほど殘つた方がよい樣に思はれる。しかし、設立者が非營利的に、獻身的に、心血を注いで盡してゐるにかゝはらず、時に利あらで、榮えぬのがある。谷中の技藝學校などその一例だ。

△梟の町に聳ゆる學舍

下谷區の谷中は自名自詮谷の樣な町である。花で云へば山茶花の樣に寂しさの滿つる町である。鳥に喩ふれば梟の町である。灰色と黑色の町である。然しながら光榮のアゼンスが梟より起つた如く、巖黑く水濁れるヨルダンの河の邊に、大豫言者ヨハネの出でた如く此の淋しい風の吹き卷く谷中からも、美しくかつ大いなるものが出なければならぬ！

などゝ景氣をつけて書き始めて見たが、事實、地が僻してゐるせいと見えて、こゝは學校區ではない。實質よきにかゝはらず經營がなか〳〵困難である。名からゆかしい初音町に數百坪の地を領して、去る三十四年畫家、島田春友氏が創立した日本女子美術學校は生徒が少くて物入りが多いので凹み、四十年に大改革があつて、福島甲子三氏が讓りうけたのである。商議員に朝野の名士三十幾人かを囑し、向ふ鉢卷でやり出し昨冬から日本女子技藝學校と改稱して、規則を更へ以つて今日に至つた。

裁縫、編物、刺繡、造花、繪畫(これは當分休み)の五課を置き、本科の修業年限三年、選科も同じである

校長は秋元子爵、校務監督は小山正太郎、戸野周二郎兩氏、幹事は前秋田女學校長の大野千畝氏。現在敎員事務員合して十一名、生徒の數は八十餘名、福島校主は年々二千圓以上損をしてゐるといふ。營利的學校多きなかに、本校の如きは珍らしい。聞けば生徒の品行もよいさうな。正直な者が榮えぬとは不思議な次第。全く惜しい學校である！

△各校寄宿のさま〴〵

高田早苗博士の寄宿舍に對する持論は、「寄宿は人材



の搖籃である。實社會に活動するは「寄宿舍製の人物」でなければならぬ」といふ點に歸着する由。是れ即ち寄宿は多人數集つて、お互に砌磋する事が出來るからなんだ。女でも殆んど同じであらう。然しかの一ぜんめしにも劣る賄の飯や、モクチンホテル（木賃宿の異名ぢや）的に狹い間に三人も四人も押し込めたその事が完全に近き人間をこしらへるのでない。

潮風生は過去一年に女學校の寄宿を參觀した數、一ダース半以上に上るが、その中で立派と感じたのは、

府立女子師範學校の寄宿で、經濟的なのは女子高等師範學校、二十六寮、棟をならべて人を驚ろかすは女子大學(寮監總代は平野濱子女史也)汚なかつたのは……略しておくが、一寸面白く觀たのは山脇高等女學校の夫れであつた。

こゝの寄宿舍には二種あつて、普通學生の方は普通の寄宿だが、卒業生の有志が今一年留る——云はゞ研究科——の寄宿舍は新工夫を凝らしてある。十何軒の長屋棟をならべて、一軒々々に玄關と臺所とがつき、一寸住める家に出來てる。間數は四間で、八、六、三、二疊敷、これへ五人づゝ割據するのだ。一ケ月の食費五圓五十錢、店賃二圓五十錢、一と月交代で主婦一名、下女一名を選み、あとは補助役となる。主婦は家長として一家の實權を握つて色々指圖をすれば、下女は水仕事から下つては賤しい厠のお掃除まで働く。かうして實地の經驗を積ますのは結構な事ぢやと思つた。此學校では校風として生徒の自治の觀念の養成に努めてゐると聞いたが、參觀しても心地よく感せられたのであつた。

△寧ろ廉價な女子教育

「女に學問は無用の長物だ!」

この一語は女子教育にとつては爆裂彈よりも恐ろしい聲である。しかし字を知るは憂の始りで、女賢しうして牛を賣りそこねると一概にもケナせない。社會は進歩する。男子も進歩する。婦人もこれに伴はねばならぬではないか。世界人類の過半數は婦人で、英雄も天才も、豫言者も、救世主も婦人の腹を借らずには生れるわけにゆかぬ。婦人教育は決して無用ぢやない。或人は曰ふ。金がかゝつてならんと。果してさうだらうか。

淺草なる第一高等女學校の責任ある計算によると、月謝、教科書費、文房具費、雜費を加へて、一ケ年五十二圓弱ださうな。この上へ食費、被服費、臨時費を加へれば、一人前の女學生が一年間に要する費用の總額が出るのである。日英博覽會へ出さんが爲め、女子

大學で作成したる表を參照してほしい。

△月　謝　五十六圓	△食　料　八十圓
△會　費　一圓五十錢	△書籍費　十四圓
△文具費　六圓	△被服費　十六圓
△洗濯費　一圓	△臨時費　十六圓
△雜　費　二十七圓	合計二百十五圓也

二百十五圓と云ふ金額は、五圓紙幣で四十三枚よりないのだ。勿論これが生活最小極限ではあらうが、僅僅二百十五圓で、口八町、手八町、足も八町――(誰ですか。合せて一里に足らぬなど〻惡口云ふのは!)――の才媛を養ふ事が出來るでないか。潮風生かつて嘉悦孝子女史の主宰する女子商業學校を參觀して寄宿の賄方に聞いた處、その日の献立によれば、舍生六十二人の食費總計朝が二圓二十二錢五厘、晝が二圓五十七錢五厘、夜が五圓四十八錢、一日の總額實に十圓二十錢であると註せられた。紳士諸彥が一人一夕の宴會費も、二圓三圓は珍らしくないではないか。高商卒業生は一人前の十圓の會費で卒業祝を紅葉館に開いたのも確かである。在來の如くんば女はマルデ男の奴隷だ皮肉なる一社會主義の叫びし『丸髷附一生ロハ』の高等奴だ。婦人はドシ〳〵敎育を受くる權利を有す。ただ活動が家庭を中心とするばかりである。女子敎育は頗る安値なもの、世に女子ほど養ひ安いものはないと思ふ。娘を持つ親御は先を爭ふて女學校に入學さすべし。若き妻を有する夫は、遲る〻を恥として、諸藝を習はすべし。智恵がついて惡結果があるならば、女子敎育の罪でなくて、女子敎育者の罪である。敎育家は坑に埋めて殺すもよからう。たゞ、女子敎育に呪ひの聲を放つ勿れと申して、御苦勞千萬なる、この長文の筆を捨つ(時に一月元日――と云ひたいが、實際は十二月五日午後十二時)





諸國正月物語

春告鳥

▲元日雜煮を祝はざる地方

元日雜煮を祝ふのは全國を通じての風習だが、ところによつて、元日雜煮を祝はない地方がある。信州安曇郡地方甲州東山梨郡などが、其れである。甲州の此の地方では、元朝家長は早起して若水にて嗽ぎ、惠方に向つて歳德神を拜し。家族と屠蘇を酌みながら、箸にするのは麵類で、決して雜煮を用ゐない。そして二日に至つて初めて里芋、胡蘿蔔、冬菜などを刻み込んだ雜煮を食するので、元日に雜煮を用ゆる家とては一軒もない。いや、正月三ヶ日麵類で打ち通ほして雜煮を用ゐない家さへもある。故に同地方では雜煮などは如何でも良し、麵類を食べざれば新年を迎へた心地がしない、トいつてゐるとか。世間も樣々なものである。麵類は大概饂飩で、釜揚の如く白茹にし、湯氣の立つた鍋の蓋を開き、溫いのを賞美する

▲甲斐山梨郡の一夜松

又右の東山梨郡では、三十一日に門松を立つるのを嫌ふて三十日になし、其他惠方棚も神棚も晦日にして、大晦日は心靜かに年を送るの風習となつてゐる。即ち迎春の準備は一切三十日にして、大三十一日には手を着けないのである。都大路の大三十一日は世の有らゆる雜踏を集めてゐるが、此處の大三十一日は浮世を離れた別天地で太古の三十一日は斯うでもあつたらうかと思はせる。

▲雑煮を祝ふ前に串柿

雑煮を祝ふ前に汁粉を食べる地方もあるが、備後三原地方では、雑煮を祝ふ前に串柿を食べる風がある。串柿一個を茶碗に入れ、茶の出花と共に、食べるので之は風邪引かぬ咒咀だといつてゐる。かと思ふと薯蕷汁を食する地方もある。静岡市の如きがそれである。尤も之れは雑煮を祝ふ前とは定らぬけれども土地の者は松の内に必ず之を戴くものと定めて、備後地方の者が串柿を戴くのと同じ様に嬉しがつてゐる。されば附近農家の婦女は、脊負籠に薯蕷を入れて、元旦より聲爽やかに、「山の芋や自然生ようござんすか」と賣りあるく。

▲備後地方の棒飴

正月の奇習は山陰及び北陸地方に特に多く遺つてゐるのである。備後三原地方の棒飴賣などは、著しいものであらう。同地方では正月三ケ日の間十歳前後の男兒が、「ばうあめーよイ、白あーめよイ、猫、猿、チユー〳〵」と無邪氣な聲を振り上げながら、十六（大阪地方のどいつの類）又は種々の遊戯をなす群集の處を撰んで賣りあるく、其の賣子は正月の小遣錢を資本にしてゐるので、富家の兒童も交つてゐるから面白いのである。若し兩親が許さなければ、こつそりと、家族の眼を忍んでも出るといふ風である。

▲玉飴、棒飴、福助飴

「折つても〳〵、福助飴、あめの中から福助さんが、によツこり〳〵」と松の内に賣つてあるくのは、加州百萬石の金澤地方である。此地方では、初市の買物戻りには、飴を土産に買戻る風習があつて、中にも玉飴棒飴、福助飴の三種は正月の延喜物となつてゐるので、正月に入れば、飴賣の數はどつと殖ゑる。玉飴といふのは鷄卵ほどに膨ましたもの、棒飴は名の如く棒の飴飴の中から福助の出るのは福助飴である。霜張つた正月の夜に、「棒あーめやイー」と呼びあるく聲は寒風に

響いてなか〳〵に哀れである。

▲正月三日のチンチコ祭

正月は儀式の月であるが、また不作法の月でもある。「不作法の月」を代表してゐるのは、三河國新地村のチンチコ祭であらう。同村は岡崎より四里ばかり隔れる地で、村の若衆連は揃ひの裝束、揃ひの手拭を被り、同じく揃ひの赤の着物を着し、大根を上下左右に打ち振り乍ら、太皷と笛にて拍子を取り、デン、デン、デノスケデン、と神社の前に集るので、舊曆三日に行はれる。――神社の前には猛火が燃えてゐるが、集まつた若衆連は、手に〳〵竹箒を持つて火の周圍を取り捲くやがて騷いでゐた群衆が火の薄らいだ頃を見計らつて、神前に供へてある大根蘿蔔又は白餅を取つて「惡病除」だと食はんとするを、それ！と竹箒を以て灰を四方八方へ跳ね飛ばすので、群衆は四方に逃げ廻はる。その逃げ樣がまた滑稽を極むるので、腹を抱へて、てんてこ笑ひこける。チンチコ祭、一名へんてこ祭の稱ある所以である。

▲近頃復興せる田祭

三河寶飯郡八幡村財賀の田祭もなか〳〵變つた所がある。之は維新迄は同國に鳴り渡れる正月祭であつたが、維新後廢れてたゞ老人達の噂に留るのみとなつたが、近頃又もや復興したと同國人から報知があつた。此村に在る財賀寺といふは古義眞言宗の古刹である。草創は行基で、中頃空海の中興にも拘はつてゐる。本尊は千手觀音で、鳥佛師の作である。扨て舊曆正月五日に爲ると、村内の老若男女は固より、附近の村民は悉く財賀寺に集つて、銘々鏡餅を携へ、左の唱歌を唄ふて、祝言の處作を試み、盆踊の如く狂ひ興ずるとは振つたものである。其の歌は、

□ウシンナ(善哉)田をつくる、カドメンナなつくる(作前田)。かどたんより。イリマンスルトホモニ(入逆田)、□ウシンナ(善哉)。ゆくところ、□ウシンナ。ハーサーコダレ(桑麻實種)根をひろめ、□ウシンナ。まいもまい(繭與麻)まいもきゝうんな、(麻繭可織)□ウシンナ。たごろもにほす(田衣繍)ウンナ(可織)、□ウシンナ。水く

めば、水持つともに、ヨウシンヤ。富ぞあるんや(富有)春田におりるなら、トウミヤウサ(稻實)の葉を、兩手に摘みれての、富へ斷ねるよノ、畦土よりも、裏田を看やればの、稻苗技面のナ溢さすトコオノといふので同地方の方言に熟れない者には、南洋土人の音調のやうで、ちッとも譯が解らないが、ヨウシンヤといふ聲が立つと、同地方の男女の中に俄に



▲下野地方の鍬入

春風吹きそめて、六七十の老婦老夫も、青春時代の昔に復へり、新年の祝福と、放樂とは洋々とした此の聲の中にとろけ入つて、さんざめくのである。因に同國砥鹿神社(國幣小社)でも舊正月三日に田祭が行はれ、鬼足神社では七日に執行せらるといふ。

＊　＊　＊

下野地方の鍬入は、右の田祭などゝは異り、一種の儀式を備へて又趣がある。これは正月十一日に行はれるので、當日年男は未明に起きて切火に、盥嗽に、身心を淨め、扨て所有の田畝に出て、小松に紙片を結ひつけて立て、その前に鍬を入れ、畝毎に一枚の紙を敷き、その上に小さい餅一ト重と田作洗米等を供へる。此の供物は延喜物で、左方を早稻の位とし、中央は中稻、右方は晩稻の位と定めてある。それを供へると遙に身を退いて、鳥來い、鳥來い、來い、と高く呼ぶので、若し犬猫などが來て食ふことがあれば不吉としてあるから、鳥の來るまでは、何時迄も／＼待つ。扨て鳥が飛び來つて啄みゆくと、左、中、右のいづれの方であるかを見定め、左方であれば早稻、中央であれば中稻、右方なれば晩稻は豐作だと定めるのである。斯くて鍬入が終れば、銘々自宅に近隣親戚を集めて、祝宴を開くといふ順序である。田祭のやうな馬鹿騷ぎはなくて、同地方では鍬入は神聖なるものとして重んせられてゐる。

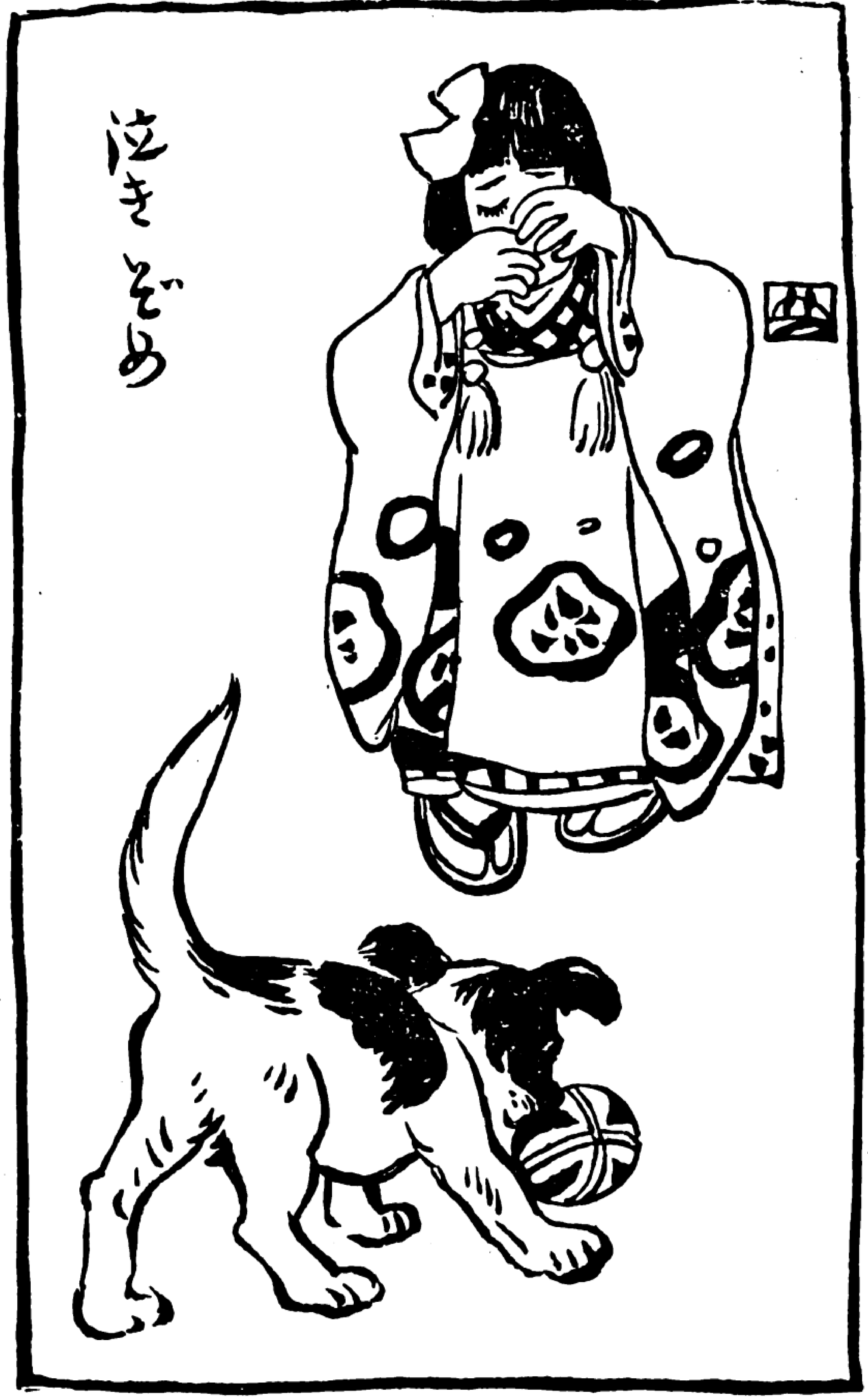
▲伊勢桑名郡のトンド

伊勢桑名郡赤須賀村（桑名より東二十餘町）のトンドといへば同地方では有名なもの。嘉例正月の十四日に行はれる。同村は白魚漁場の本場で、此日になれば、各組合より屈強の若者を總代に選び、トンド場に出だす。かくて當日になれば、村民一同業を休み、各自新藁、七五三繩、門松等を持ち寄り、トンド場（注連飾を燒くところ）に積上げ、その中央に高さ十五六尺の梯子を立て、その上に左義長とて白製の幟を附けておく、かくて總代の若者は、水に濕つた股引半纏の身装で控へてゐると、それ！と合圖の聲が出て、積み上げた薪に火のつくを見るや否や、飛鳥の如く幟を目掛けて火中に飛び入る。堵の如く集つてゐる群集は、贔屓贔屓に掛聲してゐる中を、我れ先にと爭ひ／＼、幟を取らんと競ふのである。で、第一番に左義長を下ろした若者の功名は言ふ迄もなく、白魚の漁業權も此の若者を出した組合の手に歸ると言つた風で、トンドは組

合に取つては非常の大事となつてゐるのである。

▲加賀能美郡の初寄

北國地方では正月十一日或は十五日十六日又は二十六日に町村に初寄が行はれてゐる。所謂組合酒といふものである。中でも加賀能美郡各村落の組合酒は、何人の創めたものか、頗る新式に出てゐるから一寸紹介しておかう。同郡地方では正月十六日に、神社又は寺院に集つて村約束を定る慣例は何時からとなく行はれてゐる。即ち賭博等不良の行爲ある者は、一同絶交する事、などいふ風俗改良の議も凝さるゝのである。之れは中越特に下新川の魚津地方では、火祭の二十六日に組合酒



があつて、町內の親密を厚うする慣例となつてゐる。

▲東北地方の小正月

前揭の加賀地方でも、一月十五日より三日間、小正月とて、松の內同樣の風習を繰り返へしてゐるが、小正月の風習の嚴重なのは、羽後の北秋田郡地方であらうか。同地方では十六日より向ふ三日間、すなはち十六十七十八日の三日間、柳の門松を立て、注連繩を張つて小正月を祝ふ事にしてゐるがむしろ大正月より重んぜられてゐる樣である。振つてゐるのは晩食後で、食後家內打ち寄り、豆を煎り、箕に入れて皮を擂り取り、家の周圍に蒔く。それを蒔くには

　豆の皮、率賀々々、錢と金と飛んで來い、長蟲は寄るな

と唄ひながら蒔くので、二三歲の兒童まで後に跟いて、長蟲寄るなと囃やす。かくて蒔き終つて夜に入れば門に出でゝ木で作つた法螺の貝のやうなものを吹き鳴らす。それから一夜寢につかずして鳥追に取りかゝる。

▲秋田地方の鳥追ひ

鳥追は十六日午前二時頃より初まる。追ひ來は若勢達で(若勢とて男子十五歲より四十二歲までの若連中を含む)總勢七八十名列を作つて行ふ。大鼓打つ者あり、笛吹く者あり、三四名が音頭を取つて

　朝鳥ホイ／＼、夜鳥ホイ／＼、是はどこの鳥追だ、長者殿の鳥追だ
　長者殿の圍地は、鳥のない圍地で、蟲と粟食ひ蟲の、あたま割いて、
　鹽つけて、鹽俵をまくつり込んで、佐渡が島へ流せ、弓矢も流れ、
　兇餓地も流れて、跡さ瓶はとんこと來た。

と讀み切れば、若勢一同どつと鯨聲を揚げて、ホーへ、ホーへと囃し、例の法螺の貝その間に交り、ホへ、ホーへ、ホーへ、と讀み、吹き、拍子揃へて、霜の張つた大地の上を練りゆく。……かくて鳥追終れば新婚者の家に押しかけ、秋田地方固有の惡戲が初まる。

▲新婚者の受くる嫁入の決議

鳥追の若勢はいづれも事面白しの連中とて、鳥追の列を亂すや、新婚者の家へどつと押しかけ、新婚夫婦を丸裸にして、冷水七柄杓を浴びせかけて興がる。尤も之れは啻に新婚者のみならず、他町村に入つてゐる旅人も、此の夜浮かと寢過ごした者も、皆な此の厄に逢ふのである。次に樽入の決議がある。これは銘々酒と肴とを持ち寄り、樽入宿に集むる決議で、當年十五歳になつた男子が若勢の仲間入する儀式にもなつてゐる宿は新婚者の分限者か、又は差障りなき家が當るので銘々應分の酒肴を携へ、其處へ集つて、正月の歡樂をつくす。當つた樽入宿は、身分に依り、別に酒肴の用意あるべきは無論である。婚姻は戀の終結とは當世時人の言草。が秋田地方では婚姻の際に此の社會的負擔がある。都會の兒女には、如何に見えるであらう。

▲元日の參詣は一年中の厄拂

再び元日に戻る。信州上田地方には元日別所なる北向觀世音に參詣する風習がある。然かも七里十里の遠方より來る者も多いので、觀世音は一年中の雜踏を元旦に現はすのである。といふのは同觀世音は厄除觀世音とて、その名遠近に知られてゐるが故で、特に男子の二十五歳、四十二歳、女子の十九歳、三十三歳、所謂厄年に當れる男女は、悉く此の觀世音に參詣するといふ勢ひ或は御幣を擔ぐ連中は、前厄後厄共に月詣をするといふ。可笑しいのは大三十一日で、同地方附近では、此の夜、村内の四辻に至り、年齡の數丈け、一厘二厘、又は文久錢を投げ散らして、之を厄落としと言つてゐるが、乞食の外は此の錢を拾ふ者がない。

▲注連繩の普及

東京の年の市は、深川八幡を幕開きとして、東京繁昌記中の大現象であるが、此の年の市に出る注連繩は南葛飾は若宮、堀部、小松川及南足立郡の寄塚附近の農民の內職に作るもので、最う一二月頃より取り掛り十月頃ます〳〵多忙となり、十一月の末に推し詰れば全村を擧げて、注連の製造に追はれる有様で、今は同

村落の特有產物となつてゐる。注連にも幾種類ある中に、帆船に用ゆる船注連の如きは、八十八夜前後より種を蒔き、七月下旬に至り、漸やく刈り取るので、注連の製作にもなか／＼苦心のある事は都人士は御承知あるまい。近年注連の需用は四方に擴がり、三四年來北海道、樺太は固より、朝鮮、臺灣等よりも注文が多いので、十六七年前に比ぶれば、その製造高は殆んど十倍に達したといふ。東京の風俗は、鐵道の延長につれて、漸次地方に傳播して行く。葛飾注連の普及と共に田舍正月の奇習奇俗も、漸次減少するであらう。



貴婦人の平生

鳩山夫人の日常生活

△朝起きてからお晝迄

朝は四時頃になると目がさめますから、床の中で其日にいたすべき事などを考へて、他のものゝ妨げにならぬ程度で早起きをいたします。それから、冷水摩擦は餘程以前から續けて居りますが、それを濟してよい氣もちになつた處で、新聞を一寸のぞきます。之れはほんのゝぞく丈けで、見出しを拾ふ位な事にして置いて、次に髪を結び衣更をして朝の御飯を頂きます、それから主人が出かけますから、後でまづ前日の會計をつけ、女中の用をきゝ、さて手紙の返事などを認めにかゝるのですが、其あとはもう電話がかゝる、お客樣がある、自分からも出懸けますといふ風で、つまり事の起るに從つて、それ相應の處置を取るので御座いますから、時間も順序ももとより不規則で御座います。

△無給で重寶な執事

鳩山の方の用も手紙の代筆はもとよりお使でも、私で濟むものは何でもいたして居ります。私がしなければ別に人を一人置かなければならないのですけれど、またそれでは辨じないものもありますから、滅多に書生などに話されない用件の種類によつては、矢張り私がいたした方が好都合でもあり、經濟でもあるといつたやうな譯で、執事とか書生のいたすべき役目をすつかり自分に引き受けて致して居ります。

△お交際の義理係

それに私はお交際に就ての義理係で、尤も若い人達のお友達などで、私共の知らない方への義理は嫁の方でいたしますけれど、共通にお知り申して居る方へのの義理は、すべて私が受持つていたして居るやうな譯で御座いますが、私共ではお交際の範圍もなか〳〵廣う

御座いますから、御慶びや御悔みの事はもう始終あるので、そのために出懸けます事も非常に多く、これ許りでも優に一仕事御座います。

△家事向は嫁の領分

しかし嫁を貰ひましてから家事向の方は一切委せて了ひましたので、大層私の荷が輕くなりました、其代り社會的に働く事を增して行き度いなど〻も考へて居ります、嫁に對しては、すべて私が嫁の時代に辛かつたこと苦しかつた事を改めて、かうして欲しいと思つたやうに仕向けることをつとめて居ります、献立の事などは隨分面倒にも思ひますけれども、しかしいひ付けられて、此方の氣に入るやうに出來さうと思つて心配するよりは、寧ろまかせられた方が却つて致しよいものである事は、私も經驗してわかつて居りますからお客などをする時でも初めから相談などはせずに、全然まかせ切つて了ひます。

△姑には內證の修業

私共の學校時代には、男子と同じ敎育を受けましたから、家庭をもつてから隨分困りましたもので、私などは嫁に參つてから職業學校へ敎へに參つて居るのを幸ひ、序に姑には內證で、裁縫のお稽古をして歸つたといふやうな事もございましたが、今日の若い人達は、學校で家事向の事を敎はる丈けあつて、さすがに違ひます、ことにお料理などは私共の嫁などでも餘程上手にいたします。それに何うしても料理人などの作らへます料理は、型にはまつたやうなもので、つひ同じやうなものばかりになりますが、學問をしたものは應用工夫をいたしますから、折々珍らしい御馳走が出來て、皆を喜ばせます。

△晩餐後の樂み

夜の御飯は家內中揃ふて樂しく頂きますが、時に主人達の歸宅の遲れることもございますから、さういふ

時は鳩山なれば私丈け待つことにして他の者は先きに濟し、一郎が遲い時には嫁丈けが待つて居るといふ風にいたして居ります。若夫婦と同じ家に居りましても、成るべくつまらないことで、事を煩雜にしないやうにと思ひますから……。食後はまあお互に面白い御話でもいたすのですが、此頃は鳩山が碁を打ちますので息子達も其お相手を二三番位してから各自の勉強部屋へ退きます、其間は私も勝手に自分の用事などをせずに傍で見て居りますが、私は夜分は本でも讀むとか、好きな仕事でもして居ればですけれど、手持無沙汰にして居ると直ぐ眠くなる方ですから、私も嫁に碁を敎へて二人で打たうかとも思つて見たりしますけれど、それも面倒なやうな氣がして其儘に過して居ります。（花菜女手記）



濱尾男爵夫人の家庭生活

△私が致せば女中の手が空く

日常の生活と申すものも、境遇によつて違ひますもので、私などは子供の居りました時と今とでは、大分變つて參りました。娘達が手許に居りました時分は、家事上のことを敎へますにしても、まづ自分がして見せなければなりませんから、お掃除でも勝手の方でも一緒になつて致したものですけれど、今日では家内

は少し、私がいたせば女中どもの手が空くやうな事になりますので、もうほんの指圖をいたします丈けで御座います。

△朝箒を持つて三十分庭に立つ

私は朝は早起きの方でお天氣がよければ必ずまづ庭に出て、三十分位箒をとります。これとても俥夫も居ります事故、私が受持つていたさなければならないと申す譯では御座いませんが、食事前に身體を動かさなければ御飯がおいしく頂けませんからで御座います。食後は新聞の新しい出來事に一通り目を通してから髮を結んで身じまひを致します。

△午前は接見、午後は訪問

そして今日のやうに御用談のある方には成る丈け午前中に御目にかゝる事とし、午後は何でもあれば、其方に出席いたすとか、或はまた訪問に出かけるとかいふやうな事にあてゝ居ります、私共では主人が不精で何方へも伺ひませんから、私が其代りにもなつて御無沙汰の御見舞をいたして歩きます。御交際と申しても私共あたりは別に廣い方ではございますまいけれど、たゞ大學の方丈けでもなか〳〵御座いますから、四季折々の御挨拶もこれで隨分多いのでございます。

△出かけない日の仕事

出かけない日には女中どもに縫はせます積りものでもいたしますとか、また自分でもボツ〳〵縫つて見る事なども御座いますが、お約束以外の御訪問客は矢張り午後から御出で下さいますから、時としては一日お客樣で暮らす事もあるのでございます、主人が歸りまして夜の御飯を濟まして了ひました後は好きな書物でも讀むとか、手紙でも書くとかいたします、書物は雜誌類新刊もの、和文ものも好んで讀みます。

△役目を持つ婦人會

毎日まあ斯んな事で過して居るのでございますが、

何と申しても子供がございませず、何方かと申せば、暇な身分でございますものですから、方々の會から御頼みでもあれば、つひ御斷りもしにくゝて出るやうな事になります。しかしさう數々のお世話は力も及ばぬ事で御座いますから、成るべくは御斷りをいたして、只今役目をもつて居りますのは、婦人衞生會と愛國婦人會とでございます。其代り關係いたして居ります會のためには、出來ます丈け責任をもつて盡したいと考へて居ります。



婦人會は結構だけれども着物の競爭は御免だと仰しやる旦那樣方も承つて居りますが、宅の主人なども手傳や何かで出かけやうとするから、つひ會に出席する方が少くもなるのだと申して、くれぐ〵も贅澤に流れないやうにと申きけますから、私も其邊の事には十分注意いたしまして、會に出ます時には大抵電車で參ることゝいたし、着物なども成る丈け同じ

ものを用ゐるやうに心懸けて居るのでございます。

△愛國婦人會

愛國婦人會も新聞ではいろ〳〵とやかましくいはれましたが、兎に角奥村女史の御骨折もあつて、折角あれ丈けの大團體にもなつた事で御座いますから、今更何か事が起つては、誠に殘念と存じますから、新聞などに名前を書き立てられるのは、うるさいと思ひますけれども、矢張り及ばずながら心配をいたして居るやうな次第でございます、一體婦人會に入る方が、もつと眞面目な考をもつて居て下さるとよいのですが、入會して浮調子で入らつしやる方が多いと、つひつまらぬ事が噂の種となり、其噂がまた飛んでもない大騷ぎを生み出すといふやうな事にもなるのでございます。

（若菜女手記）

後藤男爵夫人の官邸生活

△臺灣在住の時と今日

「居は氣を移す」といふ事のあります通り、其時の地位によりまして、日常生活の有樣も、自ら違つて來る樣に思はれます。私共も臺灣に居ます折は、大體に於て規則立つて生活をしたのでございましたが、こちらへ參りましてからは境遇上頓とさういふ生活をする事が出來なくなりました。從つて目下の生活は、コンな風ですと、規則正しい御話を申上げ難う御座います。

けれども、私の生活は主人とは元より責任がちがひますから、主人の樣に變化はありませぬ。それに主人はあゝいふ癇癪持の氣象ですから、少しでも落ち度がありますと、がみ〳〵申しますので、私はなるべくさういふ事で腹を立てさせない樣にと注意する事が、殆ど日常生活の大半を占めて居るのでございます。

△二階住居の運動

先づ居室の事から申しますと、私共は常にこゝ（官舎）の二階に居りますので、自然生活上に不便な事が多くあります。之れは主人もおなじく二階に居りますゆゑ、用事の都合上、自然二階に居るわけなのでございますが、一方から考へますと、これが却て運動を助ける事となりますので、下に居るよりは、場合によつては都合のよい事もあります。本來私は幼少の時には、非常に弱い身體でありまして、毎朝川に飛び込みまして冷水浴をやりましたもので、今日は止めて居ますが、若し二階に居りませんで、下にのみ居りました日には、運動が不足になりますゆゑ二階生活の方が大層よろしいと思つて居ります。



△起床と食事

朝は大抵五時半頃に起きます。そして洗面の後はお化粧をするでもなく、またきまり切つて新聞を見るでもなく、或時は手當り次第に新聞を見ながら臺所の監督をする樣な事もありますし、又時によつてはまだ洗面も了らない中に、來客を見る事もありますが、役人といふものは、いつ職を止めるかも知れませんゆゑ、地位のよい時に贅澤な生活をしてゐては萬一の時にこまりますから、食事なども成る丈け質素にいたして居ます。

食事は主人も私も、物の善惡を撰ばない方で、殆ど何でも構はないといふ流義でありますから、食事に就ては、三度共少しも氣を揉む樣な事はありませぬ。それ丈けは至つて手輕く參ゐるのであります。そして其食事も何時に必ず食卓に就くといふ事は、到底出來ませんから、手のすき次第、用の辨じ次第に、一家内が個々別々に濟ますのですが、それは境遇上仕方がないと思つて居ます。

又着物なども私は何でも構はないといふ流義で、垢さへついて居なければ、少しもいとひません。尤も綺麗な召物を見ますと、善い氣持は致しますが、これも前申す通り、人は贅澤に流れ安きものゆゑ、なるべく華美を避ける樣に致して居ります。

△茶話會と趣味

以前は私共の同窓で設けました茶話會に出席して、いろ／＼の趣味ある御話しなど承つたものでございますが此の頃は日々の來客、主人の仕事などの多い爲め、自然缺席勝ちであります。それですから他の會合などには、殆ど出席した事はありませぬ。恰度土龍の樣に一日中、こゝの二階と下とを往復して日を暮して居ります。

かういふ風ですから、何も特別の趣味などは持ちませぬ。その代りこれと言つて嫌ひなものもありませぬ音樂を聞いても、芝居を見ても、決して不愉快には感じません。併し目下の場合、到底さういふ事を樂んでゐる餘暇がないのであります。芝居なども五年に一回位やつと、行く位に過ぎません。

△別莊生活

日常生活中、唯一ッ變化があつておもしろいと思ひますのは、一週一度葉山の別莊に參る事で御座います。それは大抵は缺かさず行く事にして居りますが、時として參られない事もあります。それに主人は妙な性分で、明日別莊へ行くといふ事を考へて居ても、決して前日にそれを申しませぬ、いつも不意に汽車の出ると

いふ間際になつてから、おいそれと支度して出かけますので、若し私の出かけ際にお客樣が御見えになる樣な事があつて、一二分間でもおくれて玄關に出樣ものなら、直ぐ怒るといふ風でそれッといへば直ぐ支度して一足先きに馬車の中に、私が居る位にしなければ氣に入らぬといふ人ですから、どの道生活は主人が中心で御座います。その代り別莊へ參りました後は、全然官邸生活とは趣きがちがひまして、空氣がよくて運動も出來て、そして暢氣に一日を送る事が出來ますから、此の時斗りは生活が一變致します。此の外は殆ど不規則な生活に其日〻〻を送つて居ります。

（六尺鐵史）

有賀博士夫人

先づ私共で、毎晩休みますのは、夜の一時前後でございます。何故その樣に夜更かしをしてるかと申しますと、良人は毎夜十二時迄はどんなことがあつても、休みません。これはいろ〳〵の調べもので、夜を更かします、それが濟みましてから、子供などを集めまして種々のお話しをしながら、ビールを用ゐます。これは宅に居る時は、殆んど缺かさずやつてをります。

それで、良人は床に着きますと、直ぐ高鼾で眠むる習慣ですが、私は少し神經質のところへ、夜更をしますと、いよ〳〵神經が興奮しまして時としては終夜眠らず仕舞になる事も時々はあります。

△簡單な朝飯

其樣にしてゐて朝は大抵六時から七時の間に起きます。その起きまして寢衣を着代へます折に、毎朝冷水摩擦を致しますが、大層心地よく感じます。それから食堂を一通り見まして、大抵膳部の揃つた頃に、良人を起しますのです良人は妙な性質で、起きますと、直ぐに御飯をいたゞきますが、これは極めて簡單で、肉類や魚は朝は一切用ゐません。唯、生の卵を二個宛用ゐる丈けであります。その食事が濟みますと外に用事のあ

る時は直ぐに出かけますし、さもなければ書齋に入つた切り、晝までは一寸も顔出しはしません。

私は良人が食事を了つてから後に朝飯を頂きます。食事後は女中共と一緒に、いろ〳〵の仕事をしますので、人樣の樣に鏡臺にむかつてお化粧するなどいふ事は一切ありません。又新聞なども精しく眼を通した事はなくいろ〳〵と雜務に逐はれて居りますさうかうして居る中に晝になりますが、之れは極めて、簡單な料理で濟せて置きます。



△食物は一切手料理

私等は誠に簡單な生活ですから、別に珍らしい料理などいたしませぬ。又良人は料理に就て彼是とやかましく申しませんが、たゞ東京の料理はどうも甘過ぎていけぬと申しまして、例令御客樣があつても、容易に他から料理を取り寄せる樣なとはなく、皆手前料理で濟ませます。で良人の方は、ヤヽ濃厚のものを好みますが、私は極淡泊のものを撰み、魚類中では鯛などを好みます。

△主人の早食主義と晩餐

主人が外出先から歸りますのは、大抵午後五時でございますから、晩餐はいつも五時から六時の間でありますが、唯、外樣と異ふのは、一家團欒して晩餐を與にするといふ事はなく、歸りますと直ぐ膳に對ひますのが普通で、而かも御飯の喰べ樣が如何にも性急で一つの茶碗で、食べてる間に他の茶碗に御飯を盛らせて置きます、これは、女中などが盛る時間を潰すのを手ぬるくおもふのでせう。大きな茶碗二つを備へ最初の一碗が濟むと、直ぐ第二の茶碗を出す樣にして居ります。それゆゑ私はいつも傍に居りまして、

お魚の骨を取る役をつとめるので御座います。御茶は立ちながら飲む樣なわけ。

それが、濟みますと、かけ足で書齋に入り、それより十二時迄はむつしりと、何かの調べものを致してをります。

　私はその樣に早く御飯を食べる事はどうしても出來ませぬから、後からゆつくり頂くのですが、さて晩餐後は、私は大抵裁縫か、雜誌を讀むかの二つで、他に別段趣味を持ちません。尤も日本の音樂は、非常に好きですから、ちつとは琴などでもやつて見たいとは存じますが、良人は少しもその方の趣味がない計りでなく音響は非常に勉强を妨げると申して、少しも致ません唯、娘などに少しは敎へて置く必要があるとおもひまして良人の不在の折などに少しづゝ敎へもし、自分も樂しみますが、それも此の頃は娘は皆他へ嫁ぎましたから、頓といたしません。

△家庭生活上全力を注ぐ事

　今のところ、私の一身は全く良人の爲めに、盡して居りますから、殆んど外出などもする暇もございません。時折芝居に參る事もありますけれど、これとて年に一二度位が關の山、何しろ家庭の全部は凡て私を中心として居ますから、電話の取次から、お客樣の應對、皆致さなければならず、それに良人は私共の外出を餘り喜びませぬ上に、書齋からベルの鳴つた時に、一分でも後れやうものなら、直ぐ癇癪を起すといふ風ですから、少しも家を外にする事が出來ません。それゆゑ如何なる會合にも出た事はありませぬ。全くの世間知らずでございます。

△一家擧つての狩獵

　家庭生活は右樣の通りでありますが、併しいざ外出となると、一家打ち擧つて出るといふ流義でありまして、これだけはどうやら西洋流義で、秋に入つてそろそろ狩獵期になりますと、獵期の間は、毎週金曜日には朝早く一家打ちつれて、磯原迄獵にまゐります。こゝは直ぐ山に接近して居りますゆゑ、皆々辨當を腰にして、山坂を上り下りして、いろ〳〵の小鳥などを獲まして、一日の保養を致すのであります。これ等が僅かに生活の單調を破るものでありませう。

水仙花

（竹柏會同人）

○　西升子

潮けぶり空にかすみて伊豆の海や沖つ潮あひに年たつらしも

○　大河内國子

海志らぬ信濃そだちのはしためにかたりてきかす雨の湯の宿

○　松平岳子

見あぐれば初春の日のうらゝかに友どち語る紅梅のもと

○　山尾末子

君がひくピアノの燭の火かげうけてかすかにふるふコスモスの花

○　前田秀子

霜の夜をとく門さしゝ尼寺の書院の窓のともし火のかげ

○　酒井錦子



姪にかりし占の書に今朝の夢ひとりうらなふ水仙のもと

○　丹波貞子

津の國や武庫山おろし夕べなぎて綠の海を雁なきわたる

○　高木鍱子

夜は更けぬ月かげ寒し荒海の沖に釣するわが子いかにぞ

○　大塚楠緒子

黒金の船をも犠にとる海のとも見えぬかな瑠璃の朝なぎ

○　片山廣子

君が爲にいのちもかろく思ひつる少女の心老にけるかな

○　大澤國子

みぞれかも雨かも窓にさら〳〵と夜たゞおとなふいささむら竹

○　大村八代子

いにしへの少女おもほゆ綠葉の木かげをふみて奈良坂ゆけば　　高田雪子

○

山姫は衣おるらしもしら糸の千筋の瀧のきよくすゞしき　　原田信子

○

瀧見にと越えし山路のくるしさを語らひかはすともし火のまへ　　馬杉青琴

○

かぢめたく煙の末の打かすみ波ぎはあはきゆふぐれの海　　松本德子

○

榛名の湖底に生ひたる喬木の森にうまれしうぐひすのこゑ　　笠原君代子

○

相模の海かすみをとほす春の日に心なごみて遠き富士見る　　岩上勇子

○







客人のかゝるわざをと從妹らにわらはれながら桑つむあした　　山口桂子

○

梅咲きぬうぐひす鳴きぬされど猶たらはずとてか雪の花ちる　　山川柳子

○

すや／＼と枕ならべてねむる子のよく似し面を照らすともし火　　關屋愛子

○

世の海の荒きあらびを和むべく女子われを犧にとおもひし　　三角幾代子

○

をさなどちかはゆき手して小障子にうつす彼方向きこち向きの鳥　　安田倫子

○

勇しうひづめならして行く駒の若さにをあれ若きわが友



新年の歌

金子薫園

諸嬢が指折り數へて待たれた新年は來ました。冬の最中で、空は固く凍つて居るやうですが、其の凍つて居るやうな中へ、一筋の春の光りを導くものは、初日の影です。氣のせゐもありませうが、此の初日の光りは、尤も新年らしい心持を與へるものです。窓に射す日の影、柔らかに暖かに、春の心は早くも室内の人々の胸に漲ります。新年の街は靜かに整つて居るもので、初日の光りの流れる頃、盛裝した軍人と、着飾つた若い女の、しづ／＼歩いて行くのを見ますのは、特に目立つて、先づ新年と云ふ感じを與へるものです。それから、午すぎの街を若い女の群が、陸續と通つて行く時、新年の感じは酣になつて行きます。羽子の音や、凧のうなりよりも、此の若い女の群が笑ひさゞめいて、街を通るのを見る方が、晴れやかな感じを覺えるものです。西の京は三條の邊り、舞妓の豐麗な姿を初日の下に見るのも、亦心ゆくものがありませう。處で、古い歌にあらはれた新年は、陰暦で春めいて來る頃ですから、春の趣を歌つてありますが、今は然うは行きません、新年を迎へて新たなる心持を覺えるそれを詠むのです。冬の最中であるのに、初春の感じを歌つた所で、それは拵へものになつて、本當の心持のあらはれるものぢやありません。たゞ初日の光りを仰いで、春めいた趣をほのかに覺えると云ふのなら、差支へありません。諸嬢は自分が左に紹介する昔と今の歌を讀んで、此季節の違ひから起る心持を味ふのも、興味があらうと想ひます。

○

あたらしき年の初めに思ふどちい群れて居れば
嬉しくもあるか　　道祖王

これは思ふまゝ、感じたまゝを歌つたもので、古へ人の巧を弄さぬ、大まかの心持が、隱るゝ所なくあらはれて居ります。そこに、いかにも長閑やかな、ノンキさうな新年の趣きが傳へられてあるのです。新しい年を迎へて、思ふ同士が斯う集まつて遊んで居れば、たゞもう嬉しいことであるよの意。三句の「い群れて」の「い」は添へ詞で、意味がありません。たゞ「群れて」と言ふのと變りがありません。結句の「嬉しくもあるか」の「か」は「かな」の意で、疑問の場合のそれとは違ひます。

○

あたらしき年の初めに豐の年表すとならし雪のふれ
るは　　葛井連

これは丁度今年の御題の「新年雪」に適はしい歌です。此年の初めに斯く雪の降るのは、今年の豊年であることを顕め示すのであらうと云ふ意。ゆつたりと、暢やかに、其の歌自身が、既に豊年であると云ふ一年の運命を持つて居るやうです。古へ人の氣前の大きかつたことを伺へます。

○　大伴家持

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ
よごと

これも「新年雪」に當つて居ます。新しい此の年の初めに雪が降ることであるが、此の雪の如くに、一年中吉い事が積れよと云ふ意です。「よごと」は「吉事」で、目出度いこと。斯うあからさまに無邪氣に言つてあるので、「いやしけよごと」と云ふ比喩が少しも厭味に聞えません。後の人だと、感情に手入れをするので、巧みが加はつて、俗になるのです。此の時代の歌人は思つたまゝを飾らずに言ひ放つので、そこに天眞の流露を見るのです。飾らない心持があらはれるので、讀んで滯る處がない。此の作者は新年の雪に對して、然う感じたので、そのまゝを歌つたのであります。所が、

○

あらたまの年の初めに降りしけば初雪とこそい
ふべかりけれ

と云ふ歌、これはずつと後の「金葉集」に載つて、同じく新年の雪を、歌つたものですが、細工の痕が歴々と見えます。丁度年の初めに降つて居ることだから初雪と云ふのが當つて居ると云ふ意味です。此歌の主眼點は「初雪とこそいふべかりけれ」にあるので、之れがいかにも態とらしく、「丁度初雪と云ふのに可い」と心から出た聲でなく、何か奇抜なことを言つて見たいと期して居つたやうな跡が見えます。だから一寸見は、いかにも巧みで、工合よく出來てゐますが、段々讀んでゐる間に、厭氣がさします。諸君は何うか虚飾を取つたあからさまな心持を歌ふようにせられたい。

○　紀貫之

今日しもあれみ雪し降れば草も木も春てふなべ
に花ぞさきける

これも「新年雪」です。年改まる今日、雪が降りますので、草も木も芽を出す春と云ふにつれて花が咲くことであるよの意です。草も木もはる(芽を出すこと)を春にかけたのであります。「花ぞさきける」と云ふのが、誇張した言ひ方で、作者の得意な所でせうが、例の拵へたと云ふ弊を免れません。

○　源實朝

今朝見れば山も霞みて久方の天の原より春は來
にけり

今日は年が立つ日と云ふので、朝のほど、向ひの山を眺めると、ほのぼのと霞んで見える、あゝ空より春は來たのであると云ふ意です。調の

高い、俗氣のない歌です。「久方の」は「天」と云ふべき枕詞で、意味がありません。「天の原」は空を廣く大きく觀て言つたのです。實朝の歌は皆斯うした堂々たる趣があります。

○

しめこそは引きはえたれど山里はおのづからなる門の門松　　落合直文

しめは引いてあるが、山家は丁度門に生えて居る二本の松が自然の門松を爲して居ると云ふのです。山家の質素な生活が見えるやうではありませんか。作者が門松を詠んだもので、別に有名な作があります。それは、

○

一つもて君を祝はむ一つもて親を祝はむ二もとある松

と云ふのです。門に二本立てた松の、一本の方は大君の萬歳を祝することにしませうし、他の一本は自分の親の永い壽を得るように祈りませうとの意です。門松を斯う新しい觀方をして詠んだものは、從來の歌に見ない所であります。作者の人格の出て居る佳い作だと思ひます。

○

年立つ日城のひがしに鶴を見る竹の冠の人、玉の如き　　與謝野寛

韓國の貴公子が、元日に京城の東に出て、鶴を見ると云ふので、それは竹の冠をかぶつた、玉のやうに綺麗な人であるとの意です。「城の東」と云ひ、「竹の冠」と云ひ、「鶴」と云ひ、新年の瑞氣溢れるばかりです。然うして、よく彼の國の心持を傳へて居ります。寺崎廣業氏にでも描いて貰ひたい氣がします。

○

元日や長安に似る大道に遣羽子したる袖とらへけり　　與謝野晶子

「長安」は支那唐代の帝都です。その繁榮を極めた都に似てゐる此の大路に、羽子をついて居る美しい少女の袖をとらへたと云ふのです。興じて見た行人のさまにも、太平のすがたがあらはれて居ります。例の奔放な中に、ゆつたりした新年の趣が出て居ります。「袖とらへけり」と云ふのが、一首に生氣を與へて居る、此一句の爲めに全體が生動してくるのです。併し、之れは凡手のよくする所ではありません。之れを若し「遣羽子すなり美くしき子は」と言へば、何の面白味もなくなつて來る。二三句の「長安に似る大道に」と云ふ折角の奇拔な着眼も、生きて來なくなる。此邊の呼吸が作者の天分のあらはれる所で、女史の歌才の凡庸でないことを證明して居るのです。

○

新しきひかりを背にうけながら馴れたる暗になほ急ぐかな　　尾上柴舟

新しい年の光りを自分の背に受けて居りながら、心は少しも變りなく

わさ〳〵と舊年の暗路を辿つて居ると云ふのです。年は改まつても、改まつたと云ふ心持もなく、不安とか疑ひとか云ふ暗い感じが、依然として、自分の心を制すると云ふのです。

〇

鐘遠し風蓬々と武藏野の林を鳴らし一月あけぬ　金子薫園

新しい派の歌には、新年を題にしたものが、至つて少ない。それで烏滸がましくも自分の歌を引くことにしたのです。百八の鐘の餘音が遠く彼方に殘つて居て、木枯の風がぼうぼうと武藏野を吹いてゐるまゝで、一月の日が明けたと云ふのです。郊外に住つてゐて、實際に感じて出來たもので、つく〴〵荒涼な新年を迎へたと思ひました。

今一つ、自分の新年の作を引きます。

〇

あゝ初日御皺手あはせ屈み背にをろかむ祖父の面影に見ゆ

あゝ彼の初日を、祖父が皺手を合せて、こゞみ加減に拜んでゐる姿が目の前に見えるやうだと云ふのです。これは祖父の失せた翌くる年の元日に詠んだもので、祖父なき新年の淋しさを切に覺えました。

しかし、自分の言ひ知らぬ淋しみは、此歌の中に十分言ひあらはすことが出來なかつたのです。

京華高等女學校の新設

小石川原町酒井伯邸内

育英事業に熱心なる京華中學校主磯江潤氏は今回京華高等女學校を創立し來る三月新校舍の新築を落成していよ〳〵四月の新學期より授業開始の運びに至るよし、同氏が京華中學を創めたるは去る三十年にして以來十數年間の熱心なる經營は校運の隆盛を致し、其間に商業學校をも併置せしめ、英才を出すこと數百千人、而かも校風堅實にして操守ある教育振りを示し、江湖の信用を博するに至れり、爾來氏は女子教育の必要を認め數年前より其の準備をなせしが今回いよ〳〵これを實行するに至りしなり、學校の主意は浮華を避け實務の應用に重きを置き家庭の主働者として適當なる女子を作るにありといふ

新年笑話

良人待遇法の秘訣

芙蓉

世にむつかしきは男の心なりけり、怒て居るのかと思へば實は喜んで居るのであつたり、嬉しいのかと思つてると内心は怒て居たり、どうして〳〵底に底あり、さればこそ妻なるもの〻氣苦勞は並大抵の事にあらずさるを世の男共は口に税がか〻らぬと思つて内心如夜叉だとか、七人の子はなすとも女に心をゆるすなとか果ては大蛇にまでなぞらへて云ひたい三昧の惡口も、天保時代の女ならいざ知ず、いやしくも明治聖代の教育をうけた人がどうして堪えて居られやう、鬱憤の發する所、或は同權論となり或は獨身論となる。

然しながら御互樣に、とやかう理窟は云ふもの〻、女と生れた因果には、おそかれ早かれ一度は契る柿の實の甘い澁いは運次第、泣きつ笑ひつ老ひて行かねばならぬ約束百年の苦樂男子によると相場のきまつて居るものなら是非もなし、どうせ踏むべき道ならば愉快に歩みたいぢやありませんか、千歳の色樣々の出來榮も元之つる一筋の心から、ギユッと一つ急所をさいおさへてしまへば案外やさしい物とやら、諺に龜の甲より年の功で、ねさせつ起つの操り方を少しは知つて居るつもりの世迷言、笑はないで御聞き下さい。

一、柔順にして愛嬌あるべし

男の眼には學問よりも人柄よりも先第一に容貌が注意を惹くさうな、女と名のつくからはあゝ美しうは生れたいもの、さりながら美人ばかりが幸福で醜婦は不幸かと云へば日本二千五百餘萬の女は九分九厘まで泣いて暮さねばならないが、そこはそれ御方便なものでたで喰ふ蟲もすき〴〵で心配したものではない、が飽き易い男の愛を衰へ行く顔色にのみまかせて置く譯には行かぬ、先づ第一に柔順なるべし、つぎに愛嬌ある

べし、柔順ならぬは花に色なきが如く愛嬌なきは花に香なきが如し、両者は實に女の生命である。何陳腐だつて！　默つておきゝ柔順なれと云つても何も自覺なき人形のやうにと云ふのではない、愛嬌あれと云つても決して笑つてばかし居れと云ふのぢやない、笑ふべきときには大に笑へ、泣くべき時には大に泣け、時にはプン／＼と腹を立つべし、何でもない事に涙を流すのもまた必要である、たゞこゝに注意すべきは直にケロリと機嫌をなほす事である。度を過ぎたら



ぶちこはしだ、要は良人に今泣いた烏が早笑た、女と云ふものは罪のなきものなり、又可愛きものなりとの念を抱せなば足る、そこの呼吸を呑み込で平常は右を向けハイ、左をむけハイと、素直に叱れても笑顔を崩さず不用意にふくれてはいけない、

二、身だしなみを忘れず厭味なく粧ふべし

女は顔より髪かたちで、眼の若いポツト出の初心な男ならいざ知らず、少しく世故に長

た中年以上の男子はどうして〳〵花の顔位では承知をしない、新嫁のするやうなこツてりと暑苦しい厚化粧にめかし立てさいすれや、男は堪能するものだと思ふは大ちがひ、それも女がいつも十九や廿の色盛りで居られるなら知らず、實際の所ちりめんじわのよつた顔へ白粉こてぬりの、毒々しい華美作りは恐れ入る、身だしなみと云へば御めかしの事と早合點しない事、厭味なく粧ふた心掛けなくちやならない、ばらや牡丹は娘の事だ人の妻となつた上は山茶花の淡白とつくらぬ所に風情を見せる事、と云つて磨なと云ふのぢやない磨て〳〵磨ぬいてクツキリと垢拔のした其自然の美にうたせてやるのが肝腎だと云ふのだ。總じて廿前後は春も最中だから身だしなみにも柄模樣の好みにも花やかにあでやかにと、心掛け、卅の聲をきかば緑したたる夏なれば吹く風かほるゆかしい時代と心得て、意氣で高尚で、人柄で、粋な〳〵とりなりを喜ぶ、もしそれ四十にも達しぬればいかに若く見えやうともたゞ一時の返り咲にすぎない、いづれは枯るゝ身となるを忘れず夢にも派手を思はず澁味を好み物事さびと風韻を尊ぶべし。かくて露も滴る髮は無造作なる銀杏返し若くは根のやゝ下つた丸髷に、素鼠の御召に濃納戸の博多の帶シヤンとしめて、脂粉の氣もなき透るやうな美しい血色の豊頰に笑を湛た、スラリとしたる立ち姿あゝ此奥樣ぶり、いかで有情男子の魂を奪はざるべきぞ六十越して廿臺の花嫁もらう人は此限にあらず、

三、顔面の表情に注意すべし

表情とは秋波をよするの謂に非ず、表情とは口を開きてハー〳〵と云ふの謂に非ず。眞情の流露する時目にも止らぬ微細なる顔面筋肉の働きを云ふ。嬉しければ自口元ゆるみ怒れば眼の色變つて額に青筋を表す、笑へば目尻にしわを生じ白歯を現じ、なけば諸々の筋肉の收縮を來すなど、是等は凡て自然の作用で、教へて教へられるものでない、がさうかと云つて自然のまゝに捨て置かず、出來うるだけ人力をもつて補ねばならぬ、同じく泣くにして、海棠の雨になやめる風

情もあれば、大雨に洗はれた枯木のやうなのもあり、傾國傾城の笑もあれば狆がくさめをしたやうな笑もあるいかに、愁を分つ妻と云つても水上げかねし牡丹花の艶になやめる姿と、梅雨の空見たいな凄んだ顔色といづれか快くいづれか不快か、表情法の必要こゝにあり、一顰一笑もいやしくもせず充分研究に研究をかさねて良人に對すべきである。



四、談話法の上達を圖り人をして飽かざらしむるを要す。

一家の主婦となつて餘りに寡言沈默では家庭が何となく陰氣で濕つぽく感ぜらるゝつねに心掛けて面白く話す事を忘れぬやうにせよと云つて御しやべりを奬勵するではないが良人の話相手になつて共に語り共に興ずるだけの素養はありたいと云ふの

だ。話し上手は又聞上手で人の話を熱心に同情を以て一生懸命にきくやうにするからよい、同じ事ながら話手の意氣込みが違ふ又いかに上手に話せても其話題は千篇一律、家庭のごた／＼やら流行の事やら衣裳の事やら演劇の話、知己の月旦ではいつしか相手に飽れてしまう、どうしても淺薄ながらも一通りは社會萬般の事に通じて居てもらいたい、國務大臣の名や、重なる政治家の名、各國駐在の大公使の名位は知つて居り、海軍の大將は誰々、軍艦の數は何隻、陸軍で師團がいくつあつて歩兵と各兵科の割合はこれ／＼、官立の大學は何程あつて博士の數は何人位諳じて居たく、相續法の大意、婚姻離婚の民法上の定規はかう、何某は當今文壇の大家で、何々は近時の佳作である、日本畫には派がいくつあつて其巨匠は誰、水彩畫と油繪とはどう違つてゝ今年の展覽會の一等は誰の何と云ふ作だつたなどは、話が出來、碁や將棊は見て居て分る程には知つて居り、相撲の話も演劇ほどには知つてると都合がいゝ、かくてこそ我妻共に語るべしと良人の滿足は豫想の外のものがあらう。

五、知つて知らぬ風、きいて聞ない風をすべし

何事も知ないほど床しい事はない、いかほど深くある學問も表へひけらかしては其奥行もしれる心地し片腹いたきものである、況やよくも知らぬ身の知つたか振りのいけ好ないつたら、學問にもせよ、世事にもせよ決して己れのよく知るを進んで人に見するなかれ、良人が物珍さうに語る話はたとへ自分がなにほど深く知りぬいてる事柄にもせよ初めて聞た顔をして感心してきくべし、忘れてもそんな事はとうから知つてるわと鼻の先にあしらうなよ、良人が平生の行爲やら行先などはひそかに注意して細洩さず知つて居ぬととんだ恥をかく事がある、そして或程度までは知らないふり氣のつかぬふりをしてる事なり、殊に自分の眼を忍んで外に増す花の出來た場合などは大に怒り、どこまでもお目出度く出來てるやうに見せて良人をして歡與

博文館は毎月十五種數十萬部の雜誌を發行すると共に時代の要求に應じ社會百般の新書を發刊致し居り候、今や庚戌の新年を迎ふるに際し、茲に昨一ヶ年間の新刊書を掲げて本誌愛讀者諸彥の劉覽に供し候。總計貳百二十餘種皆是れ最新の選に係れるもの、希くば充分御利用を得て陸續御用命あらんことを。

	著者	書名	體裁	正價（円 拾錢）	郵稅（拾錢）
◉	國府犀東君著	大日本現代史	（上卷二三〇〇頁下卷一〇〇〇頁）（菊判二册）	上卷二五〇 下卷二〇〇	一六 一二
◉	文學士 齋藤隆三君著	近世世相史	（菊判一〇〇四頁）	二二〇	一二
◉	北越新報主筆 今泉鐸次郎君著	河井繼之助傳	（菊判四六六頁）（總紙數二千餘頁）	一五〇	一二
◉	故鳥谷部春汀君著	春汀全集	（全部三册菊判洋裝美本）		
◉		第一卷 明治人物月旦 前編		一五〇	一二
◉		第二卷 明治人物月旦 後編		一五〇	一二
◉		第三卷 各種の評論		一五〇	一二
●	天生目杜南君著	評傳 芭蕉	（四六判二四二頁）	三五	四

（◉洋裝上製符　●洋裝並製符　㊂和裝上製符　△和裝並製符）

	著者	書名	體裁	正價（円 拾錢）	郵稅（拾錢）
●	井上泰岳君編	現代名士の實談 我半生の奮鬪	（菊判三二〇頁）	四八	八
◉	田中萬逸君編	現代名士の實談 死生の境 前編	（四六判四九四頁）	七五	八
◉	文學士 大町桂月君著	關東の山水	（四六判五二〇頁）	一〇〇	八
●	同君著	行雲流水	（菊半截三一〇頁）	三〇	四
◉	神谷右終君編	東海道旅の友 車窓の名勝觀	（三六判二七五頁）	四五	六
●	讀賣新聞記者 松川木公君著	樺太探檢記	（菊判一八二頁）	三八	六
◉	陸軍歩兵中佐 日野强君著	伊犂紀行（全二册）▲上卷日記の部 ▲下卷地誌の部	（菊判七二六頁）	二六〇	一六
●	押川春浪君著	中村春吉 自轉車 世界無錢旅行	（四六判三四二頁）	三八	六
◉	坪谷善四郎君著	世界漫遊案內	（四六判七〇六頁）	一七〇	八
◉	文學博士 姉崎正治君著	花つみ日記	（四六判六〇〇頁）	一三〇	一二
◉	淸國駐屯軍司令部編纂	天津誌	（菊判六九二頁）	二五〇	一二
●	小川運平君著	滿洲及樺太	（菊判三五〇頁）	九〇	八

明治四十二年ヶ年間博文館新刊書

書名	著者	判型・頁數	正價（円・拾錢）	郵稅（拾錢）
● 初等 農業經濟及法規敎科書	農學博士 稻垣乙丙君監修　農業敎育協會編纂	（菊判）	三〇	四
● 初等 作物病蟲害敎科書	同	（菊判）	三〇	四
● 初等 肥料敎科書	同	（菊判）	三〇	四
● 初等 土壤學敎科書	同	（菊判）	三〇	四
● 初等 栽培通論敎科書	同	（菊判）	三〇	四
● 初等 養蠶敎科書	同	（菊判）	三〇	四
● 初等 造林敎科書	林學博士 白澤保美君監修　農業敎育協會編纂	（菊判）	三〇	四
● 夏秋蠶飼育法	蠶業專攻 高見竹次郎君著	（菊判 一八〇頁）	三五	六
● 養蠶豐作 改良蠶室法	農學士 日下部準太郎君　石田孫太郎君共著	（菊判 二一二頁）	四〇	六
● 竹林保護繁殖法	林學士 安藤時雄君著	（菊判 二〇八頁）	四〇	六
● 農業土木學	農學士 鈴木敬策君著	（菊判 三一〇頁）	並四〇 特五五	八 八
◉ 日本區分 農事曆（四國ヶ州の部）	稻垣農學博士　三宅千秋君共著	（菊判）	四五	六
同（中國地方）	同	（菊判）	四〇	六
同（北海道の部 附 樺太）	同	（菊判）	四〇	六

（◉洋裝上製符　●洋裝並製符　㊀和裝上製符　▲和裝並製符）

書名	著者	判型・頁數	正價（円・拾錢）	郵稅（拾錢）
● 牧場の經營	農學士 岩波六郎君著	（菊判 一六〇頁）	四八	六
● 害蟲驅除法	農學士 谷口熊之助君　逢坂重助君共著	（菊判 二〇〇頁）	四五	六
● 賞花食用 百合栽培書	農學士 佐々田源十君校閲　水野勉君著	（菊判 一七五頁）	四〇	六
● 牛乳と乳製品の研究	農學士 鈴木敬策君著	（菊判 二一八頁）	四五	六
◉ 水產養殖	脇谷洋次郎君著	（菊判 二五〇頁）	八五	八
◉ 實驗園藝講義	農學士 恩田鐵彌君著	（菊判 三六〇頁）	一、二〇	八
◉ 新式獨習 農家帳合法	山下與之助君著	（菊判 一八〇頁）		
◉ 農學校用 物理學初步	農學博士 稻垣乙丙君著	（菊判 一八八頁）	六五	六
◉ 天然瓦斯鑛業	日本石油會社技師 渡邊貞太郎君著	（四六判 一五〇頁）	六五	六
◉ 室內裝飾 家具圖說	井上繁次郎君　大塚健吉君共著	（太陽判 橫綴）	一四〇	一二
◉ 庭園圖說	近藤正一君著	（太陽判 橫綴）	一五〇	一二
◉ 新撰 製版印刷術 上卷 石版之部	東京高等工業學校敎授結城林藏君校閲　陸地測量師田中孫六君著	（四六判 三八二頁）	一二〇	八
◉ 同 中卷 アルミニューム版 亞鉛版 コロタイプ	同 君著	（四六判 三三六頁）	一二〇	八

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

◉ 同	同 下卷 製版用寫眞網目版、亞鉛凸版	(四六判)	一二〇	八
◉ 工學士 秋元繁松君著	鐵筋コンクリート拱橋	(四六判 一四〇頁)	八〇	八
◉ 工學士 丸澤常哉君著	硫酸及硝酸製造法	(四六判 三四五頁)	一二〇	六
◉ 農學博士 高橋偵造君著	最近 清酒釀造法	(菊判 九七五頁)	二八〇	一六
◉ 理學博士 齋藤賢道君著	東洋產有用醱酵菌	(菊判 二二〇頁)	一二〇	八
◉ 工學士 保科貞君校補 關口定伸君著	電機取扱問答	(最小判 七七頁)	一五	二
● 笠原正樹君著	最近廣告術	(四六判 三〇〇頁)	四五	六
● 實業少年主筆 石井研堂君著	進步的經營論 小賣商店繁昌策	(菊判 三一四頁)	四八	八
◉ 法學士 野依辰治君 法學士 宮下滿彦君共著	最新實用 商用英語通信	(四六判 三四〇頁)		
◉ 法學博士 井上友一君著	自治要義	(菊判 三〇四頁)	五五	八
◉ 衆議院議員 加藤政之助君著	產業政策	(菊判 三一七頁)	六五	八
◉ 內務省參事官 法學士 井上友一君著	救濟制度要義	(菊判 五六〇頁)	一五〇	一二

(◉洋裝上製符　●洋裝並製符　◬和裝上製符　○和裝並製符)

◉ 米國セーリグマン氏著 關口法學士譯	租稅轉嫁論	(菊判 三九六頁)	一二〇	八
● 法學士 工藤重義君著	國債論	(菊判 二九二頁)	並四〇 特五五	八 八
● 同君著	國債史	(菊判 二七四頁)	並四〇 特五五	八 八
◉ 伊東祐穀君著	明治四十一年 世界年鑑	(太陽判 一五六頁)	七〇	一六
◉ 同君編	明治四十二年 袖珍世界年鑑	(四六判 六二二頁)	九〇	六
◉ 東京市役所編	四十一年度 東京市勢調查概數表	(太陽判 一七〇頁)	九〇	八
● 同所藏版 坪谷善四郎君著	各國 都市事業一斑	(菊判)	四〇	六
◉ 法學博士 有賀長雄君著	中等 法制教科書〔文部省檢定濟〕	(菊判)	六〇	八
● 山田富太郎君著	註解 戶籍事件申請届出書式	(四六判 三六〇頁)	三八	八
● 法學士 島田鐵吉 法學士 宮城長五郎君共著	刑法論	(菊判 三一〇頁)	並四〇 特五五	八 八
◉ 工學博士 寺野精一君著	海事叢話	(菊判 二三四頁)	四〇	六
● 陸軍氣球隊長工兵少佐 德永熊雄君閱 大浦元三郎君著	最近 世界の飛行船	(菊判 一八五頁)	五〇	六

(3)

商工及法制兵事書類

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

記號	書名	著者	判型・頁數	正價（円拾錢）	郵稅（拾錢）
⊙	醫學新書 鼻科學 前編	醫學博士 久保猪之吉君著	（菊判 三五〇頁）	二〇〇	八
●	時代と文藝	樋口龍峽君著	（四六判 三五六頁）	四五	六
●	婦人國	法學士 桐生悠々君著	（三六判）	四五	四
⊙	評釋 新古文範	田山花袋君 前田木城君共著	（四六判 五三六頁）	七〇	八
●	北米世俗觀	田村松魚君著	（三六判 二六二頁）	三五	四
⊙	東湖全集	文學士 菊池謙二郎君著	（菊判 一一三〇頁）	二五〇	一六
△	古文眞寶新釋	文學士 久保天隨君著	（全二册 菊判 前集六三二頁 後集七〇〇頁）	前集七五 後集八五	八 八
△	師範學校入學準備 漢文自修讀本	光藤泰次郎君 朝夷不二雄君共著	（菊判 二八八頁）	四五	八
●	國語學概論	文學士 龜田次郎君著	（菊判 三一八頁）	並四〇 特五五	八 八
◬	女子作文法	遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史共編	（四六判 三三二頁）	四五	八
●	美辭類語集	文學士 久保天隨君著	（四六判 三〇〇頁）	三五	六
⊙	新式 小說辭典	海賀篤磨君編	（三六判 一〇八六頁）	一二〇	一二

《⊙洋裝上製符　●洋裝並製符　◬和裝上製符　△和裝並製符》

記號	書名	著者	判型・頁數	正價（円拾錢）	郵稅（拾錢）
●	小說作法	田山花袋君著	（四六判 三〇[illegible]頁）	三五	六
●	短歌作法	窪田空穗君著	（四六判 三〇五頁）	三五	八
⊙	日本歌選 上古之卷	佐々木信綱君撰	（四六判 三二四頁）	八〇	六
⊙	散文韻文 野菊	大和田建樹君著	（菊半截 四九〇頁）	四五	六
◬	歌の手引	佐々木信綱君撰	（菊判 三二四頁）	四五	六
⊙	和歌文庫 定家歌集	同君撰	（菊半截 二三〇頁）		
△	唐詩選新釋 全五册	文學士 久保天隨君著	（菊判 三四〇頁）	各三〇	各六
●	俳句作法	內藤鳴雪君著	（四六判 三二四頁）	三五	六
△	最新一萬句	今井柏浦君著 中村不折君畫	（四六判 六八〇頁）	七〇	八
●	芭蕉句集講義	角田竹冷君著	春の卷（三一〇頁） 夏の卷（二六六頁）	各三〇	各六
●	古今滑稽俳句集	今井柏浦君編 小杉未醒君畫	（菊半截 二四〇頁）	三〇	四
●	鳴雪俳話と評釋	內藤鳴雪君著	（四六判 三八三頁）	三八	六
●	古今女流俳句集	今井柏浦君編 榊原蕉園君畫	（菊半截 二七六頁）	三〇	四

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

符号	著者	書名	判型・頁数	定価	郵税
⊙	山崎紫紅君著	史劇十二曲	四六判 五六〇頁	九五	八
⊙	土居春曙君著	新譯 社會劇	菊判	六五	八
●	下村環君作歌 牧野錦光君作譜	新曲 哈爾賓	四六判 横綴	一二	二
⊙	幸田露伴君著	名家小説文庫一編 露伴叢書 前編	菊判九七七頁	二〇〇	一六
⊙	同	名家小説文庫二編 露伴叢書 後編	菊判九九〇頁	二〇〇	一六
⊙	塚原澁柿君著作	名家小説文庫三編 澁柿叢書	菊判約千頁	二〇〇	一六
⊙	廣津柳浪君著作	名家小説文庫四編 柳浪叢書 前編	菊判約千頁	二〇〇	一六
⊙	故川上眉山君著作 總紙數三千二百餘頁 全部六圓貳拾錢	眉山全集	全四冊 菊判	各八〇	各一二
●	江見水蔭君著	探検實記 地中の秘密	菊判 三二六頁	五八	八
⊙	小波、澁柿、風葉、秋聲外七君作	小説十二人集	菊判 四一二頁	八五	八
⊙	田村松魚君著	北米の花	菊判 三七二頁	一四	八
●	獨逸チヨツケ氏原著 司馬亨太郎君譯	立志小説 黄金村	菊判 三一二頁	四八	八

（⊙洋裝上製符　●洋裝並製符　◬和裝上製符　△和製並製符）

符号	著者	書名	判型・頁数	定価	郵税
⊙	博文館編輯局編	講談 忠臣藏	四六判 六〇〇頁	五五	八
⊙	島崎藤村君著作	小説 藤村集	四六判 四八八頁	七五	八
⊙	相馬御風君譯	短篇六種 ゴーリキー集	四六判 三一〇頁	四五	六
◬	高橋忠次郎君 松浦政泰君共著	家庭遊戯法	菊判 三〇〇頁	四五	八
◬	鹿野化骨君著	魚鳥家畜の飼養	菊判 二九四頁	四五	八
●	柳松齋井口義爲君著	劍舞大鑑	四六判 二五八頁	三五	六
△	本因坊秀哉君 稲垣兼太郎君著	新撰碁經 圍碁の礎	半紙刷 和本	八五	六
●	慶應義塾蹴球部編	ラグビー式 フットボール	三六判 二四〇頁	二五	四
●	中村青江君著	新案福引 附輸入地口百番 室内遊戯	三六判 一六四頁	一八	四
●	文藝倶樂部記者 海賀變哲君著	日本 文學遊戯大全	四六判 三六〇頁	四五	六
◬	磯村大次郎君著	刺繍術指南	菊判 三〇四頁	四五	八
△	治庖會本部教場主事 安西古満子君著	四季毎日 三食料理法	菊判一〇〇〇頁 全四冊	各五〇	各八
●	前田雪子女史著	巴里婦人の交際振 奥様の顧問	三六判 四〇八頁	四八	六

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

符	書名	著者	體裁	正價（円拾錢）	郵税（拾錢）
◬	家庭の趣味	文學士 大森兜山君著	（菊判　頁）	四五	八
●	新編家庭の科學	稻垣農學博士閲 工藤齊君著	（菊判四四六頁）	八五	八
◬	女子の教養	棚橋絢子君著	（菊判二九三頁）	四五	八
●	心理應用 腦神經衰弱必治策	森下幽堂君著	（四六判一八〇頁）	三〇	四
◬	摘み細工指南	造花技術校主 山田興松君著	（菊判二八〇頁）	四五	八
◬	新式化粧法	藤波一如君著	（菊判約二五〇頁）	四五	八
◬	母と子	原胤昭君著	前編 二四〇頁 後編 一九〇頁	四五 五五	八 六
●	名媛と筆蹟	中村秋人君著	（四六判三〇〇頁）	四〇	六
●	女子の務	文學士 下田次郎君著	（菊半截二六〇頁）	二五	四
●	人壽百年	岩井積三郎君著	（菊判一一〇頁）	四〇	六
●	少年日本歷史 第一編●古代の卷　第二編●王朝の卷 第三編●武家の卷　第四編●亂世の卷	巖谷小波君 福田琴月君共著	（菊判全六冊每編約百四十頁）	各二〇	各四
●	少年史譚 世界武將傳	前田越嶺君著	（菊判二一二頁）	三〇	六

【⊙洋裝上製符　●洋裝並製符　◭和裝上製符　◬和裝並製符】

符	書名	著者	體裁	正價（円拾錢）	郵税（拾錢）
●	少年世界物語 第一卷●世界の分割　第二卷●世界の學校 第三卷●世界の旅行　第四卷●世界の陸軍 第五卷●世界の帝王　第六卷●世界の物產	巖谷小波君 金子紫草君共著	（菊判全部六冊完成每編約百四十頁）	各二〇	各六
●	七勇士物語	水野和一君著	（四六判一四四頁）	二五	六
●	少年世界地理 第一編●鄉土及關東之部　第二編●中部地方之部	竹貫佳水君 沼田笠峰君 木村小舟君共編	（每編約百三十頁）（菊判全部六冊）	各二〇	各四
●	少女四季物語	少年世界記者 竹貫佳水君著	（四六判二六八頁）	三八	六
⊙	お伽テーブル	現代お伽作家十二名執筆	（四六判三二〇頁）	七〇	八
⊙	古代神話 ぎりしやお伽噺	諸星綠遊君著	（四六判三二四頁）	六五	六
●	お伽畫帖 廿一編●大人國　廿二編●八幡太郎 廿三編●一寸法師　廿四編●俵藤太	巖谷小波君編 每編知名畫家執筆	（四六判）（石版彩色刷）	各六	各二
●	世界お伽文庫 第九編●報恩鬼　第十編●活地獄 第十一編●金色鳥　第十二編●海の花	巖谷小波君著	（菊判每編百餘頁）	各一三	各四
⊙	むかしむかし	巖谷小波君著	（菊判二九六頁）	一一〇	八

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

桃櫻、涪山、佳水、笠峰、小舟、湖山、綠遊七君合著 ●お伽寶船（四六判三三六頁） 五〇 六

理學博士 齋田功太郎君著（菊判六百頁） ●自然科學（上下二冊） 並各四〇 特各五五 各八 各八

名和昆蟲所長 名和靖君 木村小舟君共著 ●新式昆蟲標本製作法（四六判三〇二頁） 四〇 六

西村醉夢君著 ⊙蟬の研究（菊判二一〇頁） 六〇 八

理學博士 岸山鎌吉君著 ⊙海と魚（四六判二〇六頁） 四五 六

澤田順次郎君著 ●雌雄進化論（菊判一九五頁） 四五 六

船長 萩野道二君 小堀正男君共著（全二冊菊判） ⊙航海術教科書 測器詳解（上卷二〇〇頁 下卷二〇〇頁） 上卷一〇〇 六

理學博士 岡村金太郎君著 ⊙淺草海苔（菊判四〇〇頁） 一八〇 八

理學士 松村定次郎君著 ⊙平面三角法 立體幾何學 難問解義（四六判二二二頁） 五五 六

數學世界主筆 竹貫登文君著 ⊙最近十ヶ年官立學校入學試驗 算術問題詳解（四六判三七〇頁） 六〇 六

文學士 香村宜圓君著 ●東洋論理學史（菊判三六〇頁） 並四〇 特五五 八 八

文學士 小山東助君著 ●社會進化論（菊判三四四頁） 並四〇 特五五 八 八

文學士 有馬祐政君著 ●日本倫理史（菊判三〇〇頁） 並四〇 特五五 八 八

《⊙洋裝上製符　●洋裝並製符　(▲)和裝上製符　▲和裝並製符》

文學士 藤谷深勵君著 ●基督教史（菊判二七三頁） 並四〇 特五五 八 八

文學士 小林郁君著 ●社會心理學（菊判三一〇頁） 並四〇 特五五 八 八

故日本弘道會長文學博士西村茂樹君著 ⊙泊翁叢書（菊判一〇九四頁） 二五〇 一六

文學士 岩橋遵成君 同 豐島豐三郎君共著 ⊙東洋倫理 修養寶鑑（三六判九四〇頁） 一一〇 八

新渡戸稻造君監修 前田長太君著 ⊙西洋武士道（菊判四六〇頁） 一二〇 八

今井黎廢君著 ●最近調査 男子東京遊學案内（四六判五七二頁） 五〇 八

河岡潮風君著 ●東都遊學 學校評判記（四六判三八〇頁） 四五 六

中野丈夫君著 ●中學校 高等女學校 入學試驗問題集（四六判一六〇頁） 一五 四

瀨川頼太郎君著 ●教育資料 子供の聲（四六判三八七頁） 五五 六

文學士 木川熊次郎君著 ⊙國勢と教育（菊判二四五頁） 四五 六

堀内新泉君著 ●人間學 一名立身の工夫（菊判二九〇頁） 五〇 六

小杉未醒君著 ⊙漫畫と紀行（菊判三四〇頁） 八〇 八

明治四十二年壹ヶ年間博文館新刊書

符	編著者	書名	體裁	正價（円拾錢）	郵稅（拾錢）
△	博文館編輯局	古今名家習畫帖（木版彩色刷）	（全二冊美濃判）	一〇〇	六
●	松尾哲太君著	最近實用製圖便覽	（長形美本）	一〇〇	六
▲	井田秀生君著	書道手引	（菊判三〇〇頁）	四五	八
⊙	官立韓城高等學校學監文學士高橋亨君著	韓語文典	（菊判二五〇頁）	一〇〇	八
⊙	國民英學會講師 今井信之君著	英語世界叢書三編 英文日記の書き方	（四六判二一四頁）	三五	六
⊙	深澤吉次郎君譯註	同 四編 からたち花	（四六判一七九頁）	三五	六
⊙	東京府立第四中學校敎諭横地良吉君譯註	同 五編 正義の鐘	（四六判）	三五	六
⊙	兒島熊之助君著	同 六編 伏魔殿	（四六判約一九〇頁）	三五	六
⊙	英語世界編輯部	新式初等英語獨習	（四六判三五五頁）	六五	八
⊙	英語世界編輯部	四十一年度英語試驗問題詳解	（四六判二四二頁）	四〇	六
⊙	博文館編輯局編	明治四十三年懷中日記 最新統計表重要規則書添附			
		▲新形	（細長形總布金字入三百頁）	二〇	二
		▲上製	（總布金文字入三百餘頁）	一八	二
		▲並製	（模皮金文字入三百餘頁）	一二	二

《⊙洋裝上製符　●洋裝並製符　◬和裝上製符　△和裝並製符》

符	編著者	書名	體裁	正價（円拾錢）	郵稅（拾錢）
⊙	博文館編輯局編	明治四十三年當用日記（各冊五百二十餘頁） 最新統計表重要規則書添附			
		▲大形	（菊判上製金文字入）	五五	八
		▲中形	總革別製	八五	八
		▲中形	（四六判脊皮特製）	五〇	八
		▲中形	（四六判總布上製金文字入）	三八	八
		▲小形	菊半截總布金文字入）	三〇	八
⊙	博文館編輯局編（知人名簿金錢出納錄重要規則等添）	明治四十三年ポケット日記	縱五寸横三寸 總皮三方金緣		
		◉甲種	（一頁一日附四百四十六頁）	五五	四
		▲乙種	（一頁二日附二百四十頁）	四五	二
⊙	女學世界編輯部編	明治四十三年家庭日記 ▲家庭の心得家事整理欄等百六十頁添加	（四六判四八四頁）	三八	八
⊙	英學新報社編纂	明治四十三年英文當用日記	（四六判）	五〇	八
⊙	同社編纂	明治四十三年英文懷中日記	（長方形三二二頁）	三〇	四
●	博文館編輯局編	四十二年夏期休暇 女學生日記	（菊判六四頁）	一二	二
●	同	四十二年夏期休暇 小學生日記	（菊判計六種）		
		●尋常科三年用 ●同四年用		各五五	二
		●尋常科五年用 ●同六年用 ●高等科一年用 ●同二年及三年用		各七	二

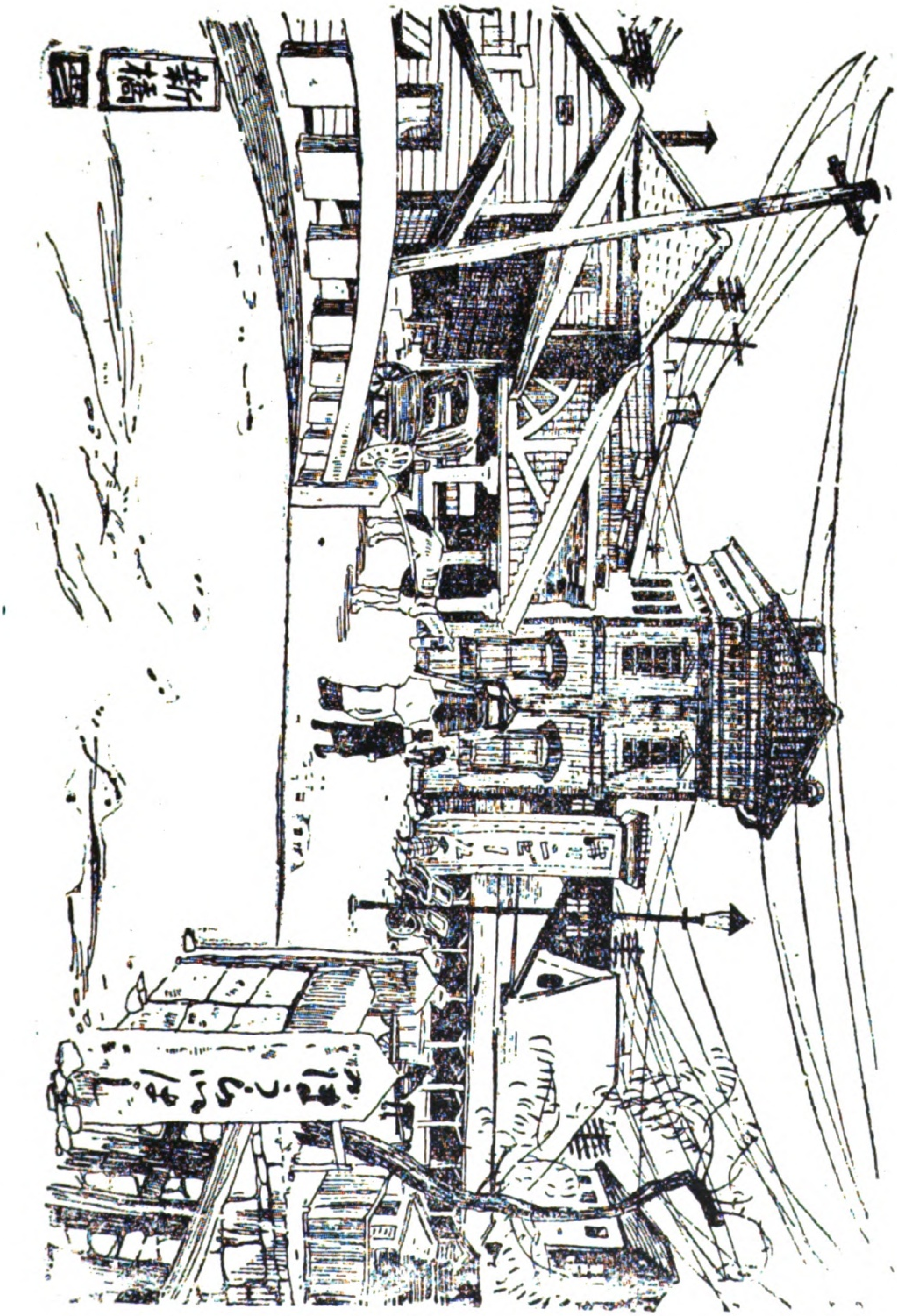
しやすしとあなどらせ、其油斷に乘じて徐ろに策を講じなければ大に仕損じる事がある。些少な事にも眼に角たてゝ意見だとか忠告だとか騷ぎ立つると良人は決して改心せぬのみか却て要愼の上にも要愼をして秘密を嚴にするに至る妻に隱しごとをする良人は世少なくないが之大方は妻の失敗である。

六、悋氣すべし悋氣すべからず

嫉妬は愛の反面なり嫉妬は女の權利なりと鹿爪らしく言ふ舶來屋あれど、嫉妬せざるべからざるは女の恥辱である。されどいよ〳〵良人の浮氣を事實とみとめ、不德の實證を得たならばこゝに大に嫉妬を活用して護身の武器とせねばならぬ。一體男と云ふものは勝手なもので女大學式の嫉妬をつゝしむべきものと心得た女なら之ほど都合のよい事はあるまいに、實は心中まことに物足らぬ、これほど己れが浮氣をするに、あいつなぜ腹を立てぬかしらん？　もう腹を立てゝるか、はてな？こいつ怪しいぞ、いやしくも女の情あるものが之ほどの己れの不實に少しも感じないとは、扨は己れを愛しては居なかつたのだな、たゝき出してやれと、業平ならぬもつい立ちぎゝもしたくなる、蓋し妻君に風吹けば沖つ白浪云々の歌がよめなんだら、哀れやこゝに三行半の最後にならうも知れぬ、さればと云つて夢中になつてやいて〳〵やき立つるに至りては之又うるさゝに堪ず、恐や〳〵こんな女房一時も持事ならぬとなる、こゝで悋氣すべしすべからずが役に立つ、

* * * * *

之を要するに、妻たるものは恒に溫雅愛嬌にして良人をして、身も心もあたゝかく清艶としてさながら羽二重の衣を身に纏ふたとも云ふべき一種の心地よき快感をもたしめねばならぬ、其家庭は春光うらゝかにして桃李妍を競ふのどかな彌生の空の如くあらしめて蝶も雲雀も自然に舞ふべくありたし。たゞ和平久しくして其單調を憂ふ時には、綠蔭に對して新茶をすゝるの變つた味を見せて其停滯をふせがねばならぬ、



東京市內雜觀——新橋停車場



我家の料理法

文子

先日からの雨も漸やく上つて久しぶりのよいお天氣、庭の四季櫻も咲き初めた、昨日などはこたつでも開け度と思つたくらゐ寒かつたのに引きかへて今日の暖かさ、日なたに居ると額に汗ばむのを覺える。

淸に洗濯物を出しておいてお座敷とお居間の淸ぶきをすませお床の花を活けかへる。

旦那樣のお召物も昨日ぬひ上げたから今日はまあお裁縫は一日休んで東京の母樣への手紙でも書かうと思つて机の前に坐つたが今日は土曜日獻立表をつくらなければと思ひ出したので早速つくり始める、何しろ此土地はお魚といへばこの頃は鯛ばかり外のものは少しもとれず、いくら鯛でも毎日〳〵では飽き〳〵してしまふ、鷄は時々賣りに來るけれど牛豚肉や其他のおさかな類は皆二三十里も離れた土地から取りよせなければならないのでほんとうに不便な事、マアこんな事にして置きませう。

月曜日、

一、小田卷むし、　二、ビーフステキ、プデイング、

三、たひの蠟やき附合せ梅酢漬け小かぶ、

四、あられ魚みじん生姜おろしあへ、

火曜日、

一、かき玉子の吸物、　二、ロースト、チキン、

三、もみぢあげおろし煮　四、野菜サラダ、

水曜日、

一、吉野あはび吸物、二、スウキトポテトーペーヤ、

三、玉葱のミルクスチウ、

四、せん大根せん人參ゴマ酢あへ、

木曜日、
一、鮭はらゝご糸ねぎ清汁、二、生鮭のプディング、
三、小だひそばむし、　四、わさび芋三杯酢、
金曜日、
一、鷄とのりまきとろゝいも吸物、二、鷄やはらか煮
三、まぐろ松風やき紅生姜、四、大根とかきサラダ、
土曜日、
一、相生摘入さきねぎ味噌汁、　二、まゝ子丼、
三、ロールキャベージ、ホワイトソース煮、
四、牛蒡黄味あへ、
日曜日、
一、たひの鹽から煮、　二、豚の柚子やき、
三、すゞきのオイルやき、四、金糸いも、
一、小田卷むし、
最初うどんを湯の煮立つた所に入れ煮上りたらば二三度水をふり柔かに煮えたる時笊にあげ水洗ひをなしよく水氣を去り、別に小えびと椎茸の細かく切つたものとに薄味をつけ、茶わんに前のうどんを盛り其上に小えびと椎茸を並べねぎのこまかく切りたる物を上にパラリとかけ玉子をかけて蒸す、玉子の加減は玉子一杯に出し三杯の割で醬油を少し入れて味を付ける。
一、ビーフステキ、プディング、
牛肉を薄く切りかろく鹽胡椒をなしおきバタにて兩面が鳶色になる迄いため、さつま芋の皮をむき二分位の厚さに輪切りになし鹽にてゆでゝ、又別にパンを薄く切り狐色になる迄兩面を焼きバタをぬりおく、此三品を芋肉パンと順々に深き丼に并べ肉をいためた鍋に水をさして煮立て鹽にて味を付けたる汁をかけてテンピにて焼く。
一、たひの鹽やき、附合はせ梅酢つけ小かぶ、
たひのこけ腸を去り三枚に下しよき程に切り上に紙を敷きて鹽をふりかけ少時おきて後くしにさして裏表ともよく焼き玉子のとかしたものにうどん粉を少しまぜよくかき混ぜて焼きたるたひの身にぬり温火にかけ焦ぬやうに焼く但し玉子は三四回ぬる、之れに小葉を梅酢に漬けおきしものを附け合はす（鯛の頭と骨は小

田巻むしの出しに用ふ。

一、あられ魚みじん生姜おろしあへ、
前の鯛の残りを一寸薄鹽をあてゝ上より酢をかけて二十分間ほど置き毛ぬきにて小骨をぬき皮をとりあられに切る、別に大根をおろし金にて下し汁を搾り此の中へ前のあられに切つた鯛の身と生姜をみじんに切つたものを混せ上より甘酢をかける。

一、かき玉子の吸物、
煮出汁にみりんを一寸落し醤油にて味をつけ煮立つた所へ葛少々を水にときて入れよく煮上りたらば玉子をときまぜて少しづゝ流しこみ一寸休ませ静かに混せて椀にもりわさびの下したのをふたの裏につけおく。

一、ロースト、チキン、
鶏の毛焼きをなし腸を出しきれいに洗ひ鹽胡椒をふりバタ大匙二杯を全體になすりつけておきチンパンに人参葉玉ねぎを少しづゝ細かに刻みて入れ其上に鶏をのせストーブにて一時間ばかり焼く其間しば／＼チンパンを横にかしぎ脂をすくひ鶏の上から注ぎかけかば色になる迄焼く。



一、紅葉あげ下ろし煮、
椎茸を洗つて細かく切り、栗も鬼皮を去り澁皮を取つてゆで二分四角位に切り、車海老の背腸を去りてゆで背より二つに割つて適宜に切り三ッ葉を湯出て五分位に切りおく、別に丼にめりけん粉をふるひ其中へ玉子のほどきたるを入れ水を少し加へて堅きねと／＼のものとなし前の材料を入れて混せ合はせ皿に一つ付ける位の大さにまるめヘットで上げるあがりたらば油を切り熱湯をかけし鍋にみりんを煮切つて入れ之れに煮

出汁と醤油を入れてかげんをなし煮立ちし處へ前の揚げ物を入れて煮る之れに大根を下しかろく搾りて入れ二三度煮立ちたる時鍋を下し小丼におろしも汁も共に盛りて出す。

一、野菜サラダ、

じやが芋を鹽ゆでにし薄く切りキヤベージの葉を生のまゝ鹽水にて洗ひ細かに手にてつみとりりんごの皮をむきしんを去り薄く切りこれらを共に混せ合はせてマイナイスソースをかける。

マイナイスソース、は玉子の黄味二つ鹽一さじ砂糖半匙胡椒少々酢五匙サラダオイル五勺の割合で混せ合はせたもの、但し酢とサラダオイルとは少しづゝ幾度にも〳〵入れて混せ合はす。

一、吉野あはびの吸物、

鮑の口をたてに切り貝の薄き所を板の上におき左の手にて貝を持ち右手にて鹽をごし〳〵とこする時は堅く身がしまる此時貝と肉との間におろし金を入れてはがす、腸其他のものを去りて肉を出來るだけ薄く大きくはぎ別に葛を粉にし皿に入れ其れにまぶして鹽湯を煮立てたる中に入れちゞまりたらば直に上げ椀にもりキヤベツの葉を小さく切りて一寸ゆでたものを側にそへ鹽味七分醤油味三分の清汁をつくりて上より注ぐ。

一、スウキトポテトー、ペーヤ、

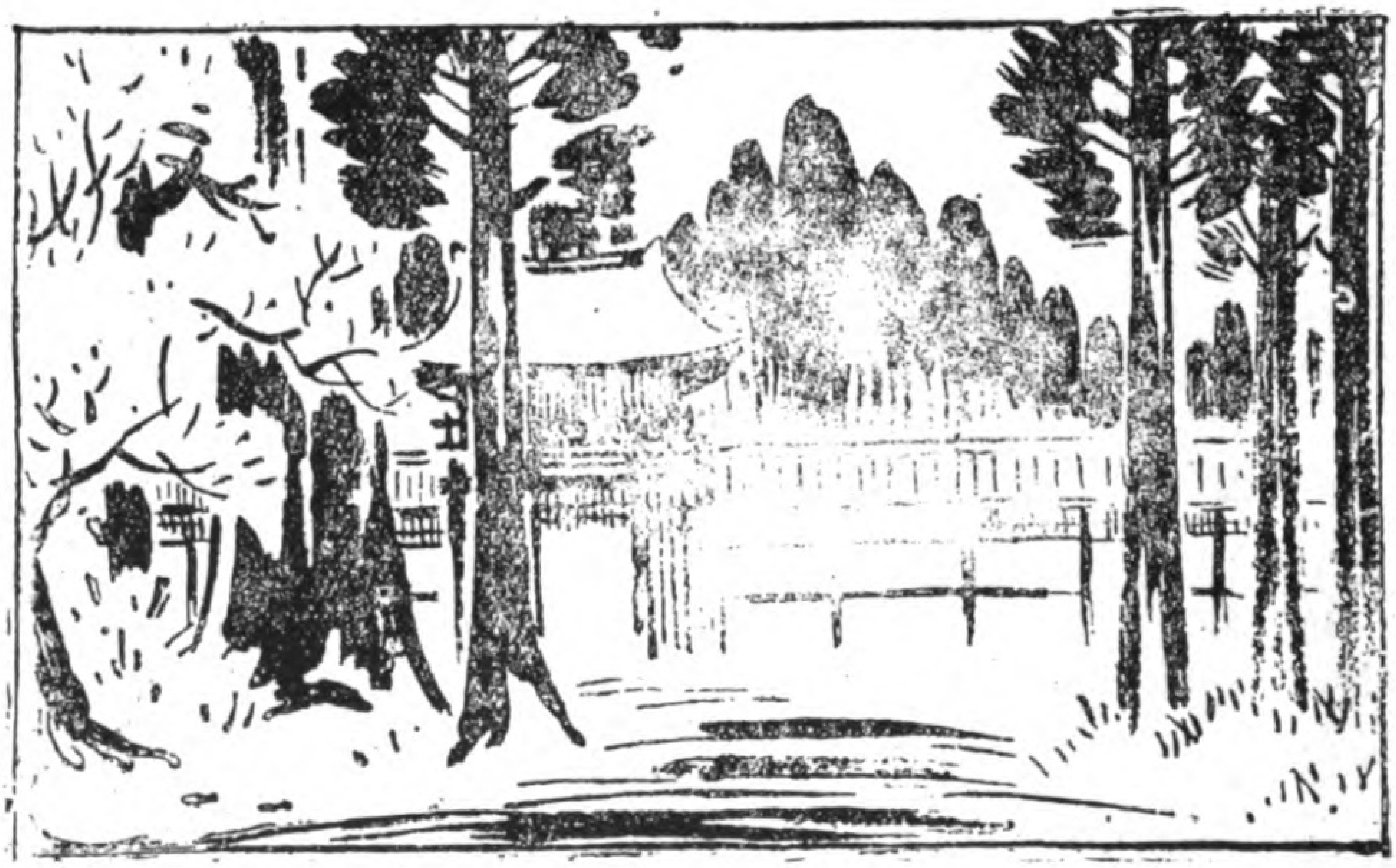
さつま芋の皮をむき切りてゆで裏ごしにかけ鹽胡椒にて味をつけ玉子を一つ入れてませ形のつくられる位の堅さになし別に肉を細かに切りバタにていため少しのめりけん粉を加へて又一寸いため其肉を中にし芋を皮にしておまんちうの樣に包み玉子をつけパン粉をつけて梨子のやうな形になし中央を凹ませて油で一寸揚げ丁字を一つづゝ梨子の軸にさすウスターソース（西洋食品屋にある瓶入のソース）をかけて食す。

一、玉葱のミルクスチウ、

玉葱を洗ひ熱湯の中にて五分計りゆで直ぐに其湯をすて又別の湯にて鹽ゆでになし軟かになりたる時出してたてに二分位に切り再び鍋に入れ牛乳バタ、鹽を入れ一寸煮て皿に盛る。

一、せん大根せん人参ごま酢あへ
大根人参を線に切り之れに酢と少しの鹽、砂糖とを混ぜ合はせしものをかけてしばらく置く。
椎茸を十分ほどゆでゝだくを切りすて線に薄く切り油揚げを中の豆腐をぬき出して線に切りゆでゝ椎茸と共に醤油と砂糖にて甘かげんに煮こみごま一合ほどを焦さぬやうによくいり油あげの中よりぬきとりたる豆腐と共にすりばちにてよくすりおき、前の椎茸とあげを煮たる汁をしぼり其中へ葛を少し水にときて入れ火にかけ煮上りたらばこれを酢にてとき前のすり置きしごまに混ぜ大根人参しゐ茸油あげの汁氣を切りて混ぜ合はす。

一、鮭はらゝご糸ねぎすまし、
鮭の子に大根おろしの汁をかけ粒をすじより一つ〳〵はなしかろく鹽をなしおき其まゝ椀にもり之れに葱を長きまゝゆでゝたてに細くさき一寸二分ほどに切りそろへたるものをそへ別につくりおきし澄汁に少しの酢をおとして上より入れる。



一、生鮭のプディング、
生鮭を適宜に切り鹽湯出にし煮え上りたらば身を細かにむしり之れにパン粉と玉子のつぶしたるものを加へ牛乳にて柔らかになし鹽胡椒にて味をつけバタをぬりおきたるプディング型に入れ二時間計りむし皿に盛りて玉子のソースをかける、ソースは牛乳一合を煮立ておきこれに玉子をよく〳〵泡立てしものを混ぜ鹽に

て味をつけ泡の立ち居る所を鮭の上よりかけて出す。

一、小だひそばむし、

小鯛のうろこを取り頭は其儘にして背より開き小骨を取り鹽をなして半日ほど置きそばを熱きスープに鹽胡椒を加へたる中にて切れぬやうにあたゝめ之れを前の小鯛の中につめて蒸す。

一、わさび芋三杯酢、

やまの芋の皮をむき手早くおろしすりばちへ入れてよく〳〵すり少しの鹽とわさびのおろしたものとを加へて又すり皿にもりて上から青のりをやきてもみ入れ三杯酢をかける。

一、鶏とのりまきとろゝいもの吸物、

鶏の白き身を小さく切りみりんと薄したじにて味をつけわんにもる別にとろゝいもを洗ひ皮をむきおろしかねにておろし摺鉢にて入れてよく〳〵すり鹽にて味をつけのりをよくやきて半分に切り之れに芋を包み一寸位の長さに切りて鶏のわきに入れ鹽味七分醤油味三分のわりあひにて清汁をつくり靜かに椀にそゝぎ入れる。

一、鶏やはらか煮、

吸物によき身を使ひし後の鶏を骨のまゝ適宜に切り水をたつぷり入れて温火にて氣長に煮三時間ほどして一寸ソーダを入れて煮立たせ浮き上りたるあくを取り味醂と醤油にて味を付け胡椒をふりて皿に移し其上にかんづめの青豆をハラリとかけ後に殘りし鶏の汁に葛をとき入れ一寸火にかけてまぜこれを其上からかける。

一、まぐろ松風やき、紅生姜、

まぐろを適宜の大きさに切り醤油につけおき三十分ばかりして醤油をこきとり簾の上に並べて暫く日光にあて上にねばりが出たらば金くしにさして燒く片面燒けて裏に返す時にくしを一寸まはしおく（之れは燒け上りて串をぬくときにぬき易きため）兩面燒けたらば醤油を一度かけて燒きけしの實の煎りおきしものを一面にふりかける。

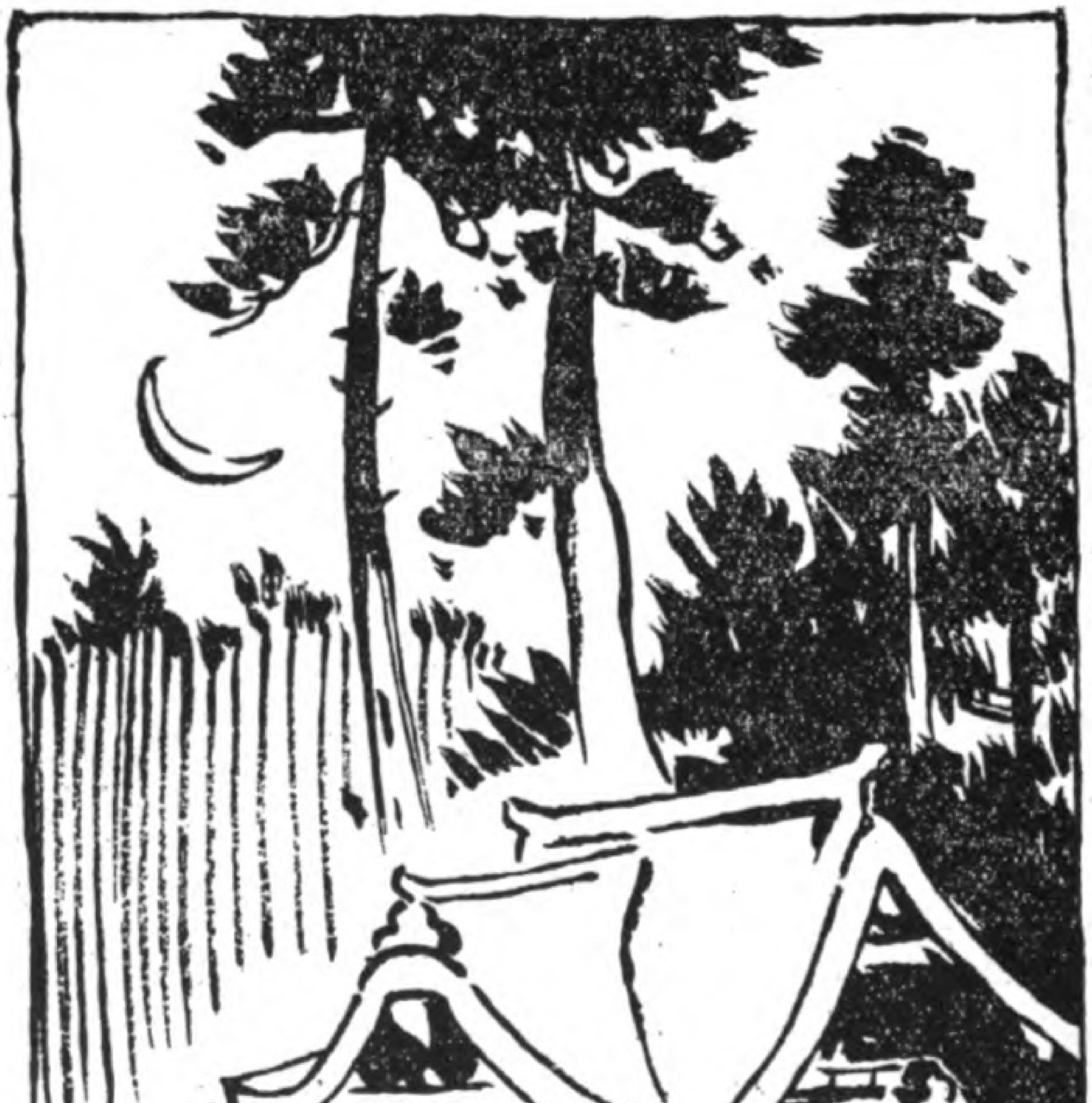
一、大根とかきサラダ、

大根を線に切り鹽にてもみ後水にて洗ひ搾りおく柿

は大根と同じく細く切りて大根と一緒にマイナイスソースで和へる、ソースは火曜日の野菜サラダの時と同じにして少し砂糖を加へる、

一、相生摘入れさきねぎ味噌汁、

鯛の身をたゝき擂鉢に入れ鹽少しとすり長芋少しを加へてすり裏ごしにかけ之けを二つに分けて一方を水色に染め何れも沸湯の中に小さく摘み入れてゆで上げ葱をゆで細くさき一寸位の長さにきり白味噌二分普通味噌三分の割合にてすり煮出汁に溶きて煮立て前の實を入れる。



一、まゝ子丼、

牛肉を細かに切り葱も細長く斜に切り平鍋に酒一、だし三、醬油一、砂糖少しの割合にて煮立ておき其中へねぎを並べて一寸煮其上に牛肉をまばらに置き肉の煮えたるを度として玉子のよくほどきたるを上より一面にかけ一分位たちて火より下しむしおきあつき御飯を茶わんに盛り其上に適度にのせふたをして出す。

一、ロールキャベーヂ、ホワイトソース煮、

牛肉の細かにたゝきたるものと玉ねぎの細かく刻みたるものとをバタにていため、キャベーヂの葉をはがし破れぬやうに湯出前の細かくしたる肉と玉ねぎとを丸めてキャベツにて包みソースにて煮る、ホワイ

トソースは鍋にバタ大匙一杯をとかし其中へメリケン粉大匙一杯半をすりばちにてすり牛乳一合を入れてまぜしものを入れ鹽にて味をつける。

一、牛蒡のきみ和へ、

牛蒡を細く千六本に切り柔かくゆで、玉子をゆで黃味と白味とを分け黃味を擂鉢にてすり白砂糖と酢にて味をつけどろ〳〵になし前の牛蒡を此中にて和へる白味は適宜の形に切りて黃味あへし上にのせ其上より淺草のりをふりて出す。

一、たひの鹽から煮、

かつをの鹽からを煮出し鹽薄き時は醤油を一寸落してかげんをなし此汁にてたひの身を煮る此わきに小松菜の一寸五分ほどに切りそろへたるを入れて煮てつけ合はせとす。

一、豚の柚子やき、

豚の脂肉三分肉七分といふ部分を大きな肉其儘にて鹽をふり其上に柚子の皮の白き綿を庖丁にてそぎとり黃色の所だけをみじんに切りてふりかけテンピにて燒く其間時々自然に出る脂をすくひて上よりかけ燒け上りたらば三分くらゐに切りて皿に盛る。

一、すゝきのオイルやき、

すゝきのこけを去り腹をあけ頭を去り三枚に下して骨をぬき鹽をなし串にさしてサラダヲイルをつけて燒き熱き中にソースをかけて出す。

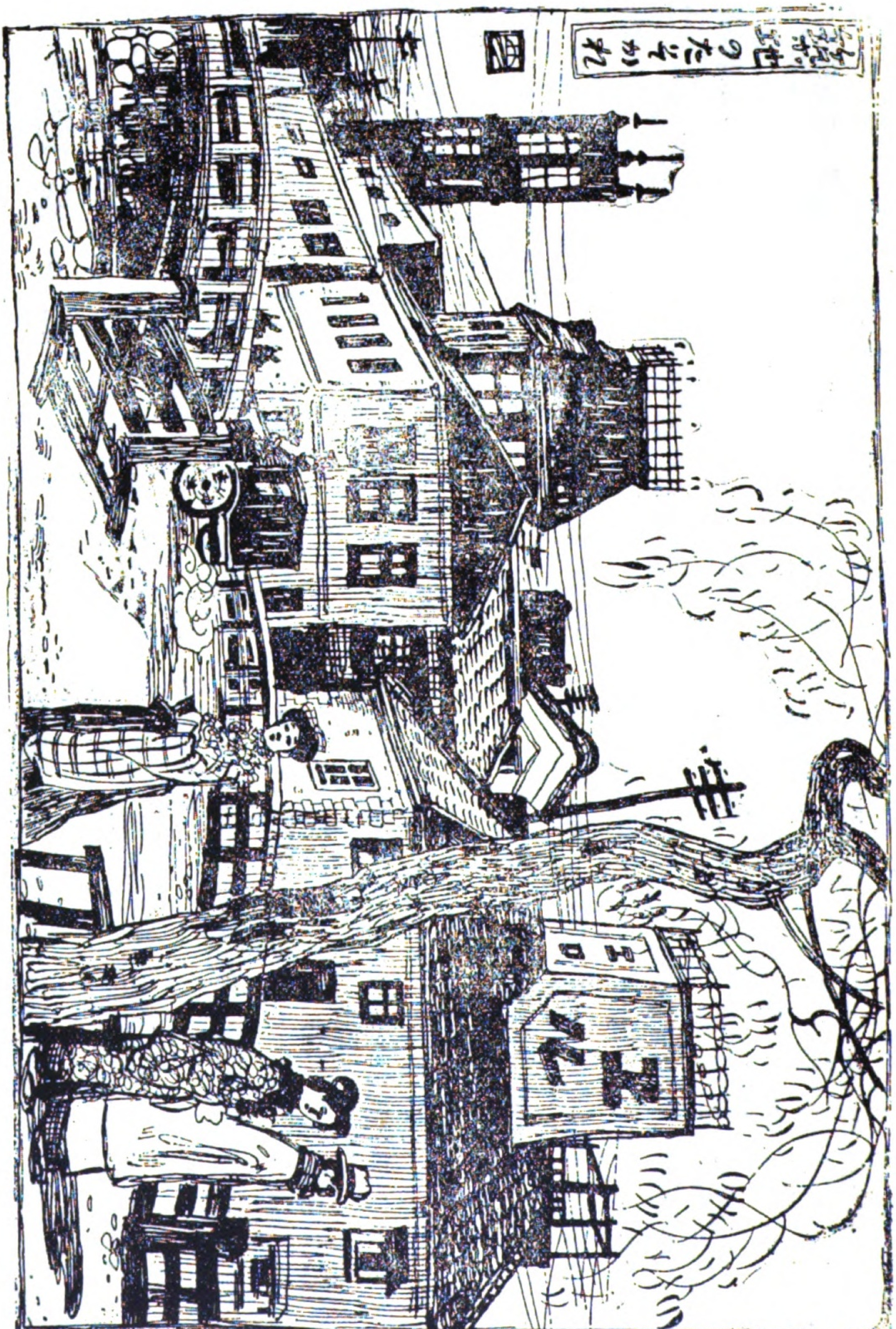
ソースはバタ大匙一つ鹽少々其中へバタの三倍の酢を混ぜ火にかけてとけたる時魚にかける。

一、金糸いも、

さつま芋を長さ二寸程に切り皮を去りはゝのまゝ薄くむきくる〳〵とまき小口より細く切り鹽水の中に十五分ばかり漬けおきて水を切り鍋に酒一杯あく引砂糖一杯と燒明礬少しとを入れ煮立ちたる所へ前の芋をほぐしながら入れて煮る。



東京市内雑観——築地の黄昏



哈爾賓より

左は川上哈爾賓總領事夫人ときは子より、坪谷水哉氏へ宛てゝ伊藤公遭難當時の所感を申し送られし書簡の一節なり。

(前略)さてこの度川上の負傷に際し、早速御懇切なる御見舞狀下され、まことにありがたく厚く御禮申上候。

實は伊藤公の御遭難はあまりに事の意外なるにあきれ驚き、國家の柱石を一朝兇手に仆れせしめ候事如何にも〳〵殘念に候へども、その御最後の立派なる事は近代歐米の元首方もあまた暗殺の厄にかゝられし例にらしても、決してこの度のごとき壯嚴なる景狀は御座なき樣に候。

何さま露淸兩國の儀仗兵が捧銃の禮をなし、外國の代表者環視いたし居り候こと〻て、ポン〳〵〳〵たゞ三つ、はあと思ふまに公爵はよろめき給ふぞ、傍にありし露國藏相と隨行の人々、かゝへあげてすぐさま列車内に運び參らせし事に候へば、いさゝかも亂れたる御樣子なく、御心たしかに靜に終らせ給へる事に候。

然かし、何と申ても、國の爲めまことに〳〵惜しき事に御座候。

さてまた川上の病狀は、最初は多分右腕切斷のやむなきかと、醫師も非常に案じくれ候へども經過案外よろしくて、今日にては最早切斷せずに全快の見込たち申し候間、御安心下され度く候。(下略)

◎大山公使夫人の談話に就て

前號記事中、前伊國公使大山久子夫人の談話の名題に、「伊太利の高貴と私」とありしは記者の勝手に撰定せしものにて、該表題に就て迷惑されたる夫人に對し謹んで記者の疎漏を謝し爰に右表題を取消し、更に「大山前伊國公使夫人の談話」と訂正す。



和歌

佐々木信綱先生選

一等

○　攝津　御影　松枝

今もなほ心ばかりはうら若くをさなきものを二十をこえぬ

評、新らしき年を迎ふる嬉しさに添へて、二十といふ年に一年を加ふる處女の輕き歎。言外にあふれて、女らしくやさしき歌なり。女の歌には斯くやさしき感想、もしくは女ならでは寫しいでがたき觀察などを描きいでられんこそ望ましけれ。

二等

○　門司　荻野英子

故郷や母屋の窓の南天の紅き實に降る春の雪かな

評、うつくしき歌、まこと南天のあかき實に白くかゝれるあわ雪を見るやうなり。

二等

○　埼玉　齋藤なを

すゝむしはよきねになきてふるさとの母なつかしきゆふ月夜かな

評、他郷にありて古里の母をしたふ夕ぐれの情、あらはれたり。よき音になきての句もよし。

三等

○　岩代　木村文子

冬しらす天つ男神が白金の兜の星のやうに月照る

評、清少のおもとが、すさまじきものゝ中に數まへけむ冬の月も、かくやうによめば新らしき光そふ心地す。

三等

○　麹町　淺井ゆき子

友せんの小袖ほどきて母ぎみは小さき衣に縫ひ更へたまふ

評、窓の外には、鶯の聲などきこゆべし。

三等

○　美作　福原靜代

枯枝に木枯すさぶ野の路を我が思ふ人はひとり行くら

む

評、萬葉の女歌人が「吾せこはいづちゆくらむ沖つ藻のなばりの山を今日かこゆらむ」伊勢物語の「風ふけば沖つ白浪立田山夜半にや君が一人こゆらむ」の類想にはあれど、やさしき心を採る。

秀逸

○　大阪　青山なか子

あな淋し落葉去る音雨の音遠寺の鐘のくれつぐる音

評、音のかさなりたる、少しわつらはしきやうにはあれど、

○　米國　村越光子

はれ小袖母がなさけと知らずしてほこりてありし日は安かりき

○　相州　齋川嘉女子

餘りにもつめたき心あやしくてそと我胸に手をふれて見し

○　備後　あきの

時といふ力ある手よしはしまて若きほこりにわれかゝやくを

○　豐後　熊谷ゆき子

この七日歌を思へどいたづらに愁ひぞつのる冬の夕雲

○　備後　掛谷鑑女

木枯は故郷戀ふる旅の子に泣けよとばかり吹きしきる哉

○　大阪　野口たつ子

張板に更紗はる手をそと留めて耳傾けぬ鶯の聲

○　香川　金井浪子

冬の空我が心かも灰ばみて日輪を見ずたそかれて行く

評、二句原作われの心か

○　東京　小林しげ子

藻の花のあはひの水に晝の月おぼつかなくも浮きてゆらげる

○　大阪　橘朗子

醜かるおもわ愁へず汚れざる處女心を尊しとおもふ

評、いひざますこし露骨なり。洗錬せまほし。

佳作

○　美作　杉山忠代

幸讃ふ二人のなかに若草は妙に香りぬ春日うらゝに

○　越後　高瀬吟子

歌舞伎見て歸り給ひし其夜より痛くわれには疎くなりぬ

○　青山　田中はな子

何となう君に逢はるゝ心地して春風かをる野をさまよひぬ

○ 近江 大角すゑ子
冬の雨馬つなぎたる小さき家に燈も灯しぬ古驛路にして

○ 神戸 松宮貴久子
ひと日なり小鳥とわれと淋しげにふと見かはせし冬木立かな

○ 水戸 中村逸子
あの世には誰が留守をなしつるぞやよかへしませ我たらちねを

○ 山梨 川田武子
窓近くはれたる富士の雪も見て白菊の香の高くもあるかな

○ 佐世保 牧瀬壽美子
夕暮や煙たなびく海士が村磯邊にさゆる追分の節

○ 豊前 田鶴子
山の邊の道の古塚埋れて枯枝の上小鳥囀づる

○ 山口 夕もみぢ
八かかへの杉の根方に杣人をあつめて降りぬ深山時雨は

○ 東京 芙蓉子
我つまの歸り來まさん日となりぬ蹄の音にしむれをどらせつ

○ 豊後 脇よし子
おほきなる川邊の石を切り取りて城修繕す筑紫の秋に

○ 目黒 城井千代子
君か代もがくこそあれといのるかな初日かゝやくしら雪のこと

○ 長野 小林靜子
うす月夜舟に獸皮の嚢のせてくだる野川の蘆の花白き

○ 中河内 西村千代子
落葉かく翁のさまもなかなかに趣き深し秋のみ社

○ 大阪 兒玉こと子
天地の分れし昔おもほえておこそかに見る初日の光

○ 神戸 西尾紅涙
尼寺の燈火うすれ讀經の聲も絶う木枯の風

○ 仁川 伊崎志加子
さゆる夜の星かとばかり咲き競ふ梅より明る月の瀬の里

○ 大阪 和子
さめ給へ丈なす髪も若き血も美し胡蝶の淡きゆめのみ

○ 下野 片岡涙子
おもはすも語りすこして驛よりかへる坂道雪はつもりぬ

○ 蒲生 深しぐれ
しらぬ間に冬は來にけり朝風のしぐれをさそふあられましりに

○ 築地 萩の枝
とばくれしむれのかた木戸あけよとやこがれ遣りのたまはりし鍵

○ 牛込 平塚白百合
よき巫女がみ神樂まつる鈴の音に興をき出でし奈良の朝かな

○ 神戸 菊香
雪の村國旗見ゆるをうれしくて拜賀に行きぬふるびし學校

○ 攝津 和久かつ子
雪ふるや白銀づくりの小扇をかざして舞ふよいく少女ども

○ 大和 豊田はる子
梅が香や朝月うごく野の小川水の烟の夢とたゞよふ

○ 大阪 愛子
つかれたる吾子いたはりなぐさめつ紅葉ちりしく段下るかな

○ 小石川 土岐光子
風なきに手向し花のひとつ散りふたつこぼれて御墓淋しも

○　下總　小澤禮子
夕野寒う母に別れし孤兒の里いづる袖に月青う照る

○　愛知　三浦ぎん子
美し國民擧き國御代安く初日のほりて年立にけり

○　下總　月沖さゆり子
古事記讀む初日の窓に室咲きの紅梅の香ぞほのに漂ふ

○　秋田　政木しげ子
もみいろの絹さく如き音たてゝちさき鳥なく霜月の空

○　下總　小尚保花子
あなさびし君も來まさずこの夕暗き牢獄にある心地して

○　伊豫　月浦一子
谷深き禪師か庵に灯影さして紅葉散るなりしぐれの雨に

○　福岡　大庭たか子
晩秋や靜けき湖にもみぢ葉の映りしまゝに日は黄昏るゝ

○　大分　勝子よし子
暮れの海白帆を浮けて灰色にかすむ筑紫の十月の海

○　福岡　大庭たか子
星川やしばしをよどむ瀬に鮎の數もよまるゝ十六夜の月

○　信州　吉池英子
雨の糸細う斜めにそぼつ夕べ高き香かをる白菊の花

○　大和　井岡春嘉
我が宿の背戸の小丘も春たちぬむれそふ鶯の聲もかすみて

○　千葉　加瀬紀文子
いつまでも世は春のみと思ひしを秋風寒く父失せましぬ

○　伏見　成田てい子
只一人音なき部屋に書見つゝ淋しく聞きぬ霰とくる音

○　大阪　京林花子
羽子板を持ちつゝいねし妹の夢のうちより年迎ふらむ

○　豊後　尾花子
紺青の海のはてよりゆらゆらと初日のぼるを岡の上に見る

○　豊後　平島芳子
たらはざるなかによみする思ふ子の言葉かるかくをかしかりける

○　神戸　上野花子
ほれられて鏡に立てば嫁ぎにし姉によく似る我はれ姿

○　伊勢　中村花子
山見るになれし柱にふとよりてみればなつかし水仙の花

○　美作　神田さと
旅出する友を送りて歸るさに月なき空にかりなきわたる

○　丹波　英子
たへがたき悩しきつかれ青草を見るとしもなく瞳うつしぬ

○　神田　三好富久子
悲しみてもだえて暮れし二十年もやがては行きて夢となるらむ

○　口之津　木多桑子
おのつから殘るも淋し霜がれの垣根に匂ふしら菊のはな

○　東京　村岡千代香
去る年の冬のゆふべの此の頃に妹はゆきけり御あかしは光る

○　岐阜　中根しげ
君が船見えずなりたる夜の濱の松に音なう時雨の降りぬ

○　岐阜　岡人
燈火の暗き廣間に只一人思出多き時を明かしぬ

○　豊後　藤よし子
冬の海島のこなたに暮れ皆む一ひら雲の下に舟ゆく

○　牛込　つゆ枝子
星月夜かの砂山の砂にゐて君とあはぢの火をばながめぬ

○　本郷　井上麗子
天の下おごそかに降る白雪は年のはじめの朝清めとて

○　神田　入木かれ子
旅立し兄が大船見つゝ居れば目も曇り來て船はいづこに

○　岡山　掛谷かめを
旅の夜を一人淋しく君戀ふる庵の小窓にほとゝぎすなく

○　岡山　高田しげよ
木枯の吹く夜は悲し旅の夜の小窓に冴ゆる冬の月見る

○　長崎　天野春子
なつかしき友と語りし日を思ふ梅の林に日影さす頃

○　同　同人
姉が小袖黄年世には出てすして思出多き紅絹の裏かな

○　大阪　波奈子
君と居て言はず語らず顔知らぬ兄を偲びぬ雨ふる夕

○　大和　秀子
春の野の空にほのめく三日月を天なる姫の眉と仰ぎぬ

○　門司　細吉はるみ
梅の花咲けばなつかし大和なる父母います月ヶ瀬の村

○　新潟　平石すま子
およすげてわれを厭はぬ古里に畑に菜蔬つむ子を吾もおもふ

○　獣牧　小野定子
菊枯れて山茶花咲きぬ米とぎに朝々通ふ山の井の邊に

○　四谷　島田あい子
指をりてまちし昔もありにしをたつを早しと今はうらみぬ

○　豊後　平島よし子
二十行く悲しき日なりわりなくもものゝあはれを知りそめにけり

○　神戸　大塚千代子
巫子の舞ふ神のみ殿にうら〳〵と初日まばゆく粉の雪降る

○　武藏　佐藤菊子
をさな時母に別れし事どもをなみたながらに乳母がかたりき

○　青森　木村恒子
磯づたひこよひの月のかげふみてこひしき君の庵尋ねみん

○　神田　臼淵つた子
秋の風むれの廣野のいづくにか起ちぬやさしき花も見ぬまに

○　京橋　市川しげを
もみぢ葉よ我戀ふ人の若し來なば我れの心も赤しと告げよ

○　三鉛　藤掛つれ子
稱名の聲ほがらかに御佛のとびらのあたり沈の香かをる

○　横濱　小豆澤清野
眞白なる帆の舟ゆくよ紫のかすみわたれる越の海べを

○　麹町　山上逸子
解ごとに黑髮落ちてわが心陰りぬ秋の暮れんとする時

○　青森　永田よし子
ゆけとしひ行かしといひて泣し身の今はふたりの母にもあるかな

○　横濱　喜多りゆう子
雨晴れし小丘に續く家々に燈つきて夕の鐘鳴る

○　豊後　工藤[illegible]子

おぼろ月今宵を嫁ぐ妹のふりそで姿母に見せたき

○　栃木　夢子

[illegible]あへで逝にし母にすがりなく夢見ぬ旅の空暗き夜に

○　熊谷　中村千代代

少女子が振の袂をなびかしてはれつきかはす年のはつ日や

○　山形　阿部ひさ子

二つ三つ峰に歸る鳥見えて風うすさむく[illegible]みだるゝ

○　豊後　星野よし子

寝牙のおばしまに倚り白袖をふりにし君の夢を忘れず

○　四日市　[illegible]田とみ子

益良夫の門出を祝ふ日の御旗小春の風にゆるうなびきつ

○　徳島　田村[illegible]子

秋風に木の葉こぼれて寂しさの秋の日過ぐる夕暮の空

○　上総　今井なほ子

きら〳〵と朝日の光うつろひぬ大内山の峰の白雪

○　愛知　三浦しの子

[illegible]やみつ[illegible]ては泣きつゝ年迎ふ若き尼か身あはれと思ほせ

○　埼玉　田島てる

父に似し子ならずわれは母に似て物言ふ事をきらひぬるかな

○　神戸　[illegible]子

病気いえて歸りて見れば野も山もおもかはりせる冬げしきかな

○　佐倉　吉松君子

旅館病みてふす夜の灯は更けて磯松原に千鳥なくなり

○　上総　安西琴子

のこる日もかすなくなりて少女等が[illegible]いそぐ年のくれ哉

○　埼玉　新井すゝ

さにつらふ妹しなればうらぶれの文読む窓や秋の淋しき

○　徳島　はるがすみ

何か只だ道は日向に通へりと云ふなし聞けば涙ぐまるゝ

○　肥前　御手洗[illegible]

故郷は冬こもりぞと思ひねの夢にも似たる今朝の初雪

○　明石　千代[illegible]

送られし歌のかへしな初春の若菜の籠にそへて送りき

○　大阪　村瀬くに子

夜嵐にちりかふ木の葉しげき野にひとり静かにすめる月かげ

○　山口　岡本ふさ

あゝ君を君をたとへば桜の花にたたにふる誠しもなき

○　山口　石田つた

葉は落ちて夕日かするゝ赤柿を鳥喙む秋の夕ぐれ

○　長野　尾崎めぐり

鐘つきて鐘楼下る[illegible]僧の白衣の袖に月斜めなり

○　廣島　井口すきえ

せゝらぎの音たえだえに更くる夜やみ空に寒く冬の月てる

○　神戸　山村千代

私夫と朧月夜にさまよへば去年を語るか花は散り来ぬ

○　伊勢　川瀬たれ

夕陽や山の紫濃く見えて棚引く雲の五色に染みぬ

○　近江　木村[illegible]子

恋びかれ露にぬれつゝ[illegible]岡見ぬ乳たらずして泣くみどり子な

○　　　茨城　大田芳子
亡き姉のめでにし菊の枯れはてぬ悲しかりけり淋しかりけり

○　　　大阪　中村とし子
小男鹿の妻呼ぶ聲にまろゐせる若き比丘尼は衾かぶりぬ

○　　　埼玉　林　歌子
寂びさしかたぶく軒のくらがりに砧うつ男月はてらしぬ

○　　　宮城　中澤たか子
寒き日は大沼の水に沈みてゝ丘の木立に風の鳴る

○　　　京都　甲斐春子
すきもちてたかへす背子のひなうたに草ひく妹も聲あはせつゝ

○　　　紀伊　佐田錦子
かつ惜しみかつまたれつゝ晴衣縫ふ手せはしき年の暮かな

○　　　丹波　足立美枝
このひごろ母と暴ひてわれ拗ふる妹すかして朝月を見ぬ

○　　　讃岐　矢野鶴子
ひろめ屋は笛と太鼓を鳴らしつゝ年行く街を練りあるくかな

○　　　牛込　村上淑子
鳳仙花手だにふるればはじけ散る實にも似るかな拗ね給ふ君

○　　　越後　小坂すま子
夢の世のさだめとしれどたへがたき涙にくもる冬の夜の月

○　　　東京　呉　ゑん
昨日までふりつもりたる白雪も今朝の旭に新しく見ゆ

○　　　京都　木俣津夜子
白壁の小家と欅の木とならびて街をかたづくりゐぬ

◎　　　和泉　井上登美子
少女子が口紅さしてものはづる姿に似たり椿花咲く

○　　　群馬　林きみ子
日の本の不二の高根の初日影いよ〳〵高くてりわたるらむ

○　　　東京　黒川ちよ子
うつくしくつゝむ雪もて明にけり白雪しろう初日かゞやく

○　　　新潟　五十嵐みつ子
打ちつれて人なづかしみ窓に來る鳩愛らしき東風の朝かな

◎　　　越後　五十嵐須賀子
平和の光あまれき小山田ににひ年祝ふ民よ靜の子

○　　　羽前　柳河鈴子
今朝のゆめは月夜に落葉ふみわけて近づく宿の音なつかしゝ見ぬ

○　　　下谷　藤掛つれ子
寒ければ千草の露は消えやらで更け行くまゝに氷となりぬ

○　　　山形　阿部久子
春なりて待ちし昔もありけるを暮れぬと思へば悲しかりけり

○　　　群馬　林きみ子
松風も谷の流れも埋れて雪しづかなる冬の山里

○　　　羽前　田中千代江
城山の紅葉も未だ散らなくになど君一人かくはいそぎし

○　　　滋賀　村上きみ
鐘のねに秋をとぢめて山寺の岩かきもみぢちりはてにけり

○　　　靜岡　横田梅代
よく笑ふ人にまじりてつゝましう舞ひてあるをほめられしかな

○　　　伊賀　亀山歌子
逝く秋を旅の宿屋の窓に倚り二人は枯野さまよふ心地



短文

（甲）十勝岳の雪

東京　平塚白百合

一晩れると、もう弟はあの遠い汽車でのり通したのを忘れて、起きるといきなり背戸に出た、所々移民の小屋が煙をはいて、白樺の上に十勝岳が眞白く雪をかむつてゐる。弟は泣きごゑになつた、見るかぎりは寒帶のくらい木ばかり、「みかむ山がないなー」と叫んだ、あゝふるさとの滲暖かい家は、今誰れのものとなつてゐるだらう、さすらひの冷たい袖に、十勝颪がゾーとしみてくる。

（乙）可愛い露子

下總　石渡内敬子

ほか〱と暖かい小春日和、からりと障子を明けはなして、緣側に近く姉樣と向ひあひに針箱を持ちだした、築山の邊りに可愛い唱歌がやんだかと思ふと、もう御母ちやまと露ちやんが飛石を傳つて來る、友仙の袂なかゝへて、綾柏の陰から萩の切株を廻らうとして覺束ない塗木履の足元に鈴がコロ〱となる、下髮の首を傾けながらにこ〱して、「お祖母ちやまに柿頂いても可いこと？　母ちやま、」赤いリボンの木目がキラキラする、振り向かれた姉樣のお肩は沁々細くおなりの樣、いけませんよ、きいきがわるくなつたらどうします……　眞絨よ、れ、露ちやん、それよかお菓子の方がいゝわ、そら善味しいヂナム入りのれ、頂いてらつしやい、そして叔母ちやまにも半分頂だいな、れ、覗き込むやうにすかしても、いやよ〱つていふ、ちやあお父樣に伺てらつしやいと姉樣がいふ、露ちやんはお佛間へはいつて行つた、父樣、露ちやん柿たべてもいゝでせう、鈴ふるやうな聲が聞える、私はそつと姉樣を見上げた、眉のあたりにいひ知れぬ寂しさがきざまれてゐる、洗髮のふわりとした銀杏返しも、びんのあたりそゝげた樣に思はれてならない、とわざとぬきあしして露ちやんが出て來る、「お父樣何て仰有て」と聞くと、「あのれおあがりつて、」ホヽヽヽ。姉樣もつひ笑つてお仕舞ひになつた。

（丙）大阪の正月

大阪　久子

「お姉樣、お正月は何日でお終ひなの、まだあるの」「エヽまだ二日あるの、敏ちやんが大きくなつたらまだ〱幾らでもあり升よ、」「さう、嬉しいワ、」とあどけなき言を殘して妹は何時の間にかスヤ〱眠つてしまひました、大方家族合せをした夢でも見てゐるのでせう、やがて夜も愈々更けたような氣がしますと、急に去年の樂しさが浮かんで來て、又

しても母様と感涙をこぼす、一度祝融の毒舌に苦められた見る陰もないこの焼跡、家も疎らの假住ひ、寒さがヒシ〳〵と身にしみ入る様、フト何処ともなく洩れ来る琵琶の音も、悲調を帯びて静かな空氣に響き、一層思ひを深うして不知〳〵玉の雫を宿しました、マーこれが大阪のお正月なのです、二度とこのような淋しい春を迎へたくはありません、月を覗く雁の一聲は東の空さして飛ゆきました。

日曜の午前九時

麹町　浅井ゆさ子

小春日の暖かいお縁に蒲團を干し終へて鶯色の襷をはづした姉様は、納戸縮緬の美しい衿を開けて、雪のやうに白いムツクリとした乳をお見せになると、庭にいらつしやる兄様に後向の無格好に抱かれて居た君ちやんは、可愛いゝ圓い手を振つて喜んでお乳の方へ行かうとする、兄様はぢらして漸く離れて入らつしやる、君ちやんは「我領分」といふ顔付でかぢり付いて呑んでゐる、兄様は「現金な奴だれ」つて入学誕の頬を柔かい坊の頬におつけになるので、「切角大人しいのにれ」つて姉様もお笑ひ遊す、いつの間にか後の襖を開けて母様が「マア賑やかだれ……」、隣の梢で百舌鳥が囀り出した。(秀逸)

迎春の仕度

四谷　櫻子

お正月の晴衣をやつと縫ひあげてホツと一息、一寸氣晴らしに窓によつてガラスごしにすつと通りを眺める、いつのまにしたのか向ふ側にはもうとびく〳〵に松飾りができた、いよ〳〵、春は瞬に近づいたと思ふと、追ひかけられる様な氣もするけれど、何だか嬉しい、こつちは聯合大賣出しの大景品つき福引賣出しと書いた大小の提灯が風にゆれて、軒毎に打渡した紅白の幕、福引所の前には引く人やら引かぬ人やらが一ぱいたかつて、「さあ〳〵大當り金だらひだ〳〵、お次は雑記帖一冊」とかゝりの男が大聲あげてゐる、大きな風呂敷抱へて行く女、輪かざりがつい肩でる人、もえぎのふろ敷首にかけてお歳暮を配る小僧、皆忙しさうにわき目もふらずに歩いてゐる、私もまだする事が澤山あるのにと思ひ出していで立ち上つた。(秀逸)

親ごゝろ

[illegible]井　添子

植物園が綺麗だから午後から参りませうと妙様と光様とにお約束したから、母様にお願ひして用意した、あの方々はきつと又立派にしていらつしやるんだらうからと母様が仰有るので、いゝ方の糸織にする、そのうちに二人とも誘つて下すつた、私も出かけやうとする、母様はお二人の風を見ていらつしやる、妙さんは麻の葉の大島だし、光さんはおぼろ御召のいゝ柄、何だか私だけこんな流行おくれの糸織の古物なんか着てますがにいゝ心地はしない、母様のお顔を見たら御眼の中はおやしく曇つてゐた。(秀逸)

正月の前日

和歌山　静子

嗚呼、モー今年も暮れるんだ、厭になつちまう、エ？　ホヽヽ、母様は十七で赤坊あがつたつてー　オヽ嫌だ、デモ妾もマガレツトに赤いリボンは止めなくつちやならないでせうか、エ、肩上げも取つてしまへつ

てまア！母樣はひどいわ、わゝもう一日で十九になる、してゆくてには結婚といふ穴を掘つて待つてゐるものがある、わゝ（秀逸）

私の名前

青森　菊　子

御父樣の御用事の時には「きく」、からかひなさる時には「けくけく」、「きくどんじ」、御母樣は「きく」、「きくちやん」、御手紙には「きく子」、お祖母さんは「きつこ」、田舍臭い事、御姉樣は「きく子」、私とけんくわする時は「ばかきく」、御手紙は「きく子よ」、をぢさんは「きつちや」、をばさんは輕くさつぱりした樣御聲で「きつちやん」、從兄弟は「きつちやん」に「おきくさん」、琴の先生は「おきく樣」、御手紙には「花の菊子樣」、學校の老先生は「、きく」お友達は「きく子の君よ」などゝやさしき御文字、近所の方は「おきく樣」、子守であつたのは「きこちや」、かう書き立てると中々あります、誰方もこんなにおありかしらん、名の事實皆許何れでもハイハイとお返事をして、まて笑つたり怒つたりする、（秀逸）

一年前と今

埼玉　み　ど　り

お姑樣が早いもんぢや、高髷に派手な振袖着た花嫁姿の女は、最う美江坊のお母さんになるし、わしはこんな白髮のお祖母さんになつた、丁度もう一年になるのう」とおつしやつて、良人の膝に居る美江坊を見てニコ〳〵してゐらつしやる、外にはヒユー〳〵と凄じく木枯が吹きすさぶ昨日今日家の中は和氣にみたされて春のやう、嫁いでから何事もお姑樣のお氣に召さなくつて、人知れぬ苦勞をしたが、美江坊が出來てからは難有いほど優しくおなりなすつて一にも文、二にも文、と私でなければならないやうに言はれて、可愛いゝ初孫のためにはかくもと思へば、美江坊が猶更可愛いくつて。（秀逸）

幸福な身の上

牛込　百　合　子

末ツ子の私は、うまれながらにして父樣や母樣の御若い顏は見られなかツた、私は何よりこれが不平であッた、然し今となツて見れば、アゝ勿體ない!!　なぜあんな事思ッたかしらんとおもふほど幸福である、隨分廣い世の中には、まだ働きざかりの父樣をうしなツて三十になるやならず母樣のと共、に朝夕を泣いて暮らしてゐる少女もあらうものを……、アゝ私には、御願をさすればいゝむもちだといツて下さる父樣があり、御用をもめばよろこんで下さる母樣もある、そして一日中笑ふて暮らして、また來る御正月にも七十以上の父樣や母樣から三組の御さかつきが頂けます、何といふ幸福者でせう、私は……（秀逸）

新春の感

中河内　西　村　千　代　子

親友のすみ子樣から年賀狀が來た、其端にこんな事が書いてある、「世間なみに新年お目出たうとは申すものゝ、私は一向にお目出たくもありませんのよ、生れて丁度二十年、此長い間に何をしたでせう？　只記憶に殘るはなつかしい寄宿舍のまとひ、こんな片田舍へ入つて了つては花々しい社會も新聞紙と雜誌で見る計り、お正月だと云つてかるたとる友もありませず、心配もなく、樂しみもなく、只まぼろしのやうに世を送る私の身、我ながら思へば可哀想ですよ、おや〳〵新年早々にこんな事を、これも失戀女の愚痴ですわれ、あなたの新春の御感想はどんなの、聞か

して下さいな」、數ある友の中でも快活であつたすみ子さんも、大分御感想が變つたこと、では早速御返事をと私も年賀狀の端へ小さく、只私はあなたの御身が羨しうの御座いますと」とみ、（秀逸）

人生

豐前　田　鶴　子

姉樣はお嫁入前で忙しいので、着物の繕役は私にまはつて來た、何だか寒い心地がする、朝から縫ひはじめてやつと衿付までなつたらおきく〳〵した、丁度この時前の川でがり〳〵と音がし始めた、毎日のやうにする が何だらうと思つて裏門を明けて見る、田圃より川を渡つて來る風が冷たい、紺の筒袖に手拭かぶり匪の中ばを水につけて芋を洗つて居る娘がある、先隣の材木やのちいさんが絆纏をきて懐手をして立つて見て居る日は傾いて水面には娘の影が長う映つて居る　一しきり風が吹いて川の上に漣なうつ、あゝあれも人生である、姉樣のお嫁入も、材木やのおぢさんもかうして見て居る私も……、（秀逸）

初雪

山形　物　阿　鈴　子

何氣なく障子を明けて外を見たら、白いものがチラリ〳〵降つてゐる、オヤ雪だ―　アレあそこに大きいのが落ちた、……オツト消えたと、十六になつても幼心がまだ殘つてると見えて、矢張り初雪の時には昔にかはりなく一寸うれしくつて心までふわ〳〵する。

母樣は大根洗ひもすまぬのにふられてとこぼしてらつしやるに、父樣はコレハ豐年だふれ〳〵と交ぜツ返へしなさる。

弟は積りもしないうちから辷下駄と雪具の準備に忙しさう。（秀逸）

元旦

下野　片　桐　浪　子

「目を明いて聞て居るなり四方の春」、バメ〳〵鳥の羽音がしたかと思ふとチウ〳〵と雀の囀へづる聲がしげくなつて來る、遠い處で雨戸を繰る響がしてから暫時たつと、裏の方でうがいをする音が高らかに聞える、雨戸の上の欄間障子が薄暗かつたのが次第に白んで來て、正四角な骨が黑くはつきりうつる、雨戸の間の隙が一すぢ鴨居から敷の上まで引廻されて、食指の入る程の穴から、パツと障子の上に明がさし込んで、庭木の枝の模樣が薄すり幻燈繪のやうに寫つて居る、旭日が映すのであらう雨戸の東の隅の板が一寸透いて見える、次第に擴がつて五寸許の處が鼈甲のやうに透つて赤く輝いて來た、今日は流石に例の清凉しい味噌摺る音が聞えぬ、鐵噴聲の納豆屋も來ぬやうだ。

異境の夕映

京城　む　ら　さ　き

珍らしい曾千いた、ナーまばゆい夕燒だこと、向ふの山の嶺々は火がつく樣に明かるいあの天の眞赤なこと、フランス教會の塔の先は全く燃えてゐるとしか見えぬ、其邊りに外人の宅が、之も赤い、町から何町離れて居るか知ら、其間の廣場に白い鳥が五ツ六ツ上つて下つて下つて上つて居る、日本のと形がよほど違ふ樣だ。

待つ夜のすさび

美濃　藤　井　米　子

寒き風の榾に遮られていきせく音、落葉の吹きまくられてさらさらと走

る音を小窓一つそとに聞く、今宵の物さう〳〵しさは、冥界に落入るこゝちになん、ふと金ぎ火鉢の火をかきおこせば、鐵瓶の音はうごかされて、立ち上るゆげいと暖はし、もはや月も出づべし。

姉の許に

静岡　静子

御手紙おなつかしく拜見致しました、姉樣のお好きな山茶花漸く咲き揃ひました、お山で百舌の聲がしますと急にお寒くなつたやうに思はれます、御父樣十五日からは一入の御機嫌で、毎日鐵砲のお掃除計り、此間も小鳥を十羽許りとつてゐらつしやいました、大分油がのつて結構でした、御飯頂きながら手まれでいや〳〵ポチのお手柄話し、一同大笑ひ致しました今十日經てば私の誕生日です、リボンでもブローチでも決して御遠慮致しません。左樣なら。

風の日

美穂

ヒユーツと又一しきり地をゆるがすやうに、あゝ吹く、吹く、枝がとぶ、枯れ葉が舞ひ上る、今朝までたつた三枚夢のやうに寂しく枝に殘つて居た紅葉も無くなつてしまつた、もうこれぎり廣い庭にも常綠樹の外葉は見られない、あゝ又吹く、恐ろしい程、日記帖の上を一枚破つて持つて居たら風は忽ち手から紙を奪つてしまつた、紙はきり〳〵〳〵と舞ひながら高く上つてお隣りの屋根を越してもう見えなくなつた、何處からともなく、坊やはいゝ子だれんれしな、坊やのお守は何處へ行つた、お山を……、風は益々はげしく吹く。

晴れ野

兵庫　くれなゐ子

背戸の破れ扉を開くと、すぐ小鈴の響く樣な水のせゝらぎが聞える、山から湧き出る此の淸い流れは夏の眞盛の折、どれだけ人を喜ばせたらう靜かな澄み渡つた空に、綿をぎつちた樣な白雲がゆたりと動いて居る。寫つて居るかと水面を見ると、只水がさら〳〵と流れて行くのみ、フト上を見ると木の枝に一羽の鳥が默つと私を見下し居てる、何んだか氣味が惡るくなつて、叱ツと聲かけると、横向きになつて一度强い羽ばたきして歎つて南へとんで了つた、

春待つ宵

千葉　山口あき子

五人の妹の爲めお年玉に水引をかけてから、昨日三越から仕立てゝ送つた春の晴着を茶の間にひろげて叔母樣に見て頂く、勝鼠鶉縮緬に若松の裾模樣、袖口にちよとお手を掛けて「私も若返つて最一度こんなのに手を通して見たい」と仰有つた。

風が强く吹きすさぶ一夜を、いつもの辻占賣の女の聲がしも夜にさえて、憐に聞こえる、あゝして今宵を一分も永かれとかせぐ人、かくして明日を待つ私、幸多かつた此一年間を心の內で眞人に感謝仕ました。

コバルト色の空

東京　友子

コバルト色の空は高く晴れた、こよみの上では立冬も過ぎたのだけれども、まだあたりには、秋の面影が偲ばれる、あまり日當りのよくない故

か、楓葉がナツと今頃まさかりに色づいて居る。ふとあの春の木のめぐむころの事が胸に浮んだ、私は毎日かうやはらかな葉ののびるのを見てゐたがもう散るやうになつたのだ、ぶと垣根の雛菊が目に入つた時、何ともいひしれぬさびしさが身にしみた、一しきり吹く風に、上の伯爵邸の「いてふ」のおちばがやつと清めた庭に又も點々と。

そゞろあるき

鹿兒島　ゆかり子

自分はなほこの長い〳〵薑場を歩いた、足下にはざぶ〳〵と靜によせてはかへす男波女波、前には櫻島がれむつてゐるやうにそびえてゐる、左の磯の沖も右の谷山の沖も漁火が點々として空の月と光を爭ふてゐる、さつとふく風に思はず襟をかき合はせるとたん、この寂寞を破つて入江の方からギイ〳〵と櫓の音！　續いて小うたが聞えた、ふりむいて見ると舟は四五人の青年をのせて行く、皆の顏は月に照されて青白い、まるで繪のやうだと思つた、遙か向の薑場のはての別莊ではもう會はすむだらしい、

影法師

本鄕　千代子

庭の隅からひろごる夕闇に、何を思ふともなくたゝづむと、さら〳〵と梢を渡る風に、何の葉かひやり襟に落つ、ふと見上る空には星が二つ三つまたゝいて居る、窓の障子にパツと燈火が映して影法師が一つ大きく映る、弟が勉强を始めたらしい。（これから原稿は墨で御書き下さい）

雨あがり

倭　文子

長く降り續づいた雨はやつと上がり、ちらほら青い空が見えて來た、大きな露のめだと連れが、互ひにはなれじと彼方の森をさして行つた、何處かで雞が鳴いて居る、雀も共にさえづり交はしてゐる、露を含むだ紅葉は暖い日の光を投げかけられて生々としてゐる、散歩にや、靜かなラツパの音を立てゝ行く自轉車の人は、美しい金髮をそよ吹く風になびかせつゝ、帽子にかざした花のひとひらは、ハンドル廻はす優しい手の上にはら〳〵とこぼれ散つた。

潛水夫

對韓國　板井かた子

築港工事の最中なので、思ひ出した樣にズドーンと巖の崩るゝ音がするゾアラ〳〵……、カツチン〳〵と鎚の音が絕間ない、長く突出た礎に、トロがゴロ〳〵ツ……、石工や土方職がいで笑ツたり大聲で怒鳴つたり、それは〳〵喧しい。その傍に二人が沈默して交互に送氣機の把柄を上下してゐる、護謨管を辿つて見ると、赤旗を樹てた水底から極めて間をおいてぽツくり〳〵と大きな水泡がたつ、何だらうと思つてゐると突然むつくりと鉛色の變てこな蛸坊主見たいな頭を擡げた、煙草吞んでゐた手傳らしいのが大聲で用を聞いた、恰で獸に言ふ樣だ、と蚊の鳴く樣な聲して釘と鎚とを吳れと言つた、そして泡をたてゝ沈んだ。

つれ〴〵の日

京都　眉青子

朝から雨、風も少し吹く、白銀の絹糸のやうな雨斜にしと〳〵と紅白のコスモスに降りそゝいでゐる。二階から街を見下すと、蛇の目や番傘が流れるやうに行く、生きた繪や歌のやうだ、裏の塗柵に鶺が來て、花の

やうな紅い實をつゝいてゐる、つゝく度に柿の葉がしきりに散る、靜枝が變な聲を出すので皆がお腹を抱へて大笑ひをした。雨は止まぬ。

津輕富士

青森　永田よし子

道端の草は露にぬれて、朝日にキラ〳〵光つて居る、黃ばんだ田には百姓が稻刈りに忙しさう、ガターツといふ音が聞えて向ふの森の間から吐出されたやうに汽車が出て來て忽ち左の方に曲がつて流れてしまふ、長く引いて漂つてゐた白い烟が末の方から擴がつてスートと消える、空は水色に澄み切つて浮出たやうに津輕富士が中身を現らはして居る、

赤城おろし

埼玉　三重櫻

昨夜の雨は名殘なく晴れて、籬の菊は今正に蕾を開かうとして居る、妹の美いちやんを連れて裏の林へ遊びに行つた、冬になると上州の名物ともいふ赤城おろしが容赦もなく吹きつけるが、けふは寒風もなく、空にはちり雲もない日本晴である、妙義榛名の連山の中からうき出したやうに淺間山の烟を吐いてゐるのが見える美いちやんにお花をとつて上げませうと言つて花を見付けに行つたら、きれいな野菊が草むらの間に咲いてる、まあ何て可憐な花だらうと一番澤山花の付いてる のをもぎ折つた、すると其の花の上に一匹の胡蝶がつかれた羽を休めてか、靜かに眠つて居たので、何となく秋のあはれが身にしみた。

友のよろこび

岩代　岡美都子

千代様、もう御存じかも知れませんが、富子樣れ、お正月にはいよ〳〵にお目出度お成りなさるんですつて、それで島田はやつとお袂布を止してお羽織を召す樣になりました、ソラスきつての衛生美人〻さぞお可愛い赤さんがお出來になるでせうれ、お目出度い初春に嬉しいお樂しみが出來ましたわれ、何れにしても御出產になれば、逸早く御知らせ申上ますから余がすに樂しんで頂戴、今年はお手の霜やけは何うですの、時節柄御身御大切に、さよなら、

晴やかな日

筑前　高松ひで代

うらゝかな空、木立に囀づる百舌鳥の聲、あゝいんげん畑より香りくる豆の香が、ひとしほになつかしい、葉鷄頭草の燒けた色が白い私の前垂れに對照して美しい、ほんに晴れやかな日だ、洗濯するのもわすれて了つて、うつとりとして風にゆられるコスモスを見入る。

初春

東京　若紫

「健三君競爭しないかれ」、「あゝしてもいゝや。だけど君のは二枚半だからいゝけれど僕のは小さいから唸りが惡いなあ」「かまうもんか。さあ上げやう」、羽根と仲のよい女の子の方は「風吹くなドウ吹くな」としきりにおまじないをして居るのに、「何だ女はあんな事云つてる」と得意然とブーンとうなる紙鳶の糸をブン〳〵引いて居る、「羨しいなあ、己らも上げて見たいや」、と何日の間にか入つか九つ位の 角兵衛が悴たような手をハー〳〵息で暖めながら見て居る、「オイ何して居るんだい・　早々と行かないかツ」、と太鼓たゝきが後からどなつたので、驚いて町の方に

聞けて行つた。

冬の夜

京都　照子

今恰度十一時、雨戸を打つ風がすきもれて肌にしみこむ、おゝ寒むと針打つて居た手がいつしか火鉢の上に、表通りにはよなきうどんの鈴の音チリンチリンと憐れにひゞく、東洋パンは如何と大きな聲が聞える、あゝ今頃東京の御祖母さまはどうしてゐらつしやるだらう、東京は一入風のはげしい處と聞いて居るから、お風でも召してゐらつしやる樣な事は無いか、もう此頃はいつものせきで夜もろくろくおやすみになるまい、私が一緒に居つたらお背でもおさすりするものを、あゝ一度御目にかゝり度い、もう來年は七十の坂を一つ越へなさるのだわ、おぐしもま雪の樣になつてゐらつしやるだらう、お腰もあづさ弓とまがつてゐらつしやるだらう、あゝ汽笛が…、あゝあの汽車に乘つて懐しいお祖母樣の處へ行きたい。

のどかな日

横濱　佳文子

今日も亦いつもの通り机にもたれて好きな雜誌に讀みふけて、時のたつのも知らずにゐる、耳許にちゝと嬉げに友呼び交はす雀の聲に、ふと我にかへつて今更のやうに、うらゝかな日和に何となく浮々として、いそいそ庭に降り立つた、裏の方では草花の手入れの終つた植屋木が敷石のくづれたのを一つ一つならべてゐる、渋りが際はだつて美しく見える、うつとりと澄みきつた空を見つめてゐると、遅れ咲きのバラの垣根の間からもれ出づる床しの音色、あの捌りとりたなで肩の、懐しげなうるんだ眼ざし、かなでる主の姿がありありと、眼につく、或はゆるく又急に胸にしみ渡るやうな弦音の……

田家の夕

岡山　貞子

今歸たゞといふ聲、爺ちやんくと走りよる左右の孫の頭をなでながら、今日は忙しかつたのでよけい勞れたゞと上り口に腰をおろせば、「おおおかへりかしとくすぶつた手拭で兩手を拭きくく出迎へるお婆さん、其内嫁らしいのが急いで裏手の方へいつたと思ふと、清い小川の水をくんで來た、お爺さんはそれで足を洗つて居るお婆さんお爺さんさぞ腹がへらつしやつたどろう」と云ひながら夕飯の仕度に忙しい、家も木も眞赤に彩つて居た夕日は、だんだんと其姿を沒して、家根の上には眉の樣な月が見え出した、家の内からは樂しさうな笑聲がきこえる。

去年の今夜

長崎　若き妻

今日も美しく晴れた、玉は書齋の緣にひなたぼつこしながら一生懸命に足をなめて居る、私は机に頰杖ついてうつとり眺めて居ると、去年の今夜の光景が胸に浮ぶ、ほんに大廣間に旦那樣と並んで坐つた時はもうも う恥しくて、幾十の視線は皆私に集まるし、本當に泣き出したい樣だつたが、と上氣した頰を片手に押へて、又新婚の寫眞を出して見る、此まあすました顔はと思うと、もう可笑くつて堪らなくなつた。

笑話

○お轉婆の由來

本鄕　小河みつ子

七つになる富みちやんがお隣の叔母さんのおいでの時お座敷を飛んだりはねたりしますゆゑ、母「富みちやんはなぜ其んなにお轉婆でしよー子」、富子「お轉婆は親の躾けよ」母、「うそを言なさい、誰れがそんなことを言ひました」、富子「お隣の叔母ちやん仰有つてよ」(秀逸)

○年賀狀珍聞

大阪　井上たれ子

ある山だしの下女、年の暮れに主人の前に恐る恐る出て、「もし旦那樣、古いお手紙がございましたら、一通いたゞかして下さいませ」、「それはおやすい事だが、一體それをなにゝするんだ」、「ヘイ、國へ年賀狀を出さうと存じまして」、

○頰被りの失敗

大阪　井上たれ子

何時も長居する客の歸つた跡で、主人が小僧に向ひ、「今度あの人が來たら箒に頰被りをさせて立てゝ置きなさい」といひつけておくと、次の日又來たから、小僧はこゝぞと早速吩附られた通りにしたが、もしや違つては居らぬだらうかと客と話をしてゐる主人の前にぬつと出して、「これでよろしうございますか」、(秀逸)

○初夢の道連

大阪　野口たつ子

「姉さん昨夜見た芝居の夢は面白かつたわね」「オホヽヽあなたの見た夢を私が知るものですか」「だつて姉さんと一緒に行つた夢を見たのですもの」

○痛切!痛切!

本鄕　櫻井春枝

「お母さんお化てほんとに有るの」、「あゝ坊が母ちやんの言ふ事を聞かないと出ますよ」、「どんな顏して出るの」、「それは〱こわい顏ですよ」「ぢやア お父さんが歸らない時のお母さんの顏の樣でせう?」(秀逸)

○今年はお幾つ

靜田　三好富久子

安子「八重子さんあなた御幾ツ」、八重子「私二十二になりましたの」、安子「あらツ今年も二十二?」、

○奇拔な問答

滋賀　久保岸子

花子が買物に行き、風呂敷包をさげて歸る途中春子に出逢ふ、春「花子さん何を買つて入らしたの」、花子「何があるかあかしたら此中の燒芋あげますわ」(秀逸)

○よすぎる返事

大阪　艶子

娘「お父樣、私今度優等で卒業しましたら金時計買つて下さるでせうネ」、父「當り前さ」、娘「指環もでせうネ」、父「當り前さ」、娘「上等の着物もネ」、父「當り前さ」、娘「うれしいわネ」、父「當り前よ」、娘「そんなによい返事ばかりして買はずにだますのでせうネ」、父「當り前よ」、

○新春の閉口談

大阪　みどり

從姉の春樣がいらつして、「惠光さんお目出度うよ」とおつしやると、「何ういたしまして、僕は雜煮を食ひ過ぎちやつて、この通り齒痛で困つてるんですもの」、

○これこそ名醫

伏見　成田てふ子

足を怪我した人が醫者に「入浴は差支へありませんか」と尋ねますと、醫者はすました顏で「足をつけないやうに入ればよろしい」、

讀者倶樂部

▲記者様はじめ、愛讀者の諸姉様、明けましてお目出度うございます、何卒本年も相變りませず小さい妹として御導きを願ひます、末筆ながらます〳〵本誌の榮ゆる事を祈ります（山城伏見成田貞子）

▲荻野様、十一月の臨時增刊本欄にて御鬪なありがとう存じます、あなたも園藝に御熱心の由……趣味の合致を懐かしう存じます、末長く御交際を念じます、尚ほ廣く園藝同好の諸姉様方に御願ひ申上ます、ドウゾ種子苗木又は宿根にてもお珍らしい物が御座りましたら、割愛して下さい、必ず相當の物を御送り致します、（信濃國中央西線三留野驛青木恒子）

▲横濱の芙蓉花様は、もしや大岡川の流れきよきあたりに住みたまふやさしく床しき桃割の君ではありませんか、（依文子）

▲名古屋の井出千草様、名古屋は何所でいらつしやいますか、私しも三年以前此の名古屋へ田舎から移りました者ですが、お友達が無くつて毎日淋しく故郷の空を仰いでは涙にくれてゐますので、今では女學世界を何よりの樂しみとしてかゝさずに取つてゐます、誠に不束者ですが、此後何本御交際していたゞき度う御座います、次號で發入ますが御住所を委しく御知らせ下さいませ（名古屋琴子）

▲不幸に終りし私の結婚といふ緋葵様の御作拜見致しまして、泣いて〳〵實に目の前に貴女様が居らつしやる樣に思ひました、小異はありますが私の運命と御同様なのですもの深く御同情申上ます、私は今母の許に居ります、何卒此後紙上にて御交際を御願ひいたします、（野末の捨小花）

▲記者様衛生顧問の糸左近先生の御住所を御敎へ下さい（春がすみ女）本郷區弓町二丁目八番地です

▲十二月號の「田園の妻」を御書き遊ばした若葉様御本名を伺ひたう存じます、私事其昔、女子の友を愛讀いたしてをりました者、貴女はもしや綿野力子様ではいらつしやいませんか、女子の友に御投書遊ばしてゐらしつた方ならば大抵の御方の御名は存じ上げてをるつもりでございます、ほんたうにおなつかしい氣がいたしますわ、（あけぼの）

▲記者様、金子先生の月々の歌の講話は、私共歌のうの字の分らぬものが拜見しましても、よく其心持が飲み込めて、誠に興味多いことに存じます、私の學校の先生も大變敎場で賞めて居られました、（麹町とし子）

△江川野菊様、お懐しいわれ、何故あなたお投書遊ばさないの、あなたのやうなお文才のおありになる方がお出しにならなくつちやつまらないわ、どうぞどし〳〵とお得意のをお投書遊ばして頂戴な、私誰か解つて、泣菫よゝゝゝ、三瓶まつのさま、あなたも是非〳〵お投書遊ばして頂戴れ、樂しみに待つていてよ、いづれ長いお手紙を差上げます、（四大久保松岡菁野）

▲千葉の百合子様、私も斜視眼で誠に困つて居ります、本誌十一號で、あなた様も同患でゐらしたのが手術遊ばして御全癒と承り、飛び立つばかり喜しく存じました、甚だ恐れ入りますが御住所御知らせ下さい、直ちに御伺ひ致したう御座います、（大阪府北河内郡庭窪村大字大日吉川末野）

▲みなし子さんにお尋ね申します、貴女は如何なる譯で尼に成りたいと仰有るのですか、いつれなにか譯がおありでせう、どうか本誌のお友達のよしみにお知らせ下さいまし、いづれ悲しき事のお有りのやうに思はれてなりませんの、何卒お聞かせ遊ばせな、私もみなし子同様な性ですから氣に成てなりませんの、（東京なみなへし）

▲千草様、貴嬢は方言をお集め遊ばさるゝ由誠に

趣味あるお企てと存じ候此處は日本にても北の端て(新領樺太の手前餘り威張れませんが)なればお耳新しき言も有之る事と存じ候、九歳の春に後に見なせし此里をば八年目にて漸々歸郷なせし妾には言葉の意味を解する事は何より難儀の事に候めし御笑ひ草まで、左様ですればツンダヤンス、つかれたはコアイ、くすぐつたいはモツコツイ、小僧はアンコ、可愛いはメンコイ、赤兒はニガ、道理ではツンダベツ、父はオドサン、母はチヽ、母なチヽとはすゐ分振つたものに候はずや(北の海棚音)

▲相馬愛子さま、お懐しう御座います、私も今年高等女學校を卒業いたしましたが、卒業する迄は希望に充ち〳〵て其の日の來るのを一日千秋の思ひで待ちあぐんで居りましたの、併し世の中は全くまゝにはまりませんれ、身體が虚弱の爲め遂々目的を達する事が出來ませんでした今はもう此の女學世界の他には何も慰めとなる物はありませんの、同じ様な御境遇のあなたが何となくおなつかしくつて……どうぞ誌上でお交際して頂戴、(四大久保松岡雲野)

▲皆様の文章の御うまい事、たゞ〳〵驚くの外ありません、田舎娘のとても者への及ばぬ事言つて居らつしやる事れホヽヽヽ、どうぞ御交際を願ひます、(酒田大平その子)

▲土佐の大黑きく子様、貴女のお姓名を見て大層おなつかしう存じました、誠に愚な者ですけれど御交際を願ひます、(高知しらはぎ)

▲皆様、無教育の私にかほどに御同情下されて誠にうれしう御座います、之も女學世界のおかげと記者様に御禮申上ます、殊に大阪の名もなき花様、大阪と承つて一入なつかしうございます、私も御地には叔父叔母や從兄弟も澤山ありますの、何卒之を御縁に一度御尋れ申度う思ひます、御差支なくば何卒御住所御知らせ下さいませ、私は横濱中村町三鈴木芙蓉花です

▲皆様私は古くから女學世界の愛讀者でございます、何卒御交際して下さいませ、御交際して下さる御心のございます御方様は、誌上で御住所御知らせ下さいましたならば、私の方から御手紙さし上ますから、何卒御住所御知らせ下さいませ、(ちぬの浦にて美鈴女)

▲どうぞ皆様、以後紙上で御交際を願ひます、扨て早速で御座いますがなるべく京橋方面に近い芝あたりで琴のよいお師匠さんがありましたらばお敎へ下さいませんか、新曲ものもくみものもこらす御存知の方なれは、なほ結構で御座います、(築地萩の枝)

▲大阪名なき花様、私も貴女の御友達ですよ、女學校は中途にてやめ、宅にて琴、活花、茶の湯等を稽古して居りますのよ、病氣のため當地に參りましたが、一人も友達はありませんから淋しくつて妹を相手にして遊で居ります、近く故一度御目もじ致しとう御座いますから、御所をくはしく御知らせ下さい、(なだ住吉靜)

▲短文は端書でないといけませんか、中紙にかくのでしたら何行何字詰ですか、(大阪美美子)

(短文は端書に限ります)

▲私は本誌の愛讀者であります、何本皆様御交際下さい、(神田皆川町九小林しのぶ)

▲本紙愛讀の皆様方、いつも〳〵才筆お振ひ、遊ばす内藤千代子様を思はれぬ方が厶いませうか、心の日記に心の秘密、扨ては驚く手紙に、小説の松風に、逝く春など、近くは嫁がぬ人、もう〳〵其他一ツとして千代子様がお筆の示さるる限り私は讀む度毎に體がこうしびれた様に感じ魂はみんなお作の中へ飛んで仕舞つて何とも彼とも丁度お酒にようた人はみなこんなだらうと思ひ升わ、ホヽヽヽ、ほんとうにお上手ですれ、願はくば記者様よ、一度此の方のお寫眞掲げて頂戴な、ハヽ嬢方も必ず御同意でせうと思ひ升、アヽ私鵠沼の近くだつたら毎日辨べん當でさがし歩きますのにれ、ホヽヽヽ、あの、それから、今後お作どし〳〵御掲載下さいな、ますます歡迎愛讀しませうれ、皆様マア私餘り夢中になつてハカキがさかさ、眞平御免々々、(女學世界最愛讀女、大阪府下愛讀者)

▲新年御目度う御座います、御社のお榮えと共に愛讀諸姉の御幸福を祈ります、(大阪市北區東梅田町二六九三、粟野光子)

女學世界
第拾卷第貳號
一月十五日發行

マダム振り
一名新奥様の人格

マダムは女性が理想の一部を現實したるものにて婦人光榮の表彰なり、光榮のあるところは嫉みの集るところなり、マダムは女性の品位なり、又權威なり、而して又歡樂を伴ふ、由來歡樂の滿つるところに患難生じ來たる、女性はマダムとなつて此の光榮と嫉みとを受け、この歡樂と患難とを受く、彼女は如何にしてこの間に處すべきか、吾人は光彩あるマダム振りの描寫によつてその暗示を得んと欲す。

目次概要

讀者文藝 懸賞募集（〆切一月十五日）

▲樣々の社會觀察
▲各地風俗の變遷
▲こゝろの日記
▲我家の料理法
▲笑話▲短文▲和歌
▲讀者倶樂部

投稿規則◎笑話、和歌、短文、讀者倶樂部は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

賞金

△社會觀察 一等貳拾圓 二等拾圓 三等五圓
△風俗の變遷 一等拾圓 二等七圓 三等五圓
△こゝろの日記 一等七圓 二等五圓
△我家の料理 一等五圓 二等三圓
△和歌、短文、笑話 甲一圓 乙七十錢 丙五十錢 秀逸三十五錢

毎月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册
　　増刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵税 一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四錢
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年十二月十七日印刷納本　第拾卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番
電話　三百三番　千十八番

博文館出版圖書拔萃目錄

△御進物用圖書切手　優美なる函入とし三百八十餘頁の本館總目錄を添ひ申候、金高は壹圓以上何程にても御隨意に調進可仕候、地方は送料雜費拾錢申受け候。（圖書の御引替は全國賣捌店共通に有之候）

△圖書陳列所　電車にて御來館の方は、本町角にて御下車、東の方三層の洋館目當に御運び被下度候。

△圖書總目錄　總目錄御入用の方は往復葉書を以て御申込被下候へば御送り可申候。



振替口座　東京二四〇番

—女學世界用目錄目次—

製本符號

● 洋裝並製符
◎ 洋裝上製符
△ 和裝並製符
▲ 和裝上製符

▲菊判（縱七寸五分橫五寸）
▲四六判（縱六寸橫四寸三分）
▲三六判（四六判の幅少し狹き物）

御註文規定摘要

△御註文は前金たるべし、又郵券代用は必ず一割增の事

△御送金は振替貯金最も御便利に候、金高壹圓以下は手數料貳錢相添へ共に御拂込被下度候

△書狀宛名は『東京日本橋區本町三丁目博文館小賣係』の事

△一時に金五圓以上の御註文には正價一割引の館友證を呈す

明治四

博文館發行定期

太陽

◎太陽　東洋雜誌界の覇王政治、文學、科學、經濟、宗教、其他各方面に亘り雄大莊嚴名海外に轟く。

毎月一回一日發行▲外に增刊年四回（定價同一）▲大判（四六判二倍大）本文二百五十六頁▲光澤紙寫眞版四頁▲同二色刷二枚▲普通寫眞口繪十二枚▲本文中寫眞版數十箇挿入

正價（◎壹册參拾錢　▲郵稅參錢）　前金（郵稅共）（●四册金壹圓廿七錢●八册金貳圓四拾四錢●十六册金四圓六拾八錢）

商工世界 太平洋

◎商工世界太平洋　商工界の絕好機關當世第一流の意見と實業界の事情を網羅す。

毎月二回一日、十五日發行▲外臨時增刊▲大判（四六判二倍大）本文百十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹册拾貳錢　▲郵稅一錢五厘）　前金（郵稅共）（●六册金七拾六錢●十二册壹圓四拾八錢●廿四册貳圓八拾六錢）

農業世界

◎農業世界　農事改良の急務に應ぜんとするものにして、眞に國本培養の良資料主筆は石阪農學士なり。

毎月一回十日發行▲外增刊年四回▲菊判本文二百四十頁▲原色寫眞版一▲石版彩色畫一枚▲光澤寫眞版四頁▲普通寫眞二枚

正價（◎壹册貳拾錢　▲郵稅貳錢）　前金（郵稅共）（●四册金八拾三錢●八册壹圓六拾壹錢●十六册金參圓拾貳錢）

實業少年

◎實業少年　實業に從事する少年諸君が立身出世の相談相手、學科獨習の良師友たり。

毎月一回一日發行▲外增刊年二回▲大判（四六判二倍大）本文七十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹册拾錢　▲郵稅壹錢）　前金（郵稅共）（●四册金四拾二錢●七册金七拾二錢●十四册金壹圓四拾錢）

文藝倶樂部

◎文藝倶樂部　小說に、時文に、將た美文に、天下の名篇を蒐む、活社會の消息、藝苑の事情、最新の流行等を網羅せり

毎月一回一日發行▲外增刊年四回▲菊判本文三百二十頁▲木版錦繪一枚▲原色寫眞版一枚▲光澤寫眞版二色刷二頁▲普通寫眞八枚

正價（◎壹册三拾錢　▲郵稅三錢五厘）　前金（郵稅共）（●四册金壹圓五錢●八册金貳圓●十六册金參圓九拾錢）

冒險世界

◎冒險世界　冒險小說、探險奇譚、冒險的成功談、書生氣質、陸海軍々事談、學校評判記、運動界情況等を滿載す。

毎月一回五日發行▲外增刊年二回▲大判（四六版二倍大）本文百二十八頁▲原色寫眞版口繪一枚▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹册拾五錢　▲郵稅一錢五厘）　前金（郵稅共）（●四册金六拾三錢●七册金壹圓〇七錢●十四册金貳圓〇五錢）

幼年畫報

◎幼年畫報　稚兒幼童唯一の良友、繪畫寫眞等、善盡し、美極む、記事は是れ小波山人獨得の壇場。

毎月一回五日發行▲外增刊年四回▲菊判美麗畫本▲石版極彩色繪畫十六頁▲二色刷木版寫眞刷込十六頁▲寫眞版口繪四頁

正價（◎壹册拾錢　▲郵稅五厘）　前金（郵稅共）（●●四册金四拾二錢●八册金七拾七錢●拾六册金壹圓四拾八錢）

婦人書類

【家政及家事經濟】

	著者	書名	體裁	正價（圓拾錢）	郵税（拾錢）
●	下田歌子女史著	家政學	（全二册菊判四三〇頁）	各 三〇	六
△	同 女史著	泰西所見 家庭教育	（菊判二五〇頁）	三五	八
●	岸上操君著	家政案内	（菊判二五六頁）	二五	六
◎	近藤正一君著	新撰家事問答	（菊半截判二六六頁）	二〇	四
△	下田歌子女史著	家事要訣	（菊判二八二頁）	三五	八
●	中村鈴子女史編	名流百家 家庭の模範	（四六判四二四頁）	三八	六
△	三輪田眞佐子女史著	新家庭訓	（菊判三二〇頁）	四五	八
△	原胤照君著	母と子（前編）	（菊判 頁）	五五	八
△	同	母と子（後編）	（菊判 頁）	四五	六
●	曾我部純一君著	最新家計簿記	（菊判一三四頁）	二五	六

【禮式】

◎ 坪谷善四郎君著 増訂 日本女禮式大全（菊判五九二頁） 正價壹圓貳拾錢 小包料拾六錢 九〇 小包料一二

▲蒔繪函入和裝美本

本書は日本固有の女禮の美性と泰西普通の禮式の外に女子の知るべき禮式技藝作文作歌其他一切の事を網羅し記事は豐富と文章の流麗 加ふるに製本の美なる世に比類なきものなり女學生は勿論良妻賢母及令孃を有せらるゝ父兄方は必ず一本を備へ給ふの必要あらん。

	著者	書名	體裁	正價	郵税
●	日本婦人正風會々長 中島義式君著	新撰日用女禮式	（菊判一八六頁）	二五	六
●	同 君著	女子禮法教科書	（菊判二六四頁）	三八	六
△	高等女子師範學校教授 佐方鎮子女史著	禮式と作法	（菊判三三八頁）	四五	八
●	同 君著	新撰小學女禮式	（菊判二二〇頁）	二五	六
△	下田歌子女史著	女子普通禮式	（菊判二六二頁）	二五	八
●	大橋乙羽君著	和洋禮式	（菊判二四八頁）	二五	六
●	中島義式君著	新撰女子作法書	（菊判一四〇頁）	二五	六
●	藤波芙蓉君著	新式化粧法	（菊判 頁）	四五	八
●	前田雪子女史著	巴里婦人の交際振 奥様の顧問	（三六判四〇八頁）	四八	六
●	宮本桂仙君著	西洋男女交際法	（菊半截判二三六頁）	二五	四

【料理】

△ 治庖會本部教場主任 安西古満子女史著 四季毎日 三食料理法（菊判和綴） 一册 五〇 一册 六

▲全四册 春、夏、秋、冬に分册

何れの家庭に於ても毎日三度は献立に就ては主婦が最も苦心する處ならん此の書は之が相談相手たらんがために著者が四星霜の間の苦心を以て衛生と經濟とに留意せられ一年三百六十五日毎日三度の豫定献立表をつくられ且つ其料理法は平易の文字を以て反覆叮嚀に記述せられたるものなれば親しく先生に就きて教を受くるに異ならず何人と雖も容易に會得することを得、實に各家庭はもとより學校及び軍隊に於ても必要缺くべからざる類書中の白眉なり

	著者	書名	體裁	正價	郵税
△	赤堀吉松君 赤堀峯吉君 赤堀菊子君共著	惣菜料理	（菊判二八一頁）	四五	八
△	大日本割烹學會長 石井泰次郎君著	四季料理	（菊判三一〇頁）	四五	八
△	龜井まき子女史著	家庭料理法	（菊判二三〇頁）	三五	八
△	下田歌子女史著	料理手引草	（菊判三三〇頁）	三五	八

著者	書名	體裁	正價	郵税
藤本藤陰君著	實用料理法	(菊判二八四頁)	二五	六
佐々木孝吉君著	西洋料理法	(菊判二五四頁)	二五	六
阪本隆哉君著	衞生食物調理法	(菊判一五四頁)	三〇	六
同君著	病者の食餌	(四六判長形一五六頁)	二〇	四
八百善主人著	八百善料理通	(全二册中本和紙刷)	三八	六
小田原屋主人編	漬物早指南	(中本和紙刷)	一二	四
醍醐山人編	料理早指南	(全二册中本和紙刷)	二五	六
風羅山人編	料理いろは庖丁	(中本和紙刷)	一八	四
東京治庖會講師 龜井まき子女史著	和洋菓子製法	(菊判三〇〇頁)	四五	八
報知新聞家庭記者 天野誠齋君著	家庭寶典 臺所改良	(菊判二四〇頁)	四〇	八

衞生的臺所の改良は實に清潔と便利と採光とにあり左れど物には順序方法あり「如何にして臺所を改良すべきか」に付て本書は懇切に說明したり

【手藝】

著者	書名	體裁	正價	郵税
下田歌子女史著	女子手藝要訣	(菊判二六二頁)	三五	八
女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著	裁縫指南	(菊判三〇〇頁)	四五	八
吉田調子女史著	裁縫と編物	(菊判二六二頁)	二五	六
飯田吳服店裁縫部小岩井主任 飯田副主任合著	實用裁縫全書	(菊判二六六頁)	五〇	八
三木とみ子女史著	編物指南	(菊判三〇二頁)	四五	八
磯村大次郎君著	刺繡術指南	(菊判三〇四頁)	四五	八
山田興松君著	摘み細工指南	(菊判 頁)	四五	八
東京女子美術學校卒業 鈴木松子女史著	家庭實用新式美術造花	(菊判二三〇頁)	五五	八
刺繡術專門 磯村大次郎君著	實用刺繡術	(菊判一二四頁)	二五	四
山田興松君著	實用造花術指南	(菊判一〇〇頁)	二五	四
森田洪君、鈴木古拙君 牧野等君共著	應用家庭美術	(四六判三四〇頁)	四〇	六

【茶の湯及活花】

著者	書名	體裁	正價	郵税
水原翠香女史著	茶道と香道	(菊判三六四頁)	四五	八
岡崎淵冲君著	各傳比較 點茶活法	(全四册菊判六〇〇頁)	二五〇	小包料一六
江刺家協一君著	茶の湯大全	(四六判五〇八頁)	六〇	八
博文館編輯局編纂	茶の湯と生花	(菊判二五八頁)	二五	六
青山御流會頭 琴松園文雅君 跡見女學校講師 松幸齋理參君 共著	諸流生花指南	(菊判三〇六頁)	四五	八
吐月齋惠一烏君編纂	挿花盆石 四時の詠	(全三册菊判一四〇頁)	五〇	六
秀眞齋月一珣君編纂	挿花盆石 正風花鏡	全三册菊判二〇二枚)	五〇	六
大露庵河村一洗君選	新撰活花圖式	(全二册美濃紙木版刷)	四〇	六
榮雲齋先生編	挿花大樂抄圖會	(全二册美濃紙木版刷)	四〇	六
江原春夢君著	盆景盆石 盆山盆庭 秘訣圖解	(菊判二二〇頁)	三〇	六
柏翁春郊 中島信義君著	草木實驗 盆栽仕立秘法	(菊判一八一頁)	二五	六
順石軒霧編	盆山百景圖	(全四册菊判木版刷)	一〇〇	小包料一二

▲家屋と庭園 内山幻堂君著（菊判約二八〇頁） 四五 八

【家庭衛生】

新編 家庭衛生 醫學士石原喜久太郎君編（菊判五八〇頁） 一七〇 一二
石原醫學士醫科大學衛生學教室に在りて多年斯學の研究に從事し其最も造詣せる所を披瀝して本書を著はす、本書前篇「緒論之部」は衛生に關する汎論にして、後篇「各論之部」は●住居之衛生●衣服と飲食物●氣候と衛生●運動と轉地●小供●姙婦と産婦●病の七章より成り、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して最大漏らさず、之を家庭に備ふれば一家衛生上無二の良指針たるべく、汲れては醫師、醫學生の良友、諸學校衛生教科の參考書たるべし。

新 衛生生理問答 醫學士石原喜久太郎君閲 首藤蘗君編 菊半截形二〇二頁 二〇 四

▲婦人の生理と衛生 青山女學院講師牧野淸子著（菊判三一二頁） 四五 八

家庭衛生訓 千葉勝義君 鹿島櫻巷君共編 菊半截四〇八頁 三五 六

女子衛生學 海軍大學校教授 治郎君譯（菊半截三二〇頁） 三〇 四

▲育兒の務 醫學士山田阿貞炭君 朝夷孤舟君共著 菊判三三〇頁 四五 八

育兒と衛生 池田敬止君著（菊判二四四頁） 二五 六

母親の心得 下田歌子女史著（菊判二六八頁） 三五 六

はゝのつとめ 醫學博士三島通良君著（菊判三一二頁） 七五 一〇

四季應用 通俗治療法 女學世界衛生顧問糸左近君著（四六判二九二頁） 二八 六

▲簡易治療法 附 養生秘訣 新潟縣高田高等女學校 齋藤稚子女史著（菊判三五二頁） 四五 八

通俗治療救急法 醫學得業士金澤君著（菊半截三一〇頁） 二五 四

△衛生指針 姙産婦の務 醫學士町村貞猶君 朝夷孤舟君共譯（菊判四二八頁） 七五 八

復習問答 簡明産婆學 醫學士伊庭榮壽君著 四六判二二〇頁 五〇 六

實習産婆學 産科專門醫稻生鑑次郎君著 全二冊菊判三六八頁 ▲上巻七拾錢 下巻八拾錢 郵稅各八錢（上巻通常産 下巻異常産）

生殖器新書 醫學士守矢親國君譯述（四六判四五六頁） 九〇 八

延命長壽法 醫學士小玉龍藏君著（三六判四四〇頁） 六〇 六

身心修養 長命術 文學士杉谷泰山君著（菊判四二二頁） 七〇 一〇

醫學上の戀愛觀 醫科大學秋吉銀藏君譯（四六判二一四頁） 三〇 六

自然界に於ける 兩性の秘密 ▲一名 人類性別學 澤田順次郎君著（菊判四〇〇頁） 六五 八

【修身及立志】

女子の修養 女子高等師範學校教授下田次郎君著（菊半截二五〇頁） 二五 四

▲女德の養成 [illegible]川長太君著（菊判三三六頁） 四五 八

▲子女の教養 明治[illegible]子女史著（菊判二九三頁） 四五 八

女學生訓 文學士大町桂月君著（菊半截二五六頁） 二五 四

女學生の栞 松岡岩五郎君著（菊判三一〇頁） 三五 六

△女訓評釋 千河岸櫻所君評釋（菊判四一六頁） 六〇 八

△日本女子立志編 千河岸櫻所君編（全二冊菊判七三二頁） 各六〇 各八

△帝國女子修身鑑 東京女學館講師 西田敬止君著（全四冊菊判四一四頁） 各二〇 各二

名士の父母 安藤君 君共編 四六判一五二頁 二五 四

偉人の母 佛國モヽスフロック君著 前田越讀君譯述 菊判一九八頁 三八 六

活動せる實業界の婦人 中央新聞記者田村江東君著（菊判二四六頁） 三八 六

△婦女教育 明治姫鏡 濱木養顯君著（半紙判木版一六五頁） 六〇 八

● 讀賣新聞記者關如來君著 明治の令孃 (四六判一八二頁) 三〇 六

● 近藤正一君著 女子職業案内 (三六判四六六頁) 四五 六

【作文、習字及習畫】

▲ 下田歌子女史著 女子作文の栞 (菊判二三六頁) 三五 八

● 佐々木信綱君著 女子消息 文のしをり (菊判二〇〇頁) 五〇 八

● 樋口一葉女史著 通俗書翰文 (菊判二四六頁) 二五 六

▲ 近藤正一君著 古今才媛文集 (四六判三一二頁) 三五 六

● 東京女學館講師西田敬止君編 女子消息文範 (四六判三一〇頁) 三五 六

▲ 井田秀生君著 書道手引 (菊判三〇二頁) 四五 八

▲ 下田歌子女史著 女子書翰文 (菊判二二八頁) 三五 八

● 佐々木信綱君 渥美雅子女史 共著 新撰女子用文 (菊判二二六頁) 三〇 六

▲ 下田歌子女史書 板垣正臣君書 女子用文習字帖 (全二册半紙判一四四枚) 八〇 八

▲ 大和田建樹君著 小野鵞堂君書 明治女子書翰文 (半紙判一〇〇枚) 四〇 四

▲ 多田親愛君著 假名習字帖 古今和歌集序 (綸子表紙美本) 八〇 四
▲菊判特製 正價壹圓貳拾錢 郵税六錢 (美濃判二四枚)

▲ 橋千蔭君書 高等女子習字帖 烏丸帖 (美濃判五一枚) 三五 四

▲ 同君著 假名習字帖 新百人一首 (和紙刷折本) 三〇 四

▲ 新岡久頼君著 いろは三體帖 (全二册菊判一〇〇枚) 四〇 四

▲ 河村墨鎌君書 初學手紙の文 (全四册和裝上製) 三五 六

▲ 中村不折君著並畫 花卉山水人物 水彩繪手本 第二輯近既刊 (附錄水彩畫手引) 各五五 各四

◉ 三宅克己君著並畫 水彩畫指南 (菊判四三〇頁) 六五 八

◉ 丸山晩霞君著 水彩畫法 女性と趣味 (全一册洋裝並製四六判一一七頁) 二〇〇 八

● 中村不折君著 鉛筆畫法 (全一册洋裝並製四六判三八〇頁) 六五 八

● 橋元春郊君譯 繪畫講話 (全一册洋裝並製菊判二五〇頁) 六五 八

● 野口珂北君著 小嶺女史畫 畫法自在 (四六判二七〇頁) 二五 六

● 三宅克己君著 水彩畫手引 ▲總クロース上製 正價九拾錢 郵税八錢 七五 六

● 新大家執筆 水彩習畫帖 (洋裝並製各册原畫六枚習畫六枚) 各三五 各二

〔第一卷〕三宅克己君筆
〔第二卷〕丸山晩霞君筆
〔第三卷〕大下藤次郎君筆
〔第四卷〕三宅克己君筆

▲ 博文館編輯局編 古今名家習畫帳 (美濃判和裝木版彩色刷二册) 一〇〇 六

▲ 毛筆畫研究會編 初心毛筆畫譜 (全五册和紙彩色刷) 一册 一二 二
▲山水之部 ▲花鳥之部 ▲獸類之部 ▲人類及魚之部 ▲雜之部

【家庭雜書】

◉ 報知新聞家庭記者中村木公君編 實驗問答 日本家庭節用 (三六判一三[illegible]頁) 一三〇 小包 八

◉ 少女世界編輯部編 明治少女節用 (三六判六四二頁) 八五 八

● 農學博士稻垣乙丙君校閲 工藤齋君著 新編 家庭の科學 (菊判四四六頁) 八五 八

▲ 文學士大森兇仙君著 家庭の趣味 (菊判　頁) 四五 八

● 奥村繁次郎君著 家庭に於ける吉凶百談 (四六判三六八頁) 四〇 六

● 櫻井鴎村君著 現代女氣質 (四六判三八〇頁) 三五 六

● 竹貫佳水君著 少女四季物語 (四六判二六八頁) 三八 六

桐生悠々君譯　◉婦人國（三六判三〇一頁）　四五　六

伊達黒州君著　●女性觀 附通人漫語（菊半截判一六六頁）　二〇　二

元祿姉さん著　●現代生活裏面觀察 呪はれたる女（菊判二〇二頁）　三五　六

博文館編輯局編　◉明治四十三年家庭日記（四六判四八〇頁）　三八　九

同局編纂　●衣服と流行（菊判二三六頁）　二五　六

【定期刊行全書】

當代第一流の女子敎育家編著

家庭百科全書

全部五十册

菊判和裝美本毎編三百頁以上

正價（一册金四拾五錢　拾册金四圓貳拾錢
　　　廿五册金拾圓　五拾册金拾九圓
　　　▲郵稅一册八錢宛

三輪田眞佐子女史著【第一編】新家庭訓
石井泰次郎君著【第二編】四季料理
喜多見佐喜子女史著【第三編】裁縫指南
飯井まき子女史著【第四編】和洋菓子製法
水原翠香女史著【第五編】茶道と香道
平松園文雅君 松平齋理參君著【第六編】諸流生花指南
醫學士田村貞策君 朝寅孤舟君共著【第七編】育兒の務
藤井靜子女史著【第八編】簡易治療法
佐方鎭子女史著【第九編】禮式と作法
赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史共著【第十編】惣菜料理
三木とみ子女史著【第十一編】編物指南
牧野濱子女史著【第十二編】婦人の生理と衞生
木村小舟君著【第十三編】敎育お伽噺
前田長太君著【第十四編】女德の養成
內山正知君著【第十五編】家庭と庭園
鹿野直司君著【第十六編】魚鳥家畜の飼養
遠藤ふみ子女史著【第十七編】女子作文法
棚橋絢子女史著【第十八編】子女の敎養
文學士大森兜山君著【第十九編】家庭の趣味
高橋忠次郎君 松浦政泰君共著【第二十編】家庭遊戯法
井田秀生君著【第廿一編】書道手引
磯村大次郎君著【第廿二編】刺繡術指南
大和田建樹君著【第廿三編】歌の手引
山田興松君著【第廿四編】摘み細工指南
藤波芙蓉君著【第廿五編】新式化粧法

以上既刊以後引續刊行す

家庭衞生講話

全部十二册

洋裝菊判毎編百六十頁以上

正價（一册金參拾五錢〇六册壹圓九拾錢
　　　十二册參圓七拾錢▲郵稅一册八錢

醫學博士三輪德寬君述【第一編】一般救急法
醫學博士森林太郎君述【第二編】衞生學大意
醫學博士林春雄君述【第三編】藥物の大要
醫學博士緒方正清君述【第四編】姙產婦之心得
醫學博士筒井八百珠君述【第五編】花柳病講話
醫學士賀古鶴所君述【第六編】耳の衞生
醫學博士井上善次郎君述【第七編】傳染病大意

女（雜付の八）

醫學博士佐藤勤也君述 【第八編】婦人病講話

醫學士桂秀馬君述 【第九編】外科講話

以上既刊……以後引續き刊行す

【全部完成全書】

下田歌子女史著

家庭文庫 全部十二冊

菊判和裝美本毎編紙數二百五十頁餘

正價 一冊金參拾五錢○六冊壹圓九拾錢 十二冊參圓七拾錢▲郵稅一冊六錢宛

【一編】女子書簡文
【二編】女子普通禮式
【三編】詠歌の栞
【四編】料理手引草
【五編】婦女家庭訓
【六編】母親の心得
【七編】家事要訣
【八編】女子手藝要訣
【九編】女子普通文典
【一〇編】女子作文の栞
【一一編】女子遊戲の栞
【一二編】賢母家庭敎育

下田歌子女史著

訓話 少女文庫 全部六冊

菊判和裝美本毎編紙數凡二百五十頁

正價 一冊參拾五錢 郵稅一冊六錢宛 全部壹圓九拾錢

【一編】お伽噺敎草
【二編】庭訓お伽噺
【三編】內國少女鑑
【四編】外國少女鑑
【五編】家庭の心得
【六編】學校の心得

醫學博士井上通泰君監修

家庭衞生叢書 全部十二冊

菊判洋裝毎冊約百六十頁

正價 一冊貳拾錢 六冊壹圓拾錢 全部貳圓拾錢 郵稅一冊六錢宛

一編 ●傳染病の話(北里博士)●胃の攝生法(長與博士)●眼科衞生談(井上博士)●血族結婚と聾唖との關係(金杉博士)●淋病と家庭(土肥博士)

二編 ●腸窒扶斯に就て(宮本博士)●婦人の衞生一斑(木下博士)●婦人及小兒の眼の衞生(桐淵博士)●眼科衞生談 井上博士

三編 ●室內空氣に就て(緒方博士)●眼科衞生談(井上博士)●小兒科一斑(三輪博士)●小兒の衞生に就て(弘田博士)

四編 ●腸胃の話(井上博士)●耳の攝生(岡田博士)●乳兒の衞生に就て(緒方博士)●狐憑とヒステリーとの關係(吳博士)●眼鏡の話(井上博士)

五編 ●創傷の話(三輪博士)●神經の攝生に就て(吳博士)●ジフテリアの話(岡村博士)●皮膚の衞生に就て(宮本學士)

六編 ●ペストの話(宮本學士)●身心の養生(大澤博士)●家庭に於て注意すべき二三の學校衞生(三島博士)●產時の創傷傳染(木下博士)

七編 ●黴毒に關する家庭の注意(筒井博士)●家庭と黴菌(遠山博士)●姙娠中の攝生(緒方博士)●便秘の話(井上博士)

八編 ●婦人姙孕力の話(第一)(伊庭學士)●肝臓の話(木村博士)●分娩時の攝生(緒方博士)●色盲の話(井上博士)●小兒の身體上の監視并に感冒の話(瀨川博士)

九編 ●肺癆の話(井上博士)●婦人姙孕力の話(第二)(伊庭學士)●小兒の蟲及疳の話(瀨川博士)●產後の攝生(緒方博士)

十編 ●飲酒血族の退化(林博士)●不姙症の話(伊庭學士)●生殖の話(大澤博士)●消毒法の大意(一)(遠山博士)●雜錄:衞生學上より見て歐米と日本との風俗習慣中善きもの惡きもの

十一編 ●癲狂村の話(吳博士)●最適當なる日本婦人の結婚年齡(楠田氏)●消毒法大意(遠山博士)●葡萄酒の話(林博士)

十二編 ●聾唖の話(賀古學士)●癲狂村の話(下)(吳博士)●慢性鉛中毒の話(林學士)●口內衞生に就て二三の注意(石原學士)

女(後付の九)

國文書類

落合直文君著【文部省檢定濟】 ◉中等教育日本文典 四六判四八八頁 六〇 八

和田萬吉君著（全一册洋裝上製菊判四〇〇頁） ◉日本文典講義 一〇〇 八

下田歌子女史著 △女子普通文典（菊判二四六頁） 三五 八

哲學館大學講師三石賤夫君著（菊半截判一六二頁） ●學生參考叢書國文典 一三 二

文學士鈴木暢幸君著 ●日本口語文典（菊判三一六頁） 四〇 特製五五 八八

落合直文君著 ◉中等教育文法教科書（菊判一二六頁） 四五 六

文學博士上田萬年君著 ◉國語學叢話（菊判二三一頁） 四〇 六

久米幹文君校閲 小谷一馬君著（四六判七六頁） △新撰國語教授問答 二〇 四

文學士小倉博君著（菊半截判一八二頁） ●學生參考叢書國文熟語詳解 一三 二

內藤耻叟君校閲 大宮宗司君校註 菊判二五八頁 ●校註神皇正統記 二五 六

中村秋香君校訂（菊判一五二頁） ●吉野拾遺詳解 二五 四

大和田建樹君删定【文部省檢定濟】（菊判一二三頁） ●中等教育删定徒然草 一八 四

佐々木信綱君校註 ●校註徒然草（菊判二〇六頁） 二五 四

同君校註 ●校註竹取物語（菊判七六頁） 一二 二

同君校註 ●校註土佐日記（菊判五〇頁） 一〇 二

同君校註 ●校註方丈記（菊判六〇頁） 八 二

同君校註 ●校註伊勢物語（菊判一〇六頁） 一二 四

同君校註 ●校註更科日記（菊判九四頁） 一二 四

萩野由之君 落合直文君 池邊義象君 校註 ●日本文學全書（全部廿四册四六判）

正價（●一册金參拾錢●五册以上八分引 ●十册以上壹割貳分引▲郵稅一册六錢）

●第一編 ○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記

●第二編 [illegible]佐[illegible]記

●第三編 ○枕草紙 ○更科日記 ○方丈記

●第四編 ○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨內侍日記 [illegible]物語

●第五編 ○堤中納言物語 ○四季物語

●第六編 ○中務內侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記

●第七編 ○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

●自第八編至第十二編 ○宇治拾遺物語 ○多武峰少將物語 ○源氏物語 五册に分綴

●自第十三編至第十五編 ○榮花物語 上、中、下三册

●自第十六編至第十八編 ○太平記 上、中、下三册

●第十九編 ○保元物語 ○平治物語 ○秋夜長物語 ○鴉鷺合戰物語

●第二十編 ○平家物語

●第廿一編 ○古今著聞集

●第廿二編 ○公事根源 ○十訓抄

●第廿三編 ○水鏡 ○大鏡

●第廿四編 ○增鏡

北村季吟君著 △枕草子春曙抄（全七册菊判和紙木版） 一八〇 一二

大和田建樹君選 △古文讀本（全六册菊判七五六頁） 一六〇 四

▲正價一より五迄各貳拾五錢▲六卷參拾五錢

國學院編纂 ●名文評釋（菊判四五二頁） 五〇 一〇

落合直文君編 ●中等教育國文軌範（四六判三八〇頁） 二五 六

麿野勇雄君著 ◉新撰國文問答（菊半截判二六六頁） 二[illegible] 四

和歌書類

佐々木信綱君著 ◎歌學論叢（四六判五六八頁）一〇〇 八
大和田建樹君著 ◎歌まなび（四六判一〇三八頁）一五〇 一二
佐々木信綱君著 ◎增補詠歌自在（四六判七八〇頁）一〇〇 八
落合直文君著 ●新撰歌典（四六判六一〇頁）四〇 八
學習院女學部長下田歌子女史著 △詠歌の栞（菊判二一〇頁）三五 八
佐々木信綱君著 ◎詠歌辭典（菊判一三七六頁）七五 八
宮澤春文君著 ●作歌自在（菊判二四〇頁）二五 六
有賀長信君著 △和歌八重垣（全七冊木版刷和紙菊半截判）八〇 八
佐々木信綱君著 ◎日本歌選（上古の巻四六判三二四頁）八〇 六
故佐々木弘綱君著佐々木信綱君校 ◎世々のあと（四六判一四四頁）二八 四
佐々木信綱君校註 ●賀茂眞淵翁全集（全二冊四六判六〇〇頁）三五 八

大和田建樹君著 △歌の手引（菊判三二四頁）四五 八
窪田空穂君著 ●短歌作法（四六判三〇五頁）三五 六
佐々木信綱君校註 ●香川景樹翁全集（全二冊四六判一〇一三頁）三五 八
同君校註 ●近世名家々集（全二冊四六判一〇七二頁）三五 八
同君校註 ●明治名家々集（全二冊四六判一一五四頁）三五 八
仲田顯忠翁編 △類題武藏野集（全四冊四六判一三〇枚）六〇 八
黒沢翁満翁編 △類題採風集（全三冊菊判木版刷）五〇 八
同翁編 △むぐらね集 一〇〇 八
契沖阿闍梨註賀茂眞淵翁後按 [illegible]君增註 △後撰和歌集標註（全四冊大本和紙刷）八〇 八
佐々木信綱君註 ●萬葉集（全三冊四六判一二二〇頁）三五 六
同君校註 ●後拾遺和歌集、相模家集、經信卿母集、高陽院歌合（四六判三九二頁）二五 六
同君校註 ●校註明倫歌集（菊判二二二頁）二五 四
佐々木信綱君校註 ●百人一首講義（四六判三〇〇頁）二〇 四

佐々木信綱君著 ◎おもひ草（四六判一五二頁）五〇 六
同君編纂 ◎竹柏園集第一編（菊半截判五五八頁）三五 六
子爵黒田清綱君 村松令朝太郎君編 税所敦子女史共撰 △庭の摘草 附歌體評（四六判二六二頁）三五 六
河井醉茗君著 ●新體詩作法（四六判三三二頁）三五 六
中郷歌香君著 ◎新體詩歌自在（四六判八三四頁）一二 八
大和田建樹君著 ●新體詩學（菊半截判二二四頁）一五 四
大和田建樹君著 ◎散文韻文野菊（菊半截判四九〇頁）四五 六
鹽井雨江君 大町桂月君 武島羽衣君合著（菊半截判四二一頁）
◎美文韻文花紅葉 三〇 六
文學士大町桂月君著（菊半截判四〇二頁）
◎美文韻文黄菊白菊 二五 六
文學士土井晩翠君著（菊半截判二三〇頁）
◎天地有情 二五 四
文學士武島羽衣君著（菊半截判二六八頁）
◎美文韻文霓裳微吟 三五 六
文學士鹽井雨江君著（菊半截判三五四頁）
◎美文韻文暗香疎影 二五 六
佐々木信綱 印東昌綱君合著（菊半截判四二三頁）
◎美文韻文磯馴松 二八 六

女（後付の一一）

田山花袋君著
◉美文作法（四六判三〇〇頁） 三五 六

大和田建樹君著 散文韻文
◉雪月花（菊半截判六二六頁） 三五 六

大和田建樹君著 散文韻文
◉深山櫻（菊半截判七〇二頁） 四〇 八

同君著 散文韻文
◉藻鹽木（菊半截判五九〇頁） 二五 六

巖谷小波君作 東儀鐵笛君作曲（菊判）
●お伽唱歌 上下 各一五 各二

樂書刊行協會編纂【文部省檢定濟】（菊判）
●日本唱歌集 二〇 二

木村小舟君作歌 田村虎藏君作曲（菊半截判）
●家庭唱歌 全部十二冊 一冊四十頁

賣價（一冊金貳錢五厘郵稅三冊迄貳錢）（十二冊金廿七錢）

【一】桃太郎
【二】舌切雀
【三】松山鏡
【四】花咲爺
【五】浦島太郎
【六】文福茶釜
【七】勝々山
【八】羅生門
【九】一寸法師
【一〇】猿蟹合戰
【一一】俵藤太
【一二】瘤取り

小說書類

故尾崎紅葉君著
◉紅葉全集 全六冊（菊判上製）
正價一冊壹圓八拾錢小包料一冊拾貳錢宛
總紙數五六〇〇頁
正價（四圓拾錢） 郵稅（拾錢）

第一卷
●色懺悔 ●風雅娘
●新桃花扇 ●巴波川
●南無阿彌陀佛 ●拈華微笑
●戀の蛻 ●此ぬし
●夏痩 ●關東五郎
●新色懺悔 ●文ながし
●懷枕 ●わかれ蚊帳
●七十二文命の安賣 ●二人むく助 ●二人女房

第二卷
●伽羅枕 ●おぼろ舟
●むき玉子 ●紙きぬた
●夏小袖 ●戀の病

第三卷
●三人妻 ●侠黑兒
●男ごころ ●心の闇
●袖時雨 ●むらさき

第四卷
●隣の女 ●不言不語
●瀧料理 ●三箇條
●冷熱 ●浮木丸
●青葡萄 ●八重襷

第五卷
●多情多恨 ●安知歇兒林
●千箱の玉章 ●寒牡丹

第六卷
●金色夜叉前編 ●金色夜叉中編
●金色夜叉後編 ●續金色夜叉
●續々金色夜叉 ●新續金色夜叉
●煙霞療養 ●紅葉山人傳
●紅葉著作年表

幸田露伴君著
◉名家小說文庫一、二編 露伴叢書（菊判上製） 全二冊
▲前編紙數九百七十七頁
▲後編紙數九百九十頁
●正價一冊金貳圓小包料一冊拾六錢

前編目次
●自傳 ●二日物語 ●夜の雪
●僥倖 ●縁の絲 ●休暇傳
●毒朱唇 ●ひげ男 ●新學士
●迷霧 ●和合樂 ●川舟
●大珍話 ●縁外縁 ●夢かゝり
●是は〳〵 ●醉郷紀 ●珍饌會
●獅子庵 ●伊能忠敬 ●まき筆日記
●客舍雜筆 ●地獄谷日記 ●將棋雜考
●將棋雜話 ●元祿時代の雜劇 ●折々草

後編目次
●椀久物語 ●春の山 ●當世外道の面
●封じ文 ●鐵三鍛 ●自繩自縛
●蹄鐵 ●冷干冰 ●箱根草
●銃獵孝行 ●夢日記 ●ひとよ草
●新浦島 ●鄭成功 ●日蓮上人
●二宮尊德 ●突貫紀行 ●醉興記
●易心後語 ●春の一日 ●うつしゑ日記
●遊行雜記 ●旅の心得 ●知々夫紀行
●文明の庫

塚原澁柿君著
◉名家小說文庫三編 澁柿叢書（菊判上製）近刊 全一册
▲正價金貳圓 小包料拾六錢

廣津柳浪君著
◉名家小說文庫四、五編 柳浪叢書（菊判上製）近刊 全一册
▲正價一册金貳圓 小包料拾六錢

女（後付の一二）

女（後付の一〇[illegible]）

●相馬御風君譯 ゴーリキー集（四六判三〇八頁）四五 六

○文學士高田御一郎君 陸軍士佐□□君共譯 英獨戰爭未來記（菊判三八八頁）六五 八

●文學士中内蝶二君譯 日露戰爭未來の夢（菊判一九二頁）二五 六

●文學士大町桂月君譯 日露戰爭未來記（菊判一五八頁）一八 四

●露國ノイ、トルストイ伯著 田山花袋君譯 哥薩克兵（菊判二三〇頁）一八 六

●堀光鑑君譯述 ロビンソン 絶島漂流記（菊判四九八頁）四〇 八

○押川春浪君譯述 海島冒險 塔中の怪（菊半截判三三二頁）二五 四

○櫻井鷗村君譯述 冒險譚 勇少年 初航海（菊半截判三一八頁）二五 四

同君譯

●世界冒險譚

全部拾二冊 四六判洋裝 並製

正價一冊金參拾錢●拾貳冊參圓二拾錢 假一冊壹圓六拾五錢▲郵税壹冊六錢宛

【一】金掘少年 【七】殖民少年
【二】遠征奇談 【八】航海少年
【三】二勇少年 【九】不撓少年
【四】蠻境征奇談 【一〇】朽木の舟
【五】決志少年 【一一】俠勇少年
【六】漂流少年 【一二】絶島奇談

●帝國文庫

正價一冊金拾五錢 小包料一冊拾貳錢

▲全部五拾冊四六判七製 總紙數五萬餘頁

帝國文庫は小説のみを蒐集したるものに非ざれども目錄編纂の便宜上全部を一括して茲に掲ぐ

○一編 眞書太閤記 卷一
○二編 眞書太閤記 卷二
○三編 眞書太閤記 卷三
○四編 眞書太閤記 卷四 ▲附太閤朝鮮軍記
○五編 源平盛衰記
○六編 南總里見八犬傳 上卷
○七編 南總里見八犬傳 中卷
○八編 南總里見八犬傳 下卷
○九編 東海、奥羽、木曾、江の島 道中膝栗毛
○十編 梅暦春告鳥
○十一編 通俗三國志 上卷
○十二編 通俗三國志 下卷
○十三編 三馬傑作集
○十四編 柳澤、越後、黒田、加賀、伊達 騒動實記
○十五編 京傳傑作集
○十六編 種彦傑作集
○十七編 星月夜鎌倉顯晦錄 北條九代記
○十八編 通俗十二朝軍談 通俗武王軍談
○十九編 通俗明清軍談 甲越軍談
○二十編 通俗呉越軍談 通俗漢楚軍談
○二十一編 楠廷尉秘鑑
○二十二編 風來山人傑作集
○廿三、四編 西鶴全集 上下（禁賣）
○廿五、六編 滑稽名作集 上下
○二十七編 其磧自笑傑作集 上卷
○二十八編 其磧自笑傑作集 下卷
○二十九編 人情本傑作集 上卷
○三十編 氣質全集
○三十一、二、三編 珍本全集 上中下
○三十四編 人情本傑作集 下卷
○三十五編 赤穗復讐全集
○卅六、七編 水滸傳 上下
○三十八編 忠臣藏淨瑠璃集
○三十九編 四大奇書 一、二卷
○四十編 續氣質全集
○四十一編 四大奇書 三、四卷
○四十二編 近松時代淨瑠璃
○四十三編 大岡政談
○四十四編 佛教各宗高僧實傳
○四十五編 仇討小說集
○四十六編 馬琴傑作集
○四十七編 淨瑠璃名作集
○四十八編 俠客傳全集
○四十九編 續仇討小說集
○五十編 近松世話淨瑠璃

（續付の一四）

●朝鮮史 文學士久保天隨君著
●西洋歷史 文學士吉國藤吉君著
●北米合衆國史 法學士山本信博君著
●現代露西亞 法學士須崎芳三郎君著
●露西亞侵略史 法學士須崎芳三郎君著
●世界文明史 文學博士高山林次郎君著
●日本文明史 文學士大町桂月君著
●支那文明史 文學士白河次郎君 國府種徳君著
●印度文明史 文學士常盤大定君著
●日本風俗史 文學士阪本健一君著
●世界殖民史 法學士山内正瞭君著

◉世界史 上巻 文學士阪本健一君著（菊判一〇八〇頁） 一六〇 一二
◉同 下巻（菊判一四五四頁） 二〇〇 一六
●通俗世界歷史 長谷川天溪君著（菊判三三四頁） 二五 八
△東洋通史 文學士久保天隨君著 全部十二冊 菊判三九〇〇頁
▲正價一冊金拾錢◎全部五圓◎郵税八錢
壹巻…巳皇五帝○三代の興亡○春秋の世
貳巻…戰國の世○先秦漢族の人文○秦の帝業○前漢の角逐
參巻…前漢の世○前漢の盛業
四巻…後漢の世○三國の分立○兩晉の世
五巻…五胡十六國の世○南北朝
六巻…隋唐の盛時○唐の初世○唐の中世
唐の末世○五世十國の世○漢唐間の人文
七巻…北宋の盛衰○宋金の對立
八巻…蒙古の勃興○蒙古の隆昌○元室の
九巻…治世○宋元間の人文
拾巻…明の初世○明の中世○明の末世
拾壹巻…清の初世○清の盛世と經外經
（文略○英人の東漸○同清治の人文
拾貳巻…最近東洋事綱

●東洋史 學生參考書 丸井文學士高島米峯君共著（菊半截判一八七頁） 一三 二
◉北京誌 清國駐屯軍司令部編（菊判九七六頁） 二五〇 三
◉天津誌 同部編纂（菊判六九二頁） 二五〇 三
△資治通鑑 三島文學博士校閲 山名義濟君訓點 全七十冊（美濃判五一一二枚） 一五〇〇 五〇
●十八史略講義 太田津軒君講述 全二冊（四六判八八六頁） 三〇 八
●佛蘭西革命史 奥田竹松君著（菊判四四四頁） 七〇 八
◉伊太利亞史 文學士阪本健一君著（菊判四二〇頁） 一二五 八
◉獨逸史 文學士白石眞君編著（菊判五五五頁） 一二五 一二

●通俗獨逸歷史 河上清君著（菊判三三四頁） 二〇 八
◉日本歷史寶鑑 文學士久保天隨君著（菊判一六〇〇頁） 三〇〇 二〇
●歷史叢話 文學博士箕作元八君著（菊判二二〇頁） 四〇 六
◉中等教育日本歷史要解 文學博士萩野由之君編述（四六判四二四頁） 六〇 六
◉近世世相史 文學士齋藤隆三君著（菊判一〇四〇頁） 二二〇 一六
●元祿世相志 同君著（菊判三四八頁） 四五 八
◉朝鮮開化史 國友重章君閲 恒屋盛服君著（菊判五六六頁） 一〇〇 一二
●世界風俗志 重田勘次郎君著（四六判四六三頁） 五〇 八

●少年日本歷史 巖谷小波君 福田琴月君合著
菊判全部六冊 紙數一冊約百四十頁
△正價一冊貳拾錢 六冊壹圓拾錢 郵税一冊四錢
第一編……古代の巻
第二編……王朝の巻
第三編……武家の巻
第四編……亂世の巻
第五編……德川の巻
第六編……明治の巻

女（發付の一七）

傳記書類

正價　郵稅

今泉鐸次郎君著
◉河井繼之助傳（菊判　頁）　五〇　八

法學博士阪谷芳郎君序文・全三冊
◉青淵先生六十年史（菊判二二二〇頁）　一五〇　二四
▲一名　近世實業發達史

伊藤痴遊君講演
◉明治元勳井上侯實傳（菊判二五四頁）　三五　六

三橋光威君著
●日島太助翁の成功訣炭鑛王（菊判一五八頁）　三五　六

海軍省教育本部藏版（菊判一三二〇頁）
◉英國水師提督ネルソン傳　一六〇　一六

理學博士鶴田賢次君抄譯（三六判三二〇頁）
◉自助論スマイルス翁の自傳　四五　六

慶應義塾教授菅綠陰君著（四六判一五四頁）
◉カーネギー　二五　四

文學士桂山寿太郎君著（四六判二六六頁）
●英雄末路ナポレオン　三〇　四

綠陰谷部春汀君著（總紙數二千餘頁）
◉春汀全集　全部三册菊判　洋裝美本

◉第一卷明治人物月旦　前編　一五〇　一二
◉第二卷明治人物月旦　後編　一五〇　一二
◉第三卷各種の評論　一五〇　一三

小野田翠雨君著
●現代名士の演說振（四六判三二二頁）　四五　六

全國教育家大集會編
●帝國六大教育家（菊判二八〇頁）　五〇　八

文學士蜷川龍夫君著
●日本高僧之人格（菊判二三八頁）　四〇　一〇

文學士土井晚翠君著（四六判三二七頁）
◉ナポレオン性格論　五五　八

長田秋濤君著
●世界富豪の表裏（菊判二六二頁）　三五　六

伊藤、井上侯、山縣公直話（菊判三〇二頁）
●元勳談　二〇　六

中央新聞社編
●名士の嗜好（菊半截判三四六頁）　二五　四

坪谷善四郎君著
◉當代名流五十家訪問錄（菊半截判四八〇頁）　四〇　六

遲塚麗水、內藤昌樹君著（菊判二九四頁）
●露軍將校旅順籠城實談　四八　八

宮崎虎之助君著
●基督觀（菊判二五六頁）　四〇　八

井上泰岳君編
●我半生の奮闘（菊判三二〇頁）　四八　八

武田櫻桃君、木村小舟君編（菊判一六四頁）
●少年講談日本武將傳　二八　六

前田越嶺君著
●少年史譚世界武將傳（菊判二一二頁）　三〇　六

大和田建樹君著
●日本歷史譚（菊判全部二十四冊）　每冊約百頁　木版密畫入

正價　一冊金八錢　●十二冊八拾五錢　●廿四冊壹圓六拾錢　▲郵稅一冊貳錢宛

【一】日本開闢　【二】敵愾山　【三】三韓征伐　【四】聖德太子　【五】菅公　【六】九郎判官　【七】曾我兄弟　【八】惡七兵衛　【九】相模太郎　【一〇】楠公　【一一】日蓮　【一二】大塔宮

【一三】豐太閤　【一四】七本槍　【一五】關ヶ原　【一六】水戸黄門　【一七】四十七士　【一八】平田篤胤　【一九】櫻田門外　【二〇】七卿落　【二一】彰義隊　【二二】城山　【二三】平壤　【二四】威海衛

地理書類

理學士山崎直方君
理學士佐藤傳藏君　共著
◉大日本地誌　全部拾冊
▲菊判脊皮上製總紙數壹萬餘頁
▲每卷地圖及寫眞銅版數多挿入
正價貳圓五拾錢
小包料拾貳錢

●第壹卷關東
相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆、七島、小笠原島

（女後付の一八）

●第貳卷奥羽 二五 二
磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後

●第參卷中部 二五〇 二
尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛騨、信濃

●第四卷近畿 三〇〇 一六
山城、大和、河内、和泉、攝津、伊賀、伊勢、志摩、近江、丹波、丹後、但馬、播磨、紀伊、淡路

●第五卷北陸 二五〇 三
若狭、越前、加賀、能登、越中、越後

●第六卷中國 二五〇 二
美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐

●第七卷四國 二五〇 二
阿波、讃岐、伊豫、土佐、

續刊
●第八卷九州
●第九卷北海道
●第十卷琉球及臺灣

稲垣農學博士、矢津昌永君共著 (菊判二一四頁)
◉實業學校日本地理教科書 七〇 八

稲垣農學博士、矢津昌永君共著 (菊判一九〇頁)
◉實業學校外國地理教科書 六五 八

理學士佐藤傳藏君著 (菊判三一四頁)
●日本新地理 四〇 八

太瀬田諸輪君著 (菊判二九六頁)
●通俗日本地理 三〇 八
▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢

志賀重昂君閲 設樂金三郎君著 (菊判三三二頁)
●學生參考叢書日本地理 [illegible] 二

野崎左文君外四君合著全十二冊(四六判二〇〇頁)
●日本名勝地誌 一冊 三〇 六
【一】畿内之部
【二】東海道之部上
【三】同 下
【四】東山道之部上
【五】同 下
【六】山陽道之部
【七】北陸、山陰之部
【八】南海道之部
【九】北海道之部
【十】西海道之部
【十一】琉球之部
【十二】臺灣之部

中村士徳君大久保千濤君共著(四六判七二〇頁)
◉本邦地理詳説 一八〇 二

松永藤劍君編 (菊判三六〇頁)
●樺太及勘察加 五〇 八

讀賣新聞記者松川木公君著(菊判一八二頁)
●樺太探檢記 三八 八

文學士田淵友彦君著 (菊判三五〇頁)
●韓國新地理 四〇 六 特製五五 八

三島定之助君著 (全二冊菊半截判三〇〇頁)
●學生參考叢書外國地理 各一三 二

理學博士神保小虎君講述 (菊判二四〇頁)
◉地理學叢話 四〇 六

理學士佐藤傳藏君著 (菊判三三八頁)
●萬國新地理 四〇 八 特製五五 八

澁江保君著 (菊判三四〇頁)
●通俗世界地理 三〇 八

農學士志賀[illegible]君著 (四六判一九二頁)
●訂正増補地理學講義 五〇 八

同君譯述 (菊判三二六頁)
(●)地理講話 六〇 八

法學士[illegible]國臣君著 (菊判三五〇頁)
●清國商業地理 四〇 八
▲洋布特製 正價金五拾五錢 小包料八錢

石渡延世君著 (四六判二六二頁)
◉地理統計要覽 五八 六

麻生鯱三君著 (麻生式折本)
全國鐵道線路名所古蹟明細
△旅行案内地圖 四五 四

巌谷小波君金子紫草君共著 (菊判洋裝)
●少年世界讀本
正價(●一册金貳拾錢●六册壹圓拾錢●全部貳圓拾錢▲郵税一册四錢)
【一卷】英吉利
【二卷】支那、朝鮮、暹羅、波斯及東洋諸國
【三卷】獨逸、墺太利
【四卷】西班牙、葡萄牙、亞非利加各國
【五卷】佛蘭西、瑞西
【六卷】中央亞米利加各國
【七卷】伊太利、希臘
【八卷】露西亞
【九卷】南亞米利加各國
【十卷】丁抹、和蘭、伯耳義
【十一卷】土耳古、東部歐羅巴各國
【十二卷】北米合衆國

◉ 關東の山水　文學士大町桂月君著（四六判五二〇頁）一〇〇　八
● 行雲流水　同君著（菊半截判三一〇頁）三〇　四
◉ 東海道旅の友 車窓の名勝觀　神谷有終君編（三六判二七五頁）四五　六
◉ 増補千山萬水　大橋乙羽君著（菊半截判七〇二頁）五〇　八
◉ 續千山萬水　同君著（菊半截判六五〇頁）五〇　八
◉ 一簑一笠　大町桂月君著（菊半截判三七六頁）三〇　六
◉ 南船北馬　田山花袋君著（菊半截判五〇〇頁）四〇　六
● 大英貴賓の日本觀　英國リーズデール卿著　永田榮雄君譯述（四六判三〇〇頁）五〇　六
◉ 亞細亞大陸横行　五大洲探檢家中村直吉君　冒險世界主筆押川春浪君　共著（四六判三二八頁）四五　六
◉ 南洋印度奇觀　同（四六判三〇〇頁）四五　六
● 自轉車世界無錢旅行　押川春浪君著　中村春吉（四六判三四二頁）三八　六
◉ 伊犂紀行　陸軍歩兵少佐日野强君著（菊判七二六頁）▲上卷日記之部▲下卷地誌之部　▲正價貳圓六拾錢　小包料拾六錢

◉ 花つみ日記　文學博士 [illegible]正路君著（四六判六〇〇頁）一二〇　八
◉ 世界漫遊案内　坪谷水哉君著（四六判七〇六頁）一七〇　八
◉ 改訂増補日本漫遊案内　坪谷善四郎君著（全二册四六判一三〇〇頁）▲府縣廳所在地銅版圖廿餘頁▲風景寫眞八十餘圖▲全國精半部彩色郡▲大地圖　一〇〇　八
◉ 旅行者寶鑑　伊藤銀月君著（三六判三八〇頁）四八　八
◉ 學生必攜修學旅行案内　八★柴三郎君著（關東の部）（三六判六九二頁）四五　八
◉ 京畿地方修學旅行案内　同君著（三六判四二〇頁）六〇　六
● 八丈島保養案内　醫學得業士橘公行君著（三六判一八四頁）二五　四
● 歐米書生旅行　森次太郎君著（三六判三二〇頁）三五　六
● 最近活動北米事業案内　河有村項君著（四六判三〇〇頁）三八　八
● 北米の新日本　安部磯雄君著（四六判二二三頁）三五　四
◉ 米國渡航案内　飯島榮太郎君著（四六判三七二頁）四〇　六
● 支那旅行便覽　香川悅次君著（三六判六〇〇頁）四〇　八

● 本派本願寺名所圖會　石倉翠葉君著（菊判三九四頁）六〇　八
● 大谷派本願寺名所圖會　同君著（菊判二二八頁）四〇　八
● 佛光寺名所圖會　同君著（菊判一〇八頁）二五　四
● 日蓮宗各本山名所圖會　同君著（菊判三五六頁）五〇　八
● 成田山名所圖會　同君著（菊判一五八頁）三五　六
● 善光寺名所圖會　同君著（菊判二七六頁）四五　八
● 高野山名所圖會　同君著（菊判三四二頁）六〇　八
● 日光名所圖會　同君著（菊判五一〇頁）六五　一二
△ 坂東・西國・秩父百觀世音靈場記　東潭生君編（四六判三六頁）二〇
△ 江戸名所圖會　長谷川雪旦君畫　全二十册（和紙木版菊判一一七〇枚）六〇〇　二八
△ 江戸名所花曆　同君畫　全四册（和紙木版菊判一五六頁）四〇　六
△ 東都歲事記　同君畫　全五册（和紙木版刷菊判一五五枚）六五　六
△ 木曾街道圖會　同君畫　全二册（和紙木版刷六版三九枚）三〇　四

女（線附の二〇）

見遁すべからざる俳壇の珍本

今井柏浦君選

古今女流俳句集

榊原蕉園女史口繪

全一冊
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵税四錢

女流の俳句は、男子の俳句に較べて、放膽、豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、温情自然に溢るゝ、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある。畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の温柔なる處が多いから、俳句なり、歌なり、女性的と男性的とは歴然とした區別があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千、其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より、女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

(東京本町) 博文館發行 (振替二四〇番)

女學世界
（毎月一回廿六日發兌）
第拾卷第壹號
明治四十二年十二月十七日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

（定價金貳拾錢●郵税（本誌にて）貳錢五厘）

 （東京市日本橋區本町三丁目博文館發行）